

各時代の大争闘

上 卷

エレン・G・ホワイト著

清 野 喜 夫

村 上 良 夫 訳

福 音 社

THE GREAT CONTROVERSY
by
ELLEN G. WHITE

Fukuinsha
Yokohama, Japan



まえがき

本書は、この世界に罪悪と苦悩と苦痛があることを語るために著わされたものではない。われわれは、それを知り過ぎるほどに知っている。

また、本書は、光と暗黒、正義と罪悪、善と悪、生と死の間に、不可避の争闘があることを語るために刊行されたものでもない。われわれは、現実にそれを感じるとともに、自分たちが、その争闘の中で役割を演じている参加者であることを知っている。

われわれが望むことは、この大いなる争闘の真相をつきとめたいということである。それは、どうして始まったものであるか。いつまで続くものであるか。複雑な、恐るべき争いの中で、どんな勢力が活動しているのであるか。それは、われわれとどんな関係があるのか。われわれには、どんな責任が負わせられているのか。われわれが、この世に生を受けたのは、自分たちの選択によるものではない。果たして、これは幸福であつたのか、そ



れとも不幸であつたのか。

この争闘には、どんな根本原理がひそんでいるのであろうか。それは、いつまで続くのであろうか。それは、どういう終局を迎えるのであろうか。ある科学者たちが言うように、この地球は、太陽の輝かない永遠の夜の深みに没するのであろうか。それとも、生命の光に照らされて、神の永遠の愛に暖められる、より幸福な未来を望むことができるのであろうか。

それはそうとして、より身近な問題がある。それは、われわれの心の中に巢食っている利己心と、外に働きかけようとする愛との間の争いは、どのようにして善の勝利に終わり、永遠の解決を見るのであるかという問題である。聖書には、この事について、なんと書いてあるであらうか。このように、すべての人にとって重大なこの問題について、神はなんと教えておられるであらうか。

われわれは、このような問いを、各方面から聞くのである。これは、われわれの心の奥底から起こってくるものである。これに対する明快な解答がなされなければならない。確かに、われわれは、心の中に、さらに優れたものに対する渴望と、真理に対する欲求を持っている。これは神が、われわれの心の中に起こされたものである。そして、神は、



われわれに、必要なすべての知識を与えることを差し控えるおかたではない。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」のである。

本書の目的は、以上の諸問題に深い関心を寄せている人々に、正しい解答を与えることである。本書の著者は、神の恵み深さを、実際に味わい知り、神との親密な交わりと聖書の研究とによつて、主はご自身をおそれる者と親しくされ、その契約をお示しになることを知った。

著者は、宇宙の運命にかかわるこの重大な争闘の根本原理を、われわれに明確に理解させるために、過去二千年にわたる一大実物教訓を、具体的に展開している。

ユダヤ人は、彼らを救おうとして来られたイエスを拒否し、カルバリーの丘で十字架につけたのであるが、本書は、そのユダヤの首都エルサレムの悲惨な滅亡の光景から筆を起している。そして、諸国の歴史のあとをたどり、第一世紀の神の民に加えられた迫害、神の教会に生じた大背教、争闘の重大原理を明示した宗教改革と世界の覚醒、正義の原則を破棄した結果起きたフランス革命等に言及し、さらに、聖書に対する一般社会の関心と評価の上昇、その豊かな恵みと救いの力、最終時代に起こる宗教的覚醒などに触れ、こう



して、神の言葉という輝かしい泉が開かれて、驚くべき光と知識が示されることにより、暗黒の欺瞞とその悲しむべき結果が打ち破られることを、述べているのである。

今、われわれの上に迫っているこの重大な争闘において、だれ一人中立の立場をとることとはできないことが、単純明快に指摘されている。

ついに、善は悪に勝利し、正は邪に、光はやみに、喜びは悲しみに、希望は絶望に、栄光は恥辱に、そして、生は死に、永遠の輝かしい勝利をおさめるのである。そして、忍耐強い永遠の愛は、執念深い憎しみの心に、ついに勝利するのである。

本書が、読者の上に、豊かな永遠の幸福をもたらすことを、心から祈るものである。IV

発
行
者



序

罪がこの世にはいる前には、アダムは創造主と分け隔てのない交わりをしていた。しかし人間が罪を犯して神から離れてからは、人類はこの尊い特権から切り離されてしまった。しかし、救済の計画によって、地上の住民がなお天とのつながりを保つ道が開かれた。神は、聖霊によって人間と交わり、選ばれたしもべたちの啓示によって天来の光を世にお与えになった。人々は、「聖霊に感じ、神によって語った」のである（ペテロ第二・一ノ二一）。

人類歴史における最初の二千五百年間は、書かれた啓示というものはなかった。神から教えられた人々が、その知識を他の人々に伝え、それが父から子へと、次の世代に伝えられていった。神のみことばを書きしるすことは、モーセの時代に始まった。靈感による啓示は、その時靈感の書の中に書きあらわされた。この働きは、創造と律法についての歴史家であるモーセから、福音の最も崇高な真理を記録したヨハネにいたるまで、千六百年の長い間にわたってつづけられた。

聖書は、神をその著者として指し示す。しかし、それは人間の手で書かれた。そしてその種々の書の異なった文体は、それぞれの記者の特徴を表わしている。そこにあらわされている真理は、みな「神の靈感を受けて書かれたものであ」るが、それは人間のことばで表現されている（テモテ第二・三ノ



一六)。限りなきおかたである神は、聖霊によつて、ご自分のしもべたちの心と頭に光をお与えになった。神は、夢とまぼろしと象徴をお与えになった。そして、このようにして真理を啓示された人々は、その思想を人間のことばであらわしたのである。

十誡は、神ご自身によつて語られ、神ご自身の手によつて書かれた。それは神がおつくりになったものであつて、人間のつくつたものではない。しかし、神から与えられた真理が人間のことばに表現されている聖書には、神的なものと人間的なものとの結合がみられる。このような結合は、神の子であると同時に人の子であつたキリストの性質の中にもあつた。このように、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿つた」ということは、キリストご自身についてと同様に、聖書についても言えるのである（ヨハネ一ノ一四）。

聖書は、時代が異なり、身分や職業、また知的靈的な才能も広く異なっている人々によつて書かれたので、その中の諸書は、そこに示されている主題の性質が異なっていると同時に、その文体にもいちじるしい対照がみられる。それぞれ異なつた記者によつて、それぞれ異なつた表現形式が用いられている。同じ真理を、ある記者は他の記者よりも特にめだつて強調していることがよくある。幾人かの記者が、異なつた角度と関連から一つの主題を示しているので、浅薄に、不注意に、あるいは偏見をもつて、これを読む者には、相違や矛盾があるように思われるかも知れないが、思慮深い、敬虔な者が、はつきりした眼でこれを読めば、その根底には調和があることに気づくのである。

真理は、いろいろな人によつてあらわされているので、いろいろな角度から示されている。ある記



者は問題のある一面に特に強い感動を受けている。彼は、自分の経験や自分の知覚力、認識力に合う点を把握している。またある者は、これとは異なった一面を把握している。そしておのおのは、聖霊のみちびきのもとに、自分の心に最も力強く訴えるものを示しているのである。すなわち、それぞれに真理の異なった一面をもっているが、しかしそこには、全体を通じて完全な調和がみられるのである。このようにしてあらわされた真理は、結合して完全な全体を構成し、人生のあらゆる境遇と経験の中にある人々の要求にこたえるのに適したものとなっているのである。

神は、ご自分の真理を、人間を通して世にお伝えになった。そしてご自分の聖霊によって、人々に、この働きをなす資格と能力をお与えになった。神は人を導いて、語るべきことと書くべきことをえらばせられた。宝は土の器である人間に託されたが、しかしその宝が天来のものであることにはかわりがない。あかしは、人間のことばという不完全な表現を通して伝えられたが、しかしそれは神のあかしである。神を信ずる従順な子らは、その中に、恵みと誠とに満ちた、神の力の栄光を見るのである。

神は、みことばを通して、救いに必要な知識を人間にお与えになった。われわれは、聖書を、神のみことばについての権威ある、まちがいのない啓示として受けとらねばならない。聖書は品性の規準であり、教理を示すものであり、経験を吟味するものである。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである」(テ

モテ第二・三ノ一六、一七)。



しかし、神がみことばを通してみこころを人間に啓示されたからといって、聖霊のたえざる臨在とみちびきが不要になったわけではない。それどころか、聖霊は、みことばを神のしもべたちに開き、その教えを説明して実行に移させるために、救い主によって約束されたのである。しかも、聖書に靈感を与えたのは聖霊だったのであるから、聖霊の教えがみことばの教えと相反するということはあり得ないのである。

聖霊は、聖書にとって代わるために与えられたのではないし、また、そのようなものとして与えられるはずもないのである。なぜなら、神のみことばは、すべての教えとすべての経験を吟味する標準である、はつきり聖書に述べられているからである。使徒ヨハネは言っている。「すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(ヨハネ第一・四ノ二)。そしてイザヤは、「ただ律法と証詞とを求めべし、彼らの言うところこのことばにかなわずば、しのめあらじ」と宣言している(イザヤ書八ノ二〇文語訳)。

一部の人々が、自分たちは聖霊の光を受けたから、もはや神のみことばによってみちびかれる必要はないと公言するような誤りを犯しているために、聖霊の働きについて大きな非難が投げかけられている。こういう人々は、自分の印象に支配され、それを魂に語る神の声とみなしている。しかし彼らを支配しているのは、神の霊ではない。このように、心の印象に従って、聖書を見做すことは、混乱と欺瞞と滅亡に陥るだけである。それはまた、サタンの計画を助けるだけである。聖霊の働きはキ



リストの教会にとって非常に重要であるために、極端な人々や狂信的な人々の誤りを通して、聖霊の働きを軽べつし、主ご自身がお与えになったこの力の源を神の民に無視させるのが、サタンの策略の一つなのである。

聖霊は、神のみことばと調和して、新約時代にその働きをつづけるのであった。旧新約聖書が与えられつつあった時代に、聖霊は、聖書の中にあらわされるはずの啓示とは別に、個々人の心に光を与えることをやめなかった。聖書として与えられるものとは無関係な事柄において、人々が聖霊を通して警告と譴責と勧告と教えを受けたことが、聖書自体の中に述べられている。また、その語ったことばが記録されていない各時代の預言者の名もあげられている。同様に、聖書が完成されてからも、聖霊は、依然としてその働きをつづけ、神の民を照らし、警告し、慰めるのであった。

イエスは弟子たちに、次のように約束された。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは……きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」と約束になった(ヨハネ一四ノ二六、一六ノ一三)。これらの約束は、使徒時代に限られるのではなく、各時代のキリスト教会にまで及ぶものであることを、聖書ははっきり教えている。救い主は、ご自分に従う者たちに、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と保証しておられる(マタイ二八ノ二〇)。パウロもまた、聖霊の賜物とその力のあらわれが教会に与えられたのは、「聖徒たちをととのえて奉仕



のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至らせるために、みたまの賜物と啓示が教会内に与えられたと宣言している（エペソ四ノ一二、一三）。エペソの信者たちのために、使徒パウロは、「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、**知恵と啓示との霊**をあなたがたに賜わって神を認めさせ、**あなたがたの心の目を明らかにして下さるように**、そして、あなたがたが神に召されていだいている望みがどんなものであるか、…また、神の力強い活動によつて働く力が、わたしたち信じる者にとつて**いかに絶大なものであるか**を、あなたがたが知るに至るように」と祈った（エペソ一ノ七―一九）。パウロがエペソの教会のために、このように祈り求めた祝福というのは、人々の理解力を照らし、神の聖なるみことばのうちにある深い事柄を心に開き示すための、聖霊の働きであった。

ペンテコステの日、聖霊の驚くべき力の顕現の後で、ペテロは、人々に、罪のゆるしを得るために、悔い改めてキリストの名によつてバプテスマを受けるようすすめて、「そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」と言った（使徒行伝二ノ三八、三九）。

神の大いなる日の光景と直接関連して、主は、預言者ヨエルによつて神の霊の特別なあらわれを約束しておられる。「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預



言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る」(ヨエル書二ノ二八)。この預言は、ペンテコステの日に聖霊がくだったことによつて、部分的な成就をみた。しかしそれは、福音の最後の働きに伴う神の恵みのあらわれにおいて、完全に成就するのである。

善と悪との大争闘は、時の終わりにいたつて、ますます激しさを加えるのである。すべての時代において、サタンの怒りはキリストの教会に向けられてきた。そして神は、ご自分の民がサタンの勢力に対して強く立つことができるように、恵みと霊を与えてこられた。キリストの使徒たちが、福音を世界に伝え、またそれを将来の時代のために記録しなければならなかった時、彼らは聖霊による光を特別に与えられた。しかし、教会が最後の救いに近づくにつれて、サタンはますます強い力をもつて働くのである。彼は、「自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもつて」やつてくるのである(黙示録一・二ノ一二)。彼は、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議」をもつて働く(テサロニケ第二・二ノ九)。かつて神の天使の中で最高の地位にあつた偉大な頭脳の持ち主が、六千年の間、欺瞞と滅びの働きに全力をかたむけてきた。この長年の争闘の間に、サタンが身につけた腕前と狡猾さ、またその間にますますひどくなつた残虐さの、あらんかぎりをつくして、彼は最後の争闘において神の民に迫るのである。この危機の時に当たつて、キリストに従う者たちは、主の再臨の警告を世に伝えねばならない。そして民は、キリストがおいでになる時、「しみもなくきずもなく」彼の前に立つことができるように、備えをしなければならぬ(ペテロ第二・三ノ一四)。今日、神の恵みと力が特別にさずけられることは、使徒時代に劣らなければならないのである。



長年つづけられている善と悪との争闘の場面は、聖霊の光によって、本書の著者に示された。ときどきわたしは、生命の君であり、救いの創始者であるキリストと、悪の君であり、罪の創始者であり、神の聖なる律法を初めて破った者であるサタンとの間の、各時代の争闘の経過を見せられた。キリストに対するサタンの敵意は、キリストに従う者たちにも向けられてきた。サタンは、神の律法に対する憎しみと欺瞞的策略によって、誤謬を真理に見せかけ、神の律法を人間の律法と取り替え、創造主よりも被造物のほうを人々に拝ませるのであるが、そうした憎しみや策略は、過去のすべての全歴史の中に見られるのである。神の品性について誤った印象を人にあたえ、創造主についていつわりの観念を人にいだかせ、こうして愛よりはむしろ恐怖と憎しみをもって神を見させようとするサタンの努力、また、神の律法を捨てて、その要求から解放されたと人々に考えさせようとするサタンの努力、そして、彼の欺瞞に抵抗しようとする者に対する迫害などが、各時代にわたって着々とつづけられてきた。こうしたことは、父祖たち、預言者たち、使徒たち、そして殉教者たちや宗教改革者たちの歴史の中にみられるのである。

最後の争闘において、サタンは同じ政策を用い、同じ精神を発揮して、過去のすべての時代と同じように、同じ目的のために働くのである。これまでに見られたことが、これからも見られるであろう。ただ異なるところは、きたるべき争闘が、かつて世にみられなかったほどの恐ろしい激しさをもったものであるということである。サタンの欺瞞はもっと巧妙になり、彼の攻撃はもっと断固たるものとなる。彼は、もしできるなら、選民をも惑わそうとするであろう（マルコ一三ノ二二参照）。



神の霊がわたしの心に、神のみことばの大いなる真理を開き、過去と未来の光景を示されたとき、わたしは、過去の争闘の歴史をたどるために、そして特に、急速に近づいている未来の争闘に照明を当てるために、自分にこのように示されたことを他の人々に知らせるよう命じられた。この目的を果たすにあたって、わたしは、各時代に世に与えられた大いなる試金石としての真理をたどることができるよう、教会歴史における事件を選んでこれを分類した。この真理こそは、サタンの怒りと、世俗を愛する教会の敵意をひきおこし、しかも「死に至るまでそのいのちを惜しまなかった」人々によって維持されてきたものである（黙示録一一ノ一二）。

こうした過去の記録の中に、われわれは、われわれの目の前にある争闘があらかじめ示されているのを見ることができる。これらを見言葉の光と聖霊の解明とによって見るときに、われわれは悪魔の策略を見破ることができ、そして、再臨の時に主の前に「傷なき者として」立つ者が避けなければならない危険をも、見分けることができるのである。

過去の宗教改革運動において起こったいくつかの大事事件は、歴史的事実であって、プロテスタントの世界によく知られ、あまねく認められている。これらは、だれも否定することのできない事実である。著者は、簡潔を旨とする本書の扱い得る範囲内で、この歴史を短く述べた。各事実は、その適用の十分な理解を妨げない程度に縮めて簡単に書かれている。また、歴史家が諸事件を短くまとめて、問題の総合的観察を行ない、要領よくその細かい部分を要約している場合には、その言葉を引用した。その際必ずしも出所を明示しなかったが、それは、その言葉を引用したのはそれらが主題を巧みに力



強く提示していたからであって、その筆者を権威として引用することが目的ではなかったからである。現に改革運動を推進している人々の経験や意見を述べる場合にも、その著作について同様の取り扱いをした。

本書の目的は、過去の争闘に関する新しい事実を提示することよりも、むしろ未来の諸事件に関する事実と原則とを明らかにすることにある。しかし、こうした過去のすべての記録を、光と暗黒との間の争闘の一部として見るとき、そこには新しい意義が認められるのである。そして、これらの諸事件は、未来に光を投げ、過去の改革者たちのように、神の召しを受けて、この世のすべての幸福を犠牲にしても「神の言葉とイエス・キリストの証のために」立つ人々の道を、照らすのである。

真理と誤謬との間の大争闘の模様を説明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖であって不変のものであることを明示すること——これらが本書の目的である。人々が、本書によって、闇の力から救われ、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者」となり、われわれを愛し、われわれのためにご自身をささげられたかたを賛美するようになることを、著者は心から祈っている。

E・G・ホワイト

目次

第一章	世界の運命の預言	1
	ユダヤ民族の誇り、エルサレム 選民イスラエルの歴史 天の最上の賜物 ああ、エルサレム、エルサレム 世界の滅亡の象徴 歴史的に見たエルサレムの神殿 エルサレム滅亡の預言 罪惡の巢エルサレム サタンの支配 キリスト者の奇跡的な脱出 テイトウスの再攻撃とエルサレムの惨状 神殿燃ゆ エルサレム陥落 罪の収獲 現代に対する神の警告	
第二章	ローマ帝国とキリスト教	29
	激しい迫害 カタコンベの教会 キリスト者の血は種 妥協精神の侵入 光と暗黒との戦い 忠実な少数者 福音の力 苦難の意味 眠っている教会	
第三章	中世の靈的暗黒時代	43
	「不法の者」の出現 非聖書的な法王至上権説 時と律法の変更 偽りの安息日 暗黒時代の開始 真の宗教の危機 深まりゆく暗黒 誤った教義の数々 世界の真夜中	
第四章	真理の擁護者たち	59

暗黒時代の神の証人	ブリテン（イギリス）のキリスト教会	ワルド派（ワルデンセス）の人々	大自然の中の教会	宗教教育の模範	ワルド派の信仰と生活	ワルド派の伝道精神	偉大な真理の発見	真理の使者たち	ローマによる迫害	宗教改革の種	改革の明星ウィクリフ	83
-----------	-------------------	-----------------	----------	---------	------------	-----------	----------	---------	----------	--------	------------	-------	----

改革の先駆者	ウィクリフの青年時代	悪習誤謬の打破	修道会の腐敗	法王教との戦い	神の摂理と改革事業の進展	英語訳聖書の完成	晩年の活躍	法王への最後の警告	ウィクリフの信仰と聖書	ウィクリフの人格	福音の伝播	改革への道	殉教者フスとヒエロニムス	106
--------	------------	---------	--------	---------	--------------	----------	-------	-----------	-------------	----------	-------	-------	--------------	-------	-----

ボヘミアにおける光	フスの生い立ち	ウィクリフの影響	プラハ市の騒動	ヒエロニムスの協力	コンスタンツ公会議	フスの決意	信仰の放棄か、死か	フスの殉教	ヒエロニムスの投獄	ヒエロニムスの弁明	ヒエロニムスの殉教	ボヘミア人の奮起	法王軍の惨敗	ボヘミア人の忍苦と待望	マルチン・ルターが登場	139
-----------	---------	----------	---------	-----------	-----------	-------	-----------	-------	-----------	-----------	-----------	----------	--------	-------------	-------------	-------	-----

幼年時代と彼の両親	青年時代の学び	修道院での生活	ローマ訪問	聖書主義への欺瞞的な免罪符販売	九十五か条の提題	提題に対する反響	弾圧の動き	メランヒトンの協力	法王使節による審問	ルターの弁明	ザクセン侯フリードリヒによる保護	改革運動の進展	改革運動の危機	ローマ教会との最後的分離	改革者の宿命	われここに立つ	172
-----------	---------	---------	-------	-----------------	----------	----------	-------	-----------	-----------	--------	------------------	---------	---------	--------------	--------	---------	-------	-----

カール五世の即位と国会の召集 法王使節による攻撃 議會を導かれる神の力 ルターの召喚 ウォルムスへの道 ウォルムス到着 国会での審問 神との格闘 議會に

おける信仰告白 われここに立つ！ 法王側の策動 二派の対立とカール五世 広汎な支援とルターの忠誠 ルター、ウォルムスを去る 改革事業と神の導き

第九章 スイスにおける改革運動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・207

ツウイングリの生い立ち ツウイングリ、働きにつく 福音を説く チューリヒでの活動 福音主義と法王主義の抗争 改革事業の進展 法王側の妨害 法王側の策略
バーデン会談とその影響

第一〇章 ドイツ宗教改革の進展・・・・・・・・・・・・・・・・226

ルターの失踪と人心の動揺 偽預言者たち 改革事業の危機 ルターの訴え 狂信的なトマス・ミュンツァー 真理と虚妄との戦い 聖書のドイツ語訳 聖書の普及と法王教の打破

第十一章 信教の自由のための戦い・・・・・・・・243

シユパイエル議會が開かる 危険な妥協案 信教自由の危機 皇帝側と改革派の対立『抗議書』の提出 プロテスタントの根本精神 天使の守護 アウグスブルクの議會堂々たる信仰告白 ルターの持した態度 祈りの力

第十二章 フランスの宗教改革・・・・・・・・264

ドイツとスイスの状況 フランスにおける先駆者 ファーレルの熱意 著しい進展 改革者ベルカン ベルカンの殉教 迫害と、福音の前進 カルバンの苦悩 福音の戦士としての登場 パリにおける争闘 カルバンの活動 檄文事件と弾圧の開始 無言の説教 プロテスタント撲滅政策 福音拒否の結果 ファーレルの伝道 ジュネーブにおけるカルバン イエズス会の策動 宗教改革におけるカルバンの位置

第二章	北欧諸国の宗教改革	299
-----	-----------	-----

オランダにおける真理の伝統 改革者メノー・シモンズ 迫害と宣教 デンマークの改革者タウセン スウェーデンの改革者ペトリ兄弟

第四章	英国における真理の前進	309
-----	-------------	-----

聖書を英国民の手に ティンダルの偉大な事業 改革主義者たちの輩出 スコットランドの情勢 大胆不敵なジョン・ノックス イングランドの情勢 ウェスレー兄弟の出現 モラビア派との出会い キリストの兵卒として 奇跡的な神の守り 初期メソジストの苦闘 律法不要論との戦い 律法と福音 ウェスレーの生涯の意味

第五章	聖書とフランス革命	339
-----	-----------	-----

恐るべき預言 二人の証人 神を否定する国の出現 フランスの殉教者たち 聖バーンロミューの虐殺 無神論の挑戦 「理性の女神」 ローマの政策 革命の遠因 革命前夜 ローマ教と無神論 革命勃発 恐怖の時代 真理拒否の結果 聖書の勝利

第六章	アメリカ合衆国と建国の精神	371
-----	---------------	-----

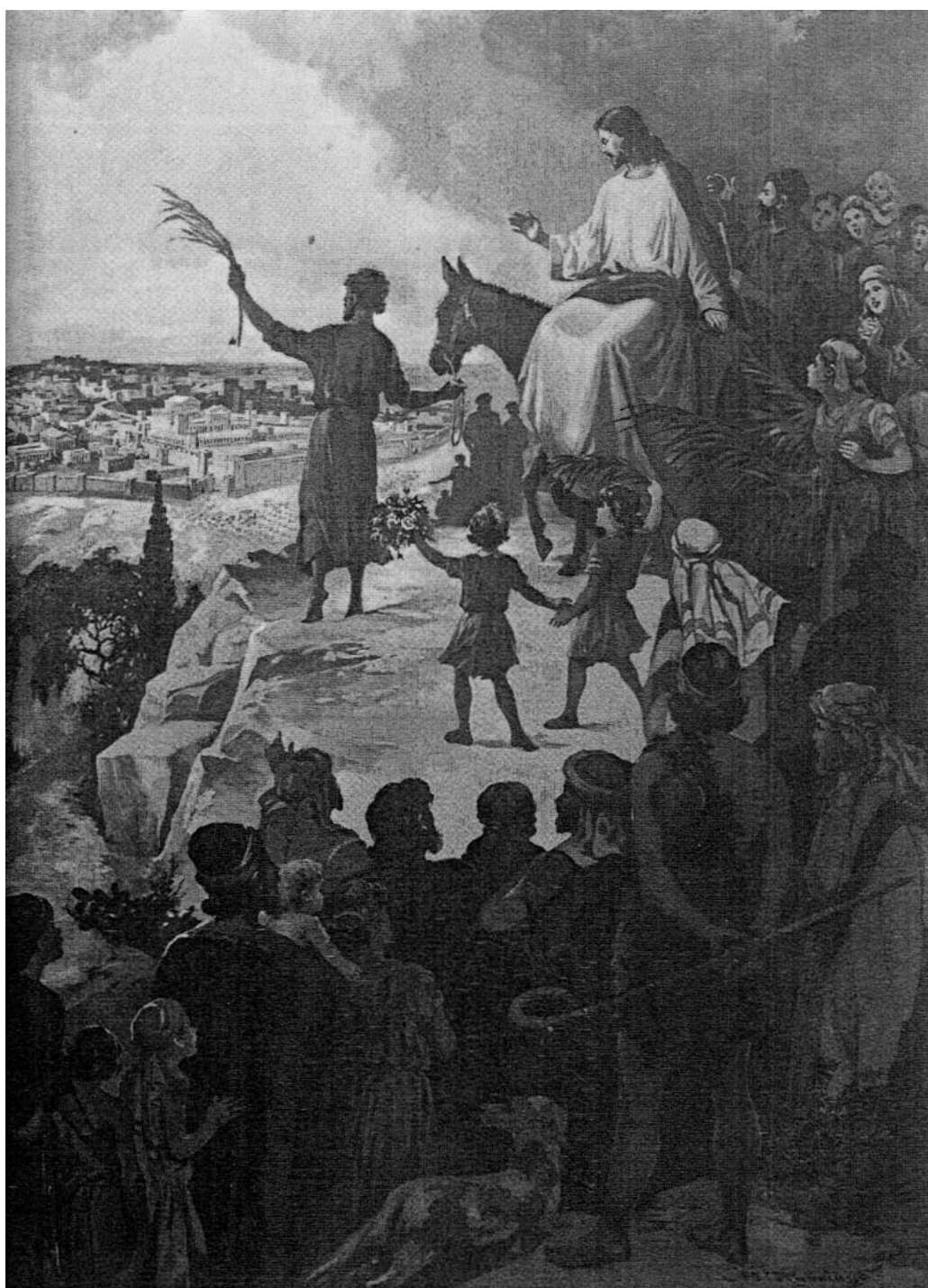
英国宗教界の情勢 清教徒の海外移住 ジョン・ロビンソンの告別の辞 アメリカの岸辺で 信教自由の闘士ロージャー・ウィリアムス 合衆国と信教自由の精神 米国宗教界の墮落

第七章	最大の希望	385
-----	-------	-----

各時代の希望 再臨の約束 改革者たちの再臨信仰 再臨の前兆——リスボンの大地震 再臨の前兆——暗黒日 再臨直前の教会の状態 再臨と神の警告 初臨と再臨 ベツレヘムの物語の教訓 教会の覚醒と、再臨を迎える準備

各時代の斗争闘

上



勝利の入城ですべてのものが喜んでいるとき、イエスはエルサレムをぞらになり、神の愛を拒んだその民を待ち受けている悲劇を思って涙を流された。

第一章

世界の運命の預言

ユダヤ民族の誇り、エルサレム

「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている。いつかは、敵が周囲に壘を築き、おまえを取りかこんで、四方から押し迫り、おまえとその内にいる子らとを地に打ち倒し、城内の一つの石も他の石の上に残して置かない日が来るであろう。それは、おまえが神のおとずれの時を知らないでいたからである」(ルカ一九ノ四二―四四)。

イエスは、オリブ山の上からエルサレムを見られた。美しい平和な光景が彼の前にひろがっていた。それは、過越の祭りの時であった。ヤコブの子孫たちは、この国民的大祭を祝うために各地から集まっていた。巡礼者たちの天幕が、庭園にも、ぶどう園にも、緑の斜面にも散在していた。そしてそのまん中に、段々に高くなった小

山があつて、そこに壮麗な宮殿とイスラエルの首都の巨大な城壁があつた。シオンの娘は、誇らかに、わたしは女王の位についている者であつて悲しみを知らない、と言っているようであつた。幾世紀も前に、詩人ダビデ王が、「シオンの山は……うるわしく、全地の喜びであり、大いなる王の都である」と歌つたときと同様に、この時もエルサレムは、神の恵みに浴していることを確信しているかのように思われた（詩篇四八ノ二）。そこには壮麗な神殿の建物が一目で見渡せた。沈んでいく太陽の光が純白の大理石の壁を照らし出し、黄金の門とやぐらと尖塔に輝いていた。それは、「麗しさのきわみ」であり、ユダヤ民族の誇りであつた。イスラエル人であれば、この光景をながめて、喜びと賛美に心を震わせないものがあるであらうか。しかし、イエスは、それとは全くかけ離れたことを考えておられた。「いよいよ都の近くにきて、それが見えたとき、そのために泣」かれた（ルカ一九ノ四一）。すべての者が勝利の入城を祝つて、しゅろの葉を振り、喜ばしいホサナの声を山々に響かせ、大群衆が彼を王と呼んでいるそのときに、世界の贖い主は、突然、不思議な悲しみに打ちひしがれた。神の子であり、イスラエルの約束のすえであり、死を征服して墓から死者を呼び出されたおかたが、ただ単なる悲しみのためではなくて、抑制しきれぬ激しい苦悩のために、涙を流されたのである。

彼は、ご自分がどこに向かつて歩まれつつあるのかをよく知つておられたが、しかしこの涙は、ご自分のためではなかつた。彼の前には、近づきつつある苦悩の場、ゲッセマネが横たわっていた。幾世紀の間、犠牲としてささげられる動物が通つた羊の門も見えていた。そしてこれは、彼が「ほふり場にひかれて行く小羊のように」ひかれて行くときに、彼のために開かれるのであつた（イザヤ書五三ノ七）。彼が十字架につけられる場所であるカルバリーも、あまり遠くはなかつた。まもなくキリストが、ご自分をとがの供え物として歩まれる道は、大き

な暗黒の恐怖におおわれなければならなかった。しかしこの喜ばしい時に彼の心を暗くしたのは、こうした光景を思われたためではなかった。彼の無我の心は、ご自分の超人的苦悩を予測して曇ることはなかった。彼が泣かれたのは、滅亡の運命にあるエルサレムの多くの人々のためであった。彼が祝し救うために来られた人々の盲目と強情のためであった。

選民イスラエルの歴史

神の特別の恵みと保護を受けた選民の、千年以上にわたる歴史が、イエスの眼前に展開された。約束の子イサクが、なんの抵抗もせずに犠牲として祭壇に選ばれた——それは、神のみ子の供え物の象徴であった——モリヤの山がそこにあった。そこで信仰の父アブラハムに祝福の契約、輝かしいメシヤの約束が確認された（創世記二二ノ九、一六―一八参照）。ここは、オルナンの打ち場から犠牲の炎が天にのぼり、滅びの天使のつるぎをさらせたところであった（歴代志上二一章参照）が、それは罪人のための救い主の犠牲ととりなしの適切な象徴であった。エルサレムは、全地のどこよりも、神の栄誉を受けていた。「主はシオンを選び、それをご自分のすみかにしようと望」まれた（詩篇一三二ノ一三）。そこは、各時代にわたって、聖預言者たちが警告の使命を発したところであった。そこで、祭司たちは、香炉をゆり動かし、そして礼拝者の祈りと共に、薫香のけむりが神の前にのぼっていった。そこで、日ごとに、ほふられた小羊の血がささげられて、神の小羊を指し示していた。そこで、主は、贖罪所の上の栄光の雲の中にご自分の臨在をあらわされた。そこに天と地を結ぶ不思議なしが立ち、

その上を神の使いたちが上り下りしていた。そして、それは、最も聖なところへの道を世界に開いたのである（創世記二八ノ一二、ヨハネ一ノ五一参照）。もしイスラエルが国家として、天の神に忠誠をつくしたならば、エルサレムは、神に選ばれたものとして、永遠に立ったことであろう（エレミヤ書一七ノ二一―二五参照）。しかし、あの恵まれた民の歴史は、背信と反逆の記録であった。彼らは、天の神の恵みに反抗し、自分たちの特権を乱用し、機会を軽んじたのであった。

天の最上の賜物

イスラエルは「神の使者たちをあざけり、その言葉を軽んじ、その預言者たちをののしった」けれども、神はなおもご自分を、「主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神」として彼らにあらわされた（歴代志下三六ノ一六、出エジプト記三四ノ六）。彼らが何度も拒んだにもかかわらず、神は、恵み深く彼らに訴えつつけられた。父が、その息子をあわれむ以上の愛をもって、「主はその民と、すみかをあわれむがゆえに、しきりに、その使者を彼らにつかわされた」（歴代志下三六ノ一五）。勧告と懇願と譴責がむだであることが明らかになると、神は、天の最上の賜物をお与えになった。いやそれだけではない。神は、その一つの賜物によって、全天を注ぎ出されたのである。

神のみ子ご自身が、かたくなな町に訴えるために送られた。エジプトからイスラエルをよいぶどうの木として携え出されたのは、キリストであった（詩篇八〇ノ八）。彼は、ご自身の手で、その前から異邦人を追い払われた。

彼は、それを「土肥えた小山の上に」植え、それを保護するために、そのまわりに垣をつくられた。また、彼のしもべたちが、それを育てるためにつかわされた。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」と彼はおおせられるのである（イザヤ書五ノ一―四）。彼はよいぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、結んだものは野ぶどうであつた。それでもなお、実を結ぶのを熱望して、なんとかしてこれを滅びから救おうと、彼ご自身がぶどう畑においでになつた。彼は、ぶどうの回りを掘り、はさみを入れ、たいせつに育てられた。彼はご自分が植えたぶどうを救うためには、あらゆる努力をおしまれなかつた。

こうして、三年の間、光と栄光の主は、彼の民と共に過ごされた。彼は、「よい働きをしながら、また悪魔に押えつけられている人々をことごとくいやしなうが、巡回され」た。彼は、心のいためる者をいやし、捕われている者に解放を告げ、盲人の目を開き、足なえを歩かせ、耳しいに聞かせ、らい病人をきよめ、死人を生きかえらせ、貧しい人々に福音を伝えられた（使徒行伝一〇ノ三八。ルカ四ノ一八、マタイ一ノ五参照）。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」という恵み深い招きが、すべての階級の人々に同様に発せられたのである（マタイ一ノ二八）。

善に報いるに悪をもってされ、愛に報いるに恨みをもってあしらわれても、彼は、たゆまず慈悲深い働きを続けられた（詩篇一〇九ノ五参照）。彼の恵みを求めた者で、拒まれた者はひとりもなかつた。彼は家なき旅人として、屈辱と窮乏の生活を送られたが、彼の生きる目的は、困窮者に奉仕し、人々の苦しみを和らげ、彼らに生命の賜物を受けるように訴えることであつた。恵みの波は、かたくなな心によって押しかえされても、言葉では表現できない慈悲深い愛の大きな潮となって、また返っていった。それにもかかわらず、イスラエルは、その最上

の友であり唯一の援助者であるおかたに背を向けた。彼の愛の訴えはさげすまれ、彼の勧告は退けられ、彼の警告はちよう笑された。

ああ、エルサレム、エルサレム

希望と許しの時は、急速に過ぎ去りつつあった。長く延ばされていた神の怒りの杯は、今にも満ちようとしていた。各時代の背信と反逆によって、暗雲は無気味にその濃さを増し、罪深い民に向かって今にも破裂しようとしていた。しかも、彼らの上にさし迫った運命から彼らを救うことのできる唯一のおかたが、軽べつされ、虐待され、拒否されて、まもなく十字架につけられようとしておられた。キリストがカルバリーの十字架につかれるならば、神に恵まれ、祝福された国としてのイスラエルの日が終わるのであった。ただひとりの魂を失うことであつても、世界じゅうの富と財宝を失うことよりはるかに大きな不幸である。しかしキリストがエルサレムをござらんになったとき、滅亡にひんした都市全体と国家全体が、彼の前に横たわっていた。それは、かつては神に選ばれ、神の特別の宝であつた都市であり、国家であつた。

昔の預言者たちは、イスラエルの背信と彼らの罪の罰として下る恐るべき荒廃とを嘆いたのであつた。エレミヤは、彼の目が涙の泉となり、民の娘の殺された者のためと主の群れのかすめられた者のために、昼も夜も嘆くことができるようにと願つた（エレミヤ書九ノ一、一三ノ一七参照）。それでは、数年ではなくて、幾時代もの先を預言的眼光でござらんになったかたの悲しみは、どんなであつたことだろう。彼は、滅びの天使が、長く主の住

居であつた都に向かつて剣を上げているのを見られた。彼は、後年ティトウスとその軍隊が占領したオリブ山上の同じ場所から、谷の向こうの神殿の庭と柱廊とをごろんになった。そして、涙にかすむ目で、外国の軍隊が城壁を包囲する恐ろしい光景をごろんになった。彼は、進軍する軍隊の足音を聞かれた。彼は、籠城中の婦女子が食物を求める叫び声を聞かれた。彼は美を極めた聖なる神殿や王宮や塔が、炎に包まれ、あとかたもなく廃墟と化してしまうのをごろんになった。

彼は、はるか未来に目を注ぎ、契約の民が、「さばくに散らばる破片のように」、各地に離散するのを見られた。エルサレムの子らの上に下ろうとしていたこの世の応報は、最後の審判の時に彼らが一滴もあまさず飲みほさなければならぬ怒りの杯の、ほんの一口に過ぎないことを彼はごろんになった。こうして、神のあわれみと熱烈な愛は、悲しい言葉となってみ口からもれたのである。「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちようど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった」。ああ、他のすべての国にまさって恵まれた国よ、もし、おまえが、おまえの神のおとずれの時を知り、平和をもたらす道を知ってさえいたら。わたしは、刑罰の天使をとどめて、おまえに悔い改めをうながしたが、むだであった。おまえが拒み退けたのは、単にしもべや代理人、預言者たちではなくて、おまえの贖い主、イスラエルの聖者なのだ。もし、おまえが滅びるならば、それは、おまえだけの責任である。「しかも、あなたがたは、命を得るためにわたしのもとにこようとししない」(マタイ二三ノ三七、ヨハネ五ノ四〇)。

世界の滅亡の象徴

キリストは、不信と反逆によってかたくなになり、急速に神の刑罰を受けようとしていた世界を、エルサレムが象徴しているのを見られた。墮落した人類の不幸に、キリストは深く心を痛め、あのように激しい苦悶の叫びをあげられたのであった。彼は、人間の悲惨と涙と流血とが物語る罪の記録を見られた。彼の心は、地上で悩み苦しむ者のために、無限のあわれみを感じられた。彼はなんとかしてこうしたすべての人々を救いたいと熱望されたのである。しかし、彼のみ手をもってしても、人間の不幸の潮は止めかねるように思われた。彼らの唯一の援助者であるキリストを求める者が、少ないからであった。彼は、人々に救いをもたらすために、死に至るまで自分の魂を注ぎ出そうとしておられたのに、生命を得るために彼のところに来る者は少ないのであった。

天の君主が涙を流しておられる。無限の神のみ子が、み心を悩まし、悲嘆にくれて打ち伏された。この光景に全天は目を見はった。この光景は、罪がどんなに恐ろしいものであるかをわれわれに示し、また、無限の力を持たれた神でも、神の律法を破った結果から罪人を救うことがどんなに困難であるかを示している。イエスは、はるか最後の時代までをながめ、エルサレムの滅亡を招いたのと同様の欺瞞に、世界が陥っているのを見られた。ユダヤ人の大きな罪は、彼らがキリストを拒んだことであつた。キリスト教会の大きな罪は、天地を支配する神の統治の基礎である神の律法の拒否ということである。主の戒めは、軽べつされ、無視されるのであった。罪に束縛され、サタンの奴隷となり、第二の死に定められた無数の者が、神のおとずれの時に、真理の言葉を聞こう

としないのである。それは、なんと恐ろしい盲目、なんと不思議な愚かさであろう。

歴史的に見たエルサレムの神殿

過越の祭りの二日前、キリストは、ユダヤの指導者たちの偽善を非難したあと、神殿に最後の別れを告げてから、もう一度弟子たちと共に、オリブ山に行き、都を見おろす傾斜面の青草の上におすわりになった。彼は、もう一度、都の城壁と塔と王宮とをごらんになった。もう一度、聖なる山を飾る美しい王冠のような、まぶしく輝く神殿をごらんになった。

そのときから千年ほど前に、詩篇記者は、イスラエルの聖なる家をご自分の住居となさった神の恵みをほめたえた。「その幕屋はサレムにあり、そのすまいはシオンにある」。神は、「ユダの部族を選び、神の愛するシオンの山を選ばれた。神はその聖所を高い天のように建て」られた（詩篇七六ノ二、七八ノ六八、六九）。最初の神殿は、イスラエルが歴史上最も隆盛をきわめた時代に建てられた。ダビデ王は、このために、莫大な財宝を集めた。そして、その設計は、神の靈感によってなされた（歴代志上二八ノ一二、一九参照）。イスラエルの王のなかで最も賢明であったソロモンが、その工事を完成した。この神殿は、世界で最も壮麗な建物であった。しかし、主は、預言者ハガイによって、第二の神殿について、次のように言われた。「主の家の後の栄光は、前の栄光よりも大きい。」「わたしはまた万国民を震う。万国民の財宝は、はいつて来て、わたしは栄光をこの家に満たすと、万軍の主は言われる」（ハガイ書二ノ九、七）。

神殿は、ネブカデネザルに破壊されたあとで、キリスト誕生の約五百年前に、長年にわたった捕囚生活から、荒廃した故郷に帰ってきた人々によって再建された。そのとき、人々の中には、ソロモンの神殿の栄光を見た老人たちがいて、新しい建物の基礎が以前のものと比べてはるかに劣っているのを嘆いた。こうした人々の気持ちで預言者は、「あなたがた残りの者のうち、以前の栄光に輝く主の家を見た者はだれか。あなたがたは今、この状態をどう思うか。これはあなたがたの目には、無にひとしいではないか」と、力をこめて言っている（ハガイ書二ノ三。エズラ記三ノ一二参照）。このとき、この後の家の栄光は、前の家の栄光より大きいという約束が与えられた。

しかし、第二の神殿は、荘厳さにおいて、第一の神殿の比ではなかった。また、第一の神殿に与えられていた神の臨在の目に見えるしるしはなかった。その献堂を記念する超自然的力の現われもなかった。栄光の雲が新築の聖所を満たすのも見られなかった。祭壇の上の犠牲を焼きつくす天からの火もなかった。至聖所のケルビムの間に、シエキーナーは、もう宿っていなかった。そこには、契約の箱も贖罪所もあかしの板もなかった。神に問う祭司に、主のみこころを告げる天からの声はなかった。

何世紀もの間、ユダヤ人は、ハガイによって与えられた神の約束の成就を示そうと努めてきたが、おどであった。しかし、誇りと不信が彼らの心を盲目にし、預言者の言葉の真の意味を理解させなかった。第二の神殿は、主の栄光の雲ではなくて、肉体をとって現われた神ご自身、満ちみちているいっさいの神の徳が宿っているかたの生きた臨在によって、あがめられるのであった。ナザレのイイエスが神殿の庭で、教え、いやされたとき、「万国民の財宝（万国の願うところのもの・文語訳）」が、ほんとうに彼の神殿に來られたのである。キリストが來ら

れたこと、ただそのことだけで第二の神殿は、第一の神殿の栄光をしのいだ。しかし、イスラエルは、天から与えられた贈り物を退けてしまった。その日、けんそんな教師イエスが、黄金の門から出られたときに、栄光は、永久に神殿から去ったのである。「見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまつ」という救い主の言葉は、すでに成就したのであつた（マタイ二三ノ三八）。

エルサレム滅亡の預言

弟子たちは、神殿の破壊に関するキリストの予告を聞いて、恐れと驚きに満たされ、彼の言葉の意味をもつとよく知りたいと願つた。神殿の壮麗さを増すために、財宝と労力と建築上の技術とが、四十年以上にわたつて注ぎこまれていた。ヘロデ大王も、ローマとユダヤ両国の財宝を惜しみなく費やし、ローマ皇帝さえも贈り物をささげて神殿を壮麗にした。信じられないような巨大な白い大理石が、この目的のためにローマから回送され、建物の一部に用いられた。そして弟子たちは、これらの石に主の注意をひいて、「先生、ごらんなさい。なんといい見事な石、なんという立派な建物でしょう」と言つた（マルコ一三ノ一）。

ところが、これに対して、イエスは厳粛で驚くべき答えをされた。「よく言つておく。その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであらう」（マタイ二四ノ二）。

エルサレムの滅亡というと、弟子たちは、キリストが世界国家の王座につき、かたくななユダヤ人を罰し、国家をローマのくびきから解放するために、この世の栄光のうちに来られるときのできごとを連想した。主は彼ら

に、ご自分がもう一度こられることを語っておられたから、彼がエルサレムの滅亡のことを言われた時、彼らはその再臨のことを思った。そこで、彼らがオリブ山上で救い主のそばに集まったときに、「いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか」と彼らは聞いた（マタイ二四ノ三）。

未来のことは、あわれみのうちに、弟子たちから隠された。もしも、彼らがこの時、贖い主の苦難と死、そして都と神殿の破壊という二つの恐ろしいできごとを全部知ったならば、彼らは恐怖にうちひしがれたことである。キリストは、終末の前に起こる主要事件のあらましを彼らに示された。そのとき、彼の言葉は十分に理解されなかった。しかし、その意味は、神の民がそこに与えられている教訓を必要とするときに明らかにされるのであった。彼が言われた預言には、二重の意味があった。それは、エルサレムの滅亡を予告するとともに、最後の大きな日の恐怖をも予表していた。

イエスは、耳を傾けている弟子たちに、背信したイスラエルに下る刑罰、特に、メシヤを拒んで十字架につけることに対して下る懲罰報復を明らかにされた。恐るべき頂点に達する前に明白なしるしが現われる。恐怖すべき時が、突然、急速にやってくる。救い主は、弟子たちに次のように警告を発せられた。「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤに人々は山へ逃げよ」（マタイ二四ノ一五、一六、二二ノ二〇、二二参照）。エルサレムの城外、数マイルにわたる聖地に、ローマ人の異教の軍旗が立てられるとき、キリストに従う者たちは、安全をもとめて逃げなければならなかった。警報が見えたならば、のがれることを望むものはためらってはならなかった。避難警報は、エル

サレム城内と同様に、ユダヤ全土において、直ちに従うべきものであった。屋上にいる者は、どんなに大切な宝物であっても、それを取りに家の中にはいつてはならなかった。畠やぶどう畑で働いていたものは、日中働いていたときに脱いでおいた上衣を取りに帰ってはならなかった。彼らは、一瞬でもためらってはならなかった。さもないと一般の人々と共に滅びにまき込まれてしまうのであった。

エルサレムは、ヘロデ王の治世に大いに美化されたばかりでなく、塔、城壁、要害などが建てられ、それに地形が自然の要害となっていたので、難攻不落の城とされていた。こうした時に、エルサレムの滅亡を公に予告するものは、洪水前のノアのように狂気じみた杞憂家と呼ばれたことであろう。しかし、キリストは、「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることがない」と言われた（マタイ二四ノ三五）。エルサレムは、その罪のために刑罰の宣告を受けていたが、そのかたくなな不信によって滅亡を決定的にしたのであった。

罪惡の巢エルサレム

主は、預言者ミカによって、次のように言われた。「ヤコブの家のかしらたち、イスラエルの家のつかさたちよ、すなわち公義を憎み、すべての正しい事を曲げる者よ、これを聞け。あなたがたは血をもってシオンを建て、不義をもってエルサレムを建てた。そのかしらたちは、まいないをとってさばき、その祭司たちは価をとって教え、その預言者たちは金をとって占う。しかもなお彼らは主に寄り頼んで、『主はわれわれの中におられるではないか、だから災はわれわれに臨むことがない』と言う」（ミカ書三ノ九―一一）。

このみ言葉は、腐敗に陥り自分を義とするエルサレムの住民を、正確に描写していた。彼らは、神の律法の教えを厳格に守っているといいながら、そのすべての原則を犯していた。彼らは、キリストの純潔と聖潔とが彼らの罪悪を暴露したために彼を憎んだ。そして、自分たちの罪のためにふりかかってきた苦難について、その原因は彼にあると言って非難した。彼らは、キリストが無罪であることを承知の上で、国家の安全を保つためには彼の死が必要であると宣言した。「もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう」とユダヤの指導者たちは言った（ヨハネ一ノ四八）。もしキリストを犠牲にしまえば、彼らは、もう一度強力な統一国家になることができる。このように考えて彼らは、全国民が滅びるよりはひとりの人が人民に代わって死ぬほうがよいという大祭司の決定に、同意したのであった。

このようにして、ユダヤ人の指導者たちは、「血をもつてシオンを建て、不義をもつてエルサレムを建てた」（ミカ書三ノ一〇）。彼らは、救い主が彼らの罪を譴責されたために、彼を殺しておきながら、なお自分たちは神に恵まれていると考え、神が彼らを敵の手から救ってくださると期待するほどに自分を義としていた。「それゆえ、シオンはあなたがたのゆえに田畑となつて耕され、エルサレムは石塚となり、宮の山は木のおい茂る高い所となる」と預言者は言った（同・三ノ一二）。

神は、エルサレムの運命がキリストご自身の口から宣言されてから四十年近くも、都と国家に対する刑罰を延ばされた。福音を拒否し、神のみ子を殺害した者に対する神の寛容は驚くべきものであった。神がユダヤ国民を扱われる方法が、実を結ばない木の譬によくあらわされている。「その木を切り倒してしまえ。なんのために、

土地をむだにふさがせて置くのか」という命令がすでに出されていた（ルカ一三ノ七）。しかし、神のあわれみは、なおしばらくの間、それを猶予しておられた。ユダヤ人の中には、キリストの品性と働きについて無知なものがまだ多くあった。子供たちは、彼らの親が拒否した光に接する機会も、それを受ける機会もなかった。神は使徒たちやその仲間たちによって、彼らに光を輝かそうと望まれた。彼らは、キリストの誕生と生涯だけでなく、その死と復活についても、預言がどのように成就したかを見せられるのであった。子供たちは親の罪の罰を受けるではなかった。しかし、子供たちが、親に与えられたすべての光を知った上で、さらに自分たちに与えられた光を拒むとき、彼らは親の罪にあずかる者となり、彼らの悪の升目を満たすのであった。

サタンの支配

エルサレムに対する神の忍耐は、ただユダヤ人をかたくなな不信に陥れるだけであつた。彼らは、イエスの弟子たちを憎み、虐待して、最後のあわれみの招きを拒んでしまった。その時、神は、彼らから保護の手を引き、サタンとその使いたちに対する神の抑制力を除去された。そして国家は、その選んだ指導者のなすままになった。イスラエルの人々は、邪悪な衝動をしずめる力を彼らに与えることのできるキリストの恵みを、退けてしまった。そこで、今度は、こうした衝動が優位を占めた。サタンは、人間の心の中の最も激烈で卑しい感情をよびおこした。人々は、道理をわきまえなかった。彼らは理性を越えた衝動と盲目的な激しい怒りに支配された。彼らは、悪魔的残酷さをあらわしてきた。家庭においても国家においても、上流階級においても下層階級においても一様

に、疑い、ねたみ、憎しみ、争闘、反逆、殺人などが行なわれた。どこも安全ではなかった。友人も親族も、互いに裏切り合った。親は子供を殺し、子供は親を殺した。国民の指導者たちは、自分自身を統御する力がなかった。押えきれない感情が彼らを暴君にした。ユダヤ人は、神の罪なきみ子を罪に定めるために、偽証を受け入れたのであった。そして今、偽証が、彼ら自身の生命を脅かしていた。彼らは、その行動によって、長い間、「われらが前にイスラエルの聖者をあらしむるなかれ」と言ってきた（イザヤ書三〇ノ一文語訳）。今、彼らの願いはかなえられた。彼らはもう神を恐れなくなった。サタンが、国家のかしらとなった。そして政治と宗教の最高の権威者たちは、彼の支配下にあった。

対立する諸党派の指導者たちは、時には結束して、哀れな犠牲者たちを襲って苦しめるかと思うと、今度は互いに攻め合い無慈悲に殺害し合った。神聖な神殿でさえ、彼らの恐ろしい残忍さをとどめることができなかった。礼拝者が祭壇の前で殺され、聖所は死体によって汚された。しかし、この凶悪な行為の扇動者たちは、その盲目で神をないがしろにした思い上がりから、エルサレムは神ご自身の都であるから、滅亡する恐れはないと公言していた。彼らは権力を確保するために、にせ預言者を買収して、ローマの軍隊が神殿を包囲しているときでさえ、神の救いを待つべきであると人々に言わせた。群衆は、至高者であられる神が敵を滅ぼすために介入なさることを、最後まで信じていた。しかし、イスラエルは、神の保護を退けてしまっていたから、今、なんの防備もなかった。不幸なエルサレムよ。内紛に裂かれ、同志の手で殺害された子らの血が、都の通りを赤く染め、その上異邦人の軍隊が要塞を破壊し、兵士たちを殺害したのである。

エルサレムの滅亡に関するキリストの預言はみな、文字どおり成就した。ユダヤ人は、「あなたがたの量るそ

のはかりで、自分にも量り与えられるであろう」というキリストの警告の言葉が事実であることを、身をもって知った（マタイ七ノ二）。

災害と滅亡を予告するしと不思議があらわれた。真夜中に、神殿と祭壇の上に異様な光が輝いた。戦いのために戦車や勇士たちが集結するのが、日没のとき雲の上に描き出された。夜間、聖所で奉仕する祭司たちは、不思議な物音に驚かされた。地が震え、「われわれはここを去ろう」と大ぜいの声が叫ぶのが聞こえた。二十人がかりでもしめられないほど重く、しかも堅い敷石に深く打ち込まれた鉄のかんぬきで閉じられた東の門の扉がだれもないのに、夜半に開かれた。

また、七年の間、ひとりの男がエルサレムの町をあちこちとへめぐって、都に下る災いについて叫びつづけた。彼は、昼も夜も、激しい悲しみの歌をうたった。「東からの声。西からの声。四方からの声。エルサレムを責め、神殿を責める声。新郎と新婦を責める声。全国民を責める声」^二。この不思議な男は投獄されて、きびしく罰せられたが、一言もつぶやきの言葉をもらさなかった。彼は、侮辱とののしりに対して、「エルサレムは、わざわいだ、わざわいだ。」「エルサレムの住民はわざわいだ、わざわいだ」と答えるだけであつた。彼の警告の叫びは、彼が自分の予告したその包囲のなかで殺されるまでやまなかった。

キリスト者の奇跡的な脱出

エルサレムが滅亡したとき、キリスト者はひとりも死ななかった。キリストが弟子たちに警告を発しておられ

たので、彼の言葉信じたものは、みな、約束のしるしに注意していた。「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたときとみなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい」とイエスは言われた（ルカ二一ノ二〇、二二）。ローマ軍は、ケステイウスの指揮のもとに都を包囲したが、すべてが即時攻撃に好都合であると思われるにもかかわらず、不意に撤退してしまった。籠城していた側では包囲に耐えかねて、今にも降伏するばかりになっていた時に、ローマの將軍は、一見、なんの理由もないのに、軍隊を撤退させたのである。しかしこれは、神が神の民のために事件のなりゆきを導かれるあわれみに満ちた摂理であつた。すでに約束のしるしは、待っているキリスト者に与えられていた。そして、今、救い主の警告に従おうとするすべての者に機会が与えられた。事件は、神の支配下にあつたので、ユダヤ人もローマ人も、キリスト者の避難を止めなかつた。ケステイウスの退却を見たユダヤ人は、エルサレムを飛び出して敵軍のあとを追つた。両軍の交戦中に、キリスト者は都を去ることができた。このとき、彼らの避難の妨害になつたかもしれない敵の軍勢も、国内から追い払われていた。包囲されたとき、ユダヤ人は仮庵の祭りを祝うためにエルサレムに集まつていた。したがつて全国のキリスト者は、無事のがれることができた。彼らは直ちに安全な場所へ、ヨルダンの向こうにあるペレアの地のペラの町に避難した。

ケステイウスとその軍隊を追跡したユダヤ軍は、これを全滅させるかと思われる勢いで後方から攻めたたてた。ローマ軍は、非常な困難のなかでやつと退却した。ユダヤ軍は、ほとんど損失をこうむらずにすみ、戦利品を携えて、意気揚々とエルサレムに引きあげた。しかし、この勝利と思われたことは、ただ彼らを不幸にしたいだけであつた。これは、ローマ人に対する頑強な抵抗心を彼らにいだかせ、滅亡にひんした都を言語に絶する苦難に陥れた。

ティトウスの再攻撃とエルサレムの惨状

ティトウスがふたたび包囲したとき、エルサレムに起こった災難は悲惨なものであった。都の包囲は、城内に幾百万のユダヤ人が集まっていた過越の祭りのときに起こった。注意深く保存すれば、数年は住民を養うことができたはずの食糧の蓄えは、相争う党派のしつとやふくしゅうのためにすでになくなり、人々は、今や飢餓の恐怖にさらされていた。小麦一升の価は一タラントであった。人々は、非常な飢えのために、帯皮やサンダル、また盾のおおいをかなりした。多くの者は、夜間城外に忍び出て、城壁の外に生えている野草を取ろうとしたが、その多くは捕えられて惨殺された。また、無事帰ってきた者も、非常な危険を冒して集めたものを他の人に奪われてしまうのであった。権力者が、窮乏に陥った者から、隠しているわずかの食物を奪い取るために加えた拷問は、実に残忍なものであった。こうした残忍なことは、十分に食物を持っていながら、ただ将来のために蓄えておこうとする人々によって、しばしば行なわれたのであった。

無数の者が、飢えと病気で倒れた。人間本来の自然な愛情は失われてしまったように思われた。夫は妻から、妻は夫から奪った。子供は、老いた親の口から食物をもぎ取った。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるのか」という預言者の問いに対して、滅亡にひんした城内から次のような答えがあった。「わが民の娘の滅びる時には情深い女たちさえも、手ずから自分の子どもを煮て、それを食物とした」(イザヤ書四九ノ一五、哀歌四ノ一〇)。また、それより一四〇〇年前に与えられた警告の預言が成就した。「ま

たあなたがたのうちのやさしい、柔和な女、すなわち柔和で、やさしく、足の裏を土に付けようともしない者でも、自分のふところの夫や、おすこ、娘にもかくして、…自分の産む子をひそかに食べるであろう。敵があなたの町々を囲み、激しく攻めなやまして、すべての物が欠乏するからである」(申命記二八ノ五六、五七)。

神 殿 燃 ゆ

ローマの將軍たちは、ユダヤ人を脅かして、彼らを降伏させようとした。彼らは抵抗した捕虜をむちで打って苦しめ、都の城壁の前で十字架にかけた。こうして、殺される者が毎日何百人とあった。そして、この恐ろしいことは、ヨシヤパテの谷一帯とカルバリーに無数の十字架が立てられ、その間を歩くことさえ困難になるまで続いた。ピラトの法廷で叫ばれた「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」という恐ろしいのろいの言葉は、このように悲惨な罰となった(マタイ二七ノ二五)。

しかし、ティトウスは、なんとかしてこの恐るべき状態をやめさせ、エルサレムを全滅から救いたいと思った。彼は、谷間に積まれた死体を見て戦慄した。彼は、オリブ山の上から壮麗な神殿をながめて、非常に心を打たれ、その石一つにでも触れてはならないと命令した。ティトウスはこの要害を占領するに先だって、ユダヤの指導者に熱心に訴え、彼がこの神聖な場所を血で汚さなくてもよいようにしてほしいと言った。もし彼らが出てきて、他の場所で戦うことを望むならば、ローマ人はだれも神殿を汚すことはしないとやった。ヨセフ自身も大いに熱弁をふるって、ユダヤ人に降伏をすすめて、自分たちを救うと共に都と神殿とを救うように訴えた。しかし、こ

うした言葉に対して、彼は激しいのろいの声を浴びせられた。最後の調停者として訴える彼に、投げやりが投げられた。ユダヤ人は、神のみ子の懇願を退けてしまったが、今では忠告も懇願もただ彼らの心をかたくなにしてあくまで抵抗させるだけであつた。神殿を滅ぼすまいとしたティトウスの努力はむだであつた。彼より偉大なおかたが、その石一つでもくずされずに、他の石の上に残ることはないと言言されていたのである。

ユダヤの指導者たちの盲目的頑強さと、城内で行なわれた憎むべき犯罪とが、ローマ人の恐怖と激怒をあり、ティトウスはついに、神殿を襲つてこれを占領することをきめた。しかし彼は、できることならば神殿を破壊から守ろうとした。けれども彼の命令は無視された。彼が夜、天幕に帰つたあとで、ユダヤ人は、神殿から城外に出て、敵の兵隊を攻撃した。交戦中、ひとりの兵士が柱廊のすきまから中へたいまつを投げ込んだ。たちまち、神殿の回りの杉材のへやは火に包まれた。ティトウスは將軍や兵隊をつれてその場に行き、火を消すように兵隊たちに命じた。しかし、その命令は顧みられなかった。怒り狂つた兵隊たちは、神殿に隣接したへやにたいまつを投げ込み、そこに避難していた多くの者を剣にかけて殺した。血が神殿の階段を川のように流れた。幾千というユダヤ人が死んだ。戦いの物音に混じつて、「イカボデ」——栄光は去つたと叫ぶ声が聞こえた。

ティトウスは、兵隊たちの激しい怒りをしずめることが不可能であることを知つて、将校たちと共に中にはいり、神殿の内部を調査した。彼らはその壮麗さに目を見張つた。そして、火はまだ聖所まで回っていなかったのだ、必死になつてこれを守ろうとし、飛び出して行つて、ふたたび兵隊たちに火の進行を止めるように訴えた。百卒長リベリウスは、その職権によつて、服従をしいようと試みた。しかし、皇帝への尊敬でさえ、ユダヤ人に対する激しい敵意と戦いの恐ろしい興奮と略奪に対する飽くことを知らない欲望の前には、どうする力もなかつ

た。兵隊たちは、金色に輝く周囲のものがみな、燃えさかる炎に照りはえるのを見て、聖所の中には無数の宝物がたくわえられていると考えた。だれも気づかないうちに、一兵卒が、とびらのちようつがいの間から火のついたたいまつを中に投げ入れた。建物全体は、一瞬のうちに炎に包まれた。立ちこめる煙と火のために、将校たちは、避難するほかなかった。そして、広大な建物は、焼失するままになってしまった。

エルサレム陥落

「それは、ローマ軍にとって恐るべき光景であつた。では、ユダヤ人にとってはどうであつたか。全市を見おろす山頂全体が噴火山のように燃え上がった。建造物は次々と大音響を立てて倒れ、火の海にのまれた。杉ぶきの屋根は一面の火と変わり、金色の尖塔は赤い火の柱のように輝いた。門塔は炎と煙を高く吹き上げた。近くの山々は火に照りはえ、黒い人影が恐怖と不安にかられつつ、滅亡のさまをながめていた。都の城壁と高台のほうにも、絶望に青ざめた人々や、無益なふくしゅうの念に顔をしかめた人々が群がっていた。走り回るローマの兵隊の叫び声や、炎の中で倒れる反乱兵たちのうめき声が、猛火のうなりと材木の落下する大音響に混って聞こえた。高台の人々の叫び声が山々にこだまし、城壁の回り一面に、泣き叫ぶ声と嘆き悲しむ声が満ちた。飢えて死にひんしている人々は、わずかに残った力をふりしぼって、苦悩と悲痛の叫びをあげた。

「城内の殺害は、城外の光景よりいっそう悲惨なものであつた。男も女も、老いも若きも、反乱兵も祭司も、戦った者もあわれみを請うた者も、みな差別なく殺害された。殺された者の数は、殺害者の数を上回った。軍隊

第1章 世界の運命の預言



エルサレムの城壁はローマ軍に包囲された。神殿も王宮も塔も炎に包まれ、それらがあったところには、くすぶる廃虚だけが残った。

は死者の山をよじのぼって、絶滅の仕事が続けねばならなかった。」^三

神殿が破壊された後、まもなく、全市がローマ軍の手に落ちた。ユダヤの將軍たちは難攻不落の要塞を放棄したので、ティトウスがそこに来たときには、だれも残っていなかった。彼はそれを見て驚き、これを彼の手に与えたのは神であると言った。というのは、どんなに強力な兵器でも、この巨大な要塞の胸壁を打ち破ることはできなかったからである。都も神殿ともに完全に破壊され、神殿の跡は、「畑のように耕され」た（エレミヤ書二六ノ一八）。包囲とその後の虐殺によって死んだ者は百万人以上であった。生存者は、捕虜として連れていかれたり、奴隷に売られたり、勝利者の凱旋を飾るためにローマへ引かれて行ったりした。また円形劇場で野獣の餌食になった者もあれば、流浪の民として世界じゅうにちらばった者たちもいた。

罪の収獲

ユダヤ人は、自分で自分の足かせをつくり、自分でふくしゅうの杯を満たしたのである。国家としての全滅の中で、そしてそれに続いて起こったあらゆる災いの中で、彼らは彼ら自身がmaidしたその収獲を刈り取っているにすぎなかった。「イスラエルよ、あなたはあなた自身を滅ぼす」「あなたは自分の不義によって、つまりいたからだ」と預言者は言っている（ホセア書一三ノ九・英語訳、一四ノ一）。彼らの苦難は、神の直接の命令によって下った刑罰のように言われることがよくある。こうして大欺瞞者は、自分自身の行為をかくそうとしているのである。ユダヤ人は、神の愛とあわれみを頑強に拒否して、神の保護を彼らから退け、サタンが思いのままに彼らを

支配するにまかせたのであった。エルサレムの滅亡のときに行なわれた残虐行為は、サタンの支配に応じる者にサタンがどんな執念深い力をあらわすかを示している。

われわれは、自分たちの享受している平和と保護が、どんなに多くキリストに負うものであるかを、知ることができない。人類が全くサタンの支配下に陥らないようにしているのは、神の抑制力である。神が慈悲と忍耐をもって、悪魔の残酷で悪意に満ちた力を止めておられることを、不従順で恩を知らない者たちは、大いに感謝しなければならぬのである。しかし、人間が神の忍耐の限度を越えるとき、この抑制は取り除かれる。神は、罪に対する宣告の執行者として罪人の前に立たれるわけではない。しかし神は、神のあわれみを拒んだ者をそのすがまにされるのである。彼らは、自分たちが聞いたものを刈り取らなければならない。退けた光、軽んじ、無視した警告、ほしいままにした欲情、神の律法にそむいたことなどはすべて、まかれた種であって、それは必ずその収穫をもたらすのである。神の霊は、頑強にそれを拒んでいると、ついには、罪人から離れてしまう。すると、もはや心の邪悪な感情を抑制する力がなくなり、サタンの悪意と敵意から彼らを保護するものがなくなってしまう。エルサレムの滅亡は、神の恵みの招きを軽んじ、神のあわれみの訴えを拒む者に対する恐ろしい、そして厳粛な警告である。罪に対する神の憎しみと、罪人に下る刑罰の確実性に関する、これ以上の決定的証拠はない。

現代に対する神の警告

しかし、エルサレムに下った刑罰に関する救い主の預言は、もう一つの成就を見なければならない。あの恐ろ

しいエルサレム滅亡も、そのできごとのほんのかすかな影にしかすぎないのである。すなわち、われわれは、選ばれた都の滅亡のなかに、神のあわれみを拒み、神の律法をふみにじってきた世界の運命を見るのである。この地上で、幾世紀の永きにわたって罪を犯し続けてきた悲慘な人類の歴史は、まことに暗いものである。それを考えるとき、だれしも心痛み、気はなえてしまう。神の権威を拒否する結果は、実に恐ろしいことである。しかし、さらに暗い光景が未来に関する啓示のなかに示されている。すなわち、混乱、争闘、革命、「騒々しい声と血まみれの衣を持った戦士の戦い」（イザヤ書九ノ五・英語訳）といった過去の歴史も、神の霊の抑制力が悪人たちから全く取り除かれ、人間の欲情とサタンの怒りを止めるものが何もなくなくなるその日の恐怖と比べると、もの数ではないのである。そのとき、世界は、これまでかつてなかったほどに、サタンの支配の結果を見るのである。

しかし、その日、エルサレムの滅亡の時と同じように、生命の書に記されたすべての神の民は救われる（イザヤ書四ノ三、四参照）。キリストは、忠実な者を集めるためにもう一度来ると言われた。「そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう。また、彼は大きいなるラッパの音と共に御使たちをつかわして、天のはてからはてに至るまで、四方からその選民を呼び集めるであろう」（マタイ二四ノ三〇、三二）。そのとき、福音に従わない者は、彼の口の息をもって殺され、その来臨の輝きによって滅ぼされる（テサロニケ第二・二ノ八参照）。昔のイスラエルと同様に、悪人は、自分自身を滅ぼし、自分の不義のために倒れる。彼らは罪の生活によって、神と一致した生活から遠く離れ、彼らの性質は悪に染まってしまった。そのため、神の栄光の

あらわれは、彼らにとって焼き尽くす火となるのである。

われわれは、キリストの言葉に示された教訓をなおざりにしないように注意しなければならない。キリストは、エルサレムの滅亡について弟子たちに警告を与え、彼らが逃れることができるように、滅亡の近いことを示すしをとお与えになった。そのように、彼は、最後の滅亡の日について世界に警告を発し、すべてのものが来たるべき怒りから逃れるように、その近いことを示すしをお与えになった。「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう。そして、地上では、諸国民が悩み」とイエスは言われた（ルカ二ノ二五、マタイ二四ノ二九、マルコ一三ノ二四―二六、黙示録六ノ一―一七参照）。キリストの再臨に関するこうしたしるしを見る者は、「そのことが戸口まで近づいている」ことを知らなければならない（マタイ二四ノ三三・英語訳）。「目をさましていなさい」と彼は勧めておられる（マルコ一三ノ三五）。この警告を心にとめている者は、暗黒のうちに取り残され、その日が不意に彼らを襲うことはない。しかし、目をさましていない者にとっては、「主の日は盗人が夜くるように来る」のである（テサロニケ第一・五ノ二、三―五参照）。

今、世界は、ユダヤ人がエルサレムに関する救い主の警告を受け入れなかったのと同様に、現代のためのメッセージを信じようとしていないのである。しかし、いずれにしても、神の日は、神を信じない者に不意にやって来る。生活はいつもと変わりなく続き、人々は快樂にふけり、事業や商売や金もうけに熱中し、宗教家が、世界の進歩と知識の増加を賞賛し、人々が偽りの安定に眠りをおさぼっているとき、そのときに、真夜中の盗人が不用意な家に忍び込むように、突然、滅亡が軽率で神を信じない人々に臨む。「そして、それからのがれることは決してできない」（テサロニケ第一・五ノ三）。

注

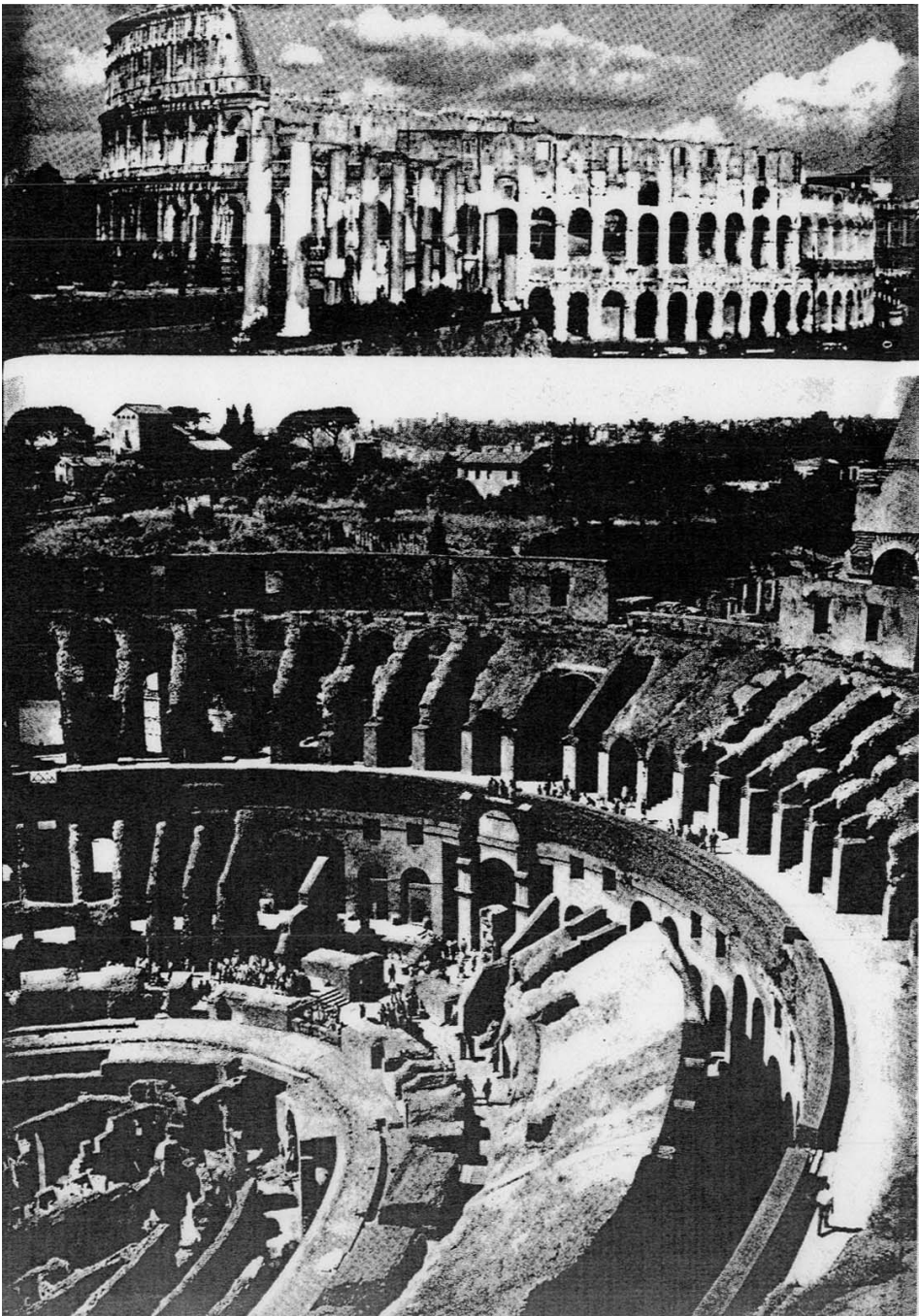
- 一 Milman, "History of the Jews," b.13.
- 二 *Ibid.*, b.3.
- 三 *Ibid.*, b.6.

第二章

ローマ帝国とキリスト教

激しい迫害

イエスは、エルサレムの運命と再臨の光景を弟子たちに示されたとき、彼が弟子たちから取り去られてから、彼らを救うために力と栄光のうちに再臨される時までの、神の民の経験をも予告された。オリブ山上から救い主は、使徒時代の教会にふりかかろうとしていた嵐を見られた。そして、さらに遠い未来を貫いて、来たるべき暗黒と迫害の時代において、彼に従う者たちを襲う激烈で破壊的な嵐を告げられた。彼はここで、簡単ではあるがきわめて重大な発言によって、この世の支配者が神の教会をどう扱うかを予告された（マタイ二四ノ九、二一、二二参照）。キリストに従う者たちは、彼らの主が歩かれたのと同じ屈辱と非難と苦しみの道を歩かなければならない。世界の贖い主に向けられた敵意は、彼の名を信じるすべての者に対してあらわされるのであった。



ローマのコロセウム(円形劇場)。紀元 80 年ごろ完成。約 5 万人を収容できた。キリスト教徒迫害の際、多数の信徒がここで殉教したと伝えられる。

初代教会の歴史は、救い主のみ言葉の成就を立証した。地と黄泉の力は、信徒たちに立ち向かうことによって、キリストに対抗した。異教は、もし福音が勝利を収めるならば、自分たちの神殿と祭壇は一掃されてしまうと予想し、そのために全力を挙げてキリスト教を撲滅しようとした。迫害の火が点じられた。キリスト者たちは持ち物を奪われ、家から追われた。彼らは、「苦しい大きな戦いによく耐えた」（ヘブル一〇ノ三二）。彼らは、「あざけられ、おち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った」（同・一一ノ三六）。多くの者は、彼らのあかしに血の印をおした。貴族も奴隷も、金持ちも貧乏人も、知者も無知なものも一様に容赦なく殺された。

ネロのもとで、パウロが殉教したところに始まったこのような迫害は、その激しさに多少の差はあったが、数世紀間続いた。キリスト者は、極悪非道な犯罪を犯したものであるとして偽って訴えられ、飢饉、疫病、地震などの災害の原因であるとされた。彼らが、一般社会の憎悪と嫌疑の的となると、密告者たちは利益のために、罪のない者を裏切った、彼らは、ローマ帝国の反逆者、宗教の敵、社会の害毒であると非難された。数多くの者が円形劇場で、野獣の餌食になり、生きながら火で焼かれた。十字架に架けられた者たちもあれば、野獣の皮を着せられて闘技場に投げ込まれ、犬にかみ裂かれた者たちもあった。こうした刑罰は、しばしば、祝祭日の主な催し物にされた。大群衆が集まってきて、その光景をながめて楽しみ、彼らの死の苦しみを笑い、喝采した。

カタコンベの教会

キリストに従う者たちは、どこに避難しても、野獣のように狩り出された。彼らは荒涼として人跡まれなと

ころにかくれが求めなければならなかった。「無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた」（ヘブル一ノ三七、三八）。カタコンベ（地下墓所）は、幾千の人々の避難所となった。ローマ市外の丘の下には、土や岩を掘って造った長い地下道が網状に交錯して、城外に幾マイルも広がっていた。キリストに従う者たちは、この地下にかくれがに死者を葬った。また、彼らが嫌疑をかけられ、追放されたときには、ここをすみかとした。善き戦いを戦った者たちを生命の君が呼びさまされるとき、これらの暗いほら穴の中から、キリストのために殉教した多くの者たちが出てくるのである。

もっとも激烈な迫害の中にあつて、イエスの証人たちは、自分たちの信仰を清く保った。彼らは、あらゆる慰安を奪われ、太陽の光を見ることもできず、暗いが親しみのある地のふところを家として、つぶやきを口にしながら。彼らは、信仰と忍耐と希望に満ちた言葉で、互いに励まし合い、欠乏と苦難に耐えた。この世のあらゆる幸福が失われたにもかかわらず、彼らにキリストを信じる信仰を捨てさせることはできなかった。試練と迫害は、彼らを休息と報賞とに近づける歩みに過ぎなかった。

昔の神のしもべたちのように、多くの者は、「更にまさったいのちによりみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった」（ヘブル一ノ三五）。彼らは、キリストのために苦しみを受けるときには喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい、あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである、という主の言葉を思い出した。彼らは真理のために苦しむに足る者とされたことを喜び、燃えさかる炎のまっただ中から勝利の歌声があがったのであった。彼らは信仰によって上を仰ぎ、キリストと天



ローマの地下墓所（カタコンベ）の階段と墓室。カーブした天井にも、壁にも、絵が描かれている。上から、イエスと弟子たち、魚から吐き出されるヨナ、祈る婦人、ヘブルの三青年。

使たちが天の胸壁から深い関心をもって彼らを見つめ、彼らの堅い信仰をよしとされるのを見た。神のみ座から、彼らに声が聞こえた。「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」(黙示録二ノ一〇)。

キリスト者の血は種

キリストの教会を暴力で滅ぼそうとしたサタンの努力はむだであった。イエスの弟子たちがその生命をささげた大争闘は、これらの忠実な旗手たちがその持ち場で倒れたときにもやむことはなかった。敗北によって彼らは勝利した。神の働き人たちは殺されたが、神の働きは着実に前進した。福音は進展し続け、それを信じる者の数は増加した。それは、近づきたいような地域にもはいりこみ、ローマの軍隊にまで及んだ。迫害を推し進めようとする異教徒の支配者たちをいさめて、あるキリスト者はこう言った。あなたがたは、「われわれを殺し、苦しめ、罪に定めることができよう。……あなたがたの不正行為は、われわれの無実の証拠である。……また、あなたがたの残酷さも……あなたがたの益とはならない。」迫害は、他の人々をキリスト教に導くさらに強力な招きとなったに過ぎなかった。「われわれはあなたがたに刈り倒されるたびに、数が増加する。キリスト者の血は、種である」(テルトゥリアヌス、「護教論」五〇節)。

幾千の者が投獄され、殺されたが、すぐに他の者が現われてその場所を埋めた。そして、信仰のために殉教した者は、キリストのものとして確保され、彼に勝利者として認められた。彼らはいつぱに戦いぬいたのであり、キリストが来られるときに、栄光の冠を受けるのであった。彼らが耐え忍んだ苦しみは、キリスト者たちを互い

に近づけ、また彼らの贖い主へと近づけた。彼らの生きた模範と死ぬときの証言は、真理に対する絶えざるあかしであった。そして、最も予期していないところで、サタンの部下がその務めを去って、キリストの旗の下に加わった。

そこでサタンは、彼の旗をキリスト教会内に立てることによって、神の政府をもっと効果的に攻撃しようと計画した。もし、キリストの弟子たちを欺き、神のみこころを損わせることができるならば、彼らの力と忍耐と堅固さは失われて、たやすく彼の餌食になるのであった。

大いなる敵、悪魔は、暴力でできなかったことを、今や策略によって得ようと努めた。迫害はやんだ。そして、その代わりに、この世の繁栄と世俗の栄誉という危険な誘惑物がおかれた。偶像教徒は、他の重要な真理を拒否しながらも、キリスト教の信仰の一部を受け入れるように導かれた。彼らは、イエスを神の子として受け入れ、彼の死と復活を信じると言いながら、罪の自覚もなく、悔い改めや心の変化の必要を感じなかった。彼らは、自分たちも譲歩したのだから、キリスト者も譲歩して、すべての者がキリストを信じる原則において一致するようにしようと提案した。

妥協精神の侵入

今や教会は恐るべき危機に陥った。これと比べるならば、牢獄や拷問、火や剣は祝福であった。キリスト者のある者たちは堅く立って、妥協することはできないと宣言した。しかし、ある者たちは、彼らの信仰のいくつか

の特徴を捨てたり変更したりすることに、そしてキリスト教を部分的に受け入れていた者たちと結合することに賛成して、これは、彼らを完全な改宗に導く手段になるであろうと言った。それは、キリストに忠実に従う者たちにとって、深刻な苦悩の時であった。サタンは、見せかけのキリスト教という上衣をまとして、教会内に侵入し、信者たちの信仰を腐敗させ、彼らの心を真理の言葉から離れさせた。

ついに、キリスト者の多くは、標準を下げることに同意し、キリスト教と異教との間の結合が成立した。偶像礼拝者たちは、改宗したと言って教会に加わったものの、依然として偶像礼拝を続けており、礼拝の対象をイエスの像や、マリヤ、聖人たちの像に変えたにすぎなかった。こうして教会内に侵入したいまわしい偶像礼拝のパン種は、その害を及ぼしていった。不健全な教義、迷信的礼典や偶像礼拝的儀式が、教会の信条と礼拝の中に取り入れられた。キリスト者たちが偶像礼拝者たちと結合したことによって、キリスト教は腐敗し、教会はその純潔と力を失った。しかしながら、こうした惑わしに欺かれぬ者たちもいくらかはいた。彼らは、真理の本源であられる神に依然として忠誠をつくし、ただ神だけを礼拝した。

キリストの弟子であると自称する人々の中に、常に二種類の人々がある。一方の人々は、救い主の生涯を研究して、自分の欠点を正し、模範に倣おうと熱心に求めるが、もう一方の人々は、彼らの誤りを指摘する明白で実際的な真理を避けるのである。教会は、その最善の状態にあつたときでさえ、真実で純潔で誠実な人々だけで成り立っていたのではなかった。救い主は、故意に罪にふける人々を教会に受け入れてはならないと教えられた。しかし彼は、品性に欠点のある人々をご自分に結びつけ、彼の教えと模範の利益を受けることを許された。それは彼らに、自分たちの誤りを認めてそれを正す機会を与えるためであった。十二使徒の中には裏切り者がいた。

ユダは、彼の品性の欠陥のためではなくて、欠陥にもかかわらず受け入れられた。ユダが弟子たちの仲間に加えられたのは、彼がキリストの教訓と模範によって、キリスト者の品性がどのようなものであるかを知り、自分の過ちを認めて悔い改め、神の恵みの助けと、「真理に従うことによって」魂を清めるためであった。しかしユダは、このように恵み深く彼を照らした光の中を歩かなかった。罪にふけることによって、彼はサタンの誘惑を招いた。彼の品性の悪い特徴が、主導権を握った。彼は、自分の心を暗黒の力の支配に従わせ、自分の欠点が譴責されると怒るようになり、こうして、主を裏切るという恐ろしい罪を犯すようになった。これと同じく、信心深いことを言いながら心に罪をいだいている者はみな、自分たちの罪の歩みを指摘して、心の平和をみだす者を憎むのである。彼らは、よい機会が来るならば、ユダのように、彼らのためにを思つて彼らを譴責した者を裏切るのである。

光と暗黒との戦い

使徒たちも教会内で、信心深い様子をしながらひそかに罪をいだいている人々に出会った。アナニヤとサツピラは、人を欺いた。彼らは、神のためにすべてを犠牲にしているように見せかけながら、欲のためにその一部を自分たちで保留していた。しかし真理のみ霊がこうした偽り者の本性を使徒たちに暴露し、神の刑罰が下って、教会の純潔を損うこうした汚点を教会から取り除いた。教会には真偽を見分けるキリストの霊があるというこの顕著な証拠は、偽善者たちや悪事を行なう者たちに恐怖を与えた。彼らは、その習慣や品性が常にキリストを代表している者たちと、長くつながっていることはできなかった。ひとたびキリストの弟子たちに、試練と迫害が

来たとき、真理のためにすべてを喜んで捨てる者だけが、弟子になることを望んだのである。こうして、迫害が続くかぎり、教会は比較的純潔を保つことができた。しかし、迫害がやむと、それほど真剣でもなくそれほど献身もしていない改宗者たちが加わってきて、サタンが足場を得る道が開かれた。

しかし、光の君と暗黒の君との間に一致はない。そして、その弟子たちの間にも一致はあり得ない。キリスト者たちが、異教から半分だけ改宗した人々と一つになることに同意したとき、彼らは真理からますます遠ざかる道に足を踏み入れたのであった。サタンは、多くのキリストの弟子たちを欺くことができたことを喜んだ。そして彼は、この人々をさらに十分に自分の支配下に治めて、彼らによって、神に忠誠を保つ人々を迫害させようとした。かつてキリスト教信仰の擁護者であった人々ほど、どのようにして真のキリスト教信仰を圧迫すべきかを知っているものはない。これら背教的なキリスト者たちは、半ば異教的な仲間たちと結合して、キリストの教理の最も重要な特徴を攻撃したのである。

忠誠を保とうとする人々は、司祭服にかくれて教会のなかに導入された欺瞞と憎むべきこととに對抗して、必死に戦わねばならなかった。聖書は、信仰の規準として受け入れられなかった。信仰の自由という教義は異端視され、その支持者は憎まれ追放された。

忠実な少数者

長期にわたった激しい戦いの後、忠実なわずかの者たちは、教会が虚偽と偶像礼拝とを捨てることをなお拒否

するならば、背信した教会との一致をすべて絶つ決心をした。彼らは、神のみ言葉に従おうとするならば、分離することが絶対に必要なことを認めた。彼らは、自分たちの魂を危険に陥れる誤りを黙認したり、自分たちの子孫の信仰を危うくするような例を残したりすることはしたくなかった。彼らは、神に対する忠誠と矛盾しないかぎり、どんな譲歩でもして、平和と一致を保とうとした。しかし、平和のために原則を犠牲にすることは、あまりにも大きな代価であった。真理と正義を曲げなければ得られない一致であるならば、彼らはむしろ不和をも、そして戦争をもいとわなかった。

これらの人々を堅く立たせた諸原則が、神の民と称している人々の心の中によみがえるならば、教会と世界にとってどんなにかよいことであろう。キリスト教信仰の柱である教理が、驚くほど無視されている。結局こうしたことは重大なものではない、という意見が強くなっている。この墮落は、サタンの配下たちの手を強めるものであつて、そのために、各時代の忠実な者たちが、生命をかけて反対し摘発してきた偽りの説や致命的な欺瞞が、今やキリストに従っていると称する多くの人々に歓迎されるようになってきた。

初代のキリスト者たちは、実際、特殊な民であつた。彼らの非難するところのない行状と確固たる信仰とは、絶えず罪人の心を責めるものであつた。彼らは数が少なく、富も地位も名誉ある称号もなかったけれども、その品性と教義とが知られているところではどこでも、悪を行なう者たちにとって恐怖であつた。それゆえに彼らは、アベルが神を恐れないカインに憎まれたように、悪人たちに憎まれた。カインがアベルを殺したのと同じ理由から、聖霊の抑制を拒む人々は神の民を殺した。ユダヤ人が救い主を拒んで十字架につけたのも、同じ理由からあつた。すなわち彼の品性の純潔と神聖さとが、絶えず彼らの利己心と墮落とを責めたからであつた。キリスト

の時代から今に至るまで、彼の忠実な弟子たちは、罪を愛してその道を歩む者たちの憎しみと反対とを引き起こしてきたのである。

福音の力

それならば、どうして福音を、平和のメッセージと呼ぶことができるのであろうか。イザヤはメシヤの誕生を預言して、彼を「平和の君」と呼んだ。また天使たちは、キリストの誕生を羊飼いたちに告げたとき、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心になう人々に平和があるように」とベツレヘムの平原の上で歌った（ルカ二ノ一四）。これらの預言の言葉と、「平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきた」というキリストの言葉との間には、一見、矛盾があるように思われる（マタイ一〇ノ三四）。しかし、正しく理解されるならば、この二つは完全に一致している。福音は平和のメッセージである。キリスト教は、それを受け入れて従うならば、全地を平和と一致と幸福で満たすものである。キリストの宗教は、その教えを受け入れるすべての者を親しい兄弟関係に入れる。イエスの使命は、人々を神と和解させ、そしてお互いに和解させることであつた。しかし世界は一般に、キリストの大敵サタンの支配下にある。福音が彼らに、彼らの習慣や欲望と全く異なった生活の原則を示すために、彼らはそれに反逆する。彼らは自分たちの罪を指摘し非難する純潔を憎む。そして、その公正で神聖な要求を守るように勧める人々を、彼らは迫害し滅ぼすのである。福音のもたらす崇高な真理は、憎しみや争いを引き起こすものになるために、この意味において、福音は剣であると言われているのである。

苦難の意味

神が不思議な摂理のうちに、義人が悪人に迫害されることを許されることは、信仰の薄い多くの者を大いに困惑させてきた問題である。神が、極悪人たちを栄えるがままにしておかれ、一方最も善良で純潔な人々が、彼らの残酷な力によって悩まされ苦しめられるのを見て、神に対する信頼を捨て去ろうとする者さえいる。正義にしてあわれみ深く、無限の力を持ったがたが、どうしてこのような不正と圧迫を黙認しておられるのか、と人々は問う。しかしこれは、われわれの関知すべき問題ではない。神はその愛について十分な証拠を与えておられるのだから、われわれは神の摂理の働きが理解できないからと言って、神の慈愛を疑ってはならない。救い主は、試練と暗黒の日々に弟子たちの心を苦しめる疑惑を予見して、「わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう」と彼らに言われた（ヨハネ一五ノ二〇）。イエスはわれわれのために、彼のどの弟子が悪人の残虐によって苦しめられるよりも激しい苦しみを受けられた。苦しみに耐え、殉教するために召された者は、神の愛するみ子の足跡をふみ従うに過ぎないのである。

「主は約束の実行をおそくしておられるのではない」（ペテロ第二・三ノ九）。主は、ご自分の子供たちを忘れたり、おろそかにしたりなさらない。ただ、主のみこころを行なおうとする者がだれも悪人に欺かれることがないように、悪人の本性があらわされることをお許しになるのである。また、義人たちが苦難の炉に入れられるの

は、彼ら自身が清められるためであり、彼らの模範によって、他の人々が信仰と敬虔な生活の實際をよく理解するためである。そして、彼らの終始一貫した行為によって、神を信じ敬うことをしない人々を責めものである。神は、悪人が栄え、悪人が神に対する敵意を表わすことをお許しになる。それは、彼らの罪惡の升目が満ちたとき、彼らが全く滅ぼされることが神の正義とあわれみによるものであることをすべての者が知るためである。神の報復の日が迫っている。そのときには、神の律法を破り神の民を圧迫した者がみな、その行為に対する正当な報いを受ける。そのときには、神に忠実に仕える者に対して行なわれたすべての残酷な、また不正な行為が、キリストご自身に対してなされたかのように罰せられる。

眠っている教会

ところで、今日の教会が注意すべきもう一つのさらに重大な問題がある。使徒パウロは、「キリスト・イエスにあつて信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」と言っている（テモテ第二・三ノ一二）。それでは、迫害の火が消えているように思われるのは、なぜであろうか。その唯一の理由は、教会が世俗の標準に妥協したために、反対を引き起こさないということにある。今日、世に迎えられている宗教は、キリストとその弟子たちの時代の信仰のように純潔で聖なるものではない。キリスト教が世の中から迎えられているように見えるのは、罪と妥協する精神、神のみ言葉の偉大な真理に対する無関心、教会内における生きた敬神の念の欠乏のゆえにほかならない。初代教会の信仰と力が復興するならば、迫害の精神もまた復興し、迫害の火は再び点じられるのである。

第三章

中世の靈的暗黒時代

「不法の者」の出現

使徒パウロは、テサロニケ人への第二の手紙のなかで、法王権の樹立をもたらす大背教のことを預言した。彼は、キリストの日が来る前に、「まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する」と言った。パウロは、さらに、「不法の秘密の力が、すでに働いている」と信者たちに警告している(テサロニケ第二・二ノ七、三、四参照)。早くも彼は誤りが教会に侵入し、法王権の発展に道を備えるのを見たのであった。

徐々に、最初はこっそりと静かに、そしてそれから勢力を増し、人心を支配するようになるにつれて、もっと

公然と、「不法の秘密」はその欺瞞的冒瀆的な働きを進めていった。異教の習慣は、目につかないほど少しずつキリスト教会の中にはいつてきた。教会が異教から激しく迫害を受けていた間は、一時妥協と迎合の精神は抑えられていた。しかし迫害がやんで、キリスト教が王侯の宮廷や宮殿にはいったとき、教会はキリストと使徒たちのつつまじやかな単純さを捨て、異教の司祭や王侯たちの虚飾と華美に倣った。そして神のご要求のかわりに、人間の理論や伝説を取り入れた。四世紀の初期に、コンスタンティヌス帝が名ばかりの改宗をして、一般から大いに歓迎された。そして、世俗が信心深い様子をして教会内にはいつてきた。今や、墮落は急速に進んだ。異教は征服されたように見えながら、勝利者となった。異教の精神が教会を支配した。その教義と礼典と迷信とが、キリストの弟子であると公言する人々の信仰と礼拝に織りこまれた。

この異教とキリスト教の妥協が、神に反抗して立ち上がると預言された「不法の者」を出現させることになった。偽りの宗教のあの巨大な組織は、サタンの権力が生んだ一大傑作であって、自分の意のままにこの地上を支配しようとする彼の努力の記念碑である。

サタンは前にも一度、キリストと妥協しようとしたことがあった。彼は試みの荒野で、神のみ子のところに来て、この世のすべての国々とその栄華とを見せ、もしキリストが暗黒の君の主権を認めさえすれば、すべてを彼の手に与えようと言った。キリストは僭越な誘惑者を譴責し、追い払われた。しかしサタンは同じ誘惑を人間の前に差し出して、大きな成功を収めている。教会はこの世の利益と栄誉を手に入れるために、地上の有力者たちの賛成と支持を求めるようになった。そして、このようにしてキリストを拒否したことによって、教会はサタンの代表者であるローマの司教に忠誠をつくすに至った。

非聖書的な法王至上権説

法王は全世界のキリストの教会の目に見える頭であつて、世界各地の司教と牧師に対する至上権が与えられている、というのがローマ・カトリック教会の主要教義の一つである。そればかりではない。法王には、神の称号そのものが与えられている。彼は「主なる神、法王」と呼ばれ、誤ることがないとされてきた（付録参照）。彼はすべての人間が彼を尊敬することを要求する。サタンは試みの荒野において主張したのと同じことを、今日もなおローマ教会を通じて主張している。そして無数の人々が、心から彼に尊敬を払っている。

しかし、神を恐れ敬うものは、キリストが、狡猾な敵の誘惑に対抗されたように「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と言って、神に逆らうこうした主張に立ち向かうのである（ルカ四ノ八）。神はみ言葉の中で、だれか人間を教会の頭にしたなどという暗示すら与えておられない。法王至上権説は、聖書の教えと全く相反するものである。法王は、横領による以外に、キリストの教会の上に権力を振うことはできない。

カトリック教徒は、プロテスタントを異端視しつつ、真の教会から故意に分離したものであると言ってきた。しかしこうした非難は、むしろ彼らにこそ当てはまるのである。キリストの旗を捨てて、「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰」から離れたのは、彼らであつた（ユダ三）。

サタンは、聖書が人々に、彼の欺瞞を見分け、彼の力に対抗できるようにさせることをよく知っていた。世の救い主でさえ、み言葉によつて、彼の攻撃を退けられた。キリストは攻撃されるたびに、永遠の真理の盾を用い

て、「……と書いてある」と言われた。サタンのあらゆる誘惑に対し、キリストはみ言葉の知恵と力をもって對抗された。サタンが人々の上に権力をふるい、横領者的な法王権をうちたててゐるには、彼らを聖書について無知にしておかねばならなかった。聖書は神を高め、有限な人間の真の立場を明らかにする。それゆえに、その聖なる真理を隠し、抑圧しなければならぬ。ローマ教会はこの論法をとった。数百年にわたって、聖書の配布が禁止された。人々は聖書を読むことも、それを家に持つことも禁じられた。そして節操のない司祭たちや司教たちが、自分たちの主張を支持するためにその教えを解釈した。こうして法王は、地上における神の代表者、教会と国家に対する権威を与えられた者として、広く認められるようになった。

時と律法の変更

誤りを指摘するものが除かれたので、サタンは、思う存分に活躍した。法王権は「時と律法とを変えようと望む」と預言されていた（ダニエル書七ノ二五）。このことは、さっそく実行に移された。異教から改宗した人々に、偶像礼拝の代わりになるものを与え、こうして彼らの名ばかりのキリスト教受容を促進するために、聖画像や聖遺物崇拜が、キリスト教の礼拝のなかに徐々に取り入れられた。ついに公会議の布告によって、この偶像礼拝制度が確立した（付録参照）。ローマ教会は、神を汚す活動の結びとして、僭越にも、偶像礼拝を禁じる第二条を神の律法から削除し、その欠けたところを補うために第十条を二つに分けたのである。

異教に譲歩する精神は、なおいっそう神の権威を無視する道を開いた。サタンは、教会の清められていない指

導者たちによって、第四条をも変更し、神が祝福し聖別された昔からの安息日（創世記二ノ二、三参照）を廃そうとした。そしてその代わりに、異教徒が「太陽の神聖な日」として守っていた祭日を高めようとした。この変更は初めから公然と行なわれたものではなかった。最初の二、三世紀の間、すべてのキリスト者たちは真の安息日を守っていた。彼らは熱心に神をあがめ、神の律法は不変であると信じていたから、その戒めを熱心に清く守った。しかしサタンは、彼の代理者たちを用いて非常に巧妙に働き、その目的の達成をはかった。人々の注目を日曜日にひくために、それはキリストの復活を記念する祝日とされた。宗教的礼拝が日曜日に行なわれた。しかし、その日は娯楽の日とみなされており、安息日が従来どおり清く守られていた。

サタンは、自分がなしとげようとしている仕事に道を備えるために、キリストの来臨に先だって、ユダヤ人たちが安息日に苛酷な要求を増し加え、それを守ることを重荷にするようにさせていた。そしてサタンは、自分がそのようにして人々に安息日を誤解させておきながら、今度はそれを利用し、安息日はユダヤ人の制度だとしてそれを軽べつした。キリスト者たちが、日曜日を楽しい祝祭日として祝う一方、サタンは彼らがユダヤ教に対する憎しみの表現として、安息日を断食の日、ゆううつな悲しみの日とするようにしむけた。

四世紀の初期、コンスタンティヌス帝は、日曜日をローマ帝国全土の公の祝日にするという布告を出した（付録参照）。太陽の日は、異教徒の国民に尊ばれ、またキリスト者たちからもあがめられた。それは、異教とキリスト教との相反する点を一致させようとする皇帝の政策であった。彼は、教会の司教たちから、こうするように勧められたのである。彼らは権力を渴望していたから、もしキリスト者と異教徒とが両方とも同じ日を守るならば、異教徒が名目だけでもキリスト教を信じるのを助長し、教会の権力と栄光を推し進めるものと考えた。しかし多

くの敬虔なキリスト者たちは、次第に、日曜日にはいくぶんか神聖さがあると見なすようになったものの、なお真の安息日を主の聖なる日とし、第四条の戒めに従って守っていた。

偽りの安息日

大欺瞞者は、まだ十分にはその目的を達成していなかった。彼は、キリスト教世界を彼の旗の下に集め、彼の代理人、すなわち、キリストの代表者であると主張する高慢な法王によって、力を振おうと決心した。半分しか改宗していない異教徒たち、野心満々の司教たち、そして世俗を愛する教会人たちによって、彼は自分の目的をなしとげた。いくたびか公会議が開かれて、教会の指導者たちが全世界から集められた。そのほとんどの会議において、神が制定された安息日が少しずつ低められると共に、日曜日はそれに応じて高められていった。こうして異教の祝祭日が、ついには神聖な制度としてあがめられるようになり、その反面、聖書の安息日はユダヤ教の遺物であると宣言され、それを守る者たちはのろわるべきであると言われた。

大背信者は、「すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して」自らをその上に高く上げることに成功した（テサロニケ第二・二ノ四）。彼は、全人類を生きた真の神へと誤ることなく向ける、神の律法の唯一の戒めをあえて変更した。神は、第四条の戒めのなかで、天と地の創造主として示されており、それによってすべての偽りの神々との区別が明らかにされている。第七日が、人間の休息の日として聖別されたのは、創造の業の記念としてであった。それは人間が、生ける神を、存在の根源、尊崇と礼拝の対象として、常に心に留めておくため

であった。サタンは人々に、神への忠誠をつくさせず、神の律法に従わせまいと努力している。それゆえに彼は、神が創造主であることを指し示す戒めを、特に攻撃するのである。

今、プロテスタントの側では、キリストが日曜日に復活されたから日曜日がキリスト教徒の安息日になったと主張している。しかし、その聖書的証拠はない。キリストや使徒たちも、この日をそのように尊んではない。日曜日をキリスト教の制度として遵守することは、すでにパウロの時代に活動しはじめた「不法の秘密の力」にその起源をもつ（テサロニケ第二・二ノ七）。しかし主は、いつでも、この法王権の子とも言うべき日曜日の制度を迎え入れられたのであろうか。聖書が認めていない変更に対して、どのような確かな理由をあげ得るであらうか。

暗黒時代の開始

第六世紀に至って、法王権は確立した。その権力の座はローマに置かれ、ローマの司教が全教会の首長であると宣言された。異教は法王権に地位を譲った。龍は獣に、「自分の力と位と大いなる権威とを」与えた（黙示録一三ノ二。付録参照）。こうして、ダニエル書と黙示録に預言されたところの、一二六〇年間に及ぶ法王権の迫害が始まった（ダニエル書七ノ二五、黙示録一三ノ五―七参照）。キリスト者たちは、神に対する忠誠を放棄して法王教の儀式と礼拝を受け入れるか、それとも、地下の牢獄に幽閉され、拷問や火刑、また斬首吏のおので生命を失うか、そのどちらかを選ばねばならなくなった。「しかし、あなたがたは両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切ら

れるであろう。また、あなたがたの中で殺されるものもあろう。また、わたしの名のゆえにすべての人に憎まれるであろう」というイエスの言葉が、ここで成就した(ルカ二二ノ一六、一七)。迫害は、これまでに以上に激しく忠実な人々に向けられ、世界は一大戦場となった。何百年もの間、キリストの教会は人里離れた場所に難をのがれた。預言者はこのように言っている。「女は荒野へ逃げて行つた。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があつた」(黙示録一二ノ六)。

ローマ教会が権力を握つたことは、暗黒時代の始まりを意味した。教会の権力が増すにつれて暗黒は深まった。信仰は、真の基礎であるキリストから、ローマ法王へと移された。人々は、罪の許しと永遠の救いを求めて神の子によりたのむかわりに、法王や、法王が権力をゆだねた司祭や司教たちにたよつた。彼らは、法王はこの地上における彼らの仲保者であつて、法王によらなければだれも神に近づくことができない、と教えられた。さらに、法王は神に代わつて彼らの前に立つ者であるから、絶対に服従すべきであると教えられた。彼の要求に従わない者が、最も厳しい罰をその心身に受けるのは、当然のこととされた。

こつして人々の心は神から引き離されて、誤りの多い残酷な人々に、いや、彼らを通して力を振つところの暗黒の君自身に向けられた。

罪は聖潔の仮面をかぶつた。聖書が圧迫され、人間が自分を最高のものと見なすようになるとき、そこには、欺瞞と惑わし、汚れた罪悪しか期待できない。人間の律法と言い伝えとが高められるにつれて、神の律法を放棄するとき常に起こる腐敗があらわれてきた。



隠者ピーターは、教会内の多くの者たちに、十字軍に参加してエルサレムを異教サラセンの手から救い出すよう勧め促した。そして人々は、この悔悛の行為によって、神の怒りをなだめ、神の祝福と好意を得ようとした。

真の宗教の危機

キリストの教会にとって危機の時代であった。忠実な旗手はまことに少なかった。真理の証人たちもいなかったわけではないが、誤りと迷信が完全に勝利して、真の宗教は地上からぬぐい去られたように思われた時もあった。福音は見失われてしまった。しかし宗教の形式は増大し、人々は厳しい要求に苦しんだ。

彼らは、法王を彼らの仲保者として仰ぐだけでなく、罪を贖うために自分自身の行ないに頼らねばならないと教えられた。長い巡礼の旅、難行苦行、聖遺物崇拜、教会堂・寺院そして祭壇の建築、教会への大金納入——これらの行為、またそれに類した多くの行為が、神の怒りを和らげ、神の恵みにあずかるために要求された。あたかも神が人間のように、ささいなことに怒り、あるいは贈り物や苦行によってなだめられるかのように。

罪悪が一般に広く行なわれ、ローマ教会の指導者たちのなかにさえ及んでいたが、しかし教会の勢力は着実に増加していくように見えた。八世紀の終わりごろ、カトリック教徒たちは、初期の教会においてもローマの司教は、現在有しているのと同じ宗教上の権力を持っていたと主張した。この主張を確立するためには、何かの手段を講じてそれを権威づける必要があった。そしてそれには、偽りの父が直ちに示唆を与えた。古文書が、修道士たちによって偽造された。これまで聞いたこともないような会議の布告が発見されて、法王が最も初期の時代から普遍的な至上権を持っていたことが確立された。そして、真理を拒否した教会は、これらの欺瞞をすぐさま承認した（付録参照）。

眞の土台の上に築いていたところの、ごく少数の忠実な建設者たちは、このようなくずに等しい偽りの教義が働きを妨害するために、困惑し妨げられた（コリント第一・三ノ一〇、一一参照）。ネヘミヤの時代にエルサレムの城壁を築いた者たちのように、ある者たちは、「荷を負う者の力は衰え、そのうえ、灰土がおびただしいので、われわれは城壁を築くことができない」と言うばかりになった（ネヘミヤ記四ノ一〇）。迫害、不正、罪惡、その他サタンが、彼らの働きの前進を妨げるために考案したさまざまな妨害との絶え間ない闘いに疲れて、さすがの忠実な建設者たちの中にも失望に陥る者があった。そして自分たちの財産と生命を守るために、彼らは眞の土台から離れていった。しかし、敵の攻撃にもくじけずに、「あなたがたは彼らを恐れてはならない。大いなる恐るべき主を覚え」よと大胆に宣言する者もあった（同・四ノ一四）。そして彼らは各自が腰に剣を帯びながら働きを推し進めたのであった（エペソ六ノ七参照）。

真理に対する同じ憎しみと反対の精神が、各時代の神の敵の心を満たしてきた。そして同じ警戒心と忠実さが神のしもべたちに要求されてきた。最初の弟子たちに言われたキリストの言葉は、終末に至るまでの弟子たちに言われたのである。「目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである」（マルコ一三ノ三七）。

深まりゆく暗黒

暗黒はますますその濃さを増していくように見えた。聖像崇拜はいっそう広く行なわれるようになった。像の

前に燈明があげられて、祈りがささげられた。最もばかげた迷信的な習慣が広まった。人々の心は迷信によって完全に支配されたので、理性そのものが失われてしまったかのように思われた。司祭や司教たち自身が享樂を愛し、肉欲にふけり、腐敗していたのだから、彼らの指導を仰いでいた民衆が無知と不道德に陥るのは、当然のことであつた。

さらに法王は、もう一つの僭越なことをした。すなわち十一世紀に法王グレゴリー七世は、ローマ教会は完全であると宣言したのである。その主張の中で彼は、聖書によれば教会はこれまで誤ったことはないし、これからも誤ることがないと言明した。しかし聖書には、このような主張を裏付ける証拠はないのである。高慢な法王はまた、皇帝を退位させる権力があると主張し、自分が布告した宣言を破棄し得る者はだれもなく、一方他のすべての者の決定を取り消す権力が自分にはあると断言した(付録参照)。

こつした絶対無謬を唱えた法王の暴君的性格を示す顕著な実例は、ドイツ皇帝ハインリヒ四世(ヘンリー四世)に対する処置である。ハインリヒ四世は、法王の権威をあえて無視したために、破門と廢位の宣告を受けた。法王の命令に力を得て彼に反逆した諸侯たちの、離反と威嚇に驚いたハインリヒは、法王と和解する必要を感じた。彼は王妃と忠実な従者とを伴つて、法王の前に身を低めるため、真冬のアルプスを越えた。グレゴリーが留まつていた城に到着すると、王は護衛もなく外庭に案内され、その厳しい冬の寒さの中で、みすばらしい衣を着、頭には何もかぶらず、はだしのまま、法王の前に出る許可を待った。彼が三日間断食とざんげを続けた後、ようやく法王は彼に赦免を与えた。そしてそれさえも、皇帝が位に復して王権を行使する前に、法王の認可を仰がねばならないという条件つきのものであつた。こつしてグレゴリーは、自分の勝利に意気揚々となり、王たちの誇り

をはぐことが自分の義務であると誇った。

このごうまんな法王の横暴な態度と、キリスト——ゆるしと平和をもたらすために、心の戸の外に立って、はいることを求めておられるキリスト、また弟子たちに、「あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない」（マタイ二〇ノ二七）と教えられたキリスト——の柔和と優しさとは、なんと異なっていることであろう。

誤った教義の数々

時代が進むにつれて、誤った教義がローマからやむことなく送り出されていった。法王制が確立する以前でさえ、異教の哲学者たちの教えが教会の中で注目され、影響を与えていた。改宗したという人々の多くは、依然として彼らの異教の哲学の教えに執着し、それを自分で研究するばかりでなく、異教徒の中で勢力を広げる手段として、他の人々にもそれを勧めた。こうして重大な誤りがキリスト教信仰のなかにもちこまれた。それらのうちで特に目だつものは、人間は生来不死であつて、死んでも意識があるという信仰であつた。この教義を基礎にして、ローマ教会は、諸聖人に祈りをささげることや、聖母マリヤを崇拜することを確立した。また早くから法王教の中に織りこまれていたところの、最後まで悔い改めない者は永遠の責苦に会うという異端的な教えも、ここから起こつたのである。

これに伴つてもう一つ異教のつくりごとが取り入れられることになった。ローマ教会はそれを煉獄と呼び、だ

まされやすく迷信的な民衆を脅すのに用いた。この異端的な教えによれば、永遠の滅びを受けるほどでない魂がその罪の罰を受けるべき苦しみ場所が存在し、そこで不純な状態から清められたとき天国にはいることを許される、というのである（付録参照）。

ローマ教会が、その信者たちの恐怖と悪行とを利用して益を得るためには、さらにもう一つのつくりごとが必要であつた。この必要は、免罪の教義によつて満たされた。法王の戦い——世俗的な主権を拡大し、敵を懲らしめ、法王の霊的至上権を否定する者たちを撲滅するための戦い——に参加するすべての者に、過去・現在・未来の罪の完全な赦免と、受けるべきすべての苦痛と罰の免除が約束された。また、教会に金を払うことによつて罪から解放されること、そしてまた、苦しみの火の中にいる死んだ友人たちの魂をも解放することができ、これらのことを人々は教えられた。このような方法によつて、ローマ教会はその懷を肥やし、キリスト——まくらする所さえ持たれなかつたおかた——の代表者と称する者の豪華とぜいたくと悪徳とを支えたのであつた（付録参照）。

聖書の礼典である主の晩餐は、ミサという偶像崇拜的犠牲にとつて代わられた。カトリックの司祭たちは、その無意味な儀式によつて、ただのパンとぶどう酒を実際の「キリストの体と血」に変えると主張した。彼らは、神を汚す僭越さをもつて、万物の創造主であられる神を創造する力があると公言した。キリスト者たちはこの恐ろしい流神的邪説を信じるように要求され、さもないと死刑に処せられるのであつた。これを拒んだために火刑に処せられた者が無数にあつた（付録参照）。

世界の真夜中

十三世紀に、法王制の機関中で最も恐ろしいもの、すなわち宗教裁判所（異端審問所）が設けられた。暗黒の君は、法王制の指導者たちと共に働いた。彼らの秘密会議においてサタンとその天使たちが、悪人たちの心を支配した。しかしそれと同時に、人の目にこそ見えなかったが、神の天使がそのただ中に立ち、彼らの不法な命令の恐るべき記録をとり、とうてい人間の目が見るに耐えない恐ろしい行為の記録を記していたのであった。「大いなるバビロン」は「聖徒の血に酔いしれた。」無数の殉教者たちの寸断された体は、この背信した権力に対する神のふくしゅうを叫び求めた。

法王教は世界の専制君主となった。王も皇帝もローマ法王の命令に服した。人々の運命は、現世のものも来世のものも、彼の支配下にあるように思われた。数百年にわたってローマの教義は、絶対的なものとして広く受け入れられ、その儀式は厳粛にとり行なわれ、その祝祭はあまねく遵奉された。聖職者たちは尊敬され、豊かにさえられた。この時ほど、ローマ教会が大きな威厳と壮大さと権力を誇った時代はなかった。

しかし、「法王制の真昼は、世界の真夜中であつた。」^二聖書は、民衆だけでなく、司祭たちにさえほとんど知られていなかった。昔のパリサイ人たちと同様に、法王教の指導者たちは、彼らの罪を明らかにする光を憎んだ。義の標準である神の律法を放棄してしまったので、彼らは無制限に権力を行使し、自由に悪事を働いた。詐欺、貪欲、放とうが広く行なわれた。人々は、富と地位を得るためにはどんな罪でも犯した。法王や高位聖職者たち

の宮殿は、最も罪深い放とうの現場であつた。何人かの法王たちはあまりにも非道な犯罪を犯したために、世俗の支配者たちが彼らを、許すことのできない極悪な人物としてその地位から退かせようとしたほどであつた。ヨ
ーロッパは、幾世紀もの間、学問、芸術、また文化の面で何の進歩もなかつた。キリスト教世界は、道德的、知的マヒ状態に陥つていた。

ローマ教会の権力下にあつた世界の状態は、預言者ホセアの言葉の恐ろしくも的確な成就である。「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨て、…あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる。」「この地には真実がなく、愛情がなく、また神を知ることもないからである。ただのろいと、偽りと、人殺しと、盗みと、姦淫することのみで、人々は皆荒れ狂い、殺害に殺害が続いている」(ホセア書四ノ六、一、一二)。これが神の言葉を捨てた結果であつた。

注

- I Cardinal Wiseman, "The Real Presence of the Body and Blood of Our Lord Jesus Christ in the Blessed Eucharist, Proved From Scripture," Lecture 8, sec.3, par.26.
- II J. A. Wylie, "History of Protestantism," b.1, ch.4.

第四章

真理の擁護者たち

暗黒時代の神の証人

法王が長期間にわたって至上権を握っていた時、地上は暗黒におおわれたが、しかし、その中であって、真理の光が全く消えてしまったわけではなかった。どの時代にも神の証人がいた。キリストを神と人間との間の唯一の仲保者として信じ、人生の唯一の規準として聖書を受け入れ、そして真の安息日を尊んだ人々がいたのである。こうした人々に世界が負うところいかに大であるか、後世の人々にはけっしてわからないであろう。彼らは異端者の烙印を押され、その動機は非難され、その品性は中傷され、そして彼らの書き物は禁圧され、誤り伝えられ、骨抜きにされた。しかし彼らは堅く立った。そして、来たるべき時代のための神聖な遺産として、彼らの信仰を、代々、純潔に保ったのである。

ローマが至上権を握ってからの、暗黒時代における神の民の歴史は、天に記録されているが、人間の手になる記録には、あまり記されていない。彼らを迫害した者たちによる非難以外には、彼らの存在の形跡はほとんどない。教義や命令に異議を唱えるものは、あとかたもなく抹殺してしまうことが、ローマの政策であった。教会は、人間であろうが書物であろうが、異端的なものはすべて滅ぼそうとした。法王の教義の権威に対する疑惑や質問を表明するだけで、貧富、貴賤の別なく、生命を奪われるのに十分であった。またローマは、反対者に対する教会の残酷な行為の記録を、すべて消滅させようとした。法王による宗教会議は、こうした記事がのっている書物や文書を焼却することを命じた。印刷機が発明される前は、書物の数も少なく、その形も保存には向いていなかった。それで、彼らの目的の遂行を妨げるものはほとんどなかった。

ローマの管轄内にあるどの教会も、良心の自由をいつまでも保つことはできなかった。法王権は、権力を握るとすぐ、その支配を認めない者をみな粉砕するために、手を伸ばした。こうして諸教会は、次々とその支配下に陥った。

ブリテン（イギリス）のキリスト教会

大ブリテンでは、原始キリスト教が早くから根をおろしていた。最初の二、三世紀にブリトン人たちが受けた福音は、まだローマの背教によって腐敗してはいなかった。この遠方の国にまで及んだ異教の皇帝たちによる迫害は、ブリテンの初期の教会がローマから受けた唯一の贈り物であった。すなわち、多くのキリスト者たちは、

イングランドでの迫害をのがれてスコットランドに避難し、これによって真理は、アイルランドにも伝えられた。そしてこれらの国々では、どこでも歓迎されたのであった。

ところが、サクソン人がブリテンに侵入したとき、異教が支配権を握った。征服者たちは、自分たちの奴隷から教えられることを好まなかったので、キリスト者たちは、山や荒野に避難しなければならなかった。しかし、光は、一時隠されたにしても、常に燃えつづけた。一世紀の後、スコットランドでは、その光は明るく輝き出て遠くの国々にまで及んだ。アイルランドからは、敬虔なコルンバとその共労者たちがあらわれ、各地に離散した信者をアイオナの孤島に集めて、そこを彼らの伝道活動の中心にした。これらの伝道者のなかには、聖書に示された安息日を守る者もいて、こころしてこの真理が人々に伝えられた。また、アイオナ島に学校が設立され、ここから、スコットランド、イングランドだけでなく、ドイツやスペインやイタリアにまで、伝道者が送られた。

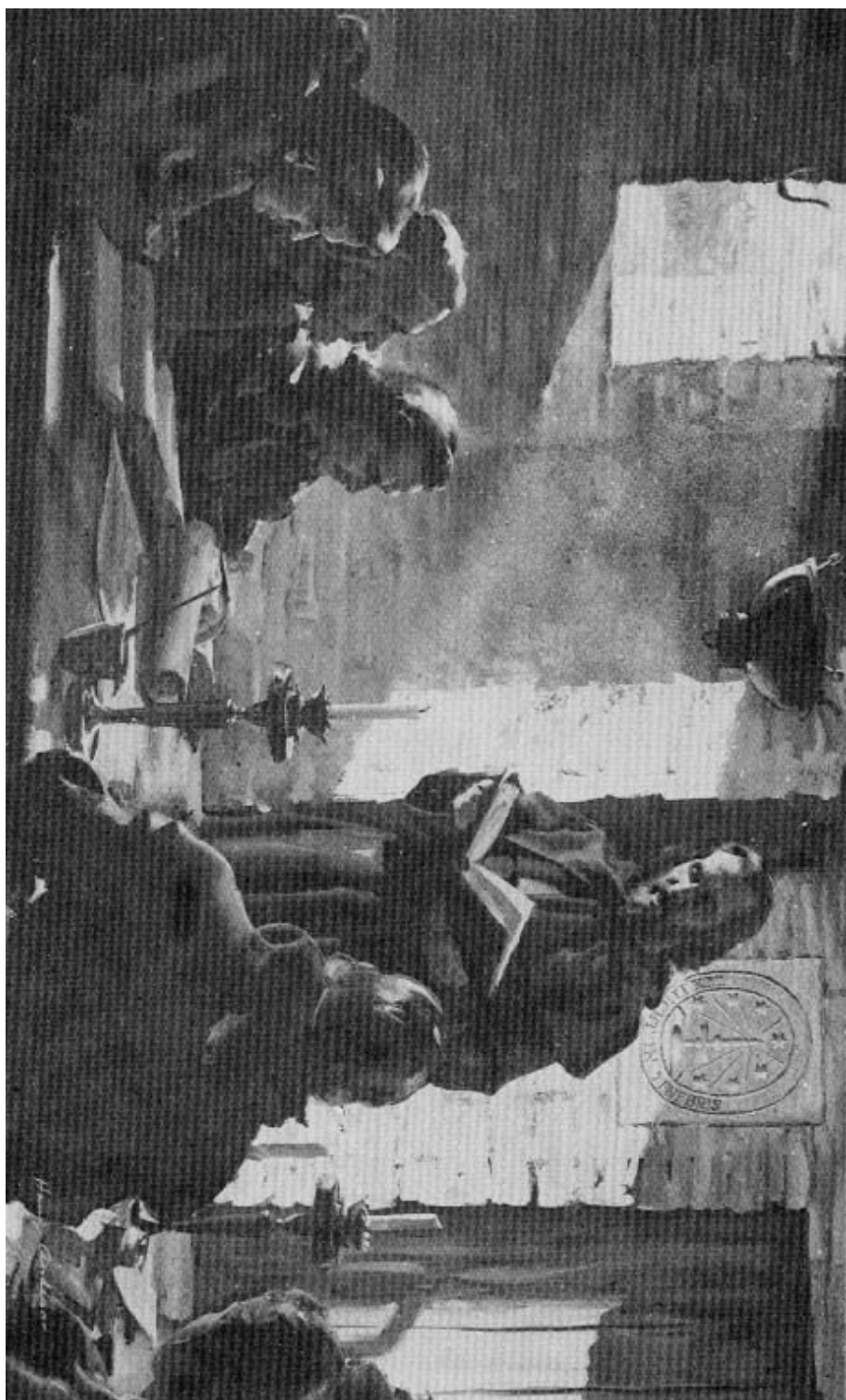
しかし、ローマはブリテンに目をつけ、これを自分の支配下におこうと決心した。六世紀に、ローマ教会の宣教師たちは、異教のサクソン人を改宗させようと企てた。彼らは誇り高き異教徒たちから歓迎され、幾千という人々をローマ教に改宗させた。働きが進展するにつれて、法王教の指導者たちと改宗者たちは、初代教会の流れをくむキリスト者たちに出会った。そこには著しい相違があった。前者が法王教のもつ迷信的で華美で尊大な性格をあらわしていたのに対し、後者は、単純で謙そんで、品性においても教義においても態度においても、聖書的であった。ローマの使節たちは、これらのキリスト教会に、法王の至上権を認めることを要求した。ブリトン人は、自分たちはすべての人を愛したいと思う、しかし法王は教会における至上権を与えられたわけではないのだから、自分たちとしては、すべてのキリスト者たちに対してすべき服従を、法王に対してもなすことができる

だけであると、柔和に答えたのであった。彼らがローマに対して忠誠を尽くすようにさせようとする試みがくり返された。しかし、これらの謙そんなキリスト者たちは、ローマ教会の使節たちのごうまんな態度に驚き、自分たちはキリスト以外のだれをも主として認めないと、断固として答えた。ここにおいて、法王制の真の精神があらわされた。すなわちローマの指導者は、次のように言ったのである。「平和をもたらす兄弟たちを受け入れないなら、戦いをもたらす敵を迎えることになる。われわれと一致してサクソン人に生命の道を示さないなら、彼らから死の打撃を受けるであろう。」これは□先だけのおどしではなかった。戦争と陰謀と欺瞞とが、聖書の信仰の証人たちに向けられ、ついにブリトン人の諸教会は破壊され、あるいは法王の権威に余儀なく屈した。

フルド派（フルデンセス）の人々

ローマの管轄外にあった国々には、幾世紀もの間、法王教の腐敗にほとんど染まることなく存在したキリスト者たちの諸団体があつた。彼らは異教に囲まれていたために、時の経過につれて、その誤りに感化された。しかし彼らは聖書を信仰の唯一の規準とし、その真理の多くを固守し続けていた。これらのキリスト者たちは、神の律法の永続性を信じ、第四条の安息日を守っていた。この信仰と習慣を保っていた諸教会は、中央アフリカに、そしてアジアのアルメニア人の中にあつた。

しかし法王権の侵入に抵抗した人々のなかで、最も著しいのがフルド派（フルデンセス、フルドウス派）であつた。法王庁が存在しているまさにその国家において、その虚偽と腐敗は最も激しい抵抗に会つた。数世紀にわ



フルド派の人々は、聖書の翻訳をしたヨーロッパで最初のクリスチャンに数えられる。宗教改革の数百年前に、彼らは、手書きの自国語聖書を持ち、そのメッセージを何千もの人々に伝えた。

たつて、ピエモンテの諸教会は独立を保っていた。しかし、ついにローマが彼らに屈服を迫るときがきた。ローマの圧制に対して無益な抵抗を試みたあとで、これらの教会の指導者たちは、全世界が敬意を表しているように思われるこの権力の至高性を、しぶしぶ認めた。しかしながら、法王や司教たちの権威に対する服従を拒否した者たちもあつた。彼らは、あくまでも神に忠誠を尽くし、信仰の単純さと純潔とを保とうとした。こうして分離が起きた。古くからの信仰を固守する者たちは、今や身を引いて、ある者たちは故郷のアルプスを去って外国で真理の旗をかかげ、また他の人々は、人里離れた谷間や岩角けわしい山岳地帯に逃れて、そこで自由に神を礼拝した。

幾世紀にもわたつてフルド派のキリスト者たちが信じ、教えてきた信仰は、ローマから出た偽りの教義と著しい対照をなしていた。彼らの宗教的信念は、キリスト教の真の体系である書かれた神の言葉に基づいていた。しかし、世から隔離された寂しい隠れがに住み、家畜の世話や果樹の栽培に労苦の日々を送っていたそぼくな農民たちは、自分自身の力で、背信した教会の教義や邪説に反対する真理に到達したのではなかった。彼らの信仰は、新たに受けた信仰ではなかった。彼らの宗教的信念は、彼らの先祖から受け継いだものであつた。彼らは、使徒時代の教会の信仰、すなわち、「ひとたび伝えられた信仰」を強く主張した(ユダ三節)。世界的な大都市に王座をかまえた高慢な法王制ではなくて、この「荒野の教会」がキリストの真の教会であり、世界に伝えるために神がご自分の民にゆだねられた真理の宝の保管者であつた。

真の教会がローマから分離しなければならなかった主な理由の中に、聖書的安息日に対するローマの憎しみとということがあつた。預言されていたとおり、法王権はこの真理を地に投げ捨てた。人間の言い伝えや習慣が尊ば

れる一方、神の律法は踏みにじられた。法王権の支配下にあった諸教会は、早くから、日曜日を聖日としてあがめるよう強要された。誤りと迷信が広くゆきわたっているさなかにあつて、多くの者が——神の真の民でさえも——当惑し、真の安息日を守りながらも、日曜日にも仕事を休むほどであつた。しかし法王教の指導者たちは、それでは満足しなかつた。彼らは、日曜日を尊ぶばかりでなく、安息日を汚すことを要求した。そして、安息日を尊ぼうとする人々を、最も激しい口調で非難した。だれでも神の律法を平安のうちに守ろうとするならば、どうしても、ローマの権力外に逃れるほかはなかつた。

大自然の中の教会

フルド派の人々は、ヨーロッパにおいて最初に聖書の翻訳を手にした人々の一つであつた(付録参照)。宗教改革の数百年も前から、彼らは、自国語で書かれた聖書の写本を持っていた。彼らは混ぜ物のない真理を持つており、そのために、特に憎しみと迫害とを受けたのであつた。彼らは、ローマの教会は黙示録の背教したバビロンであると宣言し、生命の危険をもかえりみず、その腐敗に抵抗するために立ち上がった。長期にわたる迫害のために、信仰の妥協をしたり、独特の主義を少しずつ放棄したりする者もあつたが、真理に堅く立った人々もいた。暗黒と背教の全時代を通じて、ローマの至上権を否定し、聖画像崇敬を偶像礼拝だとして拒み、真の安息日を守つたところのフルド派の人々がいた。最も激しい弾圧のさなかで、彼らはその信仰を保つた。サボア人たちのやりに深手を負い、ローマの火刑柱で焦がされようとも、彼らは神の言葉と神の栄光のために、ひるまず堅く立つ

たのである。

そびえ立つ山々のかげに——それはいつの時代においても、迫害され圧迫された人々の避難所であったが——フルド派は隠れ場を見いだした。そしてここで真理の光が、中世の暗黒のただ中にあって燃え続けた。ここで、千年以上もの間、真理の証人たちは昔ながらの信仰を保持したのであった。

神は、ご自分の民におゆだねになった力強い真理にふさわしい、極めて荘厳な避難所を、彼らのために備えておられた。忠実な避難者たちにとって、山々は主の不变の義の象徴であった。彼らは子供たちに堂々たる威厳をもって彼らの前にそびえ立つ山々を指さし、変化も回転の影もないおかた、そのみ言葉が永久の丘のように持続するおかたについて語った。神は、山々を堅くすえ、それに力をお与えになった。無限の力を持たれた神の腕以外のような腕も、山々をその場所から動かすことはできなかった。同様に神は、天と地における神の統治の基礎である律法を、堅くすえられた。人間は、手を伸ばして同胞の生命を奪うことはできよう。しかし、主の律法の一つでも変えることができるならば、あるいは、神のみこころを行なう者に対する神の約束の一つでも消し去ることができるならば、山々をその土台から根こそぎにして、海の中にやすやすと投げ込むことができるであろう。神のしもべたちは、不動の山々のように、断固として神の律法に忠誠を尽くさなければならない。

低い谷間を取り巻く山々は、神の創造の力を絶えずあかしするとともに、神の保護の絶えざる保証であった。信仰のゆえに故郷を後にした人々は、主の臨在を無言のうちに表わしている大自然を愛するようになった。彼らは自分たちの境遇の苦しさをつぶやかenかった。ひっそりした山の中にあっても、彼らは寂しさを感じなかった。人間の怒りと残酷さからの避難所を備えていくださったことを彼らは神に感謝した。彼らは、神の前で自由に

礼拝ができることを喜んだ。時おり、敵の追撃を受けたときには、強固な山々が確実な防御となった。彼らは多くの高い断崖から、神を賛美する歌をうたった。そしてローマの軍隊は、彼らの歌う感謝の歌を沈黙させることができなかった。

宗教教育の模範

純潔、単純、熱心が、キリストに従うこれらの人々の信条であつた。彼らは、真理の原則を、家屋、土地、友人、親戚はいうに及ばず、生命そのもの以上に大切なものと見なした。彼らは、これらの原則を若い人々の心に植えつけようと熱心に努めた。青年たちは幼いときから、聖書を教えられ、神の律法の要求を神聖なものとするよう教えられた。聖書の部数は極めて少なかったもので、その尊いみ言葉を彼らは暗記した。多くの者が、旧約聖書両方のかんりの部分を暗唱できた。神を思う思いが、自然の莊嚴な光景からも、また、日常生活のささやかな祝福からも、同じように連想された。幼い子供たちは、神を、すべての恵みとすべての慰めを与えてくださるおかたとして、感謝をもって仰ぐよう教えられた。

両親たちは、慈愛と愛情に満ちていたが、同時に非常に賢明であつて、子供たちをわがままにさせたりはしなかった。彼らの前途には、試練と困難の生涯が、そしておそらくは殉教者としての死が待っていた。それだから彼らは、子供のころから、困難に耐え、統制に服し、しかも自ら思考し行動するように教えられていた。幼いきから彼らは責任を負い、言葉を慎み、沈黙の賢明さを理解するように教えられた。敵に聞こえた軽率な一言が、

それを言った者だけでなく、多くの同信者の生命を危険に陥れる恐れがあった。真理の敵は、餌食をさがしまわるおおかみのように、信仰の自由を求める者たちをつけねらっていたからである。

フルド派の人々は、真理のために、世俗的な繁栄を犠牲にし、忍耐強く、自分たちの糧のために労苦した。山岳地帯の中の耕せる土地はすべて、ていねいに開墾された。谷間も、あまり肥えていない山の中腹も耕されて、作物を实らせるようになった。節約と厳しい克己とが、子供たちの受ける唯一の遺産としての教育の中に含まれていた。子供たちは、人生が訓練となるよう神は計画しておられること、そして自分たちの必要は、自分自身の労働と生活設計、配慮と信仰によつてのみ満たせるということを教えられた。その過程は、労苦に満ち、疲れさせるものではあつたが、しかし健康的なものであつた。そしてこれは、墮落した状態にある人間にちようど必要なことであつて、神が人間の訓練と発達のために備えられた学校であつた。青年たちは、ほねおりと困難に慣れる一方、知性の開発も怠らなかつた。彼らは、自分たちのすべての能力が神のものであつて、そのすべてを神の奉仕のために開発し活用しなければならぬことを教えられた。

フルド派の教会は、その純潔と単純さにおいて、使徒時代の教会に似ていた。彼らは、法王や大司教の至上権を拒み、聖書を唯一最高で誤りのない権威として主張した。彼らの牧師たちは、ローマの尊大な司祭たちと異なつて、「仕えられるためではなく、仕えるため」に來られた彼らの主の模範に従つていた。彼らは神の民を、神の聖なる言葉という緑の牧場、生きた泉に導いて、彼らを養つた。彼らは、人間の虚栄と誇りの記念物から遠く離れ、華麗な会堂や大寺院ではなくて山々のかげに、アルプスの谷に、あるいは危険な場合には、岩のとりでの中に集まつて、キリストのしもべたちから真理の言葉を聞いた。牧師たちは福音を説くだけでなく、病人を見

舞い、子供たちを教え、誤った者をさとし、争いをしずめて一致と兄弟愛を育てるように努めた。彼らは、平和な時には人々の自発的なさげ物によって支えられていたが、テント作りのパウロのように、各自は何かの職業を身につけていて、必要な場合には自分で生活できるようにしていた。

青年たちは牧師たちから教育を受けた。普通の学問の諸分野に注意が向けられる一方、聖書が主要な科目であった。マタイやヨハネによる福音書は、多くの使徒書簡とともに、暗記された。彼らはまた、聖書の写本に従事した。聖書全体の写本もあれば、短い部分的なものもあり、それには、聖書の解説ができる人々による簡単な聖句の説明がついていた。こうして、神よりも自分たちを高めようとする人々によって長く隠されていた真理の宝が明らかにされた。

忍耐強くたゆまぬ努力によって、時には暗い洞窟の奥深くで、たいまつ之光をたよりに、聖書は一節ずつ、また一章ずつ書き写されていった。こうして働きは続けられ、あらわされた神のみ旨は純金のように輝き出た。試練を経たために、神のみ旨がどんなにかいっそう輝かしく、明らかで強力なものとなったかは、その働きに携わった者たちにしかわからない。そして天使たちが、これらの忠実な働き人たちを取り囲んでいた。

フルド派の信仰と生活

サタンは法王教の司祭や司教たちを促して、真理のみ言葉を誤謬や邪説、迷信などのつまらないものの下に隠しておこうとした。しかし、それは、暗黒時代の全期間を通じて、驚くべき方法で純粋に保たれた。それは、人

間の印ではなくて、神の刻印を帯びている。人間は、聖書の簡単、明瞭な意味をあいまいにし、それ自体が矛盾しているものであるかのように思わせようとして、たゆまず努力してきた。しかし神のみ言葉は、荒れ狂う大海に浮かぶ箱舟のように、それをくつがえそうとするあらしにも動じないのである。金や銀の鉱脈は、鉱山の地中に深くあって、宝を発見しようとする者たちはみな掘らなければならないように、聖書にも真理の宝が隠されていて、それは心ひくく熱心に祈りつつ探究する者にだけあらわされる。神は聖書を、全人類にとって、幼年時代、青年時代、壮年時代の教科書となり、全生涯にわたって研究すべきものとなるよう意図された。神は聖書を、ご自分の啓示として人間にお与えになった。新しい真理が明らかになるたびに、その真理の本源であられる神の品性が新たにあらわされる。聖書を研究することは、人間を創造主とのいっそう密接な関係に入れ、神のみこころをいっそう明瞭に知らせるために、神がお定めになった方法である。それは、神と人間とが交わる手段である。

フルド派の人々は、主を恐れることが知恵の初めであることを認めていたが、それとともに、世界と接触して人間と実生活の知識を得ることが、心を広くし、知覚を鋭くするのに重要であることを知っていた。青年たちのある者は、山の中の学校から、フランスやイタリアの諸都市にある学校に送られた。そこには郷里のアルプスにおけるよりはいっそう広範な、研究と思索と観察の領域があった。こうして送り出された青年たちは、誘惑にさらされ、罪惡をまのあたりに見、最も巧妙な邪説と最も危険な欺瞞を主張する、サタンの狡猾な手下たちに出会った。しかし彼らが子供のときから受けた教育は、こうしたすべてのことに対する準備となる性質のものであった。彼らは、どこの学校に行っても、心を打ち明けるような友をつくってはならなかった。彼らの衣服は、最大の宝すなわち聖書の貴重な写本を隠せるように作られていた。長年の苦心の結晶であるこれらの写本を、彼らはい

つも身につけていて、怪しまれない時にはいつでも、真理を受け入れそうな人々に、その一部を注意深く手渡した。フルド派の青年は、母親のひざもとで、このような目的のために訓育されたのであった。そして彼らは、自分たちの働きを理解し、それを忠実に実行した。真の信仰に改宗する者たちが、これらの大学内に出てきて、その主義が学校全体にみなぎることもよくあった。しかし法王教の指導者たちは、どんなに厳密に調べても、いわゆる異端邪説の出所をつかむことができなかった。

フルド派の伝道精神

キリストの精神は、伝道の精神である。心が新たにされた人のまず最初の衝動は、他の人をも救い主に導こうとすることである。これが、フルド派キリスト教徒の精神であった。彼らは、単に自分たちの教会内において真理を純潔に保つだけでなく、それ以上のことを神が要求しておられると感じた。彼らは、暗黒の中にいる人々に光を輝かす厳粛な責任が自分たちに負わされているのを感じた。こうして彼らは、神のみ言葉の偉大な力によって、ローマが人々に負わせたくびきを砕こうと努めた。フルド派の牧師たちは宣教師としての訓練を受け、牧師の職務にたずさわる者はみな、まず伝道者としての経験を持たなければならなかった。各自は、本国の教会の責任を負うに先だって、どこかの伝道地で三年間奉仕しなければならなかった。この奉仕には、まず克己と犠牲とが要求されたが、困難をきわめた時代に牧師の生活をする者にとって、まことにふさわしい出発であった。聖職に任じられた青年たちは自分たちの前途に、世俗の富と栄光ではなくて、労苦と危険の生活、あるいは殉教者

の運命を見た。宣教師たちは、イエスが弟子たちをつかわされたように、二人ずつで出かけた。青年たち一人一人に、たいていの場合、年長で経験に富んだ人が組み合わせられ、青年たちは、彼を訓練する責任を負った同伴者の指導の下でその教えに従わねばならなかった。こうした同労者たちは、いつもいっしょにいたわけではなかったが、たびたび祈りと相談のために集まって、互いに信仰を強めあった。

彼らの任務の目的を明かすことは、不利を招くにきまっていた。それゆえ彼らは注意深くその身分をかくした。どの牧師も、何かの技術か職業をわきまえており、伝道者たちも、世俗の職業に従事しながら自分たちの働きを行なった。通常彼らは、行商の働きを選んだ。「彼らは、当時遠い市場でなければ、たやすく入手できなかった絹、宝石、その他の品を扱った。そして、宣教師として訪れるならはねつけられるところに、商人として歓迎された。」^二彼らの心は常に、金や宝石よりも尊い宝を人々に示す知恵を、神に仰ぎ求めていた。彼らはひそかに、聖書の全部、またはその一部を幾冊か携えていた。そして機会あるたびに、これらの写本に客の注意を引いた。こうしてしばしば、神のみ言葉を讀もうとする興味が呼び起こされ、み言葉の一部が、それを受け入れたいと願う人々のところに喜んで置いていかれた。

これらの伝道者たちの働きは、彼らの住んでいた山々のふもとの平野や谷間から始まったが、しかしそうした近辺だけではなく、はるか遠くまで広がった。彼らは、彼らの主イエスのように、旅によぐれたそまつな衣服を着、はだしで、大きな町々を巡り、遠方の地方にまで進んでいった。至る所で彼らは、尊い種をまいた。彼らが通ったところには教会が起こり、殉教者の血が真理のあかしを立てた。これら忠実な人々の働きによって集められた、豊かな魂の収穫は、主の大いなる日にあらわされることであろう。ひそかに、そして静かに、神のみ言葉

第4章 真理の擁護者たち



上)イタリアのトーレ・ペリーチェ近郊にある洞窟の入口。迫害されたワルド派は、このようなところでひそかに集会を持った。(下)トーレ・ペリーチェのワルド派博物館に陳列されている資料。手前の文書はナントの勅令(新教徒に信仰の自由を認めた勅令)の廃止を告

はキリスト教世界の中を進んでいき、人々の家庭と心の中に喜び迎えられていった。

偉大な真理の発見

フルド派にとって、聖書は、過去の人間を神がどのように扱われたかという記録と、現在の責任と義務の啓示であるだけではなくて、将来の危険と栄光を開き示すものであった。彼らは、万物の終わりが遠い先のことではないことを信じた。そして、祈りと涙をもつて聖書を研究したとき、ますますその尊い言葉に深く心を動かされ、その救いの真理を他の人々に伝える義務を感じた。彼らは、救いの計画が聖書のページに明らかにあらわされているのを見、イエスを信じるこの中に慰めと希望と平和を見いだした。こうして光に照らされて明らかな理解を得、心の喜びを感じたときに、彼らは、法王教の誤謬という暗黒の中にいる人々に、その光を注ぎたいと熱望した。

彼らは、多くの人々が法王と司祭の指導のもとに、自分たちの魂の罪の償いとして苦行をし、罪のゆるしを得ようとむだな努力をしているのを見た。人々は、善行に頼って救いを得るように教えられていたので、たえず自分自身に目を向け、自分たちの罪深さを考え、自分たちが神の怒りにさらされているのを見、心と体を苦しめたのであるが、しかしなんの安心も得られないのであった。こうして、良心的な人々はローマの教義に縛られていた。幾千という人々が友人や親戚を捨て、その一生を修道院の小部屋で過ごした。たび重なる断食、残酷な打ち、夜半の勤行、荒涼とした住まいの冷たくしめつた石の上での数時間の平伏、長途の巡礼、屈辱的苦行や恐

ろしい拷問——こうしたものによって、幾千という人々が、良心の安らぎを得ようとしたがむだであった。罪の意識に圧倒され、神の報復の怒りを恐れて、多くの者は悩みつづけ、ついには精根つき果てて、一条の光も希望も得ずに墓にはいつてしまふのであった。

フルド派の人々は、これらの飢えた魂に生命のパンを与え、神の約束のなかにある平和のメッセージを示し、救いの唯一の望みとしてキリストをさし示したいと切望した。善行によって、神の律法を犯した罪を贖うことができるという教義は、虚偽に基づくものであると彼らは主張した。人間の功績に頼ることは、キリストの無限の愛を見ることを妨げてしまう。墮落した人類は神の前に、何一つとして自分を推奨しうるものがないために、イエスが人間の犠牲としてなくなられたのである。十字架に架けられ、復活された救い主の功績が、キリスト者の信仰の基礎である。人がキリストによりすがり、キリストにつながるということは、手足が体につながり、枝が幹につながるのと同様に、現実で密接なものでなければならない。

法王や司祭たちの教えは、神の品性またキリストの品性でさえも、厳格で、暗く、近づきにくいものという考えを人々にいだかせていた。また救い主は、司祭や聖人の仲保がなければならないほど、墮落した人間に対する同情心に欠けたおかたとして提示された。しかし、神のみ言葉によって目を開かれた者たちは、罪の重荷と心配苦労を持ったままご自分のもて来るようにと、立って両手をひろげ、すべてのものを招いておられる愛とあわれみに満ちた救い主イエスを、これらの魂に示したいと熱望した。また、人々が神の約束を認めて、直接神に来て、罪を告白し、ゆるしと平和を受けることがないようにするためにサタンが積み上げた妨害物——人々が神の約束を悟らないようにするために、そして、直接神のもてきて罪を告白し、ゆるしと平和を得ることがないよ

うにするために、サタンが積み上げた妨害物——を、一掃したいと切望した。

真理の使者たち

フルド派の伝道者は、興味をもった人々に、福音の尊い真理を熱心に伝えた。彼らは、注意深く書かれた聖書の一部を、用心深く取り出した。刑罰の執行を待ち構えている報復の神しか知らなかったところの、罪に苦しむ良心的な魂に、希望を与えることは、彼の最大の喜びであつた。くちびるを震わせ、目に涙を浮かべながら、そしてしばしばひざまずいて、彼は、罪人の唯一の希望を告げる尊い約束を彼の同胞に読んで聞かせた。こうして真理の光は、暗黒に閉ざされていた多くの心を照らし、黒雲を追い払い、そしてついには義の太陽が、その光にいやしの力をもって、心の中にさし込むようになった。しばしば聖書のある部分は、くり返し何度も読むことを相手から望まれた。相手は、それが聞きがちではないということ、確かめているかのようであつた。特に次の聖句は、何度もくり返すよう熱心に求められた。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(ヨハネ第一・一ノ七)。「そして、ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」(ヨハネ一三ノ一四、一五)。

多くの者が、ローマの主張に関して目をさまされた。彼らは、罪人のための人間や天使のとりなしが、どんなに無益であるかを知った。彼らの心に真理の光が射し込んだとき、彼らは喜びをもって叫んだ。「キリストがわ

たしの祭司、彼の血がわたしの犠牲、そして彼の祭壇がわたしの告白室である」と。彼らは、イエスの功績に全く依り頼んで次のみ言葉を繰りかえした。「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」(ヘブル―ノ六)。「わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」(使徒行伝四ノ一二)。

嵐になやむ哀れな魂にとって、救い主の愛の保証は、実感できないほど大いなるものに思われた。大きな安心が与えられ、あふれるばかりの光が彼らの上に注がれたので、彼らは天に移されたかのように感じたほどであった。彼らの手は、キリストをしっかりと握り、彼らの足は永遠の岩の上に立っていた。死の恐怖はすべて消え去った。今や彼らにとって、救い主のみ名の栄光のためであるならば、牢獄であれ火刑であれ、あえて切望するところとなった。

こうして、人目を避けたところで、神のみ言葉が持ち出され、読まれたのであった。時には、ただ一人のために、そして時には、光と真理を渴望する小さい群れのために。このようにして徹夜することもよくあった。聴衆があまりにも驚き、感嘆するので、彼らが救いのおとずれを十分に理解するまで、あわれみの使者は朗読を中断せざるをえないこともまれではなかった。また、しばしば、「神は、ほんとうに**わたし**の献げ物を受け入れられるであろうか。神は、**わたし**に恵みをお与えになるであろうか。神は、**わたし**をおゆるしになるであろうか」という言葉が発せられた。そしてその答えとして、「すべて重荷を負って苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」というみ言葉が読み上げられた(マタイ―ノ一二)。

人々は信仰によって約束をしっかりと捉え、喜びをもって応答した。「もう長い巡礼の旅に出ることはない。

もう苦勞して宮詣りをしなくてもよいのだ。罪深く汚れたまま、わたしはイエスのもとに行つていいのだ。そして彼は、悔い改めた者の祈りを退けられない。『あなたの罪はゆるされた』。わたしの罪、わたしの罪でさえ、ゆるされるのだ！」。

きよい喜びが心に満ち、賛美と感謝によつてイエスの名があがめられるのであった。喜びに満たされたこれらの人々は、眞の生ける「道」を発見したという自分たちの新しい経験を、できるだけ十分に他の人々に語り、光を伝えるために、家路を急いだ。眞理を求めていた人々の心に直接語つた聖書の言葉には、不思議で厳肅な力が伴つていた。それは神の声であつた。そしてそれは、それを聞いた者たちの心を強く動かした。

眞理の使者は、また旅に出してしまう。しかし、彼の謙そんな態度、誠実さ、そして眞剣で熱意にあふれていたことなどが、たびたび話題となつた。多くの場合聴衆は彼がどこから来てどこへ行くのかをたずねていなかった。彼らは、最初は驚きに圧倒され、そのあとでは感謝と喜びに圧倒されて、彼にたずねることなど考えもしなかつたのである。彼らが、自分たちの家までいっしょに行くよう勧めると、彼は、自分は群れの失われた羊をたずねなければならぬと答えるのであつた。もしかすると彼は天からのみ使いだつたのではなからうか、と人々は不審がった。

たいていの場合、眞理の使者は二度と現われなかつた。彼は、他の地方へ行つてしまつたのか、それとも人知れぬ牢獄の中で苦しんでいるのか、または、眞理のあかしを立てたその場所で、骨をさらしているのかもしれない。しかし、彼が後に残して行つた言葉は、滅ぼすことができなかった。それは人々の心のなかで働いていた。その祝福された結果は、審判の時になつてはじめて明らかになることであらう。

ローマによる迫害

フルド派の伝道者たちは、サタンの王国に侵入しつつあったので、暗黒の勢力も嚴重な警戒を始めた。悪の君は、真理を前進させようとするあらゆる努力を監視し、自分の代理者たちの恐怖心をあおった。法王教の指導者たちは、これらの素朴な旅商人たちの活動が、彼らの側を危険に陥れる兆であることに気づいた。もし真理の光が、なんの妨げもなしに輝くならば、それは、人々を閉じこめている誤りの厚い雲を一掃してしまうことである。それは、人々の心をただ神だけに向けて、ついにはローマの至上権を打破してしまうことである。

初代教会の信仰を保っているこの人々の存在そのものが、ローマの背教に対する絶えざるあかしであり、それゆえに、最も激しい憎悪と迫害をひき起こした。彼らが聖書の引き渡しを拒否したことも、ローマにとっては許せないことであつた。ローマは彼らを地上から一掃しようとした。こうして、最も恐るべき戦いが、山の中に住む神の民に向かって始められた。また、宗教裁判官（異端審問官）が、彼らの後を追ひ、罪なきアベルが残忍なカインに殺されるという光景がしばしばくり返された。

何度となく、彼らの肥沃な土地は荒らされ、住まいや礼拝堂は破壊され、なんの罪もない勤勉な人々の、実り豊かな田園と家庭であつたところが、見渡すかぎりの荒地地となつてしまった。飢えた猛獣が血をなめて、ますますたけり狂うように、法王教徒たちは犠牲者たちの苦難を見て、ますます激しく怒りを燃やした。これら純粋な信仰の証人たちの多くは、隠れていた山々から追われ、谷間から狩り出され、深い森林や岩山の峰々に避難し

た。

こうして追放された人々の品性には、なんのおちどもなかった。彼らの敵でさえ彼らのことを、平和を愛し、穏やかで、敬虔な人々であると言明している。彼らの主要な罪は、彼らが法王の意志通りには神を礼拝しないということであった。この罪のために、人間または悪魔が考え出すことのできるあらゆる屈辱と侮辱と拷問が、彼らに加えられたのである。

ローマが、憎むべき教派を全滅させようと決意したとき、彼らを異端として非難し、滅ぼすよう命じた教書が、法王によって出された（付録参照）。彼らは、怠け者であるとか不正直であるとか、秩序を乱すとかと言って訴えられたのではなかった。そうではなくて、信心深く神聖な外観を装いながら、「真の羊の群」を欺く者であると宣言されたのである。それゆえに法王は、「そのような悪人たちの、有害で忌まわしい宗派は」、もし彼らが「それを放棄しないならば、毒蛇のように撲滅せよ」と命じた。^三この傲慢な権力者は、この言葉をふたたび聞くことを予期したであろうか。彼は、この言葉が天の書に記されて、審判の時に彼はそれに直面するのだということを、知っていたであろうか。「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」とイエスは言われた（マタイ二五ノ四〇）。

この教書は、異端に対する戦いに教会の全員が参加するよう呼びかけた。この残酷な仕事に従事させるための刺激として、それは、「一般または特定を問わず、すべての宗教的苦行と罰からの赦免を与えた。戦いに加わる者すべてに、どんな宣誓の不履行をもゆるした。どんな不正によって得た物でも合法と認めた。そして、異端者を殺すものは、すべての罪がゆるされると約束した。また、ワルド派の人々に有利な契約はすべて破棄し、彼ら

の使用人たちに家を去るよう命じ、すべての者に対して、どんな援助をも彼らに与えることを禁じ、そして、すべての者に彼らの財産を奪う権利を与えた。^四 こうした文書は明らかに、その背後で働く悪の霊を示している。ここに聞こえるのは、キリストの声ではなくて、龍のほえる声である。

宗教改革の種

法王教の指導者たちは、彼らの品性を神の律法という偉大な標準に合わせようとはせず、自分たちに都合のよい別の標準を設けた。そして、ローマがそう命じるという理由のもとにすべての者をそれに従わせようと決めた。最も恐ろしい悲劇が演じられた。墮落して神をけがしても恐れない司祭や法王たちは、サタンが彼らに命じたことを行なっていた。彼らには、あわれみなど少しも見られなかった。キリストを十字架にかけ、使徒たちを殺したのと同じ精神、また、残忍なネロが彼の時代の忠実な者たちを迫害したのと同じ精神が、神に愛された人々を地上から除き去ろうとして働いていた。

神を恐れる民、フルド派の人々は、数世紀にわたって受けた迫害にも忍耐強く耐えて、贖い主をあがめた。彼らにはしばしば十字軍が向けられて、残忍な虐殺を受けたにもかかわらず、彼らは貴重な真理をあちこちに伝えるために、伝道者を派遣しつづけた。彼らは狩り出され殺された。しかし、その血は、まかれた種に水を注ぎ、必ず実を結ばせた。こうしてフルド派の人々は、ルターが生まれる幾世紀も前に、神のためにあかしを立てた。彼らは多くの国々に散らばって、宗教改革の種をまいた。宗教改革は、ウィクリフの時代に始まり、ルターの時

代に広く深く成長した。そしてそれは、「神の言とイエスのあかしとのゆえに」喜んですべての苦難を忍ぶ人々によつて、世の終わりまで続けられるのである（黙示録一ノ九）。

注

- 一 J. H. Merle D'Aubigné, "History of the Reformation of the Sixteenth Century," b.17, ch.2.
- 二 Wylie, b.1, ch.7.
- 三 Ibid., b.16, ch.1.
- 四 Ibid.

第五章

改革の明星ウィクリフ

改革の先駆者

宗教改革以前には、ほんの少ししか聖書がなかった時があつたが、神は、神のみ言葉が全く滅び失せることをおゆるしにならなかった。聖書の真理は、永遠に隠しておかれるべきではなかった。神は、牢獄の扉を開き、鉄の門のかんぬきをはずして、神のしもべたちを自由にすることができたのと同様に、生命の言葉を解放すること、たやすいことであつた。ヨーロッパ各国において、人々は聖霊に動かされて、隠れた宝をさがすように真理を研究した。彼らは、摂理的に聖書に導かれて、非常な興味をもってそれを研究した。彼らは、どんな犠牲を払ってでも、光を受けようとしていた。彼らは、すべてのことをはっきりと認めたわけではなかったけれども、久しくうずもれていた多くの真理を見出すことができた。天からの使者として彼らは出て行き、誤りと迷信の鎖を

碎き、長い間縛られていた人々に、立ち上がって自由を主張するように呼びかけた。

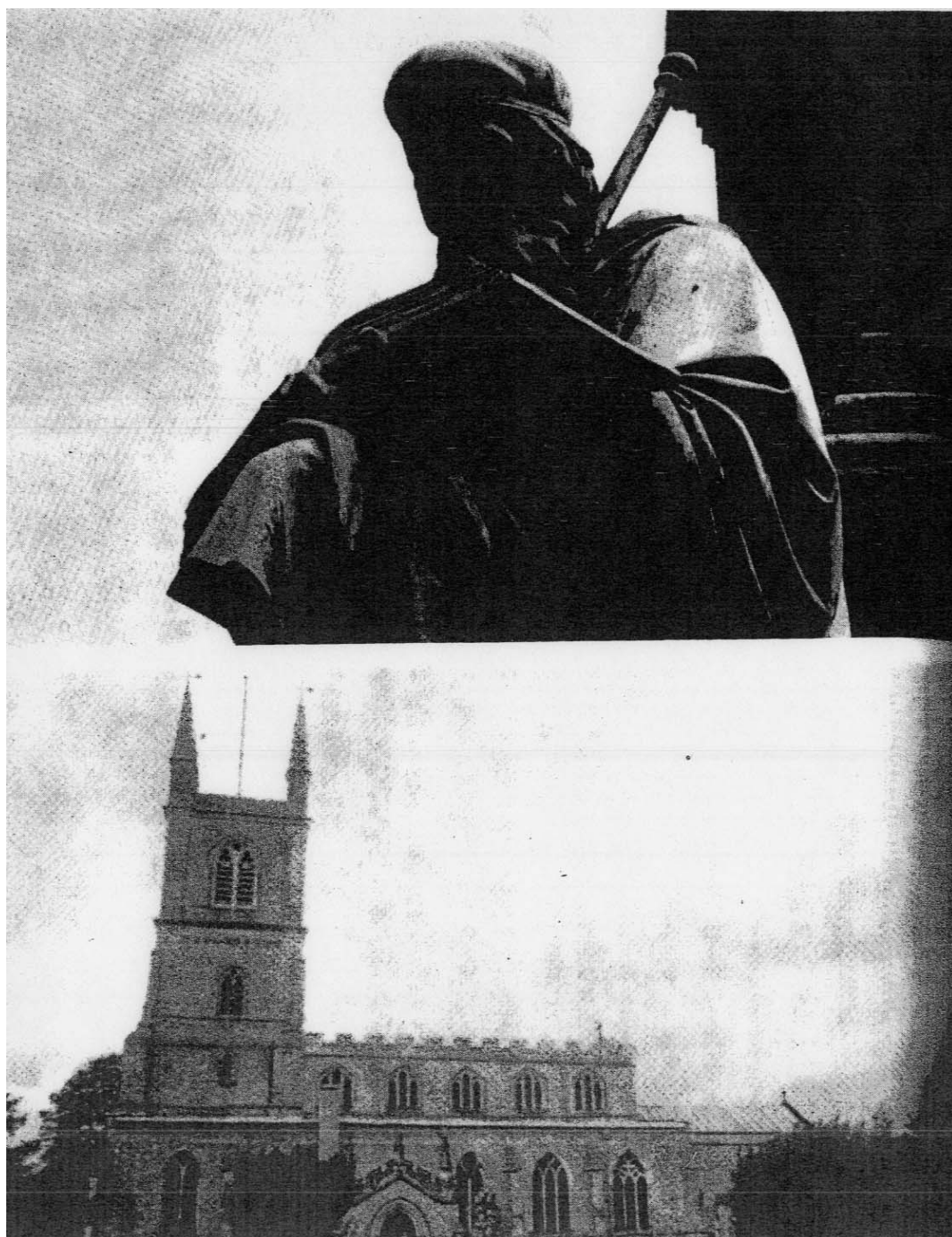
フルド派の人々を除いては、神の言葉は長い間、知識階級だけが読める言語の中に閉じ込められていた。しかし、聖書が翻訳されて、各国の人々に自国語で与えられるときが来た。世界はその真夜中を過ぎた。暗黒の時は過ぎようとしていた。そして各国に、夜明けのしるしが現われつつあった。

十四世紀、英国に、「宗教改革の明星」が現われた。ジョン・ウィクリフは、英国だけでなく、全キリスト教国にとつての、改革の先駆者であった。彼が語ることを許されたローマに対する一大抗議は、決して沈黙させることができなかった。その抗議は紛争のきつかけとなつて、ついに個人、教会、国家の解放が起こつたのである。

ウィクリフの青年時代

ウィクリフは、高等教育を受けた。彼にとつて、神を恐れることは知恵のはじめであつた。彼は大学時代に、驚くべき才能と学識の持ち主であると共に、熱心な信仰の持ち主として知られていた。彼は知識欲にもえて、あらゆる学問を身につけようとした。彼は、スコラ哲学、教会法、民法特に自国の法律を学んだ。こうした青年時代の教育は、後年の彼の活動に大いに役立った。彼はその時代の思弁哲学に通じていたから、その誤りを指摘することができた。そして、国の法律や教会の法規の研究によつて、彼は、市民的自由と宗教的自由のための大いなる戦いにたずさわる準備ができた。彼は、神のみ言葉から得た武器をふるうことができたと同時に、学校における知的訓練を受けていたから、哲学者たちのかけひきをも知っていた。彼のすぐれた資質と深遠な学識には、敵も味方も尊

第5章 改革の明星ウィクリフ



(上)西ドイツ、ウォルムスのルター記念碑のかたわらにあるウィクリフ像。(下)イギリスのラタワースにあるウィクリフの教会。ここでウィクリフは、最初の英訳聖書を作るとい
う大事業に没頭した。©KIRJATOIMI

敬を払った。彼の支持者たちは、自分たちの戦士が国家の指導者たちの中でも第一級の人物であることを誇りとした。そして彼の敵たちは、改革事業の支持者の無知と弱点を暴露して軽べつするというのができなかった。

ウィクリフは、まだ学生であつたときから、聖書の研究を始めた。まだ古代語で書かれた聖書しかなかったその時代において、学者たちは真理の泉への道を見出すことができたが、無学な者たちにはそれは閉ざされていた。こうして、ウィクリフの改革者としての将来の働きへの道は、すでに備えられていた。学者たちは神の言葉を研究し、そこに示されている豊かな神の恵みという大真理を見出していた。彼らは、その教えにおいて、この真理の知識をひろめ、他の人々を生きたまひ言葉に導いていた。

ウィクリフの注意が聖書に向けられたとき、彼は、学業の修得に当たつたのと同じく徹底的に、その研究に当たつた。これまで彼は、スコラ哲学にも、教会の教えにも満足することができず、非常な物足りなさを感じていた。そして神のみ言葉のなかに、彼はこれまで求めても得られなかったものを発見した。ここに彼は、救いの計画が啓示され、キリストが人類の唯一の仲保者として示されているのを見た。彼は、キリストの御用に自分自身を献げ、自分が発見した真理を人々に宣布しようと決心した。

悪習誤謬の打破

その後の改革者たちと同様にウィクリフも、働きを始めたころは、自分がどこに導かれるか知らなかった。彼は、故意にローマに反抗したわけではなかった。しかし、真理に献身したとき、必然的に虚偽と戦わなければな

らなくなった。彼は、法王制の誤りがはつきりすればするほど、熱心に聖書の教えを説いた。彼は、ローマが神のみ言葉を捨てて人間の伝説を取り入れたのを見た。彼は、聖書を退けた司祭たちを大胆に非難して、聖書をも一度人々の手に回復することを、そしてその権威を教会内でもう一度確立することを要求した。彼は熱心で有能な教師であり、雄弁な説教者であった。そして彼の日常生活は、彼が宣べ伝えている真理の実証であった。聖書に関する彼の知識、強力な論証、彼の純潔な生活、確固とした勇氣と誠実さとは、一般の人々の尊敬と信頼をかちえた。多くの者は、ローマ教会にみなぎる罪悪を見て、これまでの信仰に不満を抱くようになっていたから、ウィクリフが示した真理を非常な喜びをもって迎えた。しかし、法王教の指導者たちは、この改革者が自分たちよりも大きな勢力を得つつあるのを見て、激しい怒りに満たされた。

ウィクリフは鋭く看破する人であって、ローマの権威によつて認められていた多くの悪習を恐れず攻撃した。彼は王室付牧師として活躍していたが、法王が英国国王に課した税の支払いに勇敢に反対した。そして、法王が世俗の王たちの上に権力をふるう事は、道理にも啓示にも反する事を指摘した。法王の要求は人々を大いに憤慨させていたので、ウィクリフの教えは国家の指導階級に影響を及ぼした。王と貴族達は、結束して法王の俗権に対する要求を拒絶し、税の支払いを拒んだ。こうして英国における法王の至上権に対して大きな打撃が加えられた。

修道会の腐敗

ウィクリフが、長年にわたって断固たる戦いをいどんだもう一つの悪習は、たくはつ修道会の制度であった。

これらの修道士たちは、英国に群がり、国家の偉大と繁栄にとつての障害となっていた。産業・教育・道徳上に衰退的影響を及ぼしていた。修道士たちの怠惰な食生活は、財政的に人民の重い負担となつたばかりでなく、有用な労働を軽べつするに至らせた。青年たちは墮落し腐敗した。修道士たちの影響を受けて、修道院にはいり、隠遁生活をする者が多くいた。しかもこのことは、親の同意を得ないばかりか、彼らには知らせず、また彼らの命令に反してまで行なわれた。ローマ教会初期の教父のひとり、子としての愛と義務の要求以上に修道院生活の要求を重要視して、次のように宣言していた。「たとえ、なんじの父が戸口に倒れて嘆き悲しみ、なんじの母が、なんじを抱きし身をあらわし、なんじに乳ふくませし胸をあらわそうとも、なんじこれを足下にふみにじり、まっすぐキリストへと進み行くべし。」後にルターが言っているように、親に対して無情無感覚になつた子供たちの心は、こうした「ぞつとするような冷酷さ」のゆえに「キリスト者や人間というよりは、おおかみや暴君のような感じがする。」¹こうして法王教の指導者たちは、昔のパリサイ人たちのように、自分たちの言い伝えによって神の戒めを廃した。こうして、家庭は荒廃し、親は息子や娘たちとの交わりを奪われた。

大学の学生たちでさえ、修道士たちの偽りの言葉に欺かれて、その団体に誘ひこまれた。多くの者が、後になって、自分たちの一生を破滅させ親を悲しませたことに気づき、後悔したが、しかし、ひとたびわなにかかるや、そこから抜け出すことはできなかつた。修道士たちの影響を恐れて、息子たちを大学に送ろうとしなかつた親も多かった。学問の中心である各地の最高学府の学生の数は目立って減少した。学校は衰微し、無学な人が多くなつた。法王はこれらの修道士たちに、告白を聞いて許しを与える権威を授けた。これが一大罪惡の原因となつた。修道士たちは利益の増大を図つて、たやすく免罪を与えたので、あらゆる種類の犯罪人が彼らのもとにやってくる

ゆるしを得るようになり、その結果、最もはなはだしい罪悪が急激に増加した。病人と貧者はかえりみられず、彼らの困窮を救うはずであった贈与物は修道士たちの手にわたった。修道士たちは、人々を脅して施し物を要求し、彼らの団体に寄付しない者を不信心であると非難した。表面では清貧を口にしながら、修道士たちの富は殖える一方であった。そして、彼らの壮大な建造物とぜいたくな食卓とが国民をますます貧困に陥れることは明らかであった。彼らはぜいたくと快楽にふける一方、自分たちの代理として無知な者たちを派遣した。この者たちは不思議な物語や伝説、たわごとしか話すことができず、こうしたもので人々を喜ばせて、ますます人々を修道士たちにとってだましやすいものとした。修道士たちは依然として、迷信深い大衆を支配し、すべての宗教的義務は、法王の至上権を認め、聖人たちをあがめ、修道士に施し物をするこの中に含まれていると信じこませていた。そして、天国に入るにはこれで十分であると思わせていた。

学識ある、信心深い人々は、このような修道院制度を改革しようとしたがむだであった。しかし、いっそうはつきりと洞察していたウィクリフは、悪の根源をつき、制度そのものが偽りであって、それは廃止すべきであると宣言した。それについて、種々の議論と研究がわき起こった。修道士たちが法王の免罪符を売りながら国内を巡歴するとき、多くの者が、金でゆるしを買うことができるかどうか疑うようになった。彼らは、ローマの法王のゆるしよりも、神のゆるしを求めるべきではなからうかと、質問したのである（付録参照）。修道士たちの、飽くことを知らない貪欲を見て驚いた者も少なくなかった。「ローマの修道士と司祭たちは、ガンのように、われわれをむしばんでいる。神がわれわれを救ってくださいさなければ、人民は死んでしまう」と彼らは言った。^二 托鉢僧たちは自分たちの貪欲をおおいかくすために、自分たちは救い主の模範に従っているのであって、イエスと弟

子たちは人々の施し物によって生活したのであると言った。ところがこの主張は、彼らに不利な結果となった。というのは多くの人々が、自分で真理を学ぼうと聖書の研究を始めたのである。これはローマがほかの何よりも望んでいなかったことであつた。人々の心は、真理の源泉へと向けられた。それを隠すことが、ローマの目的であつたのであるが。

ウィクリフは、修道士たちに反対するパンフレットを書いて発行しはじめた。しかしそれは、彼らと論争するためではなくて、人々の心を聖書の教えとその著者である神に向けるためであつた。彼は、法王が持っている免罪や破門の権能は、一般の司祭の権能以上のものでなく、だれでも先ず神から罪の宣告を受けることなくして、破門されることはあり得ない、と断言した。法王が築き、無数の人々の心と体とをとりこにしていたこの霊・俗両界にわたる巨大な組織の倒壊に、これ以上効果的な方法はなかつた。

法王教との戦い

再びウィクリフは、ローマの侵略に対して英国王の権利を擁護するために召された。彼は国王の大使に任命されてオランダに二年間滞在し、法王の使節たちと会談した。ここで彼は、フランス、イタリア、スペインの聖職者たちと交わり、事件の背後にあるものを見、英国では知ることができなかった多くのことに関する知識を得ることができた。彼は後年の働きに役立つことを多く学んだ。法王庁から遣わされた代表者たちを見て、彼は法王制の真の性格と目的とを見抜いた。彼は英国に帰り、以前からの主張をさらに公然と、そして熱心にくり返し、

貪欲と高慢と欺瞞とがローマの神であると宣言した。

彼は自分の書いたパンフレットの中で、法王とその集金人たちについて次のように言った。「彼らは、わが国の貧者の糧を奪い、秘蹟やその他の霊的事物のために、年々王から数千マルクを奪い取っている。これは聖職売買というのろべき異端である。しかも全キリスト教界をこの異端に同意させ支持させている。たしかに、わが国には山のように財宝があるが、この高慢な世俗的司祭である集金人のほかには、だれもそれを取ったものはないのだ。そして彼のためにやがて、山のような宝はなくなってしまうであろう。なぜなら彼はわが国から常に金を奪い去り、その代わりに与えるものといつては、聖職売買に対する神ののろいの他、何もないのだから。」^三

英国に帰ると間もなく、ウィクリフは王から、ラタフースの教区牧師に任じられた。このことは王が彼の率直な発言を、少なくとも不快に思っていなかった証拠であった。ウィクリフの感化は、国民の信仰を形成すると同時に、宮廷の活動の方向をも決定するものとなった。

法王の怒りはすぐに彼に向けられた。大学と王と高位聖職者たちとにあてられた三つの教書が英国に送られ、異端の教師を沈黙させるために迅速かつ断固たる処置を取るよう命じた。^四

しかし司教たちは熱心のあまり、教書の到着に先だって、審理のためにウィクリフを呼び出していた。けれども王国内で最も勢力のある二人の王子が、彼に同伴して法廷に行った。そして人々は、建物を取り巻いたり内部に乱入したりして裁判官たちを威嚇したので、裁判は一時中止され、彼は安全にそこを去ることをゆるされた。その後しばらくして、高位聖職者たちがウィクリフを退けるために動かそうとしていた老齢のエドワード三世が死去し、ウィクリフのかつての保護者が王国を統治することになった。

しかし教書の到着によって、異端者を捕えて投獄せよという厳命が全英国に出された。こうした処置は、直接処刑台につながっていた。ウィクリフがすぐにローマのふくしゅうの犠牲になることは確かだと思われた。しかし、昔の人に「恐れてはならない。わたしはあなたの盾である」（創世記一五ノ一）と言われた神は、ご自分のしもべを保護するために、もう一度手を伸べられた。改革者ではなくて、彼の死を命じた法王が死んだのである。グレゴリー十一世は死んだ。そしてウィクリフの裁判のために集まっていた聖職者たちは解散した。

神の摂理と改革事業の進展

神の摂理はさらに事件の動向を支配して、改革事業が進展するための機会を与えた。グレゴリーの死後、二人の対立する法王が同時に選ばれた。二つの対立勢力が、それぞれ絶対無謬を主張して、人々の服従を要求した（付録参照）。おのが忠実な者たちの援助を求めて相手に戦いをいどみ、敵対者には恐ろしい破門の宣告をもって、また支持者には天国の報賞を約束して、自分の要求を押しつけた。このような事態は、法王権を大いに弱めた。敵対する両派は互いに他の攻撃に全力をあげていたので、ウィクリフにはしばらくの休息が与えられた。両方の法王は、互いに破門と非難の応酬をし、各自の相反する主張を支持するために多くの血が流された。犯罪と醜聞が、教会内に氾濫した。その間に改革者ウィクリフは、彼の教区ラタワースの閑居で、人々の心を、相争う法王たちではなくて、平和の君イエスに向けるために、熱心に働いていた。

分裂とそれに伴うあらゆる闘争と腐敗とは、人々に法王制の真相を暴露して、宗教改革のために道を開いた。

ウィクリフは、彼が出版した『法王の分裂について』というパンフレットの中で、これら二人の聖職者たちが互いに他を反キリストと非難しているのは、真実を語っているのではないか考えるように、人々に訴えた。「神は、悪魔がこのような一人の聖職者によって統治することを許さず、…それを二つに分けて、人々がキリストの名によって、その両方にたやすく打ち勝てるようになさった」と彼は言った。^五

ウィクリフは主イエスのように、貧しい人々に福音を宣べ伝えた。彼は、自分のラタワース教区内の質素な家に光を伝えるだけでなく、英国全土に伝えようと決心した。このことを成し遂げるために彼は、単純で信心深く、真理を愛し、それを伝えるためには何も惜しまないという説教者の一団を組織した。彼らは至るところへ行き、市場で、大都会の街頭で、そして田舎の小道で説教した。彼らは、老人や病める者、貧しい人たちをたずね、彼らに神の恵みの福音を伝えた。

ウィクリフは、オクスフォードの神学教授として、大学の講堂で神のみ言葉を説いた。彼は彼のもとにある学生たちに真理を忠実に提示したので、「福音博士」と呼ばれた。しかし、彼の生涯の最大の事業は、聖書を英語に翻訳することであった。『聖書の真理と意味について』という著作のなかで、彼は、英国のすべての人が、神の驚くべき書を自国語で読むことができるようにするために、聖書の翻訳を意図していることを語っている。

英語訳聖書の完成

ところが突然、彼の活動は中断された。彼は、まだ六十才にもなっていないかったのに、絶え間ない苦勞と研究

と敵の攻撃が体にこたえて、早くもふけこんだ。彼は重病にかかった。この知らせは、修道士たちを大いに喜ばせた。彼らは、今こそ、彼が教会に対して行なった悪をいたく悔いるものと思って、彼の告白を聞くために彼の部屋へと急いだ。四つの修道会からの代表者たちが、四人の政府の役人たちとともに、今にも死にそうだと思われる者のまわりに集まった。「あなたは今、死にひんしている。自分の過ちを認め、われわれを非難して言っただけのことを、われわれの前で取り消せ」と彼らは言った。ウィクリフは黙って聞いていた。それから付き添いの者に、自分をベッドの上に起き上がらせるよう命じ、彼の取り消しの言葉を待って立っている彼らをじっと見つめて、これまで何度も彼らを戦慄させた強いしつかりした声で、「わたしは死なない。生きるのだ。そして、もう一度、修道士たちの悪行を糾弾する」と言った。^六修道士たちは驚き恥入り、急ぎ足で部屋を出ていった。

ウィクリフの言葉は成就した。彼は生きのびて、彼の同胞の手に、ローマに対するあらゆる武器のうちで最も強力なものを与えた。すなわち彼は、聖書を彼らに与えた。それは、人々を解放し啓発し教化するために、神がお与えになったものであった。この事業を完成するためには、多くの大きな障害を越えなければならなかった。ウィクリフは健康を害していた。彼は、自分があと数年しか働くことができないことを知っていた。反対に直面しなければならぬことも知っていた。しかし彼は、神のみ言葉の約束に励まされて、恐れることなく前進した。これまで彼は、旺盛な知力と豊かな経験のうちに、彼の仕事の中でも最大の事業のために、神の特別の摂理によって守られ準備させられてきた。キリスト教国全体が混乱に満ちている時に、改革者ウィクリフはラタフースの牧師館で、外部のすさまじいあらしをよそに、彼が選んだ仕事に没頭した。

ついに仕事は完成した。これは最初の英語訳の聖書であった。神の言葉が英国に開かれた。改革者は、もう牢

獄も死も恐れなかった。彼は英国民の手に、消すことができない光を渡したのである。同胞の手に聖書を与えることによって、彼は、無知と悪徳のかせを破壊して自国を解放し高めるうえで、戦場におけるどんな輝かしい勝利がもたらしたものよりも、さらに大いなることを成し遂げたのである。

まだ印刷術が知られていなかったので、聖書は、遅々としたうんざりするような労苦によって、増やすよりはなかった。聖書を手に入れたという希望は非常に強く、聖書を写す仕事に喜んで従事する者も多かったけれども、筆者たちは、なかなか要求を満たすことができなかった。金持ちのなかには、聖書全巻を希望するものもあった。他の人々は、一部分だけを買った。何家族かがいっしょになって一冊を買うという場合も多かった。こうして、ウィクリフの聖書は、間もなく人々の家庭へとはいっていった。

人間の理性に対するこうした訴えによって、人々は、法王の教義にただ黙従することからめざめた。ウィクリフは、ここにおいて、新教主義の独特の教理、すなわち、キリストを信じる信仰による救いと、聖書が唯一の無謬なものであることを教えた。また彼が派遣した説教者たちは、ウィクリフの文書とともに聖書を配布し、英国民の半数近くがこの新しい信仰を受け入れるという成功を収めた。

晩年の活躍

聖書の出現は、教会の権威者たちをうろたえさせた。今や彼らは、ウィクリフよりも強力な力、彼らの武器も歯が立たない力と対決しなければならなかった。当時、英国には、聖書を禁止する法律がなかった。まだ聖書が、

民衆の言語で出版されたことがなかったからである。後になってそうした法令が發布され、嚴重に実施された。その間、司祭たちの反対はあったが、しばし神のみ言葉を配布する機会があったのである。

法王教の指導者たちは、ふたたび、改革者の声を沈黙させようと謀った。彼は続けて三回法廷に呼ばれたが、事なきを得た。最初の時は、司教たちの宗教教議が、彼の著書を異端であると宣言した。彼らは、若い王リチャード二世を自分の側に引き入れ、禁じられた教義を信じる者はみな投獄するという勅令を得た。

そこでウィクリフは、宗教教議から議会上訴した。彼は、恐れることなく国会において教階制を非難し、教会が公認している数多くの悪習の改革を要求した。強い説得力をもって、彼は法王庁の侵害と腐敗とを描き出した。敵は混乱に陥った。ウィクリフの友人たちや支持者たちは、すでに屈服させられていた。そして、老齢のウィクリフ自身も、ただ一人で援助者もない以上、国王と法王の合同権力の前に屈するものと予期されていた。ところが、逆に法王の側が敗北してしまった。議会はウィクリフの力強い訴えを聞いてわき立ち、迫害の勅令を取り消し、改革者はふたたび自由にされた。

第三回目に、彼は、国家の最高宗教裁判所で裁判されることになった。ここは異端に対して何の好意も示されないところであった。ローマはついに、ここにおいて勝利し、改革者の活動は中断されるであろうと法王側は考えた。もし彼らが目的を達成しさえすれば、ウィクリフは、その教義を放棄するか、それとも火刑の宣告を受けて法廷を出るかのどちらかであった。

しかしウィクリフは、信仰を放棄せず、それを隠そうとしなかった。彼は、恐れることなく自分の教えを固守し、迫害者たちの攻撃を退けた。彼は、自分のことも、立場も、場所も忘れて、聴衆を天の法廷に集め、彼ら

の詭弁と欺瞞を永遠の真理というはかりで量った。聖霊の力が法廷内に感じられた。聴衆は神に魅せられた。彼らはその場を去る力さえ失ったように思われた。改革者の言葉は、主の矢筒からの矢のように、彼らの心を射た。ウィクリフは、彼らが彼に浴びせていた異端の告訴を、強い説得力をもって彼らに投げかえした。彼らはなにゆえに、あえて誤謬をひろめようとするのか、それは利益のためなのか、神の恵みを商品化するためなのか、と彼は問うた。

彼は最後にこう言った。「あなたがたは、だれと戦っているか。今にも死にそうな老人とか。否！真理と戦っているのだ。あなたがたより強く、あなたがたに打ち勝つ真理となのだ。」^七彼はこう言って法廷を出たが、敵はだれ一人としてそれを止めようとしなかった。

法王への最後の警告

ウィクリフの仕事は、ほとんど終了した。彼が長い間掲げてきた真理の旗は、まもなく彼の手から落ちようとしていた。しかももう一度、彼は福音のためにあかしを立てるのであった。真理は、誤謬の王国の、まさにその本拠において宣言されねばならなかった。ウィクリフは審理のために、ローマにある法王庁の法廷に召喚された。そこはこれまでにしばしば、聖徒たちの血を流したところであった。彼は身の危険を知らないわけではなかったが、その召喚に応じようとした。ところが中風になって、旅行することができなくなった。しかし、ローマにおいて自ら語ることはできなくても、手紙によって語ることはできた。彼はそうすることに決めた。改革者は自分

の牧師館から法王に手紙を書いた。それは、敬意に満ちた語調とキリスト教の精神にあふれていたが、同時に法王庁の豪奢と誇りとを鋭く責めたものであった。

彼は次のように言った。「わたしは自分の信じる信仰を、すべての人、特にローマの司教に申し上げることを真に喜びとするものである。わたしはこの信仰を、健全で真実であると思っているが、彼は、快くわたしのこの信仰を確認するか、あるいは、まちがっているならばそれを正して下さるであらう。

まず第一に、わたしは、キリストの福音は神の律法の全体であると考える。…ローマの司教は、この地上におけるキリストの代理者であるといっているのであるから、だれにも勝ってこの福音の律法に従わなければならぬとわたしは確信する。なぜならば、キリストの弟子たちの偉大さは、世俗的威厳や栄誉ではなくて、キリストの生涯と態度に、できるだけそのまま従うことにあるからである。…キリストはこの世にあられたとき、きわめて貧しい生活を送り、すべての世俗的支配や栄誉を退けられた。…

忠実な信徒たるものは、法王自身であろうが、あるいはどんな聖人であろうが、彼が主イエス・キリストに従っているという点のほかは、従うべきでない。というのは、ペテロもゼバダイの子らも、キリストの足跡に従わないで世俗的栄誉を望んだため、罪を犯した。それゆえに、そのような過ちには、われわれは従わなくてもよいのである。…

法王は、すべての領土と支配権を世俗の権力に一任し、そのすべての聖職者たちに対して、そのように勧め実行させるべきである。なぜなら、キリストはそうになさったのであり、使徒たちも特にそうにしたからである。そこで、これらの点のいずれかにまちがいがあるなら、わたしは謙虚にそれを正したいと思う。もし必

要とあれば、死をもちとわない。わたしが、自分の意志と希望によって行動することが許されるならば、わたしはぜひともローマの司教の前に伺候することであろう。しかし主は、わたしに病をお与えになり、人よりは神に従うべきことをお教えになった。」

最後に彼は言った。「われわれは、神が法王ウルバン六世の心を動かし、彼とその聖職者たちが、生活と態度において主イエス・キリストに従い、また人々にもよくこれを教えて、彼らも忠実に主に従うようになることを、祈ってやまない。」^ハ

こうしてウィクリフは、法王と枢機卿たちに、キリストの柔和と謙そんを示し、ただ彼らにだけでなく全キリスト教国に、彼らと、彼らが代表していると主張する主との、著しい相違をあらわした。

ウィクリフの信仰と聖書

ウィクリフは、神に忠誠を尽くすなら自分の生命は危険になることを覚悟していた。国王も法王も司教たちも、力を合わせて、彼をなきものにしようとしていた。そして、遅くとも数か月後には、火刑になるに違いないと思われた。しかし彼の勇氣はくじけなかった。「あなたがたは、なぜ、殉教の冠を遠くに求めることを語るのか。キリストの福音を高慢な司教たちに伝えるがよい。そうすればあなたがたは必ず殉教することとなる。なに？生きて黙っていよというのか？……断じて否！弾圧が来るならば来るがよい。わたしはそれが来るのを待っている」と彼は言った。^九

しかし神の摂理は、なお神のしもべを守っていた。日々危険に身をさらして、一生の間勇敢に真理を擁護した者が、敵の憎しみの犠牲になってはならなかった。ウィクリフは、自分で身を守ろうとしてきたのではなかったが、神が彼を保護してこられたのであった。そして今、敵がその餌食を手中にしたと思ったときに、神のみ手が彼を、彼らの手のとどかないところに移された。彼がラタフースの教会において、聖餐式を執り行なおうとしていたとき、突然中風の発作が起きて倒れ、まもなく息が絶えたのである。

神はウィクリフに、彼の仕事を与えておられた。神は彼の口に真理のみ言葉を授け、このみ言葉が人々に伝えられるようにと彼を守られたのである。こうして、彼の生命は保護され、宗教改革の大事業の基礎がすえられるまで、彼の働きは延ばされたのであった。

ウィクリフは、暗黒時代の薄暗さのなかから現われた。彼の改革事業の基礎になるような仕事をしたものは、彼の前にはだれもいなかった。彼はバプテスマのヨハネのように、特別の使命を果たすために立てられた、新時代の先駆者であった。しかも、彼が示した真理の体系には、彼に続いて起こった改革者たちも及ばない統一と完全とがあり、百年後の人でも到達し得ないものもあった。その基礎は広く深くすえられ、その骨組みも正確堅固にできていたから、彼の後にきた人々は、それを建てなおす必要がなかった。

ウィクリフが創始した一大運動——良心と知性を解放し、長くローマの凱旋車につながれていた諸国民を自由にした運動——の源泉は、聖書であった。十四世紀以来、生命の水のように各時代を流れてきた祝福の流れは、その源をここに発していた。ウィクリフは、聖書が靈感による神のみこころの啓示であって、信仰と行為の十分な規準であることを絶対的に信じた。彼は、ローマの教会を神の絶対無謬の権威として認めるように、そして一

千年間にわたる確立された教義と慣習を尊敬するように教育されてきた。しかし彼は、こうしたいっさいのものを捨てて、神のみ言葉に従った。彼が人々に認めるよう促したものは、この権威であった。法王によって語る教会ではなくて、み言葉によって語られる神のみ声が、唯一の真の権威であると彼は宣言した。彼は、聖書が神のみこころの完全な啓示であることだけでなく、聖霊がその唯一の解釈者であること、そして各自は、その教えを研究して、自分でその義務を学ぶべきであることを教えた。こうして彼は人々の心を、法王やローマの教会から神の言葉へと向けたのである。

ウィクリフの人格

ウィクリフは、宗教改革者の中でも最も偉大な人物の一人であった。その該博な知識、明晰な思考、そして真理を堅く保持し、大胆に擁護した点において、彼の後に現われたもので彼に匹敵するものは、極めてまれであった。彼の純潔な生涯、研究と活動における刻苦勉励、清廉潔白、そして奉仕におけるキリストのような愛と忠実さが、この最初の宗教改革者の特徴であった。しかも彼は、彼が現われた当時の、知的暗黒と道徳的腐敗の時代において、そのように生きたのであった。

ウィクリフの品性は、聖書が人を教え改変する力を持っている証拠である。聖書が、彼をこのような人物にしたのである。啓示された偉大な真理を把握しようとする努力は、すべての機能をはたつとさせ活気づける。それは知性を広げ、知覚を鋭くし、判断力を円熟させる。聖書の研究は、他のどんな研究よりも、あらゆる思想と

感情と抱負とを高尚にする。また、確固とした目的と忍耐、勇気を与えるとともに、品性を洗練し、魂を清める。畏敬の念をもって聖書を熱心に研究するとき、学ぶ者の心は直接神の無限の心と接触することができ、どんな人間の哲学を修めても達することができないような高潔な原則を持つとともに、強く活発な知性を持った人々を世に提供することができる。「み言葉が開けると光を放って……知恵を与えます」と詩篇記者は言っている（詩篇一一九ノ一二〇）。

福音の伝播

ウィクリフが教えた教義は、その後もしばらくの間人々の間に広まっていった。ウィクリフ派、ローラド派として知られた彼の信奉者たちは、英国をめぐっただけでなく、他の国々にも散って行って、福音の知識を人々に伝えた。今や指導者を取り去られたからには、説教者たちはこれまで以上の熱心さで活動した。そして群衆は、彼らの教えを聞くために集まってきた。改心者のなかには、貴族もあれば、王妃さえ混じっていた。多くの場所で、人々の生活態度に著しい改革が行なわれ、ローマ教の偶像的な象徴が教会から取り除かれた。しかし、聖書を自分たちの指導書として信じる人々の上に、間もなく、残酷な迫害のあらしが吹き荒れた。ローマの支援を受けて権力を強化しようとする英国の君主たちは、改革者たちを犠牲にすることをためらわなかった。英国の歴史上初めて、福音の弟子たちに対して火刑の布告が出された。殉教者があいついだ。真理の擁護者たちは、追放され、拷問にかけられて、その叫びを万軍の主にあげることしかできなかった。彼らは、教会の敵、国家の裏切者

として狩り立てられながらも、ひそかに説教をつづけ、貧しい人々のあばらやでもどこにでも隠れ家を見つけ、しばしば洞穴にさえ隠れたりした。

激しい迫害にもかかわらず、広く見られた信仰の腐敗に対するところの、冷静で敬虔、熱心で忍耐強い抗議が、幾世紀にもわたって叫ばれ続けた。当時のキリスト者たちは、真理の知識を部分的にしか持っていなかったが、神のみ言葉を愛し服従していたので、そのための苦しみに耐えたのであった。多くの者は、使徒時代の弟子たちのように、キリストのためにこの世の財産を犠牲にした。家に住むことを許された者たちは、追放された兄弟たちを喜んでかくまい、そして、自分たちも追放されたならば、喜んでその運命に甘んじた。たしかに、おびただしい数の者が、迫害者の激しい怒りを恐れて、信仰を犠牲にして自由を得た。そして、自説撤回を公表するために悔悟者の衣を着て、牢獄から出たのであった。しかし、牢獄の独房や「ロラード塔」、そして拷問と炎のなかにあっても、「その苦難にあずかる」に足るものとされたことを喜び、真理のために恐れずあかしを立てたものが少なからずあった。そしてその中には身分の卑しい者もいたが、同時に高貴な生まれの人々もあったのである。

改革への道

法王教の人々は、ウィクリフの生存中には自分たちの目的を果たすことができなかった。そして彼らの憎しみは、彼の遺体が墓に静かに横たわっていることを許さなかった。彼の死後四十年以上も経過したとき、コンスタンツ宗教会議の布告によって、彼の遺体は掘り出され、公衆の前で燃やされた。そしてその灰は、近くの小川に

投げ込まれた。昔のある筆者は、次のように言っている。「この小川は、彼の灰をアボン川に運び、アボン川はセバーン川に、セバーン川は近くの海に、そして、近くの海は大海へと運んでいった。このようにウィクリフの灰は、彼の教義の象徴である。それは今や、全世界にまき散らされたのだ。」^一彼の敵たちは、その悪意から出た行為がどんな意味を持っていたか、夢想だにしなかった。

ボヘミアのヨハン・フス^二が、ローマ教の多くの誤りを放棄して、改革に着手するようになったのは、ウィクリフの著書を通してであった。こうして、遠く離れた二か国において、真理の種がまかれた。働きはボヘミアから他の国々に波及していった。人々の心は、長く忘れられていた神のみ言葉に向けられた。神のみ手が、大宗教改革への道を備えていたのである。

注

- 一 Barnas Sears, "The Life of Luther," pp.69, 70.
- 二 D'Aubigné, b. 17, ch. 7.
- 三 John Lewis, "History of the Life Suffering of J. Wiclif," pp.37.
- 四 Augustus Neander, "General History of the Christian Religion and Church," period 6, sec.2, part 1, par. 8.
付録参照。
- 五 R. Vaughan, "Life and Opinions of John de Wycliffe," vol.2, p.6.
- 六 D'Aubigné, b. 17, ch. 7.
- 七 Wylie, b.2, ch. 13.

- ハ John Foxe, “Acts and Monuments,” vol.3, pp.49, 50.
九 D’Aubigné, b.17, ch.8.
一〇 Fuller, T., “Church History of Britain,” b.4, sec.2, par.54.

第六章

殉教者フスとヒエロニムス

ボヘミアにおける光

福音は、すでに九世紀にボヘミアに伝えられていた。聖書は一般の人々の言語に翻訳され、礼拝も人々の言葉で行なわれていた。しかし、法王の権力が増大するにつれて、神のみ言葉はおおいかくされた。王たちの誇りを砕くことを自分の任務と考えたグレゴリー七世は、同様に、人々を奴隷にすることに意を注いだ。そこで、ボヘミア語で礼拝を行なうことを禁じる教書が発布された。「全能の神は、人々が知らない言葉で神を礼拝することを喜ばれる。そして多くの悪と異端とは、この規則に従わなかったために起こった」と法王は宣言した。こうしてローマは、神のみ言葉の光を消して人々を暗黒に閉じ込める布告を出した。しかし神は、教会の維持のために他の方法を設けてあられた。迫害によってフランスやイタリアの故郷を追われたフルド派やアルビジョア派の人

人の多くが、ボヘミアにやって来た。彼らは、公然と教えはしなかったが、隠れて熱心に働いた。こうして、真の信仰が世紀から世紀へと保持されたのである。

ボヘミアでは、フスの時代以前に、立ち上がって公然と教会の腐敗と、民衆の不品行を非難した人々がいた。彼らの活動は、広く一般の関心を呼んだ。聖職者たちは恐怖を感じ、福音を信じるものたちに対する迫害が始まった。彼らは、森や山で礼拝しなければなくなり、兵隊たちにかり立てられ、殺されたものも多かった。その後しばらくして、ローマ教の礼拝を離れたものは、みな火刑にするという布告が出された。しかしキリスト者たちは、その生命をささげながら、彼らの運動の勝利を待望したのであった。「救いは十字架にかけられた救い主を信じることによってのみ与えられる、と教えた」ものの一人は、その死ぬときに次のように言った。「真理の敵たちの怒りは、今われわれに勝っている。しかし、永久にそうなのではない。剣や権威によらないで、一般の民衆の中から一人の人が立ち上がる。そして彼に対して、真理の敵たちは勝つことができない。」^二ルターの時代は、まだずっと先のことであった。しかし、すでに、ローマに抗議して諸国民を揺り動かす者が起こりつつあった。

フスの生い立ち

ヨハン・フスは、卑しい身分の家に生まれ、幼少のときに父親を失った。しかし、彼の信心深い母親は、教育と神を恐れることを最も価値ある財産とみなして、こうした遺産を息子のために確保しようとした。フスは、

地方の学校で学んでから、慈善学生としてプラハの大学に入学を許された。彼は母に付き添われて、プラハへと旅立った。彼女は貧しい未亡人であって、息子に与えるようなこの世の富は何も持っていないかった。しかし彼らが大都会に近づくと、彼女は、父親のいない息子のそばにひざまずいて、彼の上に天の父の祝福を祈り求めた。自分の祈りがどのように答えられるか、この母親は知るよしもなかった。

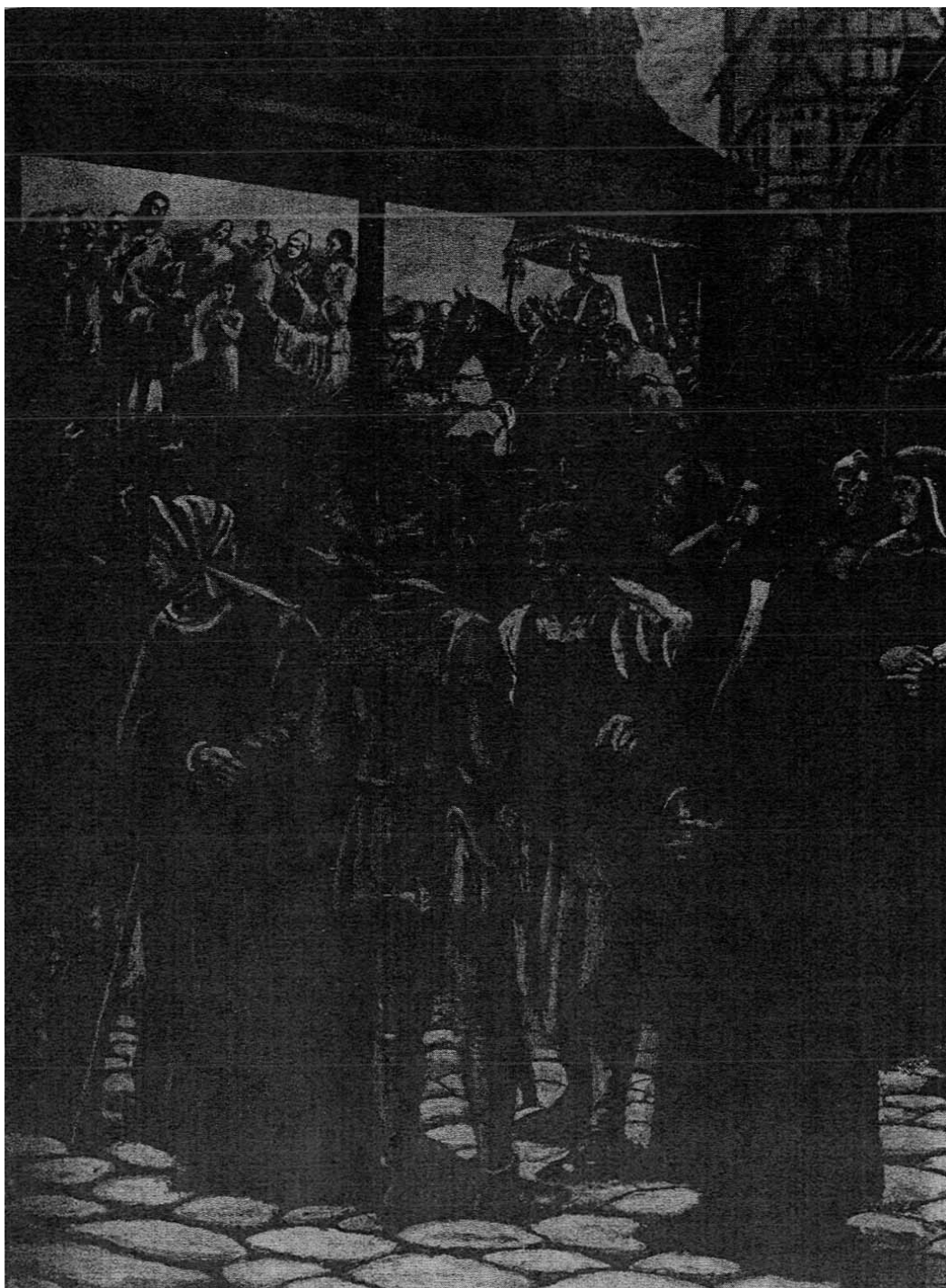
大学においてフスは、たゆまぬ熱心と急速な進歩によって、すぐに頭角をあらわした。また、彼の非難されるところのない生活、穏やかで好感のもてる態度は、だれからも尊敬された。彼は、ローマ教会の誠実な信者で、教会が与えると主張している霊的祝福を熱心に求めていた。大赦のおりには告白に行き、乏しいさいふをはいてささげ、罪のゆるしを受けるために行列に加わった。彼は、大学を終えてから聖職者の道に進み、どんどん昇進して、間もなく王室づきになった。彼はまた、母校の教授となり、後には総長になった。わずか数年のうちに一人の卑しい慈善学生がボヘミアの誇りとなり、彼の名はヨーロッパ全体に知れわたった。

しかし、フスが改革の事業を始めたのは、別の分野においてであつた。彼は司祭に任じられてから数年後に、ベツレヘム礼拝堂の説教者として指名された。この礼拝堂の創設者は、聖書を自国語で説くことが非常に重要であると主張したのであつた。このことに対するローマの反対にもかかわらず、ボヘミアでは、それが完全に中止されてはいなかった。しかし聖書に関する無知ははなはだしく、あらゆる階級の人々の間で、最もひどい不道徳が行なわれていた。フスは、こうした悪習を容赦なく責め、神のみ言葉を引用することによって、彼の説く真理と純潔の原則を強調した。

ウィクリフの影響

プラハの一市民、ヒエロニムス(ジェローム)——後にフスの親友になった人物——は、英国からの帰国に際して、ウィクリフの著書を持ち帰っていた。ウィクリフの教えに改宗した英国の女王は、ボヘミアの王女であったから、彼女の影響によって、改革者の著書が広くボヘミアに配布された。フスは、これらの著書を興味深く読んだ。彼は、著者がまじめなキリスト者であることを信じ、彼の主張する改革運動に賛成するようになった。フスは、自分では自覚していなかったが、もうすでに、ローマから遠く離れることになる道を歩きはじめたのであった。

ちょうどこのころ、プラハに、学識のある二人の旅人が英国から到着した。彼らは光を受け入れており、それを伝えるために遠くの地までやってきたのであった。彼らは初めから法王の至上権を公然と攻撃したので、すぐにその筋から発言をとめられてしまった。しかし彼らは、そのまま引き下がることを好まず、他の方法を用いることにした。彼らは、説教者であると同時に画家でもあったので、自分たちの技術を活用することにした。人々の目につくところに、彼らは二枚の絵を描いた。一枚はキリストのエルサレム入城をあしらっていた。キリストは「柔和なおかたで、ろばに乗って」おられ、その後、旅ですり切れた衣をまとった弟子たちがはだしで従っていた(マタイ二ノ五)。もう一枚の絵は、法王の行列を描いていた。法王ははなやかな衣を身につけ、三重の冠をかぶって、りっぱに飾った馬に乗り、その前にはラッパを吹く者たちが行き、後からは枢機卿や高位聖職者たちが豪華に着飾って従っていた。



二つの絵は、フスに強い印象を与えた。エルサレム入城の時の謙そんなキリストの絵は、行列の中の着飾った法王の絵と、著しい対照をなしていた。

これは、あらゆる階級の人々の注目をひいた説教であった。群衆が集まって、絵を見つめた。その教訓がわからない人はいなかった。そして多くの人々は、主イエス・キリストの柔和と謙そんと、そのしもべであると称する法王の高慢で尊大な態度との対照に、深い印象を受けた。プラハでは大きな騒ぎが起き、しばらく後に旅人たちは、身の安全のために立ち去らねばならなかった。しかし、彼らが教えた教訓は忘れられなかった。この絵はフスの心に強い印象を与え、聖書とウィクリフの著書をもっと詳しく研究するようにしおけた。彼はまだ、ウィクリフが主張する改革のすべてを受け入れる準備はなかったが、法王権の真相が彼にはいよいよ明らかとなって、彼はますます熱心に教権制度の高慢と野心と腐敗とを非難した。

プラハ市の騒動

光はボヘミアからドイツへと広がった。プラハ大学での騒動のために、何百人というドイツの学生たちが退学したからである。彼らの多くは、フスから初めて聖書の知識を学んだ者たちであって、帰国してから福音を祖国に広めたのである。

プラハにおける働きの知らせがローマに伝えられ、フスはすぐに法王からの呼び出し命令を受けた。これに応じることは、自ら死を招くことであつた。そこで、ボヘミヤの王と王妃、大学、貴族たち、政府の役人たちは団結して、フスがプラハに留まりローマでは代理者によって答えることを許されるように、法王に訴えた。ところが法王は、この願いを許すどころか、裁判を行なってフスを罪に定め、プラハ市の破門を宣言した。

その時代において、この宣告が発せられることは、一大恐慌をひきおこした。それに伴う諸儀式は、法王を神ご自身の代表者とみなし、彼が天国と地獄の力ギを持ち、霊的罰と同様に世俗の罰も与える力があると考えていた人々にとって、恐怖を抱かせずにはおかぬものであった。破門を受けた地方には天の門が閉ざされ、法王が破門を解くまでは死者は天国から閉め出されている、と信じられていた。この恐ろしい災いの証拠として、すべての宗教的儀式は停止された。教会は閉鎖された。結婚式は、教会の庭で行なわれた。死者は、聖地に埋葬することが許されないので、埋葬式もせずに、みぞとか野原に埋められた。こうして、想像力に訴えるような方法で、ローマは人々の良心を支配しようとした。

プラハ市は、大さわぎになった。多くの者は、こうした災いはみなフスによるものであるとして彼を非難し、彼をローマの懲罰に服させるべきであると主張した。さわぎを静めるために、フスはしばらくの間故郷の村に退いた。彼は、プラハに残した友人に次のように書いた。「わたしは、こうして、あなたがたの間から退いたのは、イエス・キリストの教えと模範に従うためである。そしてそれは、悪意を抱いている人々が、自分たちの上に永遠の断罪を招かないようにするとともに、信心深い者たちに苦難と迫害を引き起こすことがないようにするためである。また、不敬虔な司祭たちが、あなたがたの間で神のみ言葉が説教されることを長期にわたって禁じ続けることを恐れたからである。わたしは神の真理を拒んで、あなたがたを去ったのではない。神の真理のためには、わたしは神の助けによって、喜んで命をささげる。」^三フスは、彼の活動をやめず、周囲の地方を旅行して熱心な群衆に説教した。こうして、法王が福音を抑圧しようとしてとった手段が、かえってそれを広く伝える結果となった。「わたしたちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある」(コリント第二・一三

ノ八)。

「フスの生涯のこの時期において、彼の心中では苦しい争闘が演じられていたようである。教会は、その威嚇によつて彼を圧倒しようとしたけれども、彼は、教会の権威を否認してはいなかった。彼にとつて、ローマの教会は、なおキリストの花嫁であり、法王は神の代表者、代理者であつた。フスが争つていたのは権威の乱用に対してであつて、原則そのものに対してではなかつた。これは、彼の理解に基づく確信と良心の要求との間に、恐ろしい矛盾を引き起こした。もし彼が信じたように、その権威が正当で無謬であるならば、なぜ、それに従い得ないと感じるのであるうか。これに従ふことは罪を犯すことであるのが彼にはわかつた。しかし、無謬教会に従ふことが、なぜこうした問題に至らせるのであるうか。これは彼には解決できない問題であつた。これは彼を常に苦しめた疑惑であつた。彼が見いだした最も解決に近い答えは、かつて救い主の時代に、教会の祭司たちがよこしまになり、彼らの正当な権威を不正な目的のために用いていたが、それと同じことがまた起こつたといふことであつた。こうして彼は、よく理解された聖書の教えを良心の導きとすべきであるといふ金言を、自分自身のために採用し、また他の人々にも説き勧めるに至つた。つまり、神は聖書によつて語られるのであつて、教会が司祭によつて語るのではないことが、誤ることのない手引きなのである。」^四

ヒエロニムスの協力

しばらくして、プラハの騒動がおさまつたので、フスはベツレヘム礼拝堂に帰り、これまで以上の熱心と勇氣

をもって神のみ言葉を説きつづけた。彼の敵たちは活動的で強力であつたが、王妃や多くの貴族たちは彼の味方であつた。そして、多くの人々が彼の側についた。彼の純粹で高尚な教えや清い生活を、ローマ教会司祭の説く腐敗した教義や、彼らが行なっている貪欲や放蕩と比較して、多くの者はフスの側につくことを名誉とした。

この時まで、フスは単独で働いて来た。しかし今、英国にいたときウィクリフの教えを受け入れていたヒエロニムス、改革事業に加わつた。それから後、二人はひとつとなつて働き、死ぬときも別々でなかつた。輝かしい天才、雄弁、学識など、人々の人気を呼ぶ賜物は、ヒエロニムスが著しく所有していた。しかし、品性の眞の力を構成する特質においては、フスのほうがさらに偉大であつた。彼の冷静な判断は、ヒエロニムスの衝動的精神を抑える役を果たした。ヒエロニムスは、謙そんに、彼の眞価を認めて、その勧告に従つた。彼らの一致した働きによつて、改革事業は一段と急速に発展した。

神は、これら選ばれた人々の心に大きな光を与え、ローマの誤りの多くをお示しになつた。しかし彼らは、世に示すべき光を全部受けたのではなかつた。これらご自分のしもべたちによつて、神は人々をローマ教の暗黒から導き出しておられたのである。しかし、彼らは、さまざまの大きな障害に直面しなければならなかつた。神は、彼らが耐えられるだけ、一歩ずつ、お導きになつた。彼らはすべての光を一時に受ける用意がなかつた。長い間暗黒の中にいたものが、眞昼の太陽の輝きを受けると同じように、もしすべての光が一度に示されたならば彼らは目をそおけたに違いない。それゆえに神は、人々に受け入れられるだけの程度に従つて、少しずつ光を指導者たちに示されたのである。世紀を追つて、他の忠実な働き人たちが現われ、人々をなおいっそう、改革の道に導いた。

コンスタンツ公会議

教会内の分裂は、なお続いた。三人の法王が至上権を競い、彼らの闘争はキリスト教界を犯罪と暴動で満たした。彼らは互いに破門しあうだけで満足せず、武力に訴えた。各自は、武器の購入と軍隊の確保に苦心した。もちろん、金もなければならなかった。こうしたものを手に入れるために、教会の賜物、地位、祝福などが金銭で売られた（付録参照）。司祭たちも高位の者たちにならって、聖職売買を行ない、競争者を倒して自分の勢力を強化するために戦った。フスは、ますます大胆に、宗教の名のもとに行なわれている憎むべきことを非難した。そして人々は、キリスト教界をこのような悲惨な状態に陥れたのはローマ教の指導者たちであると、公然と非難した。

ふたたびプラハ市は、流血の惨事が起きそうに見えた。おかしと同様に、神のしもべは、「イスラエルを悩ます者」と非難された（列王紀上二八ノ一七）。プラハ市は、ふたたび破門され、フスは故郷の村に退いた。彼が愛したベツレヘム礼拝堂からの忠実な証言は、ここに終わった。彼は、真理の証人として生命をささげるに先だつて、もっと広い舞台から、全キリスト教界に語ることになったのである。

ヨーロッパを混乱に陥れていた害悪を正すために、コンスタンツにおいて公会議が召集された。この会議は、ジギスムント皇帝の希望によって、対立している三人の法王の一人、ヨハネス二三世が召集したものであった。ヨハネス二三世の人格と政策は、当時の一般聖職者と同様に道徳的に腐敗していた高位聖職者たちの調査にさえ

耐え得ないものであったので、彼は、会議を歓迎するどころではなかった。しかし彼は、ジギスムントの意志にさからいかねたのである（付録参照）。

会議の主要目的は、教会内の分裂を和解させ、異端を根絶することであつた。そこで、二人の対立法王たちも、新説の主唱者であるヨハン・フスとともに、会議に召集された。前者はそれぞれ、自分たちの身の安全を期して、自分は出て来ず、代表を送つた。法王ヨハネスは、表向きは会議の召集者ではあつたが、種々の不安を抱いて臨んだ。皇帝がひそかに彼を退位させようとしていないかと疑い、また、三重の冠を手に入れるために犯した罪とともに、それを辱しめた罪悪が問いただされるのではないかと恐れていた。それでも彼は、最高位の聖職者たちと廷臣の長い列を従えて、威風堂々とコンスタンツ市にはいつた。市のすべての聖職者や高官たちは、数多くの市民たちとともに、彼を出迎えた。彼の頭上には金色の天蓋がかかり、それを四人の長官たちが支えていた。彼の前には祭餅が運ばれ、枢機卿や貴族たちのきらびやかな服装は、実に印象的であつた。

フスの決意

この時、もう一人の旅人がコンスタンツ市に近づいていた。フスは、自分の身に迫る危険に気づいていた。彼は、もう二度と会えないかのように、友人たちに別れを告げた。そして火刑への道であることを感じつつ旅をつづけた。彼は、ボヘミアの王から安全通行券を得、またジギスムント皇帝からも同様のものを得てはいたが、死ぬこともあり得ると考えて、万事その用意をしていた。

プラハの友人あての手紙のなかで、彼は次のように言っている。「わたしの兄弟たちよ、…わたしは王からの通行券を持って、多くの恐ろしい敵に立ち向かうために出かけようとしている。…わたしは、全能の神、わたしの救い主に全く信頼している。わたしは、神があなたがたの熱心な祈りに答えて、わたしの口に神の慎しみと神の知恵を賜わり、彼らに抵抗することができるようになってくださると信じる。そして、神はわたしに聖霊を与えて堅く真理に立たせ、勇敢に、試練と牢獄、そしてもし必要なら残酷な死にすら立ち向かえるようにしてくださると信じる。イエス・キリストは、彼の愛する者のために苦しみに会われた。それゆえにわれわれは、われわれが自分自身の救いのためにすべてのことを根気よく耐え忍ぶよう、彼がわれわれのために模範を残されたことに対して驚いてよいであろうか。彼は、神である。そして、われわれは、彼に造られたものである。彼は主であって、われわれは、彼のしもべたちである。彼は世界の主であられ、われわれは、卑しい人間である。それにもかかわらず、彼は苦しみました。とすれば、われわれもまた苦しむべきではなからうか。特にそれがわれわれのきよめのためであるとすれば。それゆえに、愛する人々よ、もしわたしの死が彼の栄光となるものならば、それが早く来るように、そして、わたしにふりかかるすべての災いをわたしが忠実に耐える力を主がお与えになるように祈ってほしい。しかし、もしわたしがあなたがたのところに帰るほうが良いのであれば、何の汚点も残さずに帰れるように神に祈ろう。すなわち、わたしが、福音真理のどんな点でも隠すことなく、わたしの兄弟たちがふみ従うりっぱな模範を残すことができるように祈ろう。おそらく、プラハであなたがたと会うことはもはやないであろう。しかし、全能の神のみこころによって、あなたがたのところに帰ることができれば、その時には、いよいよ確固とした信念をもって、神の律法の知識と愛のうちに進んでいきたい。」^五

フスは、福音の使徒となったある司祭に送ったもう一つの手紙のなかで、きわめて謙虚に自分自身の誤りについて語り、自分は「美服をまとうことに喜びを感じ、軽薄なことに時を浪費していた」と自分を責めている。そして、次のような感動的な勧告をつけ加えた。「あなたは、聖職禄や財産の所有ではなくて、神の栄光と魂の救いを考えるようにせよ。自分の魂以上にあなたの家を飾らぬように注意せよ。何よりも徳を高めることに留意せよ。貧者には、敬虔と謙そんをもって接し、あなたの持ち物を饗応のために消費してはならない。もしもあなたが生活を改めず、ぜいたくをやめないならば、わたしが今懲らしめられているように、きびしく懲らしめられることであろう。…あなたは、幼い時から、わたしの教えを受けたから、わたしの教義を知っている。それだから、これ以上書く必要はない。しかし、わたしは、主のあわれみによって、あなたに願う。どうか、あなたは、わたしが陥ったのを見たどんな種類の虚栄をもまねてはならない。」手紙の封筒には、「わが友よ、わたしが死んだことを確かめるまでは、この封を開かないこと」と書きそえてあった。

フスは、旅行中、至るところで、彼の教義が広まり、彼の運動が歓迎されているのを見た。群衆が彼を出迎え、いくつかの町では長官が町じゅう彼に随行した。

信仰の放棄か、死か

コンスタンツに到着したフスは、完全な自由が与えられた。皇帝の通行券には、法王の個人的な保護の保証もつけ加えられた。しかし、これら厳粛な、またくり返し保証された言明が無視されて、フスは間もなく、法王と

枢機卿たちの命令によって逮捕され、いまわしい牢獄に入れられた。後に彼は、ライン川の向こうの堅固な城に移され、囚人として監禁された。法王は、その背信によって益するところなく、間もなく同じ牢獄にいれられた。^七彼は、会議において、殺人、聖職売買、姦淫のほか、「言うことさえ恥じるべき罪、」最も下劣な罪を犯したことが証明された。こうして、会議そのものの宣言によって、彼はついに三重冠を取り上げられ、投獄された。彼と対立していた法王たちも廃されて、新しい法王が選ばれた。

コンスタンツ会議は、フスが常に非難し改革を要求していた司祭たちよりも大きな罪を犯していた法王自身を退位させたにもかかわらず、改革者フスをも粉砕しようとした。フスの投獄は、ボヘミアの人々を大いに怒らせた。有力な貴族たちは、この暴挙に対して激しい抗議を会議に申し入れた。通行券の侵害を許すことを好まなかった皇帝は、彼に対する処置に反対であった。しかし改革者の敵たちは、激しい憎しみと堅い決意を抱いていた。彼らは皇帝の、偏見と恐怖と教会に対する熱意とに訴えた。「たとえ皇帝や王たちから通行券を交付されていたとしても、異端および異端の嫌疑を受けたものには、約束を守るべきではない」ということを証明するために、彼らは長い議論を展開した。^八こうして彼らは、その主張を通した。

牢獄内の湿気と悪い空気のために、フスは死ぬほどの熱病にかかった。病気と獄中生活のために衰弱したフスは、ついに会議に呼び出された。彼は鎖につながれて、彼を保護することを名誉と誠実にかけて誓った皇帝の前に立った。長期にわたる取調べのあいだ、彼は堅く真理を主張した。そして、教会と国家の高位高官たちのいならぶ前で、彼は、教権制度の腐敗を、ありのままに厳かに抗議した。彼の教義を取り消すか、それとも死を選ぶか求められたとき、彼は、殉教者の運命を受け入れた。



フスは、教会と国家の指導者たちの会議の前に、これを最後として立った。全キリスト教世界から集まった人々が、良心の自由のための長い戦いの中の、この最初の偉大な犠牲の目撃者となった。

神の恵みが彼を支えた。最後の宣告が下される前の苦難の数週間にわたって、天からの平安が彼の心を満たした。彼は友人にこう書いている。「わたしはこの手紙を牢獄の中で、そしてつなぐれた手で書いている。明日死の宣告を受けることを予期しつつ。…イエス・キリストの助けによって、われわれが、ふたたび、来世の快い平和のうちに再会するときに、神がどんなに恵み深く、ご自身をわたしにあらわされたか、また、誘惑と試練のただなかであって、どんなに力強くわたしを支えてくださったかを、あなたは知ることであろう。」^九

彼は、陰気な牢獄のなかで、真の信仰の勝利を予見した。彼は夢のなかで、自分が福音を説いていたブラハの礼拝堂に帰り、そこで、自分が壁に描いたキリストの絵を、法王や司教たちが消しているのを見た。「この幻は彼を悩ました。しかし次の日に、彼はたくさんの画家たちが、これらの絵をさらに多く、さらに鮮やかな色彩でもって、回復しているのを見た。その仕事が終わるや否や、画家たちは集まったあびただしい群衆に叫んだ。『さあ、法王でも司教でもくるがよい！彼らには、もう決して消し去ることはできない』。フスは夢の話をして、次のように言った。「わたしは、キリストのみ姿は消し去ることができないことを堅く信じる。彼らはそれを破壊しようとしたが、それは、わたしよりもっと力ある説教者たちによってすべての人の心に鮮かに描かれることである。」^{一〇}

フスの殉教

さて、いよいよ最後に、フスは会議に呼び出された。それは、皇帝、諸侯、使臣、枢機卿、司教、司祭たちが

列席しているはなやかな大会議であつた。また、その成り行きを見ようとする大群衆が集まっていた。良心の自由を確保するための長い闘争における、この最初の偉大な犠牲の目撃者たちが、キリスト教国全土から集められていたのである。

フスは最後の決断を促されたが、取り消すことを拒否した。彼は、恥知らずにも約束を破棄した王を、するどい目でみつめて言った。「わたしは、ここにご臨席の皇帝の公の保護と信義のもとに、自分の自由意志で、この会議に出席することを決心したものである。」^一ジギスムントは、会衆全員の視線を浴びて、顔を赤くした。

宣告は下され、聖職剥奪の儀式が開始された。司教たちはフスに僧服を着せた。フスは司祭の服を着たとき、「われわれの主、イエス・キリストは、ヘロデからピラトのところへ送られるとき、辱しめのために白い衣を着せられた」と言った。^二彼はふたたび取り消すことを勧められたが、人々の方を向いて、こう答えた。「そういうことをすれば、わたしはどんな顔をして、天を仰ぐことができようか。わたしが純粋な福音を宣べ伝えたたくさんの人々に、どのようにして顔をあわせることができようか。わたしは死に定められたこの哀れな体よりも、彼らの救いをはるかに重大視する。」彼の祭服は一枚ずつはずされていった。そして司教たちは、儀式におけるそれぞれの役を果たしながら、彼をのろつた。ついに、「彼らは、恐ろしい悪鬼の絵が描かれ、前方によく目立つように『大異端者』という字が書かれたピラミッド型の紙の冠を、彼にかぶせた。『主イエスよ、わたしは、心から喜んで、あなたのために恥辱の冠をかぶります。あなたはわたしのためにいばらの冠をかぶられました』とフスは言った。」

彼にこのような装いをさせた後、「司教たちは、『今、われわれは、なんじの魂を悪魔にわたす』と言った。

ヨハン・フスは、天を仰いで、『おお、主イエスよ、わたしは、わたしの魂をみ手にゆだねます。あなたはわたしを贖ってくださいたからです』と言った。^{二三}

こうして彼は、俗権の手に渡され、刑場へと引かれていった。彼の後には、数百名の軍人たち、美衣をまとった司祭や司教たち、コンスタンツの住民などの大行列が続いた。彼が火刑柱に縛られ、火をつける準備が整ったときに、殉教者は、もう一度、誤りを捨てて死を免れるよう勧告された。しかしフスは言った。「いったいどんな誤りを取り消せと言うのか。わたしは、何も悪いことはしていない。わたしが書き説教したことすべては、人々を罪と滅びから救うためのものだったことは、神があかしをしてくださる。したがって、わたしが書き説教した真理をわたしの血をもって確証することは、わたしの最も喜びとするところである。」^{一四}

彼の回りに火が点じられたとき、彼は、「ダビデの子、イエスよ、わたしをあわれんでください」と歌い出した。そしてそれは、彼の声が永久に沈黙するまで続いた。

彼の敵たちでさえ、彼の英雄的な態度に強く心を打たれた。ある熱心な法王教徒は、フスと、その後しばらくして死んだヒエロニムスとの殉教を描写して言った。「ふたりとも、最後の時が近づいたとき、忠実に耐えぬいた。彼らは、婚宴に行くかのように火刑にのぞんだ。彼らは苦しみの声をあげなかった。炎が上ったときに、彼らは讚美歌を歌い出した。激しい炎も彼らの歌を止めることができなかった。」^{一五}

フスの体が燃えつきたとき、彼の灰は、その下の土とともに集められて、ライン川に投げ捨てられた。こうして、それは、大海へと運ばれていった。迫害者たちは彼が宣べ伝えた真理を根絶したものと考えたが、そうではなかった。その日大海に運び去られた灰が、地のすべての国々にまかれた種のようになること、また、まだ未知

の国々において、それは多くの実を結び、真理のあかしを立てるようになることに、彼らは考え及ばなかった。コンスタンツの会議場で叫ばれた声は、その後の各時代を通じて鳴りひびく反響を引き起こした。フスはもはやいなかった。しかし、彼がそのために死んだ真理は、決して滅び去るものではなかった。彼の信仰と忠誠の模範は、拷問や死に面しても、真理のために堅く立つようと、多くの人々を励ますのであった。彼の処刑は、□—マの不実な残酷さを全世界に示した。真理の敵たちは、それとは知らずに、彼らが撲滅しようとしていたその運動を、推し進めていたのであった。

ヒエロニムスの投獄

しかし、もう一つの火刑柱が、コンスタンツに立てられねばならなかった。もう一人の証人の血が、真理のために流されねばならなかった。ヒエロニムスは、フスが会議に行くに当たり別れを告げて、勇敢に堅く立つことを勧め、もし彼の身に危険が迫るならば、ヒエロニムス自身がすぐに援助に行くと言った。フスが投獄されたことを聞くと、この忠実な弟子は、直ちに約束の実行にとりかかった。彼は、通行券も持たず、ただ一人の従者を連れて、コンスタンツに向かった。到着してみると、ただ自分自身を危険にさらすだけで、フスを救い出すなどということは何もできないことがわかった。彼は町から逃れたが、帰途捕えられてかせをはめられ、一団の兵隊たちに守られて送りがえされた。彼が会議に最初に現われて、彼に対する訴えの答弁をしようとすると、「火刑にせよ！火刑にせよ！」という叫びがあがった。^{一六}彼は牢獄に入れられ、非常に苦しい姿勢で鎖につながれて、

パンと水しか与えられなかった。ヒエロニムスは、獄中の残酷な取り扱いのために、数か月後に、頻死の病氣になった。そこで敵たちは、彼が死んでしまうことを恐れて、幾分ゆるやかに扱ったが、それでも彼は一年間、牢獄に閉じ込められたままであった。

フスの死は、法王教徒たちが期待したような結果をもたらさなかった。彼の通行券に対する侵害は、人々を非常に憤慨させた。そこで会議は安全策をとり、ヒエロニムスを火刑にせず、できれば取り消しを強要しようとした。彼は、会議場にひき出され、取り消すか、火刑による死かのどちらかを選べと言われた。投獄された最初のころに死に処せられたならば、その後に受けた恐ろしい苦難と比較して、まだしも情ある処置だったことである。しかし今、獄中の病と苦しみ、懸念と不安の苦痛、友人たちとの離別、そしてフスの死による失望のために、ヒエロニムスの心は弱り、勇氣はくじけた。そして彼は、会議に従うことに同意した。彼は、カトリックの信仰を固守することを誓った。そして、ウィクリフとフスが教えた教義の中で、「聖い真理」以外のものを否認するという会議の決議を承認した。^{一七}

ヒエロニムスはこうした方法で、良心の声をしずめ、死を免れようとした。しかし、一人牢獄のなかで考えたとき、彼は、自分が何をしたかをはっきりと悟った。彼はフスの勇氣と忠実を思い、それにひきかえ、自分が真理を拒否したことを考えた。彼は、自分が仕えることを誓った主、自分のために十字架の死を耐え忍ばれた主のことを考えた。彼が信仰を取り消す前は、あらゆる苦難のなかにあっても慰めと神の恵みの確証があった。しかし、今は、後悔と疑惑が彼の心を苦しめた。彼は、ローマと和解するには、なお他にも取り消さなければならぬことがあるのを知っていた。彼が踏み込んだ道は、完全な背信に行き着くしかないものであった。ここにおい

て、彼は決心した。しばらくの苦難を逃れるために、自分の主を拒むようなことはすまいと決心したのである。

ヒエロニムスの弁明

まもなく彼は、ふたたび会議に引き出された。彼の服従は、まだ裁判官たちを満足させてはいなかった。血に
かわいた彼らは、フスの死によって刺激されて、新たな犠牲を求めてやまなかった。ヒエロニムスは、真理を無
条件で放棄するの でなければ、生命を全うすることはできなかった。しかし彼は、信仰を告白し、殉教者フスの
あとに続いて火刑になる決心をしていた。

彼は自説撤回を取り消した。そして、死を前にした人間として、弁明の機会が与えられることを厳粛に要求し
た。しかし、彼の言葉の影響を恐れた司教たちは、ただ彼に対する告訴に対して、それを認めるか否かだけを答
えるようにと言い張った。ヒエロニムスは、そのような残酷と不正に対して抗議した。「あなたがたはわたしを、
不潔で有害で悪臭を放ち、何一つない恐ろしい牢獄に、三百四十日も閉じ込めておいた。そして今度はわたしを
引き出し、わたしの憎むべき敵には耳をかしながら、わたしの言うことは聞こうともしない。…もしもあなた
がたが、真に賢き者であり、世の光であるならば、正義に対して罪を犯さないように気をつけるべきである。わ
たしはいえ、一人の弱い人間に過ぎない。わたしの生命など、どうでもよいのだ。わたしがあなたがたに、
不正な宣告を下さぬように勧めるのは、自分のためよりも、あなたがたのためを思って言っているのだ」と彼は
言った。^{一八}

彼の要求は、ついに許された。ヒエロニムスは、彼の裁判官たちの前でひざまずき、神の霊が彼の思想と言葉を支配し、真理に反することや、主にふさわしくないことを語らないようにと祈った。彼にとって、この日、最初の弟子たちに対する神の約束が成就したのである。「またあなたがたは、わたしのために長官たちや王たちの前に引き出されるであろう。…彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである。語る者は、あなたがたではなく、あなたがたの中にあつて語る父の霊である」(マタイのノ―ハ―二〇)。

ヒエロニムスの言葉は、彼の敵たちの中にさえ、驚きと賞賛を引き起こした。彼は、丸一年の間牢獄に監禁され、読むことも見ることもさへもできずに、非常な肉体的苦痛と精神的不安のうちに過ごしたのであつた。しかし彼の論旨は、なんの妨げもなく研究を継続したもののように、明快で力に満ちていた。彼は、不正な裁判官たちによつて有罪の宣告を下された数多くの聖徒たちを、聴衆に示した。ほとんどの時代においても、その時代の人々を啓蒙しようとして、恥辱をこうむつて追放され、そして後年になってあがめられた人々がいた。キリストご自身も、不正な法廷において、犯罪人として有罪を宣告された。

ヒエロニムスは、前に自説を撤回したときに、フスの有罪の宣告は正当であると承認したが、悔い改めを宣言した今は、殉教したフスの無罪と潔白を証言した。「わたしは子供の時から彼を知っている。彼は、たゞしく聖く、最も優れた人物である。彼は、罪がないのに有罪の宣告を受けた。…そしてわたしも、また。――わたしは死ぬ覚悟でいる。わたしは、わたしの敵と偽りの証人たちが用意している責め苦にひるまない。彼らは、やがて、欺くことのできない大いなる神の前で、自分たちの欺瞞行為の申し開きをしなければならぬのだ。」^{一九}

ヒエロニムスの殉教

ヒエロニムスは、自分が前に真理を拒否したことに心を責められながら、次のように続けた。「わたしが青年時代から犯したすべての罪のなかで、最もわたしの心を悩まし、激しく心を責めたのは、この重大な場所で、ウィクリフに対して、また、わが師、わが友である聖なる殉教者、ヨハン・フスに対してなされた不法きわまる宣告を承認したことである。しかり！わたしはそのことを心からさんげする。そしてわたしは、不名誉にも死を恐れて彼らの教義を否認したことを告白する。それゆえに、全能の神が、わたしの罪を許し、特に最も憎むべきこの罪を許してくださいることを嘆願する。」彼は、裁判官たちを指し、断固として言った。「あなたがたは、ウィクリフやヨハン・フスを罪に定めたが、それは、彼らが教会の教義を混乱させたからではなくて、ただ彼らが聖職者たちの引き起こす醜聞——彼らのぜいたく、彼らの高慢、そして司教や司祭たちのあらゆる罪悪——を、非難攻撃したからである。彼らが断言したことは、論ばくすることのできないものであるが、わたしもまた彼らと同様に考え、彼らと同様に宣言する。」

彼の言葉はさえぎられた。司教たちは、激怒にふるえて叫んだ。「これ以上の証拠を求める必要があるうか。今われわれは、われわれの目の前に、最も頑固な異端者を見ている！」

この騒ぎにも動ぜず、ヒエロニムスは叫んだ。「なに！あなたがたは、わたしが死を恐れていると思っているのか？あなたがたはこの一年間、わたしを死よりも悲惨な恐ろしい牢獄に監禁した。そして、トルコ人やユ

ダヤ人、あるいは異教徒よりも残酷にわたしを扱った。わたしの肉は、文字通り、わたしの骨から腐って落ちた。それでもわたしは、つぶやきはしない。悲しむことは、勇氣ある人間にふさわしくないからだ。しかし、キリスト教徒に対して、かくも野蛮な行為が行なわれたことに、驚かざるを得ないのである。」¹⁰

ふたたび、人々が怒ってさわぎ立てたので、ヒエロニムスは急いで牢獄に送りかえされた。しかし、そこに集まっていた人々のなかには、彼の言葉に深い感銘を受けて、彼の生命を救おうとしたものもあった。彼は、教会の高い地位の人々の訪問を受け、会議に従うように勧告を受けた。ローマに反対することをやめるならば、その報賞として、輝かしい世的栄誉が約束された。しかしヒエロニムスは、世の栄光が提示されたときの主イエスと同様に、ゆるがず堅く立った。

「わたしが間違っていることを聖書から証明してもらいたい。そうすれば、わたしは、取り消そう」と彼は言った。

「聖書！なんでも聖書によって判断すべきであるというのか。教会が解釈しないで、いったいだれが理解することができようか？」と誘惑者の一人は叫んだ。

ヒエロニムスは答えた。「われわれの救い主の福音よりも、人間の伝説のほうが信じる価値があるというのか。パウロは、彼が手紙を書き送った人々に人間の伝説に従うのではなくて、『聖書を調べ』よと勧めたのである。」

「異端だ！わたしはこれまで長い間あなたに嘆願してきたことを悔いる。あなたは悪魔に取りつかれているということがわかった」というのが答えであった。¹¹

間もなく、彼に有罪の宣告が下った。彼は、フスが生命をささげたのと同じ場所に引かれていった。彼の顔は

喜びと平安に輝き、彼は歌を歌いながら進んでいった。彼はキリストをみつめていた。彼にとって、死は恐ろしいものではなかった。刑の執行者が火をつけるために彼の後ろにまわったとき、殉教者は叫んだ。「かまわず前に来て、わたしの目の前で火をつけなさい。それがこわいくらいなら、わたしはここに来てはいない。」

炎が彼を包んだとき、彼の最後の言葉は祈りであった。「主、全能の父よ。どうか、わたしをあわれんでください。わたしの罪をゆるしてください。あなたは、わたしが常にあなたの真理を愛したことを知っておられます。」^三彼の声はやんだ、しかし彼のくちびるは祈りつづけて動いていた。全部が燃えつきたとき、殉教者の灰は土と共に集められて、フスの時と同じようにライン川に投げいれられた。

こうして、神の忠実な証人たちは死んだ。しかし、彼らが宣言した真理の光——彼らの雄々しい模範の光——は、消し去ることができなかった。当時すでに世界に臨みつつあった夜明けの光を止めようとすることは、太陽をあともしさせようとするのと同じことであった。

ボヘミア人の奮起

フスの処刑は、ボヘミアに怒りと恐怖の火を点じた。全国民は、彼が司祭たちの悪意と皇帝の変節によって犠牲にされたことを感じた。彼は忠実な真理の教師であったことが宣言され、彼を死に処した会議は殺人罪に問われた。彼の教義は、今までになかったほど人の注目を引いた。法王の布告によって、ウィクリフの著書は火で焼かれていた。しかし、焼かれなかったものがその隠されたところから持ち出されて、聖書や、あるいは人々が手



司教がフスの頭に、「大異端者」と書いた帽子をのせたとき、フスは言った。「主イエスよ、わたしは、心から喜んで、あなたのために恥辱の冠をかぶります。あなたはわたしのためにいばらの冠をかぶられました。」

に入れ得た分冊と関連させながら研究された。こうして多くの人々が改革主義を受け入れるようになった。

フスの殺害者たちは、彼の運動の勝利を手をこまねいて見てはいなかった。法王と皇帝は力を合わせてこの運動を粉碎しようとし、ジギスムントの軍隊がボヘミアに送りこまれた。

しかし、一人の救済者があらわれた。ジシユカは、戦争が起こると間もなく失明してしまったが、しかし当時の最もすぐれた將軍の一人で、ボヘミア人たちの指導者であった。ボヘミア人たちは、神の助けと自分たちの運動の正しいことを信じて、自分たちを攻撃する最強の軍隊に対抗した。皇帝は、何度となく軍勢を召集して、ボヘミアを攻略しようとしたが、無残な敗北を喫するだけであった。フス派の人々は死の恐怖をのりこえていたので、何ものも彼らに対抗できなかった。戦争が起こって数年後に、勇敢なジシユカが死んだが、プロコピオスが彼のあとを継いだ。プロコピオスは、ジシユカと同じく勇敢で老巧な將軍であり、いくつかの点では、いっそう有能な指導者であった。

ボヘミア人の敵は盲目の將軍の死を知って、劣勢をばん回する絶好の機会がきたと思った。法王は、フス派に対する十字軍を宣し、ふたたびおびただしい軍勢がボヘミアに送りこまれた。しかしそれは、大敗北に終わつたに過ぎなかった。再度の十字軍が布告された。ヨーロッパのすべての法王教国において、人員と金と軍需品が徴集された。群衆が法王の旗のもとに集合し、フス派の異端者たちをついに全滅させ得ると考えた。大軍は、必勝を期して、ボヘミアに侵入した。人々は、これを撃退するために立ち上がった。両軍は、川を隔てて向かい合うまでに接近した。「十字軍は、数においてはるかに優勢であった。しかし彼らは、はるばる対戦するためにやうて来たフス派に対し、川を渡って突撃するのではなくて、黙って相手の軍勢を見ていた」^{二三}。すると突然、軍隊は

不思議な恐怖におそわれた。あの強力な軍隊が、一撃も加えることなく、目に見えない力におい散らされるように四散してしまった。フス派の軍隊によって、多くの者が殺された。彼らは逃亡兵を追跡して、おびただしい戦利品を手収め、ボヘミア人は戦争によって衰えるどころか豊かになったのであった。

法王軍の惨敗

それから数年後、新しい法王が立って、もう一度別の十字軍が起こされた。以前と同様に、人員も資金もヨーロッパのすべての法王教国から徴集された。このような危険な企てに加わるものに対する勧誘は、非常なものであった。十字軍に参加するものは、どんな極悪な犯罪もみな許された。すべての戦死者には、天で大きな報賞が約束され、生存者には戦場での栄誉と富が約束された。再び大軍が召集され、国境を越えてボヘミアに侵入した。フス派の軍勢は彼らの前から退却し、侵入軍を国内深く誘い入れて、勝利をすでに得たかのように彼らに思わせた。やがてプロコピオスの軍隊は踏みとどまって敵に向きなおり、反撃を加えた。十字軍は、自分たちの失策に気づき、陣地にとどまって敵の襲来を待った。しかし、軍隊の進軍の音が聞こえてくると、フス派の姿がまだ見えないのに、十字軍はまた恐慌状態に陥った。諸侯も將軍も、そして一般の兵隊も、武器を投げ捨てて四散した。侵入軍の指揮官であった法王の使節は、おびえて混乱した軍勢を引きもどそうと努力したがおびであった。必死の努力にもかかわらず、彼自身も、敗走者の群れにまきこまれてしまった。十字軍は完全に敗北し、ふたたび、おびただしい戦利品が勝利者の手に入った。

こうして、再度、ヨーロッパの最強国家の大軍、戦いの訓練と装備を整えた勇敢な戦士たちの軍勢が、一戦をも交えずに、弱小国家の防備軍の前に敗れ去った。これは、神の力のあらわれであった。侵入軍は、超自然的な恐怖におそわれた。パロの軍勢を紅海で打ち破り、ミデアンの軍勢をギデオンの彼の三百人の兵隊の前から逃走させ、高慢なアッシリアの軍勢を一晩のうちに倒された神が、ふたたび手を伸べて、圧迫者の力を砕かれたのである。「彼らは恐るべきことの無い時に大いに恐れた。神はよこしまな者の骨を散らされるからである。神が彼らを捨てられるので、彼らは恥をこうむるであろう」(詩篇五三ノ五)。

法王教の指導者たちは、武力で征服することができないのに気づいて、ついに外交手段を用いるようになった。つまり、これは妥協であって、ボヘミア人に良心の自由を与えようといながら、実は彼らをローマの権力に引き渡すものであった。ボヘミア人は、ローマとの和解の条件を四つあげた。聖書の自由説教、教会全体が聖餐のパンとぶどう酒の両方にあずかる権利と礼拝における自国語の使用、聖職者をすべての公職公権から除外すること、そして、犯罪を犯した場合、聖職者も同様に司法権に問われることであった。法王側はついに、「フス派の四項目を受け入れることに同意したが、その解釈権、すなわち、その正確な意味の決定権は会議に——言いかえると、法王と皇帝に——属するとした。」^{二四}このような条件に基づいて条約が結ばれ、ローマは、戦争によって得ることができなかったことを偽りと欺瞞によって得たのである。なぜなら、ローマは、聖書と同様にフス派の条件にも自分かつてな解釈を下して、自分に都合のよいようにその意味を曲げることができたからである。

多くのボヘミア人は、それが自分たちの自由を裏切るものであるのを見て、条約に同意することができなかった。不和と分裂が起こり、ついには争って血を流すまでに至った。この紛争のなかで、高潔なプロコピウスは倒

れ、ボヘミアの自由は失われた。

こうして、フスとヒエロニムスを裏切ったジギスムントは、ボヘミアの王となり、ボヘミア人の権利を確保する誓約をしていたにもかかわらず、法王権を確立しようとした。しかし、ローマに屈服して彼の得たものはほとんどなかった。彼の生涯は、約二〇年にわたって、労苦と危険に満ちたものであった。長い無益な戦争のために、軍隊は弱くなり、国庫はからになった。そして、今、王にはなったが、一年で死んでしまった。国家が、今にも内乱が起こりそうになっている中で、彼は悪名を残して死んだ。

ボヘミア人の忍苦と待望

暴動、闘争、流血が相次いで起こった。ふたたび、外敵がボヘミアに侵入した。そして国内の紛争は、国を混乱に陥れ続けた。福音のために堅く立った者たちは、血なまぐさい迫害に会った。

かつての仲間たちはローマと契約を結んで、その誤りを受け入れたので、昔からの信仰を固守する人々は別の教会を組織して、それを「同胞一致教会」「ボヘミア兄弟団」と呼んだ。このために彼らは、各方面から悪く言われた。しかし、彼らは堅く立ってゆるがなかった。彼らは森や洞穴に逃れなければならなかったが、それでも集まって神のみ言葉を読み、礼拝を共にした。

彼らは、ひそかに各国に派遣した使者たちを通じて、ここかしこに、「真理を告白しているものが、この町に数名あの町に数名と孤立しており、彼らと同様に迫害の対象になっていることを知った。また、アルプスの山の

中には、聖書を基礎にした、昔からの教会があつて、ローマの偶像的腐敗に抗議しているのを知った。^{二五}この知らせは非常な喜びをもって迎えられ、ワルド派キリスト教徒との通信が開始された。

ボヘミア人は福音を固守して迫害の夜を過ごし、その最も暗黒な時においてもなお、朝を待つ見張りのように、彼らの目を地平線に向けていた。「彼らは不運な境遇にあつた。しかし、…彼らは、フスが最初に語り、ヒエロニムスによつて繰りかえされた言葉、すなわち、夜明けまでには一世紀を経なければならぬという言葉が忘れなかつた。この言葉は、タボル派「フス派の人々」にとつて、奴隷生活をしていたイスラエルの部族に対して『わたしはやがて死にます。神は必ずあなたがたを顧みて、この国から連れ出し（てくださるでしょう）』と言つたヨセフの言葉のようなものであつた。^{二六}「十五世紀の末期において、兄弟団の教会は、徐々にではあつたが確実に増加していった。彼らは、妨害などがなくなつたわけではなかつたが、比較的安らかに過ごすことができた。十六世紀の初めには、彼らの教会は、ボヘミアとモラヴィアにおいて二百を数えた。^{二七}「火と剣という破壊的激怒を逃れて、フスが予告した夜明けを見ることを許された残りの者たちは、非常に多かつた。^{二八}」

注

- 一 Wylie, b.3, ch.1.
- 二 Ibid., b.3, ch.1.
- 三 Bonnechose, "The Reformers before the Reformation," vol. 1, p.87.
- 四 Wylie, b.3, ch.2.
- 五 Bonnechose, vol.1, pp.147, 148.

- 六 *Ibid.*, vol.1, pp.148, 149.
- 七 *Ibid.*, vol.1, p. 247.
- 八 Jacques Lefant, “History of the Council of Constance” vol.1, p.516.
- 九 *Bonnechose*, vol.2, p.67.
- 一〇 D’Aubigné, b.1, ch.6.
- 一一 *Bonnechose*, vol.2, p.84.
- 一二 *Ibid.*, vol.2, p.86.
- 一三 Wylie, b.3, ch.7.
- 一四 *Ibid.*, b.3, ch.7.
- 一五 *Ibid.*, b.3, ch.7.
- 一六 *Bonnechose*, vol.1, p.234.
- 一七 *Ibid.*, vol.2, p.141.
- 一八 *Ibid.*, vol.2, pp.146, 147.
- 一九 *Ibid.*, vol.2, p.151.
- 二〇 *Ibid.*, vol.2, pp.151—153.
- 一一 Wylie, b.3, ch.10.
- 一二 *Bonnechose*, vol.2, p.168.
- 一三 Wylie, b.3, ch.17.
- 一四 *Ibid.*, b.3, ch.18.
- 一五 *Ibid.*, b.3, ch.19.
- 一六 *Ibid.*
- 一七 Ezra Hall Gillett, “Life and Times of John Huss,” vol.2 p.570.
- 一八 Wylie, b.3, ch.19.



テツツェルは、ドイツでの免罪符販売を指揮するよう、公式に任命を受けていた。人々はこの巧みな販売人を、あたかも貴重な賜物をもって天から下ってきた人物であるかのように歓迎した。

第七章

マルチン・ルターが登場

幼年時代と彼の両親

教会を、法王教の暗黒から、純粋な真理の光に導くために召された人々の中の第一人者は、マルチン・ルターであった。熱心で、献身的で、神のほかなにも恐れることを知らず、聖書以外のどんな信仰の基準をも認めなかったため、ルターは、実に、その時代のための人物であった。神は彼を用いて、教会の改革と世界の啓蒙のために大きな働きを成し遂げられた。

ルターは、福音の最初の使者たちと同様に、貧しい階級の出であった。彼は幼年時代を、ドイツの農民の質素な家庭で過ごした。彼の父は鉱夫で、毎日の労苦によって彼の学費をかせいでいた。父親は彼を弁護士にしようと思った。しかし神は、彼を、幾世紀にもわたって徐々にではあったが、建設されつつあった大神殿の建設者に

しようとされた。困難、窮乏、厳しい訓練は、無限の知恵の神が、ルターにその生涯の重要な任務に対する備えをさせられたところの学校であつた。

ルターの父は、強固で活発な精神と、品性の偉大な力の持ち主であつて、正直と決断と率直さを持った人であつた。彼は、結果がどうなるかと、義務を忠実に果たす人であつた。彼の確かな判断力は、修道院制度に対する不信感をいだかせた。ルターが彼の許可を得ないで修道院に入つたとき、彼は非常に腹を立てた。父と子の和解には、二年かかったが、そのときでも彼の意見は変わらなかつた。

ルターの両親は、子供たちの教育と訓練に非常に注意を払つた。彼らは子供たちに、神を知ることと、キリスト者の美德を実行することを教えるように努めた。父親は、息子が主の御名を覚え、いつかは神の真理の発展を助けるようになることを祈つたが、ルターはこれをたびたび耳にした。両親は、その労苦の生活の中で与えるあらゆる道徳的知的訓練の機会を、熱心に活用した。彼らは、子供たちが信心深く有用な生活を送るよう準備させようと、熱心に忍耐強く努力した。彼らが厳格で強固な品性の持ち主であつたために、時には厳しすぎることもあつた。しかしルター自身、ある点においては彼らの誤りを認めながらも、彼らのしつけは非難するよりは賛成すべきものであると思つた。

ルターは、年少のときに送られた学校で、非常に厳しい、乱暴なまでの扱いを受けた。彼の両親は非常に貧しかったので、彼が別の町にある学校へ家から通つたときには、一時、家々を歌をうたいながらまわることによつて食を得なければならず、空腹に苦しんだこともしばしばであつた。当時一般にゆきわたっていた、陰うつで迷信的宗教観は、彼の心を恐怖で満たした。彼は、夜、悲哀におそわれて床につき、暗い将来をながめておのの

た。そして、神を、慈愛に満ちた天父としてではなく、厳格で容赦しない裁判官、残酷な暴君のように考えて、常に恐怖におびえていた。

しかしルターは、多くの大きな失望の中にもありながらも、彼の心を引きつけた道徳的知的卓越の高い標準に向かつて、決然として進んでいった。彼は、知識を渴望していた。そして彼は、熱心で実質的な性質であつたので、はでで表面的なものよりは、堅実で有用なものを望んだ。

青年時代の学び

十八才のとき、彼はエルフルト大学にはいった。この頃には彼の境遇は、年少の頃よりは順調で、将来に明るい希望が持てた。彼の両親は、節約と勤勉によつて、相当の資産を得ていたので、必要な援助を全部支給することができた。そして、彼は、賢明な友人たちの感化を受けて、前に受けた教育の陰うつな感化を、いくぶんか少なくすることができた。彼は、第一流の著者たちの研究に専念し、彼らの最も重要な思想を努めて心に蓄え、賢明な人々の思想を自分のものにした。彼は、かつての教師たちの苛酷な訓練下にあつてさえ、早くから頭角を現わしたが、ここではよい環境に恵まれて、彼の知力は急速に発達した。彼は、記憶力が強く、想像力に富み、論理力も豊かで、たゆまず研究に励んだので、間もなく学友たちの間で第一人者となつた。知的訓練は彼の理解力を円熟させ、知力を活発にし、知覚を鋭敏にして、彼を彼の生涯の闘争のために準備させつつあつた。

ルターの心に宿つた主を恐れる思いは、彼を目的堅固なものにするとともに、神のみ前で心から謙遜なものに

した。彼は、自分が神の助けに依存していることを常に感じていた。そして、毎日祈りをもって一日を始めることを忘れなかった。彼の心は、絶えず、導きと支えとを祈り求めていた。「よく祈ることは、勉強の半ば以上を成し遂げることだ」と彼はよく言った。

ある日、ルターは、大学の図書館で本を調べていたときに、ラテン語の聖書を発見した。彼は、こうした本を見たことがなかった。そうしたものの存在さえ知らなかったのである。彼は、福音書や使徒書簡の一部が、公の礼拝のときに朗読されるのを聞き、それが聖書の全部であると思っていた。ところが彼は、今初めて、神の言葉の全体を見たのである。畏敬と驚きをもって、彼はその神聖なページをくった。彼は、胸をどきどきさせながら、生命の言葉を自分で読み、時々息をついては「神がこのような本をわたしに下さったなら！」と叫ぶのであった。二
天使が彼のそばにいて、神のみ座からの光が、真理の宝を彼に理解させた。彼は、神の怒りを招くことを常に恐れていたが、今、これまでになく、自分の罪人としての状態を痛感した。

修道院での生活

彼は罪からの解放と神との平和を熱心に求めて、ついに修道院にはいり、修道院生活に身をささげることになった。ここで彼は、最も卑しい仕事をさせられ、戸ごとに食を乞い歩かせられた。彼は、人々から尊敬と理解を受けることを最も願う年齢であった。そして、このような卑しい勤めは、彼の生まれながらの感情からすれば、非常に苦しいものであった。しかし彼は、それが自分の罪のゆえに必要なことであると信じてこの屈辱に耐えた。

彼は、日ごとの勤めから寸暇を見いだしては、眠る時間もそまつな食事をとる時間も惜しんで、研究に励んだ。

彼は何よりも神のみ言葉の研究に喜びを感じた。彼は、修道院の壁に聖書が鎖でつながれているのをみつけたので、よくそこへ行った。彼は罪の自覚が深まるにつれて、自分自身の行ないによって、許しと平和を得ようとした。彼は非常に厳格な生活を送り、断食や夜の勤行、また体をむち打って、生まれながらの悪をおさえようとしたが、しかしこうした修道院生活によつては、なんの解放も得られなかった。彼は、神のみ前に立ち得るような心の清めを得るためには、どんな犠牲をも恐れなかった。「わたしは、実に敬虔な修道僧であつた。わたしは、言葉では表現できないほど厳格に、わたしの修道会の規則に従つた。もし修道僧が、修道僧としての働きによつて天国に行くことができるならば、わたしは間違いなくその資格があつたであらう。…もしあれ以上続いたならばわたしは苦行の果てに死んでしまったことであらう」と彼は後に言っている。^三 こうした厳しい苦行の結果、彼は衰弱し、失神の発作を起こした。そして、後になつても、それから完全に回復することはできなかった。しかし、これらすべての努力にもかかわらず、彼は心の悩みから救われなかった。彼は、ついに、絶望のふちに追いやられた。

ルターが万事休すと思ったときに、神は、彼のために一人の友人、援助者を起こされた。敬虔なシュタウピッツガルターに神のみ言葉を示して、自分から目をそらし、神の律法を犯したことに對する永遠の刑罰について考えることをやめ、彼の罪を許す救い主、イエスを仰ぎ見るように命じた。「罪のために自分を苦しめることをせず、贖い主の腕の中に自分自身を投げ入れよ。彼を信頼せよ。彼の生涯の義と彼の死による贖罪に信頼し、…神のみ子に耳を傾けよ、彼はあなたに神の恵みの確証を与えるために、人となられた。」「まずあなたを愛された

彼を愛せよ。」^四このように、このあわれみの使者は語った。彼の言葉は、ルターの心に深い感銘を与えた。長い間抱いていた誤りについての多くの苦闘のあとで、彼は真理をつかむことができ、彼の悩み苦しんだ心に平和が与えられた。

ルターは司祭に任じられ、修道院から召されて、ウィッテンベルク大学の教授になった。ここで、彼は、原語による聖書の研究に没頭した。彼は聖書の講義を始めた。そして、詩篇、福音書、使徒書簡などは、喜んで聞く多くの聴衆の心を啓発した。彼の友人であり先輩であったシユタウピッツは、彼に、説教壇に上って神のみ言葉を説くように勧めた。ルターは、自分はキリストにかわって人々に語る価値がないと感じてためらった。彼は、長い間の苦悩の後、初めて、友人たちの勧めに応じた。すでに彼は聖書に精通しており、神の恵みが彼に宿っていた。彼の雄弁は聴衆を魅了し、彼の明快で力強い真理の提示は、彼らの知性を納得させ、彼の熱情は彼らの心を感じさせた。

ローマ訪問

それでも、ルターは、カトリック教会の実子であり、それ以外の何ものにもなる考えはなかった。神の摂理によつて、彼はローマを訪問することになった。彼は、途中修道院に泊りながら、歩いて旅を続けた。彼はイタリヤの修道院において、その富と壮大さとぜいたくを見、非常に驚いた。修道士たちは、王侯のような歳入を得て、華麗な部屋に住み、高価な美服を着て、ぜいたくな食卓をかこんでいた。ルターは、このような光景と自分自身

の自制と苦難の生活とを比較して、疑惑に心を痛めた。彼の心は混乱してきた。

ついに彼は、七つの丘の都（ローマ）を遠方に望み見た。彼は感きわまって地上にひれ伏し、「聖なるローマよ、わたしはあなたに敬意を表す」と叫んだ。^五 彼は都に入り、教会を訪問し、司祭や修道士たちと語りかえし語る驚くべき物語を聞き、求められるままにあらゆる儀式を行なった。何を見ても彼を驚きと恐怖に陥れるものばかりであった。彼は、罪悪があらゆる階級の聖職者に及んでいるのを見た。高位聖職者たちが品の悪い冗談を言うのを聞いた。そして、ミサの時にさえ見られる、彼らの恐るべき不敬行為に戦慄した。修道士や市民と交わつてみると、放蕩や乱行が目についた。どこに目を向けても、神聖であるべきところに汚神行為を見た。彼は、次のように書いている。「ローマにおいて、どんな罪や恥すべき行為が行なわれているかは、想像もできない。実際に見聞きしなければ信じられないほどである。『もし地獄があるならば、ローマはその上に建っている。それはあらゆる罪が生じてくるところの、底知れぬ穴である』と一般に言われているほどだ。」^六

当時、法王の教書が發布されて、「ピラトの階段」をひざまずいて上るものにはみな、免罪が約束されていた。この階段は、救い主がローマの法廷を出るときに降りられたもので、奇跡的にエルサレムからローマに移されたものであると言われていた。ルターは、ある日、敬虔な思いをもってこの階段を上っていた。すると突然、雷のような声が、「信仰による義人は生きる」と言ったように思われた（ローマ一ノ一七）。彼はすぐに立ち上がり、恥と恐怖の念にかられて、その場を急いで去った。この聖句は、彼の一生を通じて、彼に力を与えた。そのとき以来、彼は、人間の行為によって救いを得ようとするこの誤りと、キリストの功績を絶えず信じるこの必要を、これまでよりもっと明瞭に悟った。彼の目は開かれた。そして、法王制の惑わしに二度と陥ることがなかった。

た。彼がローマに背を向けたとき、彼の心もローマから離れ去っていた。そしてこのときから、隔たりは大きくなり、ついに彼は、法王教会との関係を全く断つに至った。

聖書主義へ

ルターは、ローマからの帰国後、ウィッテンベルク大学から神学博士の学位を授けられた。今、彼は、これまでなかったほどに、自由に彼の愛する聖書の研究をすることができた。彼は全生涯を通じて、法王たちの言葉や教義ではなく、神のみ言葉を注意深く学んで、忠実に説教する、という厳粛な誓いを立てていた。彼はもはや、単なる修道士や教授ではなくて、正式の聖書解釈者であった。彼は、真理に飢えかわいていた神の群れを養う牧者として召されたのであった。キリスト者は、聖書の権威に基づいた教理以外は受け入れてはならないと、彼は断言した。この言葉は、法王至上権の、まさにその根底を危うくするものであった。この言葉には、宗教改革の極めて重大な原則が含まれていたのである。

ルターは、人間の理論を神のみ言葉よりも高めることの危険を認めた。彼は、恐れることなく、学者たちの思弁的な不信仰を攻撃し、長い間人々を支配してきた哲学や神学に反対した。彼は、そうした研究は無価値であるばかりか有害であると公然と非難し、聴衆の心を哲学者や神学者の詭弁から引き離して、預言者と使徒たちが示した永遠の真理に向けようと努めた。

彼の言葉を熱心に聞いていた群衆にとって、彼の伝えた使命は実に貴いものであった。彼らは、今まで、この

ような教えを聞いたことがなかった。救い主の愛の福音、彼の贖罪の血による許しと平和の確証は、彼らの心に喜びを与え、不滅の希望を持たせた。ウィッテンベルクにおいて点じられた光は全地に広がり、時の終わりまで、その輝きを増すのであった。

しかし、光とやみとは調和することができない。真理と誤謬との間には、押さえることのできない戦いがある。その一方を支持して擁護することは、もう一方を攻撃して打ち倒すことである。救い主ご自身も、次のように言われた。「地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」(マタイ一〇ノ三四)。ルターは、宗教改革が始まってから数年後に、次のように言った。「神は、わたしを導かれるのではなくて、わたしを前に押し出される。神はわたしを連れ去られる。わたしは、自分ではどうにもならない。わたしは静かに暮らしたいと思うのに、騒ぎと革命のなかに投げこまれる。」^七彼は今まさに、戦いの中へとかりたてられようとしていた。

ローマ教会は神の恵みを商品にしていた。両替人の台が祭壇のそばにおかれた(マタイ二一ノ一二参照)。そして、売買する者の声がやかましくひびいた。ローマに聖ペテロ教会を建設するための資金募集という名目のもとに、法王の権威によって免罪符(贖宥状)が公然と売り出された。神を礼拝するための会堂が、犯罪の代価をもって建てられ、その礎石が、不義の値をもって置かれようとしていた。しかし、ローマの勢力拡大の手段そのものが、ローマの権力と勢力に対して致命的打撃を与えるものとなった。そして、これが、法王制に対する最も手ごわい強敵を呼び起こし、法王の座を動揺させてその頭上から三重冠をつき落とすような戦いを招いたのであった。

欺瞞的な免罪符販売

ドイツにおいて免罪符の販売を委ねられたのは、テツツエルという人であった。彼は、社会と神の律法に対して、最も卑劣な犯罪を犯した人物であった。しかし彼は、その犯罪の刑罰を免除されて、法王の金銭づくで無節操な企てを促進するために雇われたのである。彼は、非常なずうずうしさで、根も葉もないことを口にし、無知でだまされやすい迷信的な人々を欺くために、不思議な物語を聞かせた。もしも人々が神の言葉を持っていたならば、このように欺かれなかったことであろう。聖書が人々の手に与えられていなかったのは、彼らを法王権の支配下において、その野心的な指導者たちの権力と富を増大するためであった。^八

テツツエルが町に到着すると、彼の前に使いの者が行って、「神と法王の恵みが、あなたの門口に来た」と告げ知らせた。^九そして人々は、天から彼らのところに下った神ご自身を迎えるかのように、この冒瀆もはなはだしい偽り者を歓迎したのであった。汚らしい売買が教会の中で行なわれ、テツツエルは説教壇に上って免罪符をほめ上げ、これは神の最も尊い賜物であると言った。彼は免罪符の功德を述べて、これを買う者は、これから犯そうと思う罪もみな許される、しかも「悔い改めさえ必要ではない」と言った。^{一〇}そればかりではなくて、彼は聴衆に、免罪符は生きている者だけでなく、死者をも救う力がある、金が箱の底に当たって音がした瞬間に、それが支払われた魂は煉獄を逃れて天国に行くのである、と保証した。^{一一}

魔術師シモンが、奇跡を行なう力を、使徒たちから金銭で買おうとしたときに、ペテロは彼に答えて、「おま

えの金は、おまえもとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなどと思っているのか」と言った（使徒行伝八ノ二〇）。しかしテツツェルの申し出に対し、多くの人々は熱心に飛びついた。金銀が彼の金庫に流れ込んだ。悔い改めと信仰、そして熱心に努力して罪に抵抗し勝利することによって得られる救いよりは、金で買うことができる救いのほうが、たやすく得られるのであった（付録参照）。

免罪符の教義は、ローマ教会の学識ある信心深い人々から反対されてきた。そして、理性と啓示の両面から見ても非常に矛盾したこの主張を、信じていない人々も多かった。この邪悪な売買に、あえて反対の声をあげる高位聖職者はいなかった。しかし、人々の心は混乱し、不安になった。そして多くの者は、神がだれかを起こして、教会のきよめのためにお働きにならないであろうかと熱心にたずねた。

ルターは、依然として最も厳格な法王教徒であったが、免罪符を扱う者たちの冒濫的な僭越な態度に激しい嫌悪をおぼえた。彼自身の会衆のなかにも、免罪符を買ったものが多くいた。そしてまもなく、彼らは、罪を悔いて改革したいという理由からではなくて、免罪符を理由にして、司祭のところに来て罪を告白し、許しを期待するようになった。ルターは、彼らに許しを与えることを拒んだ。そして、もしも彼らが悔い改めて生活を改めるのでなければ、その罪のために滅びなければならないと警告した。彼らは非常に当惑し、テツツェルのところへ行つて彼らの聴罪師が免罪符を拒否したことを訴え、なかには大胆に返金を迫る者もあった。テツツェルは激怒した。彼は恐ろしいのろいの言葉をはき、町の広場に火をたかして、「自分は、この最も神聖な免罪符に反対する異端者はみな火刑にする命令を、法王から受けている」と宣言した。^二

九十五か条の提題

今やルターは、真理の闘士としての彼の仕事に、大胆に乗り出した。彼は説教壇から、熱心で厳肅な警告の声をあげた。彼は人々に、罪のいまわしい性質を告げ、人間は自分自身の行為によっては、そのとがを減じることでも罰を避けることもできないと教えた。神に対する悔い改めと、キリストに対する信仰以外に、罪人を救うことができないものはない。キリストの恵みを買うことはできない。それは、無償で与えられる賜物である。彼は人々に、免罪符を買ったりしないで、十字架につけられた贖い主を信仰をもって見つめることを勧めた。彼は、自分が難行や苦行によって救いを得ようとしたが得られなかった苦い経験語り、自分を見ないでキリストを信じることによって平和と喜びを得たことを、聴衆にはつきり述べたのである。

テツツエルが売買と不敬虔な主張を続けたので、ルターはこのはなはだしい悪弊に対して、もっと効果的な抗議をする決心をした。まもなく、その機会がやって来た。ウィッテンベルクの城教会には多くの遺物があって、祝祭日には一般に公開され、その時に教会に出席して告白をする者はみな、罪が完全に許されるのであった。そのようなわけで、そういう祝祭日には、人々がたくさん集まってきた。祝祭日のうちで最も重要なものの一つで、万聖節というのが近づいていた。その前日、ルターは、すでに教会へと進んで行く群衆に加わって、免罪符の教義に反対する九十五か条の提題を書いた紙を扉にはった。彼は、この提題に反対するすべての人に対して、翌日大学において喜んで答弁することを宣言した。

彼の提題は広く一般の注目をひいた。人々はそれを何度も読み、各方面に伝えた。大学や町全体に、大きな興

奮が起こった。これらの論題は、罪を許し、その罰を免除する力が、法王にも他のどんな人にも与えられていないことを示していた。そうしたたくらみ全体が、もともとまやかしごと——人々の迷信に乗じて金を巻き上げるための策略——であつて、その偽りの主張に信頼するすべての者を滅ぼそうとするサタンの計略であつた。論題はまた、キリストの福音は教会の最も価値のある宝であること、そしてそこにあらわされた神の恵みは、悔い改めと信仰とによつて求めるすべての者に、惜しみなく与えられるものであることを明示していた。

ルターの論題は討論を呼びかけた。しかしだれもその挑戦に応じなかった。彼が提出した問題は、数日のうちにドイツ全国に広まり、数週間のうちには全キリスト教国に伝えられた。教会内で一般に行なわれていた罪惡を見て、それを嘆いていたが、その進行をどうやって止めるかを知らなかった多くのローマ教徒たちは、論題を読んで非常に喜び、そこに神の声を認めた。彼らは、法王庁から発する墮落の潮流を阻止するために、神が恵み深いみ手をのべられたと感じた。諸侯や長官たちも、自己の決定に対しては他のだれの訴えをも入れないような尊大な権力が阻止されることを、ひそかに喜んだ。

提題に対する反響

ところが、罪を愛する迷信的な群衆は、彼らの恐怖を和らげていた詭弁が一掃されて戦慄した。悪賢い聖職者たちは、犯罪を是認する彼らの仕事が妨害され、彼らの利益が危険にひんしたのを見て、大いに怒り、その欺瞞を擁護するために立ち上がった。改革者は手きびしい告発に会った。ある者たちは、ルターが輕率に衝動的な行

動を起こしたと言つて非難した。他の者たちは、彼を僭越であると非難し、彼は神に導かれているのではなくて、高慢とでしゃばりから行動したと言つた。ルターは答えて言つた。「だれでも、新しい意見を発表するときには、いかにも高慢に見え、論争をひき起こすかのように非難されるのを知らない人があるうか。…なぜ、キリストとすべての殉教者たちは殺されたのか？それは、彼らが、その時代の知恵を高慢にも軽べつするように見え、まず昔からの神託を謙そんに聞くことをせずに、自分たちの新しい説を主張したからである。」

また、彼は言つた。「わたしのすることは、人間の思慮分別ではなくて、神の勧告に基づいて行なわれる。この働きが神のものであれば、だれがそれを止め得ようか。もしそれが神のものでないならば、だれがそれを押し進め得ようか。わたしの意志、彼らの意志、われわれの意志ではない。天にいます、聖なる父よ、それは、あなたの意志であります。」^三

ルターは聖霊に動かされて彼の働きを開始したのであつたが、それを推進するためには激しく闘わなければならなかつた。敵の非難、彼の目的に対する誤解、彼の品性や動機に対する不正で悪意に満ちた非難などが、洪水のように彼を襲い、彼はそれに悩まされた。彼は、教会においても学校においても、人々の指導者たちは喜んで彼と一致して改革のために努力するものと確信していた。高い地位の人々から受けた激励の言葉が、彼に喜びと希望を与えた。すでに彼は、教会の輝かしい夜明けを予見していたのである。それなのに、激励は非難と有罪の宣告に変わった。教会と国家の両方の高官たちの多くは、彼の主張の真実であることを確信したけれども、これらの真理を受け入れるならば大変化が起こることに、すぐに気づいたのである。人々を啓蒙し改革することは、事実上、ローマの権力をくつがえすことであつて、その金庫に流れ込んでいた幾千の流れを止め、法王制の指導

者たちの浪費とぜいたくを大いに削減することになるのであった。そればかりか、人々に、キリストだけに救いを仰ぎつつ、責任ある人間として思考し行動するように教えることは、法王の座をくつがえし、ひいては、彼ら自身の権威をも失わせるのであった。このようなわけで、彼らは、神から与えられた知識を拒んだ。そして、神が彼らを啓蒙するためにお送りになった人間に反対することにより、キリストと真理とに對抗したのである。

ルターは自分自身を見たとき震えおののいた。ただ一人の人間が、地上最強の権力に反対しているのであった。彼は、自分がほんとうに神に導かれて教会の権威に対抗しているのかどうか疑うときもあった。「地上の王たちと全世界がおそれおののく法王の威光に反対するわたしは、いったいだれであろうか。…最初の二年間、わたしがどんなに苦しんだか、また、どんな失望、いやどんな絶望に陥ったかは、だれにもわからない」と彼は書いている。^{一四}しかし彼は、落胆したまま放置されてはいなかった。人間の支持を失ったとき、彼は、ただ神を仰いだ。そして、その全能の腕にたよれば絶対に安全であることを学んだ。

弾圧の動き

ルターは、宗教改革の友人に次のように書いた。「われわれは研究や、知力によって聖書を理解することはできない。まず第一になすべきは、祈って始めることである。主が大きなあわれみによって、主のみ言葉に対する真の理解を与えてくださるよう祈り求めねばならない。『彼らはみな神に教えられるであろう』と神ご自身が言われたように、神のみ言葉の解釈者は、この言葉の著者以外にはないのである。自分自身の努力、自分自身の理

解にたよらず、全く神に頼り、神の霊の感化に頼るべきである。これは、体験した者の言葉として、信じてほしい。^{一五}ここに、神は自分たちに、現代に対する厳粛な真理を他の人々に伝えるよう求めておられると感じる者への重大な教訓がある。この真理は、サタンの憎しみと、彼がたくらんだ作り話を愛する人々の憎しみをかき立てる。悪の勢力との闘いにおいては、知力や人間の知恵以上の何物かが必要なのである。

敵が、習慣や伝説、あるいは法王の主張や権威に訴えたときに、ルターは、聖書、しかも聖書のみをもって彼らに対抗した。聖書には、彼らが答えることのできない論証があった。そこで、形式主義と迷信の奴隷たちは、ユダヤ人がキリストの血を求めたように、彼の血を叫び求めた。ローマの熱心党は叫んだ。「彼は異端だ。このような恐ろしい異端者を一時間でも生かしておくことは教会に対する大逆罪である。直ちに彼の処刑台を作ろう。」^{一六}しかし、ルターは彼らの怒りの犠牲にならなかった。神は、彼がなすべき仕事を持っておられた。そして、彼を守るために天使が送られた。しかし、ルターから尊い光を受けた多くの者が、サタンの怒りの目標となって、真理のために恐れることなく責め苦に会い、殺された。

ルターの教えは、ドイツ全国の識者の注意を引いた。彼の説教と著書から光が輝き出て、幾千という人々を目ざめさせ啓発した。生きた信仰が、教会を長い間縛っていた生気のない形式主義に取って代わりつつあった。人は、日ごとに、ローマ教の迷信を信じなくなつた。偏見の防壁がくずれつつあった。ルターがすべての教義とすべての主張を吟味した神の言葉は、人々の心をえぐるもろ刃の剣のようであった。至る所で霊的向上の欲求が起こつた。長年起こつたこともないような、義に対する飢えと渇きが至る所に起こつた。長い間、人間の儀式と地上の仲保者に向けられていた人々の目が、今や悔い改めと信仰をもってキリストと彼の十字架とに向けられた。

このような関心が広く行きわたったことは、なおいっそう法王側の当局者たちを恐れさせた。ルターは、異端の訴えに答えるためにローマに出頭せよという命令を受けた。彼の友人たちは、この命令に震えおののいた。彼らは、すでにイエスの殉教者たちの血を飲んだあの腐敗した都において、どんな危険が彼を待っているかをよく知っていた。彼らは、ルターがローマへ行くことに反対し、彼がドイツにおいて調べを受けるように願いだした。

メラnhitonの協力

この取り決めは、ついに実現することになり、法王の使節が、取り調べのために任命された。法王からこの使節に伝えられた指示によれば、ルターはすでに異端者として宣告されていた。それゆえに使節は、「直ちに起訴して、身柄を拘束する」ように命じられていた。もしも彼が自分の説を固守して譲らず、また使節が彼を逮捕しそこねたときには、「ドイツ全国において、ルターから法律の保護を奪い、彼についた者をみな、追放し、のろい、破門する」権限が彼に与えられていた。^{一七}そればかりでなくて、法王は、この危険な異端を根絶するために、ルターと彼の支持者たちを捕えてローマの裁判所に送ることを怠ったものは、皇帝を別として、教会や国家のどんな高官であろうともすべての者を破門するように、使節に命じた。

ここに法王教の真の精神があらわれている。この記録全体のなかに、キリスト教の原則の痕跡どころか、一般の正義の痕跡さえみられない。ルターは、ローマから遠く離れており、自分の立場を説明したり弁護したりする機会がなかった。にもかかわらず、彼は、その事件が調査される前に、即刻異端の宣告を受け、しかもその同じ

日に、戒告、告訴、裁判、判決を受けている。そしてこうしたことはすべて、教会あるいは国家において唯一で最高の無謬の權威をもつ聖なる父と自称する者によって行なわれたのである。

ルターが真の友の同情と勧告を大いに必要としていたこのときに、神は摂理のもとに、メランヒトンをウィッテンベルクに送られた。メランヒトンは、年は若く、謙そんでひかえめな態度の人であつたが、彼の公正な判断、該博な知識、人を引きつける雄弁は、彼の高潔で厳正な品性とともに、一般の賞賛と尊敬を受けた。彼は優れた才能に恵まれていたが、その温順な性質のほうが目立っていた。彼はまもなく、福音の熱心な使徒となり、ルターの最も信頼する友、貴重な支持者となつた。彼の温順慎重できちようめんな活動は、ルターの勇敢で精力的な面をよく補つた。彼らが協力したことは宗教改革に力をそえ、ルターにとって、大きな励ましの源であつた。

法王使節による審問

審問の場所はアウグスブルクに決まり、改革者ルターは徒歩でそこへ出発した。人々は、彼の身の安全を憂慮した。途中で彼を捕えて殺害するという脅迫が公然と行なわれていたので、彼の友人たちは行かないようにたのんだ。彼らはルターに、しばらくウィッテンベルクを離れて、彼を快く保護してくれる者のところに避難するように勧めさえした。しかし、彼は、神が彼を置かれた場所を離れようとしなかった。どんなあらしが吹きよせようと、彼は忠実に真理を保持し続けなければならなかつた。彼は次のように言つた。「わたしは、争いと闘争の人、エレミヤのようである。しかし、彼らが激しく脅迫すればするほど、わたしの喜びは増し加わる。…彼

らはすでに、わたしの名誉と評判を傷つけた。ただ一つだけ残っている。それはわたしの哀れな体である。これを持っていくがよい。こうして彼らは、わたしの命を数時間縮めることができよう。しかし彼らは、わたしの魂を取ることはできない。キリストの言葉を世界に宣言しようとするものは、いつでも死を覚悟しなければならぬのだ。」^{一八}

ルターがアウグスブルクに到着したという知らせは、法王の使節を大いに満足させた。全世界の注目を集めたやっかいな異端者が、今やローマの権力のもとにはいったように思われたので、使節は彼を逃がすまいと決心した。ルターは、通行券を手に入れていなかった。彼の友人たちは、それを持たずに使節の前に出ることがないよう強く勧告し、彼ら自身が、それを皇帝から入手するようにした。使節は、できればルターを強いて自説を撤回させようとし、もしそれができない場合には、彼をローマへ送り、フスやヒエロニムスと同じ運命に陥れようとしていた。そこで彼は、彼の部下を用いて、ルターを通行券なしで出頭させ、彼の手中に身をゆだねさせようとした。ルターは、そうすることを断然拒否した。彼は、皇帝の保護を保証する文書を受け取るまでは、法王使節の前に出なかった。

法王側は策の一つとして、うわべの穏やかさでルターを説き伏せようとした。使節は彼との会談において、非常に友好的な態度を示した。しかし、彼は、ルターが教会の権威に絶対的に服従すること、そして、議論や質問の余地なくすべての点において服従することを要求した。彼は、自分が相手にしなければならぬ人物の性格を、正しく評価していなかった。ルターは、それに答えて、教会に対する彼の関心、真理に対する願いを述べた。そして、彼が教えたことに対する反対には、すべて答える用意があり、また、どこかの有力な大学に彼の教説の検

討をゆだねる用意があると言った。しかし彼はそれとともに、彼の誤りを証明もせずに取り消しを要求する枢機卿のやり方に抗議した。

唯一の返答は、「取り消せ、取り消せ」ということだけであつた。ルターは、彼の主張が聖書に支持されたものであることを示し、真理を破棄できないことを断言した。法王使節は、ルターの議論に反論できなかった。そこで彼は、言い伝えや教父たちの言葉を引用しながら、激しく責め、あざ笑ひ、またへつらいなどして、ルターに話す機会を与えなかつた。このような状態で会議を続けても何もならないので、ルターは、ついに、彼の答弁を文書によつて提出する許可をやつたのことで受けることができた。

「こうすることにより、圧迫を受けている者は二重の利益を受ける。第一に、書いたものを他の人々の判断に訴えることができる。次に、高慢な言葉によつて圧倒しようとする横柄で多弁な暴君の良心に訴えないとしても恐怖心を起こさせ得る」とルターは、友人に書いて言った。^{一九}

ルターの弁明

次の会見において、ルターは、数多くの聖句の引用によつて十分に支持された、彼の主張の簡潔明瞭で力強い説明を提示した。彼は、この論文を、大声で読んだあとで、枢機卿に手渡した。しかし、彼は、それを軽べつして投げすて、むだな言葉と無関係な引用を集めたものにすぎないと宣言した。そこでルターは、敢然と立ち、高慢な枢機卿自身の立場——言い伝えと教会の教え——から論じて、彼の憶説を完全に粉碎した。

法王使節は、ルターの論法に勝てないのを見て、自制心を失い、激怒して叫んだ。「取り消せ！さもないと、わたしはおまえをローマに送り、おまえの件を審理するように命じられた裁判官たちの前に立たせる。わたしは、おまえとおまえの仲間、そして、いつであらうとおまえを支持する者はみな破門し、教会から追放する。」そして最後に彼は、怒気を帯びた高慢な大声をあげて、「取り消せ。さもないと二度と帰るな」と宣言した。^{二〇}

ルターは直ちに、友人たちと退場し、彼が取り消す意志のないことを明らかに宣言した。これは、枢機卿が意図していたことではなかった。彼は、暴力に訴えてルターを従わせることができると安易に考えていた。こうして、自分の側の支持者だけと取り残された彼は、自分の計画の予期しない失敗をひどく無念がって、みな顔を見まわした。

この時のルターの奮闘は、良い結果をもたらさずにはおかなかった。その場にいた多くの人々は、二人の間を比較する機会が与えられ、彼らの立場の力強さと真実性ととも、彼らのあらわした精神を自分たちで判断することができたのである。それらは、なんと著しく異なっていたことであらう。ルターは、そぼくで謙そんで、神の力によって堅く立ち、真理の側にあった。しかし、法王の使節は、尊大で横柄、高慢で無分別で、聖書に基づいた議論は一つもせず、ただ、激しく、「取り消せ、さもないとローマに送られて罰せられる」と叫んでいた。

ザクセン侯フリードリヒによる保護

ルターは通行券を得ていたにもかかわらず、法王側は彼を捕えて投獄しようとしていた。彼の友人たちは、こ

れ以上彼がとどまっても無益なので、直ちにウィッテンブルクに帰り、彼の意向を極秘にしておくために細心の注意を払うようにと勧めた。そこで彼は、長官がつけてくれた案内一人をつれて、夜明け前に、アウグスブルクを馬に乗って出発した。彼は、さまざまな予感を抱きながら、静まりかえった暗い町の通りをひそかに急いだ。残酷で油断のない敵は、彼をなきものにしようと策動していた。果たして彼は、彼らのわなを逃れることができるであろうか。この時こそ、非常な心配と熱心な祈りの時であった。彼は、町の城壁の小さな門に到着した。門は彼のために開かれ、彼は道案内とともに、なんの妨げも受けずに通りぬけた。こうして安全に外に出るや、彼らは急いで逃げ去った。そして、法王使節がルターの出発を聞く前に、彼は迫害者たちの手のとどかないところに行っていた。サタンと彼の使者たちは敗北した。ちようど、一羽の鳥が捕獲者のわなを逃れたように、彼らは手中におさめたと思った者を逃がしてしまったのである。

ルターの逃亡の知らせを聞いて、法王使節は驚きと怒りに度を失った。彼は、教会を騒がせるこの者を、賢明に、かつ断固として処置することによって、大きな栄誉を受けることを期待していたのであった。しかし、彼の希望はかなえられなかった。彼は、ザクセン(サクソニア)の選挙侯フリードリヒに手紙を書いて憤りをもらし、激しくルターを非難し、フリードリヒがルターをローマに送るか、それともザクセンから追放することを要求した。

ルターは、自分を弁護して、使節または法王が聖書に基づいて彼の誤りを示すよう求め、もし彼の教義が神のみ言葉と矛盾していることを示し得るならば、彼はそれらを放棄するときわめて厳肅に誓った。そして、彼は、このような聖なる運動のために苦しむに足るものとされたことを神に感謝した。

選挙侯は、まだ改革の教義についての知識はほとんどなかったが、ルターの率直で力強い明快な言葉に深く感動した。そして、ルターが誤っているということが証明されるまで、フリードリヒは彼の保護者となる決心をした。法王使節の要求に答えて、彼は次のように書いた。『アウグスブルクにおいて、マルチン博士があなたの前に出頭したのであるから、それで満足されるべきである。われわれは、あなたが彼の誤りを説得せずに取り消しを迫るとは考えていなかった。わが国の識者はだれ一人として、マルチン博士の教義が、不敬、反キリスト教的、あるいは異端的であるとは言っていない。』さらに、選挙侯は、ルターをローマに送ること、あるいは彼の国から追放することを拒否した。」^三

選挙侯は、社会の道徳的抑制が一般に崩れつつあるのを見た。改革の一大事業が必要であった。もしも人々が神の律法を認めて従い、啓発された良心の命令に従うならば、複雑で広範囲に及ぶ禁令や罰則は不必要になるのであった。彼は、ルターがこの目的を達成するために活動しているのを認め、教会内に良い感化が及んでいるのを心ひそかに喜んだ。

彼はまた、ルターが大学の教授として大いに成功を収めているのを認めた。ルターが城教会に彼の論題を掲示してから一年が経過しただけであるが、すでに万聖節の時に教会に出席する巡礼の数は、いちじるしく減少した。ローマの礼拝者と献金は減少したが、そのかわりに別の階層の人々がウィッテンベルクにやって来た。彼らは聖遺物を崇拜する巡礼者たちではなくて、大学の教室を満たすところの学生たちであった。ルターの著書は、至る所で、聖書に対する新しい興味をよび起こし、ドイツ全国からだけでなく、他の国々からも学生が大学に群がって来た。ウィッテンベルクを初めて望み見た青年たちは、「彼らの手を天にあげ、おかしなシオンからのように、

この町から真理の光が輝き出るようになったことを神に感謝した。その光は、ここから、最も遠い国々にまで広がったのであった。」^{二三}

改革運動の進展

ルターは、まだローマ教の誤りから部分的に改宗したにすぎなかった。しかし、聖書を法王の教書や法典と比較したときに、彼は、驚きに満たされた。「わたしは、今、法王の教書を読んでいる。そして、…法王が反キリスト自身であるのか、それとも彼の使徒であるのか、わたしは知らない。だがキリストは、教書のなかで、はなはだしく誤り伝えられ、十字架につけられている」と彼は書いた。^{二三}しかしルターは、この時はまだローマ教会の支持者であって、その教会の交わりから分離することなど考えてもいなかったのである。

ルターの著書と教義とは、全キリスト教国に広がっていった。運動は、スイスとオランダにも広がった。彼の著書の何冊かは、フランスとスペインにもはいつていった。英国では、彼の教えは生命の言葉として迎えられた。真理は、ベルギーやイタリアにも及んだ。幾千のものが、死んだような眠りから、信仰生活の喜びと希望とに目ざめつつあった。

ルターの攻撃によって、ローマはますます激怒した。そして、彼の熱狂的な敵たちのあるもの、また、カトリック大学の博士たちでさえ、この反逆的修道士を殺しても罪にならないと宣言した。ある日、一人の見知らぬ人が、ピストルを外套の下に隠して、ルターに近づき、なぜこのように一人で歩いているのかを聞いた。ルターは

答えて、「わたしは、神の手の中にある。神はわたしの力、わたしの盾である。人間はわたしに何をする事ができようか」と言った。^{二四}この言葉を聞いて、見知らぬ人は真っ青になり、天使の前から逃げるように、去っていった。

ローマは、ルターをなきものにしようとしていた。しかし、神が彼の防御であった。彼の教義は至る所の「民家に、修道院に…貴族の城に、大学に、そして王の宮殿に」伝えられた。そして、貴族たちは、彼の運動を支持するために立ち上がっていた。^{二五}

ちょうどこのころ、ルターはフスの著書を読み、彼自身が支持し教えていた信仰による義という大真理が、ボヘミアの改革者によって唱えられていたことを知ったのである。「パウロ、アウグスティヌス、そしてわたしは、知らずしてフス派であった」とルターは言った。「真理は一世紀前に伝えられ、しかも焼かれたことに対して、神は必ず世界を裁かれるであろう」と、彼は続けた。^{二六}

改革運動の危機

キリスト教の改革についてドイツの皇帝と貴族とに訴えたなかで、ルターは、法王のことを次のように書いた。「キリストの代理であると自分で主張する人間が、どんな皇帝も及ばないような豪華さを誇示するのを見るのは、恐るべきことである。この者は、貧しいイエス、または謙そんなペテロに、似ているであろうか。人々は、彼が世界の主であると言っている。しかし、彼が、代理者であると誇っているキリストは、『わたしの国はこの世の

ものではない』と言われた。代理者の国は、彼の主の国より広くてよいであろうか。』^{二七}

彼は、大学について、このように書いた。「大学というところは、聖書を説明し、それを青年たちの心に刻みこむために熱心に努力するのでなければ、地獄の大きな門になってしまうのではないかと、わたしは恐れる。わたしは、だれも聖書が最高位を占めていないところに子供を送らないよう勧告する。人々が神の言葉を絶えず研究していない学校は、すべて腐敗するにきまっている。」^{二八}

こうした訴えは、速やかにドイツ全国に配布され、人々に強力な影響を及ぼした。全国民が奮い立ち、群衆は改革の旗のもとに結集した。ルターの敵たちは、ふくしゅうの念に燃え、彼に対して断固とした処置をとるように、法王に迫った。そこで、彼の教義を直ちに禁止する命令が出された。ルターと彼の支持者たちには、六〇日間の猶予が与えられた。そして、もしその後も取り消さないならば、彼らはみな破門されるのであった。

これは、宗教改革にとって、非常な危機であった。幾世紀の間、ローマの破門宣告は、有力な君主たちを震えあがらせ、強力な帝国を悲嘆と荒廃に陥れてきた。破門された人々は、一般の人々から恐怖と嫌悪の情をもって見られ、仲間との交際を絶たれ法律の保護外のものとして、かり出されて処刑されるのであった。ルターは、彼のまわりに吹き荒れる暴風雨に気づかないわけではなかった。しかし彼は堅く立って、キリストが彼の支持者であり盾であることを信じた。殉教者の信仰と勇氣をもって、彼は次のように書いた。「何が今起ころうとしているか、わたしは知らない。また知ろうとも思わない。……どこに打撃が加えられようとも、わたしは恐れない。木の葉一枚でも、神のみ心でなければ落ちないのだ。まして神は、われわれをどんなにみにとめておられることであろう。肉体をとって来られたみ言葉イエスご自身がなくなられたのであるから、み言葉のために死ぬこと

は何でもない。もしわれわれが彼と共に死ぬならば、彼と共に生きるのである。そして、彼がわれわれに先だつて通られたものをわれわれも通り、われわれは彼があられるところへ行き、彼と共に永遠に住むのである。」^{二九}

法王の教書がルターのところに到着したときに、彼は言った。「わたしはこれを、不敬で虚偽のものとして軽べつし、排撃する。……ここで罪に定められているのは、**キリスト**ご自身である。……わたしは、最大の事業のためにこのような苦難に会うことを喜びとする。わたしはすでに、心の中に大きな自由を感じている。なぜなら、わたしはついに、法王が反キリストであつて、彼の座はサタン自身の座であることを知ったからである。」^{三〇}

ローマ教会との最後の分離

しかしローマの命令は、影響を及ぼさずにはいなかった。投獄、拷問、剣は、服従を強いる有力な武器であつた。弱く迷信的な人々は、法王の教書の前で震えた。概して人々はルターに対して同情的ではあつたが、生命を改革事業にかけることはあまりにも惜しいと思う者が多かつた。万事は、ルターの事業が、今にも終わろうとすることを示すように思われた。

しかしルターは、びくともしなかつた。ローマは、彼を破門した。そして世界は、彼が死ぬか、それとも服従を強制されるかするに違ひない、と思つて見ていた。しかし彼は、恐るべき力をもつて、教会に有罪の宣告を投げかえし、永遠に教会と分離する決意を公然と宣言した。ルターは、大ぜいの学生たちや博士たち、そしてあらゆる階層の一般市民たちの目の前で、法王の教書を、教会法規や教令集、また法王権を支持する文書類とともに



ルター



メランヒトン神聖

ローマ帝国皇帝カール 5 世



ザクセン侯フリードリヒ賢公



焼き捨てた。「わたしの敵たちは、わたしの著書を焼くことによって、一般の人々の心の中での真理の働きを妨げ、彼らの魂を滅ぼそうとした。それだから、わたしも彼らの著書を焼く。重大な闘いが、今始まったのである。これまで、わたしはただ法王と遊戯をしていたに過ぎなかった。わたしは、この仕事を神の名によって始めた。それは、わたしがいなくても、神の力によって終了するであろう。」^三

ルターの運動の勢力の弱さをあざけた敵の非難に答えて、ルターは言った。「神の選びと召しがわたしになく、わたしを軽べつしても神ご自身を軽べつすることになる恐れはないと、いったいだれが知り得ようか。エジプトを去ったモーセは、ただ一人であった。アハブ王の治世において、エリヤは一人であった。イザヤは、エルサレムで一人であった。エゼキエルは、バビロンにおいて一人であった。…神は、大祭司とか、他の偉大な人物を預言者に選ばれなかった。神は、たいてい、身分の低い卑しめられた人を選び、あるときは、羊飼いのアモスをさえ選ばれた。各時代において、聖徒たちは、偉大な人々、王、貴族、祭司、賢者などを、命がけで譴責したのである。…わたしは、自分が預言者であるとは言っていない。しかし、彼らは、わたしが一人であり彼らが多数であるというそのことを恐れるべきである。わたしは、自分の側に神の言葉があり、彼らの側にはないことを確信している。」^三

とは言うものの、ルターが教会から最終的に分離する決心をするまでには、激しい闘いを経なければならなかった。ちょうどこのころ、彼は次のように書いた。「わたしが子供の時から教えられたことを捨て去ることが、どんなに困難なことであるかを、毎日、いよいよ強く感じる。たとえ、わたしの側にわたしを支持する聖書があっても、わたしがあえてただ一人立って法王に反対し、彼を反キリストと呼ぶことは、なんとわたしを苦しめた

ことであろう。わたしの心の悩みは、なんと激しかったことであろう。『お前だけが正しいのか。他のすべての者は間違っているのか。結局間違っているのがおまえ自身で、多くの魂をおまえの誤りに引き入れているとすれば、どうするのか。永遠の罰を受けるのはだれか。』という法王側からたびたび聞かれた質問を、わたしは何度くり返して自問し、心を痛めたことであろう。こうして、わたしは自分自身と闘い、サタンと闘った。そして、ついにキリストが、彼ご自身の誤ることのない言葉で、わたしの心を強め、これらの疑念に勝たせてくださったのである。』^{三三}

法王は、ルターが取り消さなければ破門すると脅していたが、それが実行に移された。新しい教書が出され、ルターがローマ教会から分離したことを宣言するとともに、彼が天ののろいを受けたものであると非難した。そして、彼の教義を信じる者はみな、同じ宣告下に置かれるのであった。大いなる闘いは、いよいよ本格的に始まった。

改革者の宿命

それぞれの時代において、その時代に特に適切な現代の真理を伝えるために神に用いられる者は、すべて、反対に会わなければならない。ルターの時代には、現代の真理、すなわち、その時代において特別重要な真理があった。今日の教会のためにも現代の真理がある。みこころのままに万事を行なわれる神は、人々をさまざまの事情のもとにおいて、その時代、また、彼らがおかれた状態に応じた特殊な任務をお命じになる。もし彼らが、与

えられた光を尊重するならば、真理に対するいつそう明らかな理解が与えられる。しかし、真理は、法王教徒たちガルターに反対したように、今日も多数の者の歓迎を受けないのである。昔と同様に、神の言葉の代わりに人間の理論や伝説を受け入れるという同じ傾向がある。この時代の真理を伝える者は、初期の改革者たちより歓迎されると期待してはならない。真理と誤謬、キリストとサタンとの間の大争闘は、この世界の歴史の終わりまで、激しさを増すのである。

イエスは、彼の弟子たちに次のように言われた。「もしあなたがたがこの世から出たものであったなら、この世は、あなたがたを自分のものとして愛したであろう。しかし、あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世から選び出したのである。だから、この世はあなたがたを憎むのである。わたしがあなたがたに『僕はその主人にまさるものではない』と言ったことを、おぼえていなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害するであろう。また、もし彼らがわたしの言葉を守っていたなら、あなたがたの言葉をも守るであろう」(ヨハネ一五ノ一九、二〇)。また一方、主は次のように言明された。「人が皆あなたがたをほめるときは、あなたがたはわざわざいいだ。彼らの祖先も、にせ預言者たちに対して同じことをしたのである」(ルカ六ノ二六)。この世の精神は、今日も昔と同様に、少しもキリストの精神と調和してはいない。そして、神のみ言葉をそのまま純粹に説く者は、昔以上の歓迎を受けることはない。真理に対する反対の形態は変わり、巧妙になって、公然と敵意を表わすことはないかもしれない。しかし、同じ敵対心が依然として存在し、時の終わりに至るまで表わされるのである。

注

- 一 D'Aubigné, b.2, ch.2.
- 二 *ibid.*
- 三 *ibid.*, b.2, ch.3.
- 四 *ibid.*, b.2, ch.4.
- 五 *ibid.*, b.2, ch.6.
- 六 *ibid.*
- 七 D'Aubigné, b.5, ch.2.
- 八 John C. L. Gieseler, "A Compendium of Ecclesiastical History," par.4, sec.1, par.5.
- 九 D'Aubigné, b.3, ch.1.
- 一〇 *ibid.*
- 一一 K. R. Hagenbach, "History of the Reformation," vol.1, p.96.
- 一二 D'Aubigne, b.3, ch.4.
- 一三 *ibid.*, b.3, ch.6.
- 一四 *ibid.*
- 一五 *ibid.*, b.3, ch.7.
- 一六 *ibid.*, b.3, ch.9.
- 一七 *ibid.*, b.4, ch.2.
- 一八 *ibid.*, b.4, ch.4.
- 一九 Martyn, "The Life and Times of Luther," pp.271, 272.
- 二〇 D'Aubigné, London ed., b.4, ch.8.

- 一一 D'Aubigné, b.4, ch.10.
- 一二 *ibid.*
- 一三 *ibid.*, b.5, ch.1.
- 一四 *ibid.*, b.6, ch.2.
- 一五 *ibid.*
- 一六 Wylie, b.6, ch.1.
- 一七 D'Aubigné, b.6, ch.3.
- 一八 *ibid.*
- 一九 *ibid.*, 3d London ed., Walther, 1840, b.6, ch.9.
- 二〇 D'Aubigné, b.6, ch.9.
- 二一 *ibid.*, b.6, ch.10.
- 二二 *ibid.*
- 二三 Martyn, pp.372, 373.

第八章

われここに立つ

——国会におけるルター——

カール五世の即位と国会の召集

新皇帝カール五世（チャールズ五世）がドイツの帝位についた。するとローマの使節は、急いで祝いの言葉を述べると共に、彼の権力を用いて宗教改革を抑えつけるように勧めた。他方、カールが帝位につくに当たって大いに力があつたザクセンの選挙侯は、ルターに発言の機会を与えるまではどんな処置もとらないように嘆願した。こうして、皇帝は、非常な当惑と苦境に立たされた。法王側は、ルターに死刑を宣告する勅令が出なければ満足しなかった。選挙侯は、「皇帝もまた他のだれも、ルターの著書に反論していない」と断固として言明し、それゆえに、「ルターは通行券を与えられて、学識のある、敬虔で公平な裁判官による法廷に出頭できるようにすべきである」と願い出た。

すべての党派の注目は、カールの即位後まもなくウオルムスで開かれたドイツ国会に注がれた。ドイツの諸侯たちの多くは、審議のために初めて若い皇帝に会見するのであり、この国会において審議すべき重要な政治問題やその他の案件があつた。祖国のあらゆる地方から、教会と国家の高官たちが集まつた。高貴の生まれで、勢力を持ち、世襲の権利を主張して譲らない領主たち、階級と権力における優越感に意気揚々としている威厳ある聖職者たち、優雅な騎士たちとその武装した家臣たち、外国や遠国の大使たちなどが、みなウオルムスに集まつた。しかし、この大会議において、最も興味深い問題は、ザクセンの改革者ルターの件であつた。

カールはこれ以前に、選挙侯にむかつて、ルターを同伴して国会に来るよう指示し、彼に対する保護と、問題点に関し資格ある人物と自由に討議することとを約束していたのであつた。ルターは、皇帝の前に出ることを切望していた。この時、彼の健康は非常に損われていたが、しかし彼は選挙侯に次のように書いた。「もしわたしが健康な体でウオルムスに行くことができなければ、病氣のまま運ばれて行きたいと思います。というのは、もし皇帝がわたしを召しておられるなら、それは神ご自身の召しであることを、わたしは疑うことができないからです。もし彼らがわたしに暴力をふるうようなら、そしておそらくそうすることでしょうが（なぜなら彼らがわたしに出頭を命じるのは、わたしから教えを受けるためでないからです）、わたしはこれを主のみ手にゆだねます。燃える炉の中から三人の青年を救い出された神は、なお生きて支配しておられます。もし神がわたしをお救いにならなくても、わたしの命など取るに足りないものです。ただ福音がよこしまな人々のちよう笑を受けることがないように努めましょう。彼らが勝利を得ることのないように、わたしたちは福音のために血を流しましょう。すべての人の救いのために最も貢献するのは、わたしの命であるか、それとも死であるか、それを決定するのはわたしで

はありません。…あなたはわたしにどんなことでも期待なさってけっこうです。…ただし、逃げることに信仰を取り消すこと以外は。逃げることなど、わたしにはできませんし、まして、取り消すことなどできません。」^二

法王使節による攻撃

ルターが議会に姿を現わすという知らせがウォルムスに伝わると、各方面で大騒ぎとなった。今回の事件を特に委任されていた法王使節アレアンダー（アレアンドロ）は、驚き、憤激した。彼は、その結果が、法王側にとっては破滅的であることを認めた。法王がすでに宣告を下した件について取り調べを始めることは、法王の権威を軽べつすることであった。そればかりでなく、彼は、ルターの雄弁で強力な議論によって、諸侯たちの多くが法王側から引き離されることを懸念した。それゆえに、彼は、ルターがウォルムスに来ないように、激しくカールに諫言した。このころ、ルターの破門を宣言した教書が公布された。使節の申し入れとともに、この教書は、皇帝を屈服させた。皇帝は選挙侯に、もしルターが取り消さないならば、彼はウィッテンベルクにとどまっているべきであると書き送った。

アレアンダーは、この勝利で満足せず、ルターを罪に定めるために、ありとあらゆる権力と策略を用いた。彼は、非常なしつこさで、諸侯や高位聖職者、そしてその他の議員たちの注意をこの問題に引き、ルターに、「扇動、反逆、不敬、冒瀆」の罪をきせた。しかし、法王使節のあらわした激しい感情は、彼がどんな精神に動かされているかをあまりにも明らかにした。「彼は、熱意と敬神というよりは、憎しみとふくしゅうの念に動かされ

ている」と一般の人々は言った。^三 議会の大部分の人々は、これまでになくルターに好意を示した。

アレアンダーは、ますます熱心に、法王の布告を実行すべきことを皇帝に迫った。しかし、ドイツの法律によれば、これは諸侯たちの同意を得ずにすることができなかった。そこでカールは、法王使節のしつこい要求に負けて、彼にその件を議会に提出することを命じた。「それは法王使節にとって誇らしい日であった。大会衆が集まっていたが、事件はさらに重大なものであった。アレアンダーは、すべての教会の母であり女主人であるローマのために、訴えるのであった。」彼は、集まったキリスト教諸国の前で、ペテロの首位権を擁護するのであった。「彼は雄弁の才を持っていた。そして、この重大な時機に立ちいたった。ローマが罪に定められるに先だって、莊厳きわまる法廷において、ローマの第一流の雄弁家が現われて訴えることは、神の摂理であった。」^四 ルターに好感を持っていた人々は、アレアンダーの演説の結果にいくぶんか不安を抱いた。ザクセンの選挙侯は出席していなかったが、顧問官たちに命じて出席させ、法王使節の演説を筆記させた。

アレアンダーは、学識と雄弁のかぎりをもって、真理をくつがえそうとした。彼はルターを、教会と国家の敵、また、生ける者と死せる者との、聖職者と信徒との、公会議と個々のキリスト者との、敵であると告発し続けた。「ルターの誤りは、十万の異端者」を焼くに匹敵するものであると彼は宣言した。

最後に彼は、改革主義の信仰を支持する人々を軽べつしようとした。「これらルター派とは、いったい何であるうか。彼らは無礼な教師、腐敗した司祭、自堕落な修道士、無知な弁護士、墮落した貴族といった連中と、彼らが誤らせ、邪道に導いたところの民衆である。彼らに比べてカトリックの側は、その数、能力、権力において、なんと優れていることであろう。このはなばなしい会議における満場一致の布告は、愚かな者の目を開き、軽率

な者に警告を与え、迷っている者に決心を与え、弱い者に力を与える。」^五

各時代における真理の擁護者たちは、こうした武器によって攻撃されてきたのである。確立された誤りに反対して、神のみ言葉の明白で直接的な教訓をあえて提示するものはみな、今でも同じ議論に迫られる。「これらの新しい教義の説教者たちは、いったいだれであるか」と、受けのよい宗教を望む人々は叫ぶ。「彼らは、無学で少数の貧民階級である。それなのに彼らは、自分たちは真理を持ち、神の選民であると主張する。彼らは、無知で欺かれているのだ。われわれの教会は、数においても、勢力においても、なんとはるかに優れていることであろう。われわれのなかには、なんと多くの偉人や学者がいることであろう。われわれの側には、なんと大きな力があることだろう。」このような議論は、世界に対して効果的な影響力を持っている。しかしそれは、ルターの時代におけると同様に今日においても、決定的な議論ではないのである。

宗教改革は、多くの者が考えているように、ルターの時代をもって終わったのではない。それはこの世界の歴史の終末まで続くのである。ルターは、神が彼の上に照らしてくださいと光を他に反映して、大事業をしなければならなかった。しかし彼は、世界に与えられるはずの光を、全部受けたものではなかった。その当時から今に至るまで、新しい光が絶えず聖書を照らし、新しい真理が常にあらわされてきたのである。

議会を導かれる神の力

法王使節の演説は、議会に深い印象を与えた。そこには、明快で説得力のある神のみ言葉の真理を提示して法

王側の闘士を打ち負かすルターはいなかった。ルターを弁護しようとする者もいなかった。ルターとその教義を罪に定めるだけでなくて、できれば異端を根絶しようという一般的な傾向が出てきた。ローマは、その主張を弁護する絶好の機会を得たのであった。自己を擁護するために言うべきことは、すべて言ってしまった。しかし、一見勝利と思われたことが、敗北のしるしであった。今後、公然たる戦いの場において争われるときに、真理と誤謬の対照はいつそう明らかに見られるのであった。このとき以後ローマは、決してこれまでのように安全に立つことはできないのであった。

国会の議員たちの大部分は、ルターをローマの報復の手に引き渡すことをためらわなかったとはいえ、多数の者は、教会内に行なわれる墮落を認めて嘆き、教権制度の貪欲と腐敗のためにドイツ国民がこうおつてきた虐待を止めたいと望んだ。法王使節は法王の支配を、最も都合のよさそうな見地から提示していた。ここで主は、国会の一議員を動かして、法王の暴政の結果をありのままに描かせられた。ザクセンのゲオルク公爵は、集まった貴族たちの前で、断固とした気高い態度で立ち上がり、法王制の欺瞞と悪虐とその悲惨な結果とを、恐るべき正確さで指摘した。彼は、最後に次のように言った。

「これらは、ローマがそのために非難されているところの悪弊の一部である。そこには恥も外聞もない。彼らの唯一の目的は、…金、金、金である。したがって、真理を語るべき説教者たちは、虚偽のほかは何も語らず、しかもそのことが黙認されているだけでなく、報賞にあずかっている。それは、彼らの虚偽が大きければ大きいほど、彼らの利益も大きいからである。この汚れた泉から、こうした腐敗した水が流れるのである。放蕩は貪欲と結びついた。…ああ、多くの哀れな魂を永遠の滅びに陥れているのは、聖職者たちの背徳行為である。一大

改革が行なわれねばならない。」^六

ルター自身であっても、法王制の害悪についてこれ以上巧みに力強く弾劾することはできなかったであろう。しかも、演説者が、ルターに断固として反対していた敵であったことが、彼の言葉に大きな力をそえた。

もし、集まった人々の目が開かれたならば、彼らは、そのなかに神の天使たちがいて、誤謬の暗やみを貫いて光を輝かし、彼らが真理を受け入れるようにその心を開いているのを見たことであろう。宗教改革の敵たちさえも支配し、まさに成し遂げられようとする大事業への道を備えたのは、真理と知恵の神の力であった。マルチン・ルターは、そこにいなかった。しかし、ルターよりも偉大なおかたの声が、その会議において聞かれたのであった。

ドイツ国民に重く課せられた法王制の抑圧を列举するために直ちに委員会が国会によって指名された。一〇一項目にわたる一覧表が、これらの悪弊を直ちに矯正することを要求した嘆願書と共に、皇帝に提出された。「キリスト教界の霊的頭を取り囲んでいる背徳行為のために、キリスト者の魂は、なんという損害、なんという破壊、なんという略奪をこうおぼっていることでしょう。わが国民の没落と汚辱を阻止することは、われわれの義務であります。このような理由から、われわれは、陛下が全般的な改革をお命じになり、その実施に当たられるよう、切に嘆願するものであります」と請願者たちは述べた。^七

ルターの召喚

次に議会は、ルターが彼らの前に出頭することを要求した。アレアンダーの嘆願、抗議、威嚇にもかかわらず、

皇帝はついにこれに同意し、ルターは議会に出頭する命令を受けた。召喚状とともに、無事帰国することを保証した通行券も発行された。これらは、彼をウォルムスに連れてくる命令を受けた使者が、ウィッテンベルクに持ってきた。

ルターの友人たちは、恐れ悲しんだ。彼らは、ルターに対する敵の偏見を知っていたので、彼の通行券さえ空文に帰すのではないかと懸念し、危険に身をさらさぬようにと願った。ルターは、次のように答えた。「法王教徒たちは、わたしがウォルムスに来ることを望まず、ただ、わたしの断罪と死を求めている。それはかまわない。わたしのためではなく、神の言葉のために祈ってほしい。…キリストは、これら誤謬の使者たちに打ち勝つように、み霊をわたしに与えられるであろう。わたしは一生彼らを軽べつする。わたしは死によって彼らに勝利するであろう。彼らはわたしに取り消しを強いようとして、ウォルムスで忙しく働いている。そして、わたしの取り消しは、こうである。わたしは以前、法王はキリストの代理であると言った。今、わたしは、法王はキリストの敵であり、悪魔の使徒であると断言する。」^ハ

ルターは、この危険な旅に一人で出なくてもよかった。皇帝の使者のほか、彼の最もしっかりした三人の友人たちが、同道する決心をした。メランヒトンも、彼らに加わることを熱望した。彼の心はルターの心と結ばれていた。彼は同行を切望し、必要ならば牢獄や死をも共にしたいと望んだ。しかし、彼の願いは許されなかった。もしルターがなくなれば、改革の希望は、この年若い共労者を中心としなければならないのであった。ルターは、メランヒトンと別れるときに、次のように言った。「もし、わたしが帰らず、敵がわたしを殺しても、教えつづけて、真理に堅く立ってほしい。わたしの代わりに働きなさい。…きみが生き残るならば、わたしの

死はたいしたことではないのだ。」ルターの出発を見るために集まった学生や市民は、深い感動を受けた。福音に心を動かされた群衆は、涙ながらにルターに別れを告げた。こうして、改革者ルターとその一行は、ウィッテンベルクを出発した。

ウォルムスへの道

彼らはその途中で、人々が悲しい予感に心を重くしているのを見た。ある町では、彼らに対してなんの敬意も示されなかった。夜、泊まったところでは、同情的な一司祭が、ルターの前に、殉教したイタリヤの改革者の肖像画をかかげて、彼の憂慮を表わした。翌日、彼らは、ルターの著書に対する有罪の宣告がウォルムスで下されたことを知った。皇帝の使者たちが皇帝の命令を布告し、禁じられた書籍を長官のところに持参するように、人々に呼びかけていた。使者は、会議におけるルターの安全を気づかい、すでにルターの決意は揺らいでいるものと考えて、なお彼が前進する希望であるかどうかをたずねた。彼は、「すべての町で妨害を受けようとも、わたしは前進する」と答えた。

エルフルトでは、ルターは大いに歓迎された。彼は、賞賛する群衆にかこまれて、前によく托鉢して歩いた通りを過ぎた。彼は、彼の修道院の部屋を訪れ、当時の苦悩——その苦悩を通して、光が彼の魂を照らし、そしてその光が、今ドイツにあふれているのであるが——を思った。彼は、説教をするように勧められた。彼は、これを禁止されていたのであるが、使者の許しがあったので、かつては修道院の卑しい仕事をしていた者が、壇に上

った。

彼は、集まった群衆に、「平安があなたがたにあるように」というキリストの言葉をもって語りかけた。「哲学者、博士、著者たちは、永遠の生命を得る道を人々に教えてきたが、成功しなかった。わたしが今それをお伝えしよう。…神は、死を滅ぼし、罪を根絶し、陰府の門を閉じるために、一人の人、すなわち、主イエス・キリストを死からよみがえらせられた。これが救いの業である。…キリストは勝利された。これは、喜ばしい知らせである。そして、われわれは、彼の業によって救われた。われわれ自身の行為によってではない。…われわれの主イエス・キリストは、『安かれ、わたしの手を見なさい』と言われた。つまり、おお、人よ、見よ、あなたの罪を除き、あなたを贖ったのは、わたし、わたしだけである。そしてあなたは平和を得た、と主は言われるのである。」

彼は、引き続き、真の信仰は聖い生活によってあらわされることを示した。「神は、われわれを救われたのであるから、われわれの行為が、神に受け入れられるようにしようではないか。あなたは富んでいるか。それならあなたの財産を、貧者の必要にささげよう。あなたは貧しいか。それならあなたの奉仕が富んでいる人々に喜ばれるようにしよう。もしあなたの労働が、ただあなたのためだけに役立つものであれば、神につくしているように見せかけている奉仕は、偽りである。」^二

人々は、あたかも魅せられたかのように聴き入った。これらの飢えた魂に、生命のパンが裂き与えられた。彼らの前で、キリストは、法王や法王使節、皇帝や国王たちよりも高く掲げられた。ルターは、自分の危険な立場については何も語らなかった。彼は人々に、自分のことを考えさせたり、同情させたりしようとはしなかった。

彼はキリストを瞑想して、自分を見失ってしまった。彼は、カルバリーの人なるイエスの後ろに隠れ、イエスを罪人の贖い主として指し示すことだけを求めている。

ウォルムス到着

ルターが旅を続けていくと、至る所で非常な興味をもって迎えられた。熱心な群衆が彼を取り囲み、好意を寄せる人々が、ローマ教側の意図することについて、彼に警告した。「彼らは、あなたを焼き殺し、ヨハン・フスに行なったと同様に、あなたの体を灰にするでしょう」とある者は言った。ルターはそれに答えた。「たとえば彼らが、ウィッテンベルクからウォルムスまで火を点じ、炎が天にまでとどいたとしても、わたしはその中を主の名によって過ぎ、彼らの前に立つ。わたしは、この巨獣のあごに入り、その歯を砕いて、主イエス・キリストのあかしをしよう。」^二

ルターがウォルムスに近づいたという知らせは、大きな騒動を引き起こした。彼の友人たちは彼の身の安全を気づかい、彼の敵たちは自分たちの側の成功をあやぶんだ。彼が町にはいるのを断念させようとす非常な努力がなされた。法王側の扇動によって、ルターは、友好的な騎士の城へ行くようにと勧められた。そこではすべての困難が円満に解決されうる、というのであった。友人たちは、さし迫った危険を述べて、彼に恐怖心を起こさせようとした。しかし、彼らの努力は無に帰した。ルターは少しも動ずることなく、「たとえば、ウォルムスに屋根の瓦のように多くの悪魔がいても、なおわたしはウォルムスへ行く」と断言した。^三

彼がウォルムスに到着したとき、大群衆が門に集まって彼を歓迎した。皇帝を出迎えるときでも、これほどの群衆が集まったことはなかった。激しい興奮が起こった。そして群衆の中からかん高くもの悲しい声が葬送歌を歌い出して、ルターを待っている運命を警告した。しかし彼は、馬車から降りるとき、「神はわたしの高きやぐらである」と言った。

法王側は、ルターがほんとうにウォルムスに姿を現わすとは考えていなかった。彼の到着に彼らは驚いた。皇帝は、直ちに議員を召集して、どうすべきかを諮った。厳格な法王教徒である、一人の司教は、次のように言った。「われわれはこの問題を長く考慮してきました。どうか皇帝は、この男を直ちに処分してください。」

ジギスムントはヨハン・フスを火刑にしたではありませんか。われわれは、異端者に通行券を与えることも、それに束縛されることもありません。」「いや、われわれは約束を守らねばならない」と皇帝は言った。^{一四}こうしてルターは、発言することにきまった。

全市は、この驚くべき人物を見ようとわきかえり、まもなく、彼の宿舎には訪問者が殺到した。ルターは、病気がなかつたばかりであった。彼は、丸二週間かかった旅行に疲れていた。そして、翌日の重大なできごとに直面する準備をしなければならなかった。彼には安静と休養が必要であった。しかし、貴族、騎士、司祭、市民など、彼に会いたい人々が続々とつめかけて、彼はわずかに二、三時間の睡眠しかとれなかった。これら訪問者の中には、聖職者たちの悪弊の改革を大胆に皇帝に要求していた多くの貴族たちがいた。ルターは、この人々は「みな、わたしの福音によって解放された人たちだ」と言った。^{一五}友人たちだけでなく、敵もまた、この不屈の修道士を見ようとしてやってきた。しかし彼は、ゆるがめ冷静さをもって彼らに面会し、だれにでも、威厳と知恵をも

って答えた。彼の態度はしっかりしていて、勇敢であつた。彼の青ざめた、やせた顔には、労苦と病気のあとがあつたが、思いやりと喜びの表情さえたたえていた。厳肅で真剣な彼の言葉には、敵でさえ全くたちうちできない力があつた。これには敵も味方も驚いた。ある者たちは、彼の上に神の力が加わつたと信じたが、キリストについてパリサイ人が言つたように、「彼は悪霊にとりつかれている」と言う者たちもいた。

国会での審問

ルターは、翌日、議会に出頭するように命じられた。式部官が彼を議場に案内することになっていたが、そこまで行くのが非常に困難であつた。どの街路も、法王の権威にあえて抵抗した修道士を見ようとする群衆でいっぱいであつた。

彼がまさに、裁判官たちの前に出ようとしたとき、幾多の戦いを経た英雄である一老将軍が、やさしく彼に言った。「哀れな修道士、哀れな修道士よ。おまえは、わたしや、その他の将軍たちのどのような血みどろの激戦よりも、もっと崇高な戦いをしようとしている。だが、おまえの主張が正しく、おまえがそれを確信しているならば、神の名によつて前進せよ。何も恐れるな。神はおまえをお見捨てにならないだろう。」^{一六}

ついに、ルターは、議会の前に立つた。皇帝が玉座を占めていた。彼の回りには、帝国内の最も著名な人々が並んでいた。マルチン・ルターが自分の信仰の弁明のために、その前に立つたような、堂々たる人々の前に立つた者は、これまでになかった。「このように彼が現われたこと自体が、法王制に対する著しい勝利であつた。す

でに法王は、この人間を罪に定めた。しかるに彼は、今、法廷に立っている。そして、この事実そのものが、この裁判の場が法王以上のものであることを示していた。法王は彼を、聖務禁止に処し、すべての人間社会から切り離れた。それにもかかわらず、彼は、丁重な言葉で召喚されて、世界で最も荘重な議会に迎えられた。法王は彼に永久の沈黙を課したにもかかわらず、今、彼は、キリスト教国の最も遠隔の地から集まった、幾千という深い関心を持った聴衆の前で語ろうとしている。こうして、ルターという器によって、大きな改革が起きたのである。ローマは、すでに、その王座から降りつつあったが、この屈辱をもたらしたのは、一修道士の声であった。」^七

卑しい身分のルターは、この権力をもった有爵議員たちの前で、恐れ、当惑しているように思われた。幾人かの貴族は、彼の心中を察して彼に近寄り、その中の一人が次のようにささやいた。「体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。」また、他の者は、「あなたがたが会堂や役人や高官の前へ引っぱられて行った場合には、…言うべきことは、聖霊がその時に教えてくださる」と言った。こうして、キリストの言葉が、世の偉大な人々によって持ち出され、試練に直面した主のしもべを強めたのである。

ルターは、皇帝の玉座のすぐ前の位置に案内された。満員の議会が静粛になった。そこで、式部官が立ち上がり、積み重ねられたルターの著書を指さして、ルターに二つの質問に答えることを要求した。すなわち、彼が、これを彼の著書と認めるかどうか、また、その中で論じた主張を取り消すかどうか、ということであった。彼の著書の名が読み上げられ、ルターは、第一の質問に対して、それらの書物が彼のものであることを認めた。「第二に関しては、それが信仰と魂の救いに関する問題であり、天においても地においても、最大で最も尊い神の言葉を含むものでありますから、よく考えずに答えることは慎重を欠くことになります。わたくしは、事情の要求

に十分答えず、あるいは、真理の命じること以上を述べて、『人の前でわたしを拒む者を、わたしも天にいますわたしの父の前で拒むであろう』というキリストの言葉に対して罪を犯すことになるかも知れませんか(マタイ一〇ノ三三)。このために、わたくしは、神のみ言葉に罪を犯さずに答えることができますよう、時間が与えられることを、陛下に伏して懇願いたします」と彼は言った。^{一八}

神との格闘

このように願ひ出ることによつて、ルターは賢明にふるまつた。彼の態度は、彼が感情や衝動にかられて行動しているのではないことを、集まつた人々に確信させた。この沈着と自制は、これまで大胆で妥協することのなかつたルターには期待できなかったことで、これが彼に力を増し加え、後に、彼が慎重、決断、知恵、威厳をもつて答弁する——そのことは彼の敵に驚きと失望を与え、また彼らの高慢と不遜を譴責するものであつたが——ことを可能にしたのであつた。

翌日、彼は最後の答弁をするために現われることになつてゐた。一時、彼は、真理に対抗して結束した勢力のことを考えて、気がめいつた。彼の信仰は揺らぎ、彼は恐怖と戦慄に襲われ、恐怖感に圧倒された。彼の前に危険は増大した。彼の敵は、まさに勝利しようとしてゐるよう見え、暗黒の勢力がまさに勝とうとしてゐるよう思われた。彼の回りには暗雲がたれこめ、彼を神から引き離すように思われた。彼は、万軍の主が彼と共におられるという確証を熱望した。彼は苦悶のあまり、地の上に突伏して、神のほかはだれにも理解できないこ

ろの、切れ切れの悲痛な叫びをあげた。

彼は嘆願した。「ああ、全能で永遠の神よ、この世界はなんと恐ろしいことでしょうか。世は口を開いて、わたしをのみこもうとし、しかもあなたに対するわたしの信仰は、まことに弱いのです。……わたしがこの世の力だけに信頼しなければならぬのなら、万事は終わりです。……わたしの最後の時が来ました。わたしはすでに有罪の宣告を受けました。……ああ、神よ、世のすべての知恵に対抗してわたしを助けてください。……あなただけが……わたしをお助けください。これはわたしの業ではなく、あなたの業だからです。わたしには何もできません。これら世の偉大な人々と闘うものは何もありません。……しかし、この事業はあなたのもです。……しかもそれは、正しくて永遠の事業です。ああ主よ、わたしをお助けください。真実で不変の神よ、わたしは人には信頼を置きません。……人間はすべて不確かで、人間のものはみな失敗に終わります。……あなたはわたしを、この仕事のためにお選びになりました。……わたしの力、盾、わたしの高きやぐらであられる愛するみ子イエス・キリストのゆえに、わたしのそばに立つてください。」^{一九}

全知の神の摂理は、ルターが自分の力に頼って僥越に危険のなかに飛び込まないように、その危険をルターに自覚させられた。しかしそれは、目前に迫るように思われた苦難や、死の拷問の恐怖が、彼を圧倒したのではなかった。彼は危機に直面していた。そして彼は、それに対する自分の無力さを感じたのであった。彼の弱さのために、真理の運動が敗北するかも知れなかった。自分自身の安全のためではなく、福音の勝利のために、彼は神と格闘した。夜、寂しい川のそばで苦闘したイスラエルのように、彼は魂を注ぎ出して苦しみ闘った。そして、イスラエルのように、彼は神に勝った。彼は、自分が全く無力であることを感じ、力ある贖い主、キリストをし

っかりと信仰によって捕えた。彼は、自分一人で議会に出るのではないという確信に強められた。彼の魂に平安がかえってきた。そして彼は、神の言葉を国々の王たちの前で高めることが許されたのを喜んだ。

ルターは、神に心を置きながら、自分の前にある闘いの準備をした。彼は、答弁の方法を考え、自分の著書の文章を調べ、聖書から彼の主張を支持する適当な証拠を引用した。それから彼は、自分の前に開かれた聖書の上に左手を置き、右手を天に向けて上げ、「たとえ証言のために血を流すことがあっても、福音に忠誠をつくし、なにもものにもとらわれずに自分の信仰を告白する」ことを誓った。^{二〇}

議会における信仰告白

彼がふたたび議会に入ってきたときには、彼の顔に恐怖や動揺の色はなかった。沈着で穏やかで、しかも勇敢で気高い態度で、彼は神の証人として、地上の偉大な人々の前に立った。式部官は、ここで、彼に教義を取り消すかどうかの決定を迫った。ルターは、激しさや感情をまじえぬ落ちついたけんそんな調子で答えた。彼の態度は遠慮がちで、礼儀正しかった。しかし彼は、議会を驚かすほどの確信と喜びにあふれていた。

「いとも高き皇帝陛下、いとも高名なる諸侯、いとも優渥なる諸賢」とルターは言った。「本日、わたくしは、昨日わたくしに与えられましたご命令に従って、ここにまいりました。そして、わたくしは、神のあわれみによって、陛下および殿下がたが、正しく真実であるとわたくしの信じております運動に関する弁明を、慈悲深く聞いてくださるように懇願いたします。もしわたくしが、知らずに宮廷の慣例や作法に背くことがあれば、どうか

お許しください。わたくしは、宮廷で育った者ではなく、修道院の隠遁生活をしていた者なのですから。」^二

こうして、いよいよ本論に入り、彼は、自分の著書は全部が同じ性質のものではないと述べた。ある著書のかでは、信仰と善行を扱っていて、彼の敵たちでさえ、それが無害であるばかりでなくて有益であると表明している。したがって、これらを取り消すことは、すべての党派の人々が告白している真理を否認することである。

第二の部類は、法王制の腐敗と悪弊とを暴露した著書である。こうした著書を取り消すことは、ローマの圧政を助長し、多くの人はだしい邪悪行為への道を、さらに開くことになる。彼の著書の第三の部類は、現存する害悪を弁護した諸個人を攻撃したものであった。これについて彼は、度を越えて激しく行なったことを率直に告白した。彼は、誤りがなかったとは言わなかった。しかし彼は、これらの著書に関しても取り消すことはできなかった。というのは、そうするならば、真理の敵を大胆にし、ますます残忍に神の民を粉砕するおそれがあったからである。

彼は言葉を続けた。「とはいえ、わたくしは単なる一個の人間にすぎず、神ではありません。ですからわたくしは、キリストのように、『もしわたくしが何か悪いことを言ったのなら、その悪い理由を言いなさい』と弁明するものであります。…神のあわれみによってわたくしは、いと高き皇帝陛下と諸侯、そして、すべての諸賢が、預言者と使徒たちの書によって、わたくしが誤っていることを証明してくださいよう懇願いたします。わたくしがこれを納得いたしましたなら、ただちに、すべての誤りを取り消し、わたくしがまず第一に、わたくしの書物をとって火に投げ込みましょう。

ただいまわたくしが申し上げましたことから、わたくしは自分が当面しております危険について十分に考察吟

味したということが、おわかりいただけだと思います。しかしわたくしは、少しも落胆してはおりません。福音が昔のように、今、紛争と議論の原因になったことを、わたくしは喜びます。これが、神のみ言葉の特質であり、運命なのです。『平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである』とイエス・キリストは言われました。神は、驚くべき、また恐るべきことを仰せになっています。紛争を鎮めようとして、神のみ言葉に逆らい、自身の上に避けることのできない危険と災害の恐るべき大洪水を招き、永遠の破滅に陥ることのないよう、注意いたさねばなりません。…わたくしは、神のみ言葉から多くの実例を挙げることができます。たとえば、パロヤ、バビロンの王たち、イスラエルの王たちは、一見最も賢明と思われた方法である会議によって、王国を強化しようとしたのですが、実は、こうした彼らの努力が、他の何よりも彼らの破滅を早めるのに貢献したのでした。『神は山を移されるが、彼らはそれを知らない』とあるとおりです。」^三

われここに立つ！

以上のことを、ルターはドイツ語で語った。そして今度は、同じ言葉をラテン語でくり返すように要求された。彼は、これまでの奮闘によって疲れきっていたけれども、それに応じて、ふたたび、最初と同様の明快さと力強さをもって演説した。これは神の摂理の導きであつた。多くの諸侯たちの心は、誤りと迷信に目くらんでいた。で、最初の演説では、ルターの議論の力を十分に認めることができなかった。しかし、ふたたびくり返して聞いたために、示された要点をはつきりと理解することができた。

オオルム又国会において、ルターは、多くの敵たちの前に恐れず立ち、こう言い放った。「わたしは取り消すことができませんし、取り消そうとも思いません。なぜなら、キリスト者が良心に背いて語ることは危険だからです。ここに、わたしは立ちます。……神よ、わたしを助けてまえ。」



光に対してかたくなに目を閉じ、真理に説得されまいと心をきめていた人々は、ルターの力強い言葉に激怒した。彼が語り終えたとき、議会の代弁者は怒って言った。「あなたは質問されたことに答弁していない。…あなたには、明瞭で正確な答えが要求されている。…あなたは取り消すのか、取り消さないのか。」

改革者は答えた。「皇帝陛下と殿下がたは、わたくしに簡単に明瞭で正確な答えを要求しておられますので、ここにお答えいたします。それは次のとおりであります。わたくしはわたくしの信仰を、法王にも会議にも従わせることはできません。と申しますのは、両者ともしばしば誤りを犯し、また互いに矛盾してきたということが明白だからであります。それゆえ、わたくしは、聖書からの証明、あるいは明瞭な議論によって、納得させられないかぎり、また、わたくしが引用した聖句によって納得させられないかぎり、そして、このようにして、わたくしの良心が神のみ言葉によって義務づけられないかぎり、**わたくしは取り消すことができませんし、取り消すとも思いません**。なぜなら、キリスト者が良心に背いて語ることは、危険だからであります。ここに、わたくしは立ちます。わたくしは、これ以外に何もできません。神よ、わたくしを助けたまえ。アーメン。」^三

こうして、義人ルターは、神のみ言葉の確かな土台の上に立った。天からの光が彼の顔を照らした。彼の偉大で純潔な品性、彼の心の平和と喜びとが、すべての者に明らかに示された。こうして、彼は、誤りの力に対抗してあかしを立て、世に勝つ信仰がいかに優れたものであるかを証明した。

集まった者はみな、しばらくの間、驚きのあまり何とも言えなかった。ルターは、最初に答えたときに、低い声で、敬意を表わしながら、従順な態度で話した。法王側はこれを、彼の勇気がくじけ始めた証拠であると解釈した。彼らは、延期の願い出を、取り消しの前提に過ぎないと考えた。カール自身さえ、修道士の疲れた様子、彼

の質素な衣服、そして、彼の飾り気のない話に対し、半ば軽べつ的に「この修道士は、わたしを異端者にすることは決してできない」と言った。しかるに今、彼の議論の力と明瞭さと共に、彼が表わした勇氣と堅固さとに、すべての者は驚き入った。皇帝も賛嘆して、「この修道士は、大胆にゆるがめ勇氣をもつて語る」と叫んだ。ドイツの諸侯たちの多くは、彼らの国のこの代表者に誇りと喜びを感じたのである。

法王側の策動

ローマ派の者たちは敗北した。彼らの運動は最も不利な立場に陥つたように見えた。彼らは、聖書に訴えることをせず、ローマの常套手段である脅迫によつて、彼らの権力を維持しようとした。議会の代弁者は、「あなたが取り消さないならば、皇帝と帝国内の諸国は、頑迷な異端者に何をすべきかを協議する」と言った。

ルターの友人たちは、彼の堂々とした弁護を非常に喜んで聞いていたが、この言葉を聞いて戦慄した。しかしルター自身は冷静に、「神がわたくしの援助者となつてくださるように。わたくしには何も取り消すことができないからです」と言った。^{一四}

彼は、諸侯たちが協議する間、議会から出るように命じられた。一大危機のやってきたことが感じられた。ルターが従うことを頑強に拒むことは、幾時代にもわたる教会の歴史に影響を及ぼすものであった。彼にもう一度取り消す機会を与えることが決定された。彼は、いよいよ最終的に議会に連れ出された。彼は、もう一度、彼の教義を放棄するかどうかを聞かれた。「わたくしは、すでに申し上げたこと以外に、お答えすることはございません」と

彼は言った。どんな約束や脅迫によっても、彼をローマの命令に屈服させることができないことは明らかであつた。

法王側の指導者たちは、王たちや貴族たちを戦慄させてきた彼らの権力が、このようにして卑しい修道士によって軽べつされたことを無念がり、彼に拷問の責め苦を加えて殺すことによって、彼らの怒りを彼に思い知らせたいと望んだ。しかしルターは、自分の危険を悟つて、すべての者にキリスト者の威厳と冷静さをもって答えた。彼の言葉には、高慢や激しい感情や誤り偽りなどは一つもなかった。彼は、自分自身も、自分の回りの偉大な人物たちのことも忘れ、ただ自分が、法王や高位聖職者や王や皇帝などよりも、無限に優れておられるところの神の面前にある、ということしか考えなかつた。キリストが、ルターの証言を通して力強く堂々と語られたのであつた。そのために、敵も味方も、一時は驚嘆し敬服してしまつた。その議会には神の霊が臨在して、帝国の首脳者たちの心に感銘を与えられた。諸侯たちの幾人かは、ルターの運動の正当性を大胆にも認めた。多くの者が真理を悟つた。しかし、受けた印象が長続きしない者もあつた。そのほかに、この時は受けた感銘の表示はしなかつたものの、後に自分で聖書を研究して、恐れを知らぬ宗教改革の支持者になつたものもあつた。

選挙侯フリードリヒは、ルターが議会に現われるのを、今か今かと待っていた。そして、彼の演説を聞いて深く感動した。彼は、喜びと誇りをもってルターの勇氣と堅固さと沈着な態度を見、ますます断固として彼を擁護する決心をした。彼は、論争における両者を比較し、法王や王たちや高位聖職者たちの知恵が、真理の力によって打ちこわされたのを見た。法王制は、各国各時代に影響を及ぼす敗北をこうむつた。

法王使節は、ルターの演説が引き起こした影響に気づいたとき、これまでになかつたほどローマの権力の安泰を心配し、全力をあげて改革者ルターを倒そうと決意した。彼は、その優れた特質であつた雄弁と外交的手腕と

をふるって、名もない一修道士の主張のために、強力なローマ法王庁の交友と支持を犠牲にすることの愚かさ
と危険とを、若い皇帝に説いた。

彼の言葉は影響を及ぼさずにはいなかった。ルターの答弁が行なわれた翌日、カールは、先祖たちの政策に従
ってカトリック教を擁護し保護するという決意を伝える布告を、議会に提出させた。ルターは自分が誤っている
ことを取り消すのを拒んだのであるから、彼と、彼の唱えた異端に対しては、断固とした処置が取られるのであ
った。「自分自身の愚かな考えに道を誤った一修道士が、キリスト教の信仰に反対して立ち上がった。このよう
な不敬虔を阻止するために、わたしは、わたしの王国、わたしの宝、わたしの友、わたしの体、わたしの血、わ
たしの魂、そして、わたしの生命を犠牲にする。わたしは、アウグスチン派修道会士ルターを追放し、彼が国民
の間で少しでも秩序を乱すことを禁じる。そして、わたしは、ルターと彼の支持者たちを、反抗的な異端者とし
て訴え、破門、聖務禁止、そしてあらゆる手段をもって撲滅するであろう。わたしは、議員たちが、忠実なキリ
スト者として行動することを求める。」^{二五}しかしルターの通行券は尊重すべきで、彼に対する処分が行なわれる前に
彼は安全に帰宅を許されるべきであると皇帝は宣言した。

二派の対立とカール五世

ここで、議会の議員のなかで、二つの相反する意見が主張された。法王使節と法王側の代表者たちは、改革者
の通行券を無視することを再び主張した。「一世紀前のヨハン・フスのように、彼の灰はライン河に投げられる

べきである」と彼らは言った。^{二六}しかしドイツの諸侯は、彼ら自身法王教徒でルターの宿敵ではあったが、そのような一般の信頼に背く行為に反対し、それは国家の名誉を辱しめる汚点であるとして異議を唱えた。彼らは、フスの死後に起きた不幸なできごとを指して、これと同様の恐ろしい災いを、ドイツおよび年若い皇帝の上に降したくないと声明した。

カール自身もその卑劣な提案に答えていった。「たとえ全世界から名誉と信義が追放されても、それらは、諸侯の心の中に隠れ家を見いださなければならぬ」。^{二七}法王側の、ルターを最も憎んでいる敵は、ジギスムントがフスを扱ったように、皇帝がルターを処理するよう、さらに要求した。それは、彼を教会の手中に一任することであつた。しかし、フスが公衆の面前で自分の鎖を指し、皇帝の不実を指摘したことを思い起こして、カール五世は、「わたしはジギスムントのようには赤面したくない」と言った。^{二八}

しかし、カールは、ルターが示した真理を故意に拒絶した。「わたしは先祖たちの模範に従つことを堅く決心した」と王は書いた。^{二九}彼は、慣習の道からは一歩も外に出ない決心をし、真理と義の道を歩こうとさえしなかつた。彼は、先祖たちが支持したゆえに、残酷で腐敗しているにもかかわらず法王制を支持するのであつた。こうして彼は、先祖たちが受けた光よりも進んだ光を受けることを拒み、彼らが行なわなかつた義務は、何一つすまひとしたのである。

今日でも、先祖の習慣や伝統を固守する人が多い。主が彼らに新しい光をお与えになると、彼らは、それが先祖に与えられておらず、彼らがそれを受け入れていなかったという理由で受けることを拒む。われわれは、先祖たちの時代におかれてはいない。したがってわれわれの義務と責任は、彼らと同じではない。自分で真理の言葉

を探究せずに、先祖の模範によってわれわれの義務を決定しようとすることは、神に喜ばれない。われわれの責任は、先祖たちの責任よりはいっそう重いのである。われわれは、彼らが受けた光、そして、われわれに遺産として伝えられたものに対して責任がある。そして、われわれは、今神のみ言葉からわれわれの上に輝いている追加的な光に対してもまた責任がある。

キリストは、不信仰なユダヤ人について言われた。「もしわたしがきて彼らに語らなかつたならば、彼らは罪を犯さなすんだであろう。しかし今となつては、彼らには、その罪について言いのがれる道がない」(ヨハネ一五ノ二二)。同じ神の力が、ルターを通して、ドイツの皇帝と諸侯に語つたのである。そして、光が神のみ言葉から輝いたときに、神の霊が、議会内の多くの者に最後の訴えをした。幾世紀の昔、ピラトが誇りと人々の歡心を買うために世界の贖い主に対して心を閉じたように、また戦慄したペリクスが「きようはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」と言つたように、また、高慢なアグリッパが「おまえは少し説いただけで、わたしをクリスチャンにしようとしている」と言いながら、天からのメッセージを退けたように、そのようにカール五世は、この世的な誇りと政策に屈して、真理の光を拒否することになつたのである(使徒行伝二四ノ二五、二六ノ二八)。

広汎な支援とルターの忠誠

ルターに危害を加えようとする陰謀のうわさが広く伝わり、全市は大騒ぎになつた。改革者ルターは、多くの

友人を持っていた。彼らは、ローマの腐敗をあばくすべての者に対するローマの不実な残虐行為を知っていたので、彼を犠牲にしてはならないと決意した。数百の貴族が彼を保護することを契約した。ローマの支配権に屈したことを示す皇帝の布告に対して、公然と反対するものも少なくなかった。家々の門や公の場所に、ポスターがはられ、ルターを非難するものもあれば、支援するものもあった。その一つには次のような、賢者の意義深い言葉だけが書かれていた。「あなたの王はわらべであって、…あなたはわざわざいだ」（伝道の書一〇ノ一六）。ルターの人気は、ドイツ全土において非常なものであったので、もし彼に対する不正が行なわれるならば、帝国の平和は破られ、王位さえ安定があやぶまれることを、皇帝も議会も共に痛感したのである。

ザクセンのフリードリヒは、改革者に対する本心を注意深く表に出さず、沈黙を守っていた。しかし同時に、ルターを厳重に保護し、彼のすべての行動と彼の敵のあらゆる動きを見守っていた。しかし、ルターに対する同情を隠そうとしないものも多かった。ルターは、諸侯、伯爵、男爵、その他、一般と聖職両方面の高貴な人々の訪問を受けた。「ルター博士の小さい部屋は、訪問してきた人々をみな入れることができなかった」とシュパティンは書いている。^{三〇}人々は彼を、まるで超人であるかのようにながめた。彼の教義を信じなかった人々でさえ、自分の良心にそむくよりは死をさえいとわぬ彼の高潔さに対して、賛嘆せずにはおれなかった。

ローマとの妥協にルターを同意させようとするけんめいの努力がなされた。貴族や諸侯たちは、もし彼が自説に固執して、教会と議会の決定に背くならば、彼はすぐに帝国外に追放され、なんの防衛もなくなると説明した。この訴えに対して、ルターは次のように答えた。「キリストの福音を伝えると必ず攻撃を受けます。…しかしそうだからといって恐怖や不安のために主から離れ、唯一の真理である神の言葉から離れてよいでしょうか。い

いえ、わたしはおしろ、わたしの体、わたしの血、わたしの生命をささげたいのです。」^{三三}

彼は、ふたたび、皇帝の意見に従うように勧められた。そうすれば彼は、何も恐れるものがなくなる。彼は、それに答えて言った。「わたしは、皇帝、諸侯、また、どんなに身分の低いキリスト者であっても、わたしの著書を吟味し、判断することに心から同意する。この場合、唯一の条件は、彼らが神の言葉を標準にすることである。人間は服従することのほかは何もできない。わたしの良心に背くことを提案しないでほしい、わたしの良心は聖書に縛られつながれている。」^{三三}

また、他の訴えに対して彼は、「わたしは、自分の通行券を放棄することに同意する。わたしは、自分の身と生命とを皇帝の手に渡す。しかし、神の言葉は、決して渡さない」と言った。^{三三}彼は、自分は喜んで議会の決定に服すといったが、その場合の唯一の条件は、議会が聖書に基づいて決定するということであった。「神の言葉と信仰に関して、法王には百万の会議の支持があるにせよ、各キリスト者は法王に劣らざりつばな裁判官である」とつけ加えた。^{三四}敵も味方も共に、これ以上妥協を勧めてもむだなことを知った。

もしもルターが一つの点でも妥協したならば、サタンとその軍勢は勝利をおさめたことであろう。しかし、彼がゆるがず堅く立ったことが、教会解放の道を開き、新しい、そしてよりよい時代の開始となった。信仰問題について自ら思考し行動したこの一人物の影響は、教会と世界に及び、その時代だけにとどまらず、その後の各時代にまで及んだ。彼の確固不動の忠誠は、時の終わりに至るまで、同様の経験をたどるすべての者を励ますのである。神の力と威光とが、人間の会議と、サタンの大きな力とを、超越したのであった。

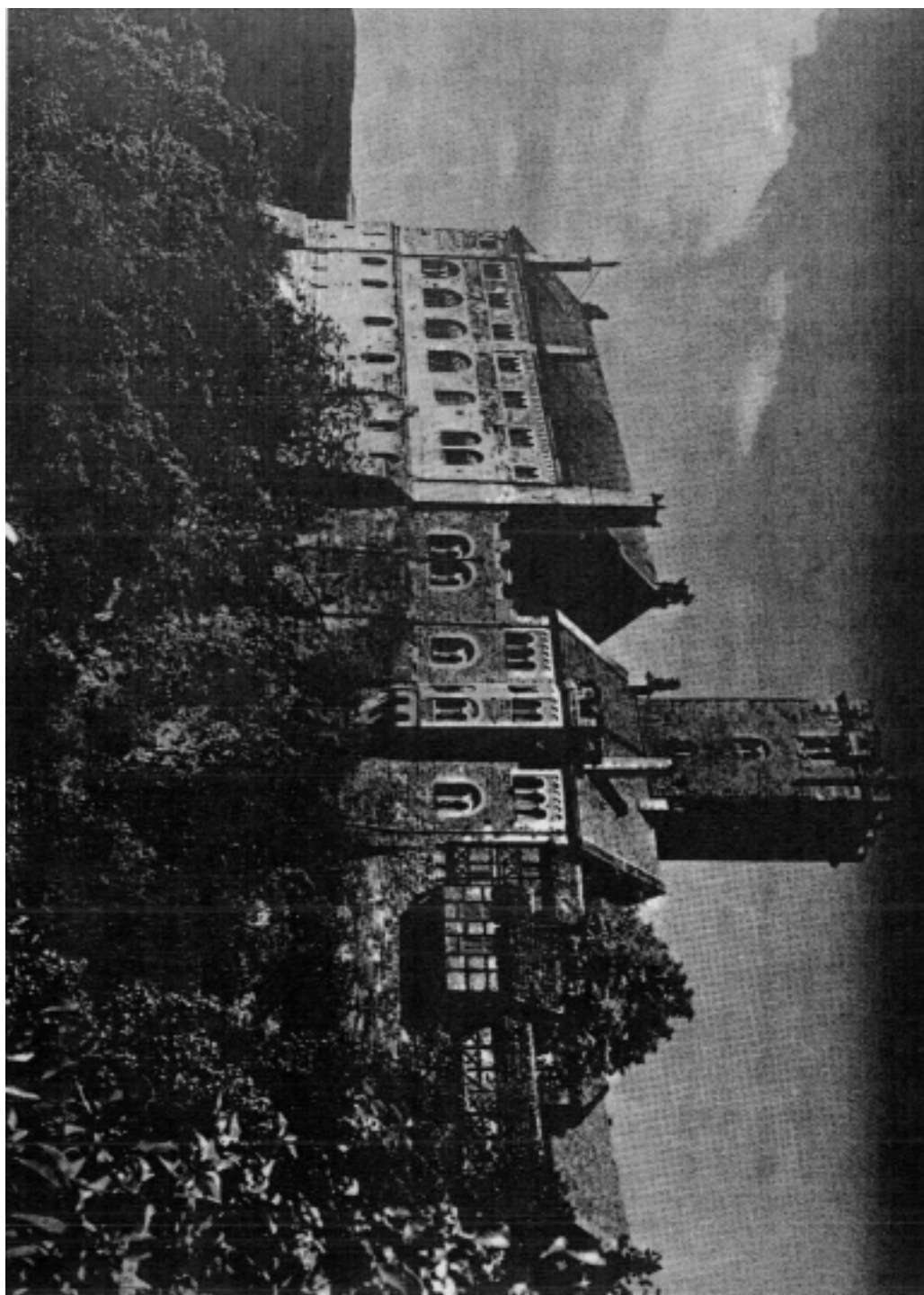
ルター、ウォルムスを去る

まもなくルターは、皇帝のほうから帰国を命じられた。そして彼は、この指示の次には、すぐに有罪の宣告が下されることを知っていた。彼の前途を暗雲が覆った。しかし、ウォルムスを去るとき、彼の心は喜びと賛美に満たされた。「悪魔自身が法王のとりでを守った。しかしキリストはこれに大きな破損を与え、サタンは、主が彼よりも力あることを告白しなければならなかった」と彼は言った。^{三五}

ルターは、出発した後、彼の堅い決意が反逆とまちがえられないために、皇帝に手紙を書いた。「人間の生命が依存している神の言葉のこと以外において、わたくしが、名誉であれ不名誉であれ、生であれ死であっても、直ちに熱誠こめて陛下にお従いしようとするものでありますことは、心を探られる神が、わたくしの証人であります。現世のいっさいのことにおいて、わたくしの忠誠に動揺はございません。と申しますのは、ここで得るも失うも、救いには関係がないからであります。しかしながら、永遠のことに関しては、人間が人間に従うことは神のみ旨ではございません。なぜならば、霊的事柄におけるこのような服従は、事実上の礼拝であり、それはただ創造主のみ帰すべきものだからであります」^{三六}

ルターは、ウォルムスからの帰途、行くときよりも盛大な歓迎を受けた。高位の聖職者たちが破門された修道士を歓迎し、長官たちが、皇帝に譴責された者に敬意を表した。彼は、禁じられてはいたが、勧められるままに説教壇に立った。「わたしは神の言葉を鎖につなぐとは誓わなかったし、これからも決してそんなことはしない」

ツルトブルクの城。ルターはここにかくまわれ、新約聖書のドイツ語訳を完成した。



と彼は言った。^{三七}

彼がウォルムスを去ってまもなく、法王側は皇帝に迫って、ルターに対する布告を發布させた。この布告のなかで、ルターは、「人間の形をとり修道士の衣をまとったサタン自身である」と告発された。^{三八}彼の通行券の期限が終わるとすぐに彼の運動をやめさせるよう、命じられていた。だれであっても、彼をかくまったり飲食を与えたり、言葉であれ行為であれ、公私を問わず、彼を支援し助けることが禁じられた。彼は、発見されたならば直ちに逮捕され、官憲に引き渡されねばならなかった。彼の支持者たちもまた、投獄されて財産を没収されなければならなかった。彼の著書は破棄されねばならなかった。そして、最後に、この布告に反抗するものは、みな、同様の宣告を受けなければならなかった。ザクセンの選挙侯と、ルターに好意的な諸侯たちは、ルターの出発後すぐにウォルムスを去っていたので、皇帝の命令は議会の賛成を得た。こうして法王側は喜んだ。彼らは、宗教改革の運命はもう決まったと考えた。

改革事業と神の導き

この危機においても、神は、ご自分のしもべのために、逃れの道を備えておられた。ルターの動きを片時も目を離さず見守っていたものがあつた。そして、真実で高貴な心の持ち主が、彼を救援する決心をしていた。□ーマはルターを死に処するまでは満足しないということは明らかであつた。彼をライオンのきばから救うには、彼を隠すほかなかった。神は、ルターを庇護する策略をたてるように、ザクセンのフリードリヒ侯に知恵を授けら

れた。選挙侯は、誠実な同志の協力によって目的を達成した。そしてルターは、敵からも味方からもうまく隠されたのである。ルターは、帰る途中捕えられて、従者たちから引き離され、森林の中を急いで通過し、人里離れた山のとりであるフルトブルクの城に連れていかれた。彼の逮捕と潜伏とは極秘のうちにこなされたために、フリードリヒ自身でさえ、彼がどこに連れていかれたかを長い間知らなかった。これは、計画的に、侯には知らされなかったのであった。つまり、実際にルターの居場所を知らぬかぎり、聞かれても答えられなかったからである。彼は、ルターが安全であるということだけで満足であった。

春、夏、秋が過ぎて冬になったが、ルターはまだ捕われの身であった。アレアンダーと彼の徒党は、福音の光が消えてしまったように見えただけで勝ち誇った。しかし、そうではなくて、ルターは真理の宝庫で、彼の燈に油を満たしていた。そして、その光はますます明るく輝き出るのであった。

フルトブルクの友好的で安全な場所で、ルターは、闘いの熱と混乱から逃れたことをしばらくは喜んだ。しかし彼は、静けさと休息の中で長く満足していることはできなかった。彼は、活動的生活と厳しい闘いになれていたので、何もしないでいることはできなかった。こうした孤独の時に、彼は、教会の状態を思い浮かべ、「ああこの神の怒りの最後の日に、主の前に城壁となって、イスラエルを救うものがない」と絶望の叫びをあげた。^{三九}彼は、再びわれに帰って、自分が争闘から身をひいておくびょう呼ばわりされることを恐れた。そして、自分の怠慢と放縦を責めた。しかし、それでも彼は、毎日、一人の人の仕事とは思われないほど多くのことを成し遂げていた。彼は休みなくペンを動かしていた。敵は彼を沈黙させたと楽観していたときに、彼がなお活動しているという具体的な証拠を見て驚きあわてた。彼が書いた多くの小冊子が、ドイツ全土に配布された。彼はまた、新

約聖書をドイツ語に翻訳して、彼の同胞のために最も重要な奉仕をした。彼は、パトモスとも言うべきとりでから、丸一年近くの間、福音を宣布し、その時代の罪と誤りを譴責し続けたのである。

神がご自分のしもべを公的生活の舞台から退かせられたのは、単にルターを敵の怒りから保護し、また、このような重大な仕事のために静かな時を与えるためだけではなかった。これらよりもさらに尊い経験が与えられた。人里離れた寂しい山の隠れ家で、ルターは地上の援助と人間の賞賛から切り離された。こうして彼は、成功にしばしば伴う誇りと自己過信から救われた。彼は、苦難と屈辱によって、彼が突然あげられた目の回るような高い所をふたたび安全に歩くことができるよう、準備が与えられたのである。

人々は、真理が彼らにもたらす自由を喜ぶときに、誤りと迷信の鎖を断ち切るために神が用いられる人々を賞賛する傾向がある。サタンは、人間の思想と愛情を神から引き離し、人間的器に向けようとしている。彼は人々を、単なる器に栄誉を帰すようにそして、すべてのできごとを摂理によって導かれる神の御手を無視するようにとしむける。こうして賞賛され、あがめられる宗教的指導者たちは、しばしば、神に頼ることを忘れて自分に頼るようになる。その結果彼らは、神の言葉に頼るかわりに彼らの指導を仰ごうとする人々の、心と良心を支配しようとするのである。改革事業は、支持者たちのこうした精神のために、しばしば阻止された。神は、宗教改革運動をこの危険から守ろうとされたのである。神は、運動が人間の刻印ではなくて、神の刻印を受けることを望まれた。人々の目は、真理の解説者としてのルターに向けられていた。そこで人々の目が、真理の本源である永遠の神に向けられるように、彼は引き離されたのであった。

注

- 一 D'Aubigné, b.6, ch.11.
- 二 *ibid.*, b.7, ch.1.
- 三 *ibid.*
- 四 Wylie, b.6, ch.4.
- 五 D'Aubigné, b.7, ch.3.
- 六 *ibid.*, b.7, ch.4.
- 七 *ibid.*
- 八 *ibid.*, b.7, ch.6.
- 九 *ibid.*, b.7, ch.7.
- 一〇 *ibid.*
- 一一 *ibid.*
- 一二 *ibid.*
- 一三 *ibid.*
- 一四 *ibid.*, b.7, ch.8.
- 一五 Martyn, p.393.
- 一六 D'Aubigné, b.7, ch.8.
- 一七 *ibid.*
- 一八 *ibid.*
- 一九 *ibid.*
- 二〇 *ibid.*

- 一一 *ibid.*
- 一二 *ibid.*
- 一三 *ibid.*
- 一四 *ibid.*
- 一五 *ibid.*, b.7, ch.9.
- 一六 *ibid.*
- 一七 *ibid.*
- 一八 *Lenfant*, vol.1, P.422.
- 一九 *D'Aubigné*, b.7, ch.9.
- 二〇 *Martyn*, vol.1, p.404.
- 二一 *D'Aubigne*, b.7, ch.10.
- 二二 *ibid.*
- 二三 *ibid.*
- 二四 *Martyn*, vol.1, p.410.
- 二五 *D'Aubigné*, b.7, ch.11.
- 二六 *ibid.*
- 二七 *Martyn*, vol.1, p.420.
- 二八 *D'Aubigné*, b.7, ch.11.
- 二九 *ibid.*, b.9, ch.2.

第九章

スイスにおける改革運動

ツウィングリの生い立ち

教会を改革する器を選ぶに当たっては、教会を設立する際と同様の神のご計画が見られる。天からの教師キリストは、国民の指導者として賞賛や榮譽を受けることに馴れた地上の偉大な人々、肩書きや富を持った人々をお用いにならなかった。彼らは、非常に高慢で、自分に自信を持ち、優越を誇っていたために、同胞に同情し、謙そんなナザレ人イエスと協力することができなかった。無学で苦勞して働くガリラヤの漁夫たちに、「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」という召しが与えられた(マタイ四ノ一九)。この弟子たちは、謙そんでよく聞き従う人々であつた。その時代の偽りの教えに影響されていなければいけないほど、キリストが彼らをご用のために教え訓練することが成功を収める。大宗教改革の時代でもそうであつた。主な

宗教改革者たちは低い身分の出で、その時代の地位の誇りや頑迷さ、聖職者たちの政策などから最も縁遠い人々であつた。卑しい器を用いて大きな業績を完成することが神のご計画である。そうするならば栄光は、人間たちではなくて、彼らに願いを起こさせてそれを実現に至らせ、神のみこころを行なわせられた神に帰せられるのである。ルターがザクセンの鉱夫小屋で生まれた数週間後に、ウルリッヒ・ツウィングリが、アルプス山中の羊飼いの小屋で生まれた。ツウィングリの幼少時代の環境と教育は、彼の将来の使命に対するよい準備であつた。雄大で美しく荘厳な自然のなかで育つたので、彼の心には早くから、神の偉大さと力と威厳とが刻みこまれた。彼の故郷の山中で成し遂げられた勇敢な行為の歴史は、彼の若い心に熱望の火を燃やした。そして彼は、信心深い祖母のかたわらで、彼女が教会の言い伝えや伝説のなかから拾い集めた貴重な聖書の物語に耳を傾けた。彼は、熱心に興味深く、父祖たちや預言者たちの偉大な行為の話、パレスチナの丘で羊を飼っていた羊飼いに天使があらわれた話、ベツレヘムの赤ん坊でありカルバリーの人であられたイエスの話を聞いた。

ハンス・ルターのように、ツウィングリの父も、息子に教育を受けさせようと望み、早くから少年を郷里の谷間から送り出していた。ツウィングリの知能の発達は早く、やがて、彼を教えることのできる教師を見つけることが問題になった。彼は十三才のときに、スイスの最高学府の所在地、ベルンに送られた。しかし、ここで、彼の前途をはばもうとする危険が迫つた。修道士たちが、何とかして彼を修道院に誘い入れようとしたのである。当時はドミニコ会士とフランシスコ会士とが、人々の人気を得ようとして張り合っていた。そのために彼らは、教会を華麗に飾り、荘厳な儀式を行ない、有名な聖遺物や奇跡を行なう像などで人を引きつけようとした。

ベルンのドミニカン派の修道士たちは、この有能で若い学者を獲得することができれば、利益と栄誉を共に確



ツウイングリの最初の働きの際は、彼の郷里からそれほど遠くないアルプスの教区であった。彼は聖書の研究に没頭し、人を天からのメッセージの理解へと導くために、真理と導きを求めて神の言葉を探り調べた。

保できると考えた。彼の非常な若々しさ、雄弁家また著者としての天分、音楽と詩の才能などは、あらゆる誇示虚飾よりも効果的に人々を集会に引きつけ、彼らの修道会の収入を増加させるものであった。彼らは、不正な手段やこびへつらいによって、ツウィングリを彼らの修道院に入れさせようとした。ルターは学生時代、修道院の一室に閉じこもっていて、もし神の摂理が彼を解放しなければ、世から全く失われてしまうところであった。ツウィングリは、同様の危険に陥ることを免れた。摂理的に彼の父が、修道士たちの策略を耳にしたのである。彼は息子に、修道士の怠惰で無価値な生活を送らせる気はなかった。彼は、息子の有用な将来が危機にひんしているのを知り、彼に直ちに帰宅することを命じた。

この命令に従ったものの、青年は故郷の谷間において長く満足していることはできず、しばらくしてバーゼルに行つて再び勉強を始めた。ツウィングリが、神の恵みによつて救われるという福音に初めて接したのはここにおいてであった。古代言語の教授ウィッテンバッハは、ギリシア語やヘブル語を研究している間に聖書を知るに至り、こつして彼の教育を受けた学生たちの心に真理の光が輝いたのである。彼は、学者や哲学者が説く理論よりもはるかに古くて無限の価値を持つ真理があると断言した。この古くからの真理とは、キリストの死が罪人の唯一の贖いであるということであった。ツウィングリにとつて、こつした言葉は、夜明けに先立つ最初の光のようであった。

ツウィングリ、働きにつく

まもなくツウィングリは、バーゼルから呼ばれて、彼の一生の仕事に従事することになった。彼の最初の任地

は、彼の郷里からそれほど遠くないアルプスの教区であった。司祭としての按手を受けてから、「彼は、全力をあげて、神の真理の探究に専念した。それは、キリストの群れを託された者は、どんなによく聖書を知らねばならないかを痛感したからであった」と、彼の同僚である一改革者は語っている。彼が聖書を探究すればするほど、聖書の真理とローマの邪説との対照がいっそう明らかになった。彼は、聖書が神の言葉であって、完全に誤ることのない唯一の規準であることを信じた。彼は、聖書が聖書自身の解釈者でなければならないことを認めた。彼は、先入観による理論や教義を支持するために聖書を説明しようとはせずに、聖書が直接はつきりと教えていることは何かを学ぶことを彼の義務とした。彼は、その意味を完全正確に理解するために、あらゆる助けを活用しようとした。そして、彼は聖霊の助けを祈り求めた。聖霊は、真剣に祈り求めるすべての者に、その真意をあらわすのであると、彼は断言した。

ツウィングリは次のように言った。「聖書は、人間からではなく、神から来ている。そして、光をお与えになる神が、み言葉が神からのものであることを理解させてくださる。神の言葉は、…誤ることがない。それは輝き、それ自身を教え、それ自身を啓示し、あらゆる救いと恵みとによって魂を照らし、神にあって慰めを与え、謙虚にする。そこで魂は、自分を忘れ去って、神を受け入れるのである。」ツウィングリは、こうした言葉を実際に体験していた。当時の経験を、彼は後にこう書いた。「わたしは聖書に没頭し始めると、哲学や神学（スコラ哲学）が常にわたしに反論するのであった。そこでわたしは、ついに『それはそのままにしておいて、神ご自身の単純な言葉からだけ、神が言おうとなさっていることを学ばなければならない』という結論に達した。それからわたしは、神の光を求めるようになり、聖書はわたしにとって、たやすく理解できるようになった。」

ツウィングリが説いた教義は、ルターから受けたものではなかった。それは、キリストの教義であつた。「もしルターがキリストを説教しているならば、彼はわたしと同じことをしている。彼がキリストに導いた人々は、わたしに導いた者よりは数が多い。しかしこれは問題ではない。わたしは、キリストの名以外のどんな名も帯びない。わたしは彼の兵卒であり、彼だけがわたしの主である。わたしはルターに一言も書かなかつたし、彼もわたしに書いていない。それなのに、なぜ？…われわれが何一つ共謀しなかつたのに、キリストの教義をこのように一様に教えるということは、いかに神の霊ご自身が同一のものであるかを示している」とツウィングリは言つた。^三

福音を説く

一五一六年、ツウィングリは、アインジーデルン修道院の説教者として招かれた。この地において、彼は、ローマの腐敗をいっそうつぶさに見た。そして、彼の故郷のアルプスよりもはるか遠方までも、改革者としての影響を及ぼすことになった。アインジーデルンの主要な呼び物の一つに、奇跡を行なう力があると言われているマリヤ像があつた。修道院の入り口の上には、「ここで罪の大赦が得られる」と書き記されていた。^四マリヤ像の聖堂には、年じゅう巡礼者が集まつた。しかも、毎年行なわれる献堂の大祭には、スイス全国は言うに及ばず、フランスやドイツからも群衆がやってきた。ツウィングリはこの光景を見て非常に心を痛め、この機会を捕えて、迷信の奴隷になっている人々に、福音による自由を宣言したのである。

「世界の他のところにまさつて神がこの会堂におられると思つてはならない。どの国に住んでいても、神はあ

なだの回りにおられて、祈りを聞かれる。…無益な苦行、長い巡礼、ささげ物、聖像、聖母マリヤや諸聖人の祈祷によって、神の恵みにあずかることができようか。…われわれの祈りの言葉が多くてもなんの役に立とうか。また、光沢のあるずきん、そった頭、長々と垂れる衣服、金で刺繍した上靴に、なんの功德があるのか。…神は心を見られる。そして、われわれの心は、神から遠く離れている。」「一度十字架に架けられたキリストは、永遠にわたって、信じる者の罪を十分に贖う犠牲でありいけにえであった。」^五

多くの聴衆にとって、このような教えは喜ばしいものではなかった。苦しい旅をしてきたものが、無益なことであったと言われることは、苦い失望であった。彼らは、キリストによって惜しみなく与えられる罪のゆるしを理解することができなかった。彼らは、ローマが指示した天国への古い道で満足していた。彼らは、さらによいものを探究する労をとりたくなかった。心のきよめを求めるよりは、司祭や法王に頼って救いを得るほうがやさしかった。しかし、他の部類の人々は、キリストによる贖いの知らせを喜んで受け入れた。ローマが命じる儀式は、心の平和を与えなかった。そこで彼らは、信仰によって、救い主の血を彼らの贖いの供え物として受け入れた。彼らは帰国して、自分たちの受けた貴い光を人々に伝えた。こうして真理は、村から村、町から町へと広がり、マリヤ聖堂に来る巡礼の数は大幅に減少した。献金額も減り、その結果そこから支給されていたツウィングリの給料も減った。しかし彼は、狂信と迷信の力が打破されたのを見て、かえって喜んだ。

教会の当局者たちは、ツウィングリの活動に対して盲目でなかった。しかし彼らはその当座は、干渉をさしひかえた。彼らはなお、彼を自分たちの側に引き入れようとして、甘言によって彼を確保しようとした。そしてこの間に、真理が人々の心を捕えていったのであった。

チューリヒでの活動

アインジーデルンにおけるツウィングリの活動は、もっと広い範囲の働きの準備であって、彼はまもなくその働きに入った。すなわちここに三年いた後、彼はチューリヒ大聖堂の説教者として召された。チューリヒは、当時スイス連邦の重要な都市で、ここでの活動は、遠くまで影響を及ぼすのであった。しかし、彼をチューリヒに招いた聖職者たちは、革新的なものの侵入を防止しようとして、彼の務めについて次のように訓示を与えた。

「あなたは、小額の献金でも見過ごすことなく、教会の収入を集めるように努力せよ。説教壇と告解聴聞席の両方において、忠実な信徒たちに、すべての十分の一税や教会税を納め、献金によって彼らの教会に対する愛を示すように勧めよ。病める者から、ミサから、そしてその他一般の教会儀式から生ずる収入を増加するよう熱心に努めよ。」「秘蹟の授与、説教、群れの世話などもまた、司祭の務めである。しかしこれらに関しては、特に説教については、代理人を用いるがよい。あなたは著名人にだけ秘蹟を施し、しかも、依頼されたときだけ行なうべきである。だれかれの区別なく施してはならない。」^六

ツウィングリは、黙ってこの任命の言葉を聞いた。そして、この重要な地位に召された栄誉を感謝した後で、彼は、自分が採用しようとしている方針について説明した。「キリストの生涯は、長い間人々から隠されていた。わたしは、マタイによる福音書全体について説教する。…わたしは、聖書の泉だけからくみ、その深さを探り、聖句を聖句と比較して、熱心で絶えまない祈祷によって理解力が与えられるように求める。わたしは、神の栄光と神の



ツウィングリの説教に対する人々の関心は非常に強く、チューリヒの大聖堂は、彼が聖書の真理を説き明かすのを聞きにくる人々であふれた。

独り子の賛美と、魂の真の救いと真の信仰の成長のために、聖職に献身する」と彼は言った。^七 聖職者たちのなかには彼の計画に反対し、そうさせまいとする者もあったがツウィングリは堅く立って動かなかった。何も新しい方法ではなくて、初期の純潔であった時代に用いられていた古い方法を探り入れようとしているのだと彼は言明した。すでに彼が教える真理に対する興味が呼び起こされ、多くの人々が彼の説教を聞くために群がって来た。彼の聴衆のなかには、長い間集会に来ていなかったものも多かった。彼は福音書を開き、キリストのご生涯、教え、その死に関する靈感の記述を読んで説明することをもって、彼の聖職の開始とした。彼は、アインジーデルンにおけると同様にここでも、神の言葉を唯一不変の権威あるものとし、キリストの死を唯一の完全な犠牲として示した。「わたしはあなたがたを、キリストへ、すなわち、救いの真の源であるキリストへ導きたいと願っている」と彼は言った。^八 説教者の回りには、政治家や学者から職人、農民にいたるまで、あらゆる階級の人々が押し寄せた。非常な興味をもって、彼らは彼の言葉に聞き入った。彼は、惜しみなく与えられる救いが提供されていることを宣言するだけでなく、当時の害悪と腐敗を恐れることなく譴責した。多くの者は、神をあがめつつ大聖堂を去っていった。「この人は、真理の説教者である。この人は、われわれをエジプトの暗黒から救い出すモーセである」と彼らは言った。^九

福音主義と法王主義の抗争

最初、彼の働きは非常に歓迎されたが、しばらくして反対が起こった。修道士たちが彼の働きを妨害し、彼の

教えを非難した。多くの者が、彼をあざけり侮べつした。無礼な態度をとり、威嚇する者もあった。しかし、ツウイングリはそれらをみな忍耐して、「もし、われわれが、悪人をキリストに導こうとするならば、多くのことに目を閉じなければならない」と言った。^{一〇}

ちょうどそのころ、改革事業に一段と力を添えるものが現われた。ルシアンという人が、バーゼルにいる改革を信じる友人に遣わされて、ルターの著書をたずさえてチューリヒに來たのである。その友人は、これらの書籍の販売が、光をまき散らす強力な手段であろうと言った。「本人が慎重で機敏であるかどうかを確かめた上で彼にルターの著書、特に主の祈りの注解を、スイス全国の都市から都市、町から町、村から村、そして家から家へ配布させられたい。知られば知られるほど、買い手は多く現われるであろう」と彼はツウイングリに書いた。^{一一}こうして、光は伝えられていった。

神が無知と迷信のかせを打ち砕こうとしておられた時に、サタンは、人々を暗黒に閉じこめ、いっそう堅く束縛しようとして、全力をあげて働いていた。あちらこちらで人々が立ち上がり、キリストの血によるゆるしと義とを説いたときに、ローマはますます強力に、キリスト教国全土に販路を広げ、金銭によるゆるしを提供した。

どの罪にも値段がついていた。そして、教会の金庫が満たされてさえあれば、人々はどんな犯罪でも犯すことが許されたのである。こうして、二つの運動が進められた。一方は、金銭による罪のゆるしであつたが、他方は、キリストによるゆるしであつた。ローマは罪を公認し、それを教会の財源にした。改革者たちは罪を非難し、キリストをその代償、また救出者として指し示した。

ドイツにおける免罪符の販売は、ドミニコ会修道士たちにゆだねられ、悪名高きテツツエルによって行なわれ

ていた。スイスでは、イタリアの修道士サムソンの指揮のもとにフランススコ会修道士たちの手によって販売されていた。サムソンは、すでにドイツとスイスから莫大な金額を得て、法王の金庫を満たし、教会のためによく働いていた。今や彼は、スイスを巡回し、多くの群衆を引きつけ、貧しい農民のわずかな収入を奪い、富裕な階級からは巨額の献金を搾取していた。しかし改革の影響は、売買を止めることはできなかったが、すでにその収入を減少させていた。サムソンが、スイス入国直後に、免罪符をもって近隣の町に到着したのは、ツウイングリがまだアインジードルンにいたときであった。彼の任務について知らされたツウイングリは、さっそく彼に反対するために出かけた。この二人は相会さなかったが、ツウイングリは巧みにこの修道士の欺瞞をあばいたので、サムソンは他の地方に去らなければならなかった。

改革事業の進展

ツウイングリはチューリヒにおいて、免罪符の販売人に痛烈に反対を唱えた。サムソンが町に近づいたとき、議会からの使者が、彼にそのまま通り過ぎるように通告した。彼は結局、策略を用いて町に入りはしたが、一枚の免罪符も売ることができずに退去させられた。やがて彼はスイスを去った。

一五一九年、スイス全国に流行した大疫病によって、改革事業に大きな刺激が与えられた。すなわち、人々がこのために死に直面したとき、つい先ごろ買ったばかりの免罪符がどんなにおなしく価値のないものであるかを、多くの者は感じたのであった。そして彼らは、より確かな信仰の基礎を得たいと熱望した。チューリヒにいたツ

ウィングリも、疫病に倒れた。彼は、助かる望みがなかったほど衰弱し、彼は死んだといううわさが広く伝えられた。こうした試練の時にあっても、彼の希望と勇氣はゆるがなかった。彼は信仰をもって、カルバリーの十字架を見つめ、罪に対する十分な贖いの供え物に信頼した。彼は死の門から帰ってくると、以前にまさる大きな熱情をもって、福音を宣べ伝えた。彼の言葉には、異常な力があつた。人々は、瀕死の床から立ち上がってきた敬愛する牧師を、喜びをもって迎えた。彼ら自身も、病人や死にそんな人々の看護をしていたから、これまでになく福音の価値を感じた。

ツウィングリは、福音の真理をいつそう明らかに理解し、彼自身が、その新生の力をより十分に経験したのであつた。彼が扱った問題は、人間の墮落と贖罪の計画であつた。「アダムにあつて、われわれは、みな死んだもの、墮落して、罪に定められたものである」と彼は言った。^二「キリストは、……われわれのために、永遠の贖いを買いとられた。……彼の受難は、……永遠の犠牲で、永遠にいやす力がある。それは、堅くゆるがぬ信仰をもつて信頼するすべてのものために、神の義を永遠に満足させる。」しかし人間には、キリストの恵みにあずかたからといって、罪を続ける自由はないということを、彼ははっきりと教えた。「神に対する信仰があるところはどこでも、神があられる。そして、神が宿られるところはどこでも、人々によきわざを勧め促す熱心が存在するのである」。^三

ツウィングリの説教に対する興味は、非常なもので、大聖堂は、彼の説教を聞きにやって来た群衆で満ちあふれた。彼は、彼らが理解できる程度に従つて、少しずつ真理を語つた。彼らを驚かし偏見を抱かせるような点については、最初に語らないように気をつけた。キリストの教えに彼らの心を引きつけ、キリストの愛によって彼

らの心を和らげ、彼らの前にキリストの模範を示すことが、彼の仕事であつた。彼らが福音の原則を受け入れるならば、迷信的信仰や習慣は、必然的に捨て去られるのである。

法王側の妨害

チューリヒにおける宗教改革は、一步一步進んでいった。敵は驚いて、活発に反対運動を起こした。一年前にウィッテンベルクの修道士が、ウォルムスにおいて法王と皇帝に対して否と言ひ、今チューリヒにおいても、法王の命令に対して同様の抵抗が起ころうとしていた。ツウイングリに対して、くり返し攻撃が向けられた。法王に属する州においては、しばしば、福音の使徒たちは火刑に処せられた。しかし、これでも十分ではなかつた。異端を唱えた教師を沈黙させなければならなかつた。そこで、コンスタンツの司教は、三人の使節をチューリヒの議会に派遣して、ツウイングリは人々に教会の規則を破ることを教えており、社会の平和と秩序を乱すものであると非難した。もしも教会の権威をくつがえすならば、至る所に、無政府状態が起こるであらう、と彼は主張した。ツウイングリはそれに答えて、自分は四年間、チューリヒにおいて福音を教えてきたが、「ここは、連邦のなかで、他のどんな都市よりも、平穩で平和であつた。」「それだから、キリスト教は、一般社会の安全を保障する最善のものではないだらうか」と言つた。^{一四}

教会以外に救いはないと言って、使節たちは議員たちに、教会にとどまるよう勧告した。ツウイングリは次のように答えた。「このような非難を受けても、動じてはならない。教会の基礎は、ペテロが忠実にキリストを告

白したゆえにペテロにその名を与えられたその同じ岩、同じキリストである。どの国においても、イエス・キリストを心から信じるものはみな、神に受け入れられる。まことに、ここに教会がある。これ以外においては、だれも救われることはできない。」^{一五}これらの協議の結果、司教の使節の一人は改革派の信仰を受け入れた。

議会はツウイングリに不利な決議をすることを拒んだ。そこでローマは、新しい攻撃の用意をした。ツウイングリは、敵の策略を知らされたとき、このように叫んだ。「攻めてくるなら来い。突き出した絶壁が、そのふもとに打ち寄せる波に動じないように、わたしも恐れな^{一六}い。」聖職者たちのすることは、彼らがくつがえそうとしたその運動を、促進するだけであつた。真理は広がり続けた。ドイツの支持者たちは、ルターが行方不明になつたために失望したが、スイスにおける福音の進展をみて、勇気を取りもどした。

チューリヒにおいて宗教改革が確立したとき、その結果は、悪徳の鎮圧と、秩序と調和の促進となつて著しくあらわれた。「平和がわれわれの都市に宿っている。口論、偽善、しつと、争鬭はない。主とわれわれの教義を除いてほかのどこからこのような一致が与えられるであらうか。これは、われわれを平和と敬虔の実で満たすのである。」^{一七}

法王側の策略

宗教改革が勝利を収めたので、法王派はますます堅い決意をもって、その撲滅を謀るようになった。彼らはドイツにおいて、ルターの運動を迫害によつてはさほど鎮圧することができなかったのを見て、改革それ自身の武

器によって改革を迎え撃とうとした。彼らは、ツウィングリと討論を行なう手はずを定め、ただその場所だけでなく、討論の審査員も自分たちで決めて、必勝を期した。そして彼らは、ひとたびツウィングリを自分たちの手中に入れてしまえば、彼を逃さないようにしようとしていた。指導者を沈黙させるならば、運動は速やかに弾圧することができるのであった。しかし、この計画は、極秘のうちに行なわれていた。

討論は、バーデンで行なわれることに決まった。しかし、ツウィングリは現われなかった。チューリヒの議会は、法王派の策略に気づくとともに、法王派の州において福音を信じた者たちが火刑に処せられたことに危険を感じ、彼らの牧師がこうした危険に身をさらすことを禁じたのである。彼は、チューリヒにおいてならば、ローマが派遣するすべての法王派と会見するつもりであった。しかし、真理のための殉教者の血が流されたばかりのバーデンへ行くことは、明らかに死に行くことであつた。そこで、エコランパデウスとハラーが改革派の代表として選ばれた。一方、有名なエック博士が、博識な学者や司教たちの支援を受けて、ローマを代表することになった。

ツウィングリは会議に出席していなかったが、彼の感化はそこに及んでいた。書記はみな法王派によって選ばれ、他の者は筆記することを禁じられて、それを犯すと死刑であつた。それにもかかわらず、ツウィングリはバーデンで論じられたことを毎日詳しく知らされた。討論に出席していた学生が、毎晩その日の議論を記録した。この記録を、他の二人の学生が、エコランパデウスの毎日の手紙とともに、チューリヒのツウィングリのところに届けた。ツウィングリはそれに答えて、助言や指示を与えた。彼の手紙は夜書かれ、学生たちは、朝それを携えてバーデンにもどってきた。町の門番の目を逃れるために、使者たちは頭に鶏のかごを乗せ、何のさまたげも

受けずに行き来できた。

こうしてツウィングリは、狡猾な敵との戦いに当たることができた。「彼は、瞑想、眠らぬ夜、また、バーデンに送った助言によって、敵たちの間で自分が討論するより、もっと多くのことを行なった」とニコニウスは言っている。^{一八}

バーデン会談とその影響

ローマ側の人々は、勝利を見越して、宝石をちりばめた美服をまとって意気揚々とバーデンに乗り込んでいた。彼らの食卓には、ぜいたくのかぎりを尽くした美食と最高の酒が豊富に並べられていた。彼らは、こうして陽気な歓楽にふけて、彼らの聖職者としての義務を軽視していた。改革者たちは、それとは全く対照的に、乞食の一行よりはややましな程度と見なされるほど質素で、彼らの食事はつましいものであり、長く食卓にとどまっていたなどいなかった。エコランパデウスの宿の主人は、彼がいつも部屋で研究をしているか、それとも祈っているかしているのを見て非常に驚き、この異端者はとにかく「非常に敬虔」であると報告している。

議場において、「エックは、りっぱに飾られた講壇に、高慢な態度で上ったが、謙虚なエコランパデウスは、質素な衣服をまとい、エックの前にあつた粗末な造りの腰かけにすわらせられた。」^{一九}エックは、大声で、無限の確信をもって語った。信仰の擁護者には多額の報酬が与えられることになっていたので、彼の熱心は名誉とともに金銭にも刺激されていた。そして議論に失敗すると、相手を侮辱し、口ぎたなくのしりさえするのであ

った。

エコランパデウスは、憤しき深く、自己を過信せず、論争を避けていた。そして、「私は神の言葉以外のどんな審判の標準も認めない」という厳肅な誓いの言葉をもって議論に応じた。^{二〇} エコランパデウスは、柔和で礼儀正しかったが、力強く、ひるむことなく立った。法王側がいつものように、教会の慣習に関する権威を主張したときにも、改革者は聖書を固持してゆるがなかった。「わがスイスにおいては、憲法に従ったものでないかぎり、慣習は無効である。事、信仰に関しては、聖書がわれわれの憲法である」と彼は言った。^{二一}

この討議に当たった両者の対照は、影響を及ぼさずにはいなかった。柔和で慎重な態度のうちに提示された、改革者の冷静で明快な理論は、エツクの高慢でそうぞうしい憶説をきらった人々の心に訴えた。

討議は十八日間続いた。その最後に当たって、法王側は、大いなる確信をもって勝利を宣言した。議員たちの多くも、法王側に加担した。議会は改革者たちの敗北を宣し、指導者ツウィングリと共に教会からの除名を布告した。しかし、会議の結果もたらされたものは、どちら側が有利であったかを明らかにした。すなわちこの討議の結果、プロテスタントの運動が強力に推進され、その後間もなく、ベルンとバーゼルという重要な都市が、改革の側に立つことを宣言したのであった。

注

- 一 Wylie, b.8, ch.5.
- 二 Ibid., b.8, ch.6.
- 三 D'Aubigné, b.8, ch.9.
- 四 Ibid., b.8, ch.5.

- 五 *ibid.*
- 六 *ibid.*, b.8, ch.6.
- 七 *ibid.*
- 八 *ibid.*
- 九 *ibid.*
- 一〇 *ibid.*
- 一一 *ibid.*
- 一二 Wylie, b.8, ch.9.
- 一三 D'Aubigné, b.8, ch.9.
- 一四 Wylie, b.8, ch.11.
- 一五 D'Aubigné, London ed., b.8, ch.11.
- 一六 Wylie, b.8, ch.11.
- 一七 *ibid.*, b.8, ch.15.
- 一八 D'Aubigné, b.11, ch.13.
- 一九 *ibid.*
- 二〇 *ibid.*
- 二一 *ibid.*

第一〇章

ドイツ宗教改革の進展

ルターの失踪と人心の動揺

ルターの不可解な失踪は、ドイツ全国を非常に驚かせた。どこへ行っても、人々は、彼のことを尋ねていた。途方もないうわさが広がり、彼が殺されたと思い込む者も多かった。明らかに彼の友人であると思われる者だけでなく、公然と宗教改革に加わってはいなかった幾千の者までが、深い悲しみに沈んだ。多くの者は結束して、彼の死のふくしゅうを厳粛に誓った。

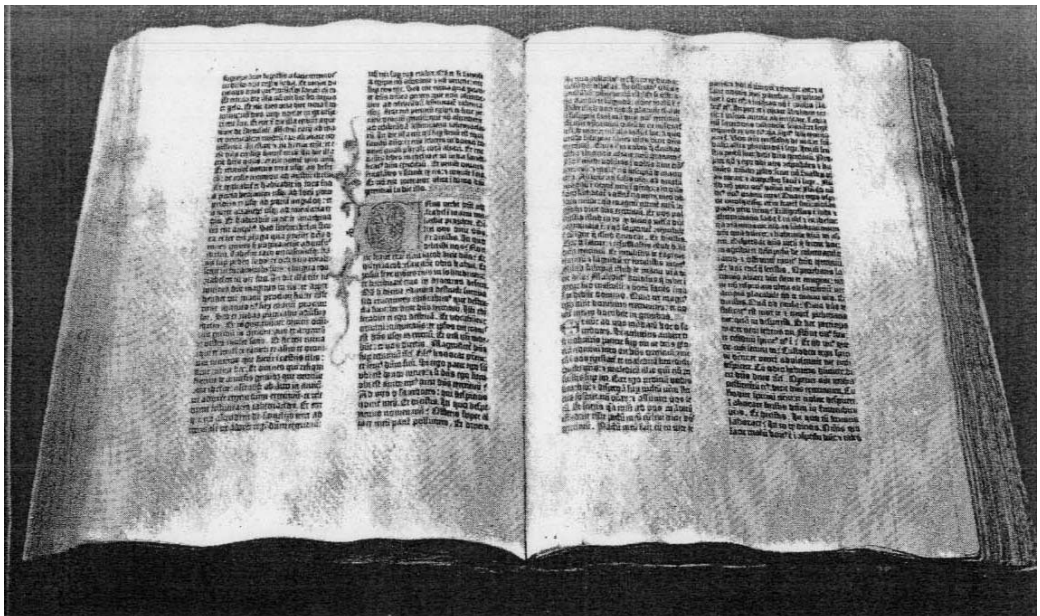
法王側の指導者たちは、彼らに対する反感の高まりを見て恐れた。初めはルターが死んだものと思って喜んだが、すぐに彼らは、人々の怒りから隠れたいと願った。ルターの敵は、彼が彼らの中にいてどんなに大胆に行動したにしても、いなくなった今ほどには困らせられなかったのである。激しく怒って、勇敢な改革者を殺そうと

した者も、今は、彼が自由のきかない捕虜になっていることに恐怖を抱いた。「われわれを救う唯一の方法は、たいまつを点じ、全世界を回ってルターを尋ね出して、彼を呼び求めている国民にかえすことだ」という者もあった。皇帝の布告も、その威力を失ったかに見えた。法王の使節たちは、皇帝の布告がルターの運命ほどには人の注意をひかないのを見て、非常に怒った。

ルターは捕われてはいるが安全であるという知らせに、人々の不安は静まったが、それとともに、彼を支持する熱意はさらに高まった。彼の著書は、これまでにない非常な熱心さで読まれた。恐ろしい強敵に立ち向かつて、神の言葉を擁護した英雄の事業に、ますます多くの者が参加した。宗教改革は、着実に勢力を増しつつあった。ルターのまいた種が、至る所で芽を出した。彼がいたのではできなかったような働きが、彼がいないことによって成し遂げられた。偉大な指導者が取り去られたために、他の働き人たちが新たな責任を感じた。彼らは、新たな信仰と熱心に燃えて全力をあげて前進し、りっぱに始められた働きが妨げられないようにしたのである。

しかし、サタンも、手をこまぬいてはいなかった。彼は、今、他のあらゆる改革運動において試みてきたことをしたのである。すなわち、真の改革事業の代わりに偽物をつかませて人々を欺き、滅ぼそうとした。キリスト教会の第一世紀に偽キリストたちが現われたように、十六世紀にも偽預言者たちが現われた。

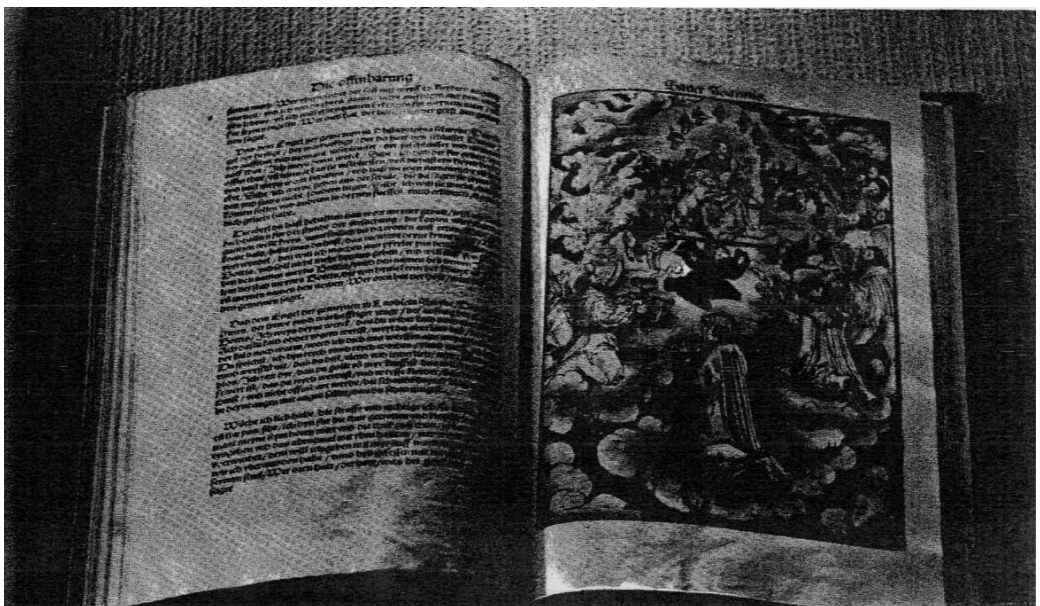
宗教界の騒ぎに強く刺激された二、三の者が、自分たちは天からの特別の啓示を受けたと思い込んだ。そして、自分たちは、ルターが細々と始めた改革を完成させるよう神の任命を受けたと主張した。しかし、実際には、彼らはルターが成し遂げた働きそのものをくつがえしていた。彼らは、改革の根底そのものである大原則、すなわち、神の言葉は信仰と行為の完全な規準であるということを拒んだ。そして、その誤ることのない指導に代えて、



グーテンベルクの印刷したラテン語聖書。『グーテンベルク聖書』あるいは『四十二行聖書』とよばれる。

ルターの訳になるドイツ語新約聖書。1522 年の 9 月に出たので『九月聖書』ともよばれる。

© SAATKORN - VFRI AG



彼ら自身の感情と印象という変わりやすい不確実な標準を用いた。誤りと虚偽の偉大な検出器である神の言葉を廃棄するこの行為によって、サタンが思うままに人間の心を支配する道が開かれた。

偽預言者たち

これらの預言者たちの一人は、天使ガブリエルから教えを受けたと主張した。彼と結束した一学生は、自分の勉強を放棄し、自分は神ご自身から、神の言葉を説明する知恵が与えられたと宣言した。他に、生来狂信的な傾向の者たちが彼らに加わった。こうした狂信家の行動によって、少なからず騒ぎが起こった。ルターの説教によって、至る所の人々は改革の必要を感じるようになっていたが、今、真にまじめな人々のなかには、新しい預言者たちの主張に惑わされる者があった。

この運動の指導者たちは、ウィッテンベルクに行き、メランヒトンと彼の同労者たちに、彼らの主張を訴えた。「われわれは、人々を教育するために神に遣わされた。われわれは、親しく主と話してきた。われわれは、何が起るかを知っている。一言で言えば、われわれは使徒であり、預言者である。そして、ルター博士に訴える」と彼らは言った。^二

改革者たちは、驚き当惑した。こうしたことにはまだ当面したことがなく、彼らはどうしてよいかわからなかった。メランヒトンは次のように言った。「確かに、この人々には、異常な霊が働いている。しかし、それはなんの霊であるか。…一方において、われわれは、神の霊を消さないように気をつけなければならぬ。そして、

他方においては、サタンの霊に惑わされないようにしなければならぬ。」^三

新しい教えの結果が、まもなく明らかになってきた。人々は聖書を軽んじ、あるいはそれを全く放棄するようになった。学校は混乱に陥った。学生たちは、すべての制限を無視して、研究を放棄し、大学をやめてしまった。改革事業を復興して支配することができると考えた人々は、それを破滅の淵に沈め得ただけであった。□—マ側は自信をとりもどし、「あともう一戦交えれば、すべてはわれわれのものだ」と勝ち誇って叫んだ。^四

フルトブルクにいたルターは、事の次第を耳にし、憂慮して言った。「わたしは、サタンがこのような災いを送ってくることを常に予期していた。」^五彼は、これらの偽預言者たちの本性を見抜いた。そして、真理の運動が危険にさらされているのを見た。法王や皇帝の反対も、今彼が経験しているほど大きな悩みや苦しみではなかった。改革事業の支持者と称する人々のなかから、最悪の敵が現われたのであった。彼に大きな喜びと慰めを与えた真理そのものが、教会のなかに争闘と混乱を起こすために、用いられていたのである。

改革の働きにおいて、ルターは神の霊によって前進させられたのであり、自分自身を越えて導かれていた。彼は、そのような立場をとろうとは意図していなかったし、またあのような急激な変化を起こそうとは考えていなかった。彼は、ただ、無限の神の手中の器に過ぎなかった。それにもかかわらず、彼は自分の働きの結果について、しばしば悩んだ。彼は、あるとき次のように言った。「もしわたしの教義が、どんなに身分が低く卑しい人であっても、その一人、ただ一人でも傷つけたとわかったならば、——これは福音そのものであるから、そのようなことはあり得ないのだが——、わたしはそれを取り消す。取り消さないくらいならば、十回死んだほうがよい。」^六

改革事業の危機

今や、宗教改革の中心地、ウィッテンベルクそれ自体が、狂信と無法の勢力下に急速に陥っていた。この恐ろしい状態は、ルターの教えの結果ではなかった。しかし、ドイツ全国 of 彼の敵が、それを彼のせいにした。彼は非常に心を痛めて、時々、「それでは、この宗教改革の大事業の結果は、こんなものであるうか」と問うた。^七彼は、熱心に神に祈り求めて、ふたたび心に平安が与えられた。「この仕事は、わたしのものではなくあなた自身のものである。あなたは、それが迷信と狂信に腐敗されることをお許しにならない」と彼は言った。しかしこのような危機にあつて、争闘から長く離れているということは、耐えられないことであつた。彼は、ウィッテンベルクに帰る決心をした。

直ちに、彼は危険な旅に出た。彼は帝国から追放されていた。敵は自由に彼の生命を奪うことができたし、友人たちは彼を助けたりかくまったりすることを禁じられていた。帝国政府は、彼の支持者たちに最も厳しい処置をとっていた。しかし彼は、福音事業が危機にひんしているのを見た。そして彼は、真理のために恐れることなく闘うために、主の名によって出ていった。

選挙侯に送った手紙のなかで、ルターは、フルトブルクを去る目的を述べたあとで、次のように言った。「わたしは、諸侯や選挙侯よりも強力な保護のもとに、ウィッテンベルクに行こうとしていることを殿下にお知らせいたします。わたしは、殿下の支持を求めようとは思いません。あなたの保護を願うよりは、わたしがあなたを

保護したいと思います。もし殿下がわたしを保護することができ、あるいは保護しようとなさることがわかつているならば、わたしはウィッテンベルクに行きたいとは少しも思いません。この運動は、剣によっては推進できません。人間の援助や同意によらず、ただ神だけが万事をなさるべきです。最大の信仰を持っている者が、最も保護する力があるのです。」^八

ウィッテンベルクへの途中で書いた第二の手紙のなかで、ルターは次のように付け加えた。「わたしは、殿下のきげんをそこね、全世界の怒りを招くことを覚悟しています。ウィッテンベルク市民は、わたしの羊ではないのでしょうか？神は彼らを、わたしにおゆだねにならなかったのでしょうか？そしてわたしは、必要ならば、彼らのために生命を捨てなくていいのでしょうか？さらに、わたしは、わが国に対する神の罰として、ドイツに恐ろしい暴動が起こることを恐れるのです。」^九

彼は、非常な慎重さと謙そんをもって、しかも断固とした決意のもとに、彼の仕事を始めた。「暴力によって立てられたものを、われわれは、み言葉によってくつがえし滅ぼさなければならぬ。わたしは、迷信深い人々や不信仰な人々に対して、暴力を用いない。人を強いてはならない。自由は信仰の本質そのものである。」^{一〇}

ルターの訴え

ルターがすでにもどってきて、説教をしようとしているということは、まもなくウィッテンベルクじゅうに知れ渡った。人々は、各地から集まってきて、教会はあふれるばかりになった。彼は、説教壇に上り、大いなる知

恵と柔和をもって、教え、勧め、譴責した。ミサを廃止しようとして暴力に訴えた人々の行動について、彼は次のように言った。

「ミサは、悪いものである。神は、それに反対しておられる。それは廃されるべきである。わたしは、全世界において、福音の聖餐がそれに代わることを望んでいる。しかし、だれ一人として、暴力によってそれから引き離されてはならない。われわれは、その事を神の手にゆだねなければならない。み言葉が行動を起こすべきで、われわれではない。それはなにゆえか、とあなたがたはたずねるのである。それは、陶工が土を手につくように、人々の心がわたしの手中にあるわけではないからである。われわれは語る権利がある。だがわれわれに行動する権利は**ない**。われわれは宣べ伝えよう。だがそれ以上は神に属する。わたしが暴力に訴えたとしても、なんの益があるのか。しかめつら、形式、物まね、人間の儀式、そして偽善である。…そして、誠実さも信仰も愛も、そこには見られないであろう。この三つが欠けていけば、すべてが欠けている。そのような結果は、なんの価値もない。…神は、あなたとわたしと全世界とが、力を合わせて行なう以上のことを、み言葉だけによってなされる。神は、人の心を捕えられる。そして心が捕えられるときに、すべてが得られるのである。…

わたしは、説教し、討論し、著述をする。しかし、わたしは、だれも強制しない。なぜなら、信仰は自発的な行為だからである。わたしの行なったことを見てほしい。わたしは、法王に、免罪符に、そして法王の支持者たちに反対したが、暴力を用いたり騒ぎを起こしたりはしなかった。わたしは神の言葉を差し出した。わたしは説教し、書いた。これがわたしの行なったすべてである。それにもかかわらず、わたしが眠っている間に、…わたしが説いたみ言葉が法王権をくつがえしたのであって、諸侯も皇帝もこれほどの損害を与えたことはなかった。

しかし、わたしは何もしなかった。み言葉だけがすべてを行なった。もしわたしが暴力に訴えたならば、恐らくドイツ全国に血の雨が降ったことであろう。そして、その結果はどうであつたろうか。身体も靈魂も滅び失せてしまったことであろう。それゆえに、わたしは静かにしていた。そして、み言葉だけを、世界にゆきわたらせておいたのである。」――

ルターは、一週間にわたって、毎日、熱心な聴衆に説教しつづけた。神の言葉が、狂信的な騒ぎを静めた。福音の力が、惑わされた人々を真理の道に引きもどした。

ルターは、非常な害悪を及ぼした狂信家たちと会うことを望まなかった。彼らは、判断力が健全でなく、感情の未熟な人々で、天からの特別の光を受けたと言いながら、わずかの反論、または親切な譴責や勧告さえも受けつけない人々であることを、彼は知っていた。彼らは、最高の権威を持ったものであると称して、いやおうなしに、すべての者に彼らの主張を認めさせた。しかし、彼らがルターに会見を申し込んできたので、彼は、彼らに会うことに同意した。そして彼は、巧みに彼らの化けの皮をはいだので、偽り者たちは直ちにウィッテンベルクを退散してしまった。

狂信的なトマス・ミュンツァー

こうして、狂信は一時くいとめられた。しかし、それは数年後にさらに激しく盛りかえして、恐ろしい結果をもたらした。この運動の指導者について、ルターは次のように言った。「彼らにとって、聖書は死文に過ぎない。

そして彼らはみな、『聖霊、聖霊』と叫び出した。しかし、わたしは彼らの霊の導くところには、もちろんついて行かない。どうか、あわれみ深い神が、自称聖徒だけしかないような教会から、わたしを守ってくださいように。わたしは、自分たちの罪を痛感し、神の慰めと支えを得るために、心の底からたえずうめき、叫び求める人々、謙そんで弱く病んでいる人々と共に住みたいと思う。^二

狂信家の中で最も活動的なトマス・ミュンツァーは、非常な才能の持ち主であった。もし彼が正しく指導されなければ、世を益するところが多かったであろう。しかし彼は、真の宗教の根本原則を知っていなかった。「彼は、世界を改革しようと望んだ。そして、すべての熱狂家たちと同様に、改革はまず自分から始まるべきであることを忘れた。」^三彼は、地位と勢力への野望を抱き、ルターに次ぐ地位でも満足しなかった。改革者たちが、法王の代わりに聖書の権威を認めるならば、それは、ただ別の形の法王権を樹立するだけであると彼は主張した。そして彼自身は、自分は真の改革を行なうために、神の任命を受けたと主張した。「この精神を持つものは、一生涯聖書を見なくても、真の信仰を持つ」とミュンツァーは言った。^四

狂信的教師たちは、感情のままに支配され、すべての思いと衝動を神の声であると考えた。したがって、彼らは、非常に極端であった。「文字は人を殺し、霊は人を生かす」と叫んで、聖書を焼く者さえあった。ミュンツァーの教えは、奇異を好む人心に訴えると共に、事実上、人間の思想や意見を神の言葉以上に高めて、彼らの誇りを満足させた。彼の教義は、幾千のものに迎えられた。彼はまもなく、公の礼拝のあらゆる秩序を公然と非難し、諸侯に服従することは神とベリアル^五の両方に仕えようとするものである、と宣言した。

すでに法王権の拘束を脱し始めていた人々の心は、国家の権力の束縛にも耐えられなくなっていた。神の是認

によるものと称したミュンツァーの改革的教義は、彼らをあらゆる抑制から引き離し、彼らの偏見と感情の赴くままにさせた。最も恐ろしい暴動と争闘の場面が続いて起き、ドイツの国土に血の雨が降った。

真理と虚妄との戦い

狂信の結果起こったことが、宗教改革のせいにされたのを見たルターは、ずっと以前にエルフルトで経験した苦悩に倍するほどの、大きな苦悩を味わった。法王側の諸侯は、ルターの教義は当然反逆を引き起こすものであると断言し、多くの者がそれを是認するありさまだった。こうした非難は、なんの根拠もないものであったが、改革者ルターに大きな悩みを与えずにはいかなかった。真理の事業が、卑劣な狂信と同一視されて、このように辱められることは、耐えられないことに思われた。他方、反逆の指導者たちは、ルターが彼らの教義に反対し、神の靈感によるものであるという彼らの主張を否定しただけでなく、彼らを国家の権力に反逆する者であると言ったために、ルターを憎んだ。その報復として、彼らはルターを卑しい欺瞞者と非難した。彼は、諸侯と民衆の両方の敵意を招いたかのように思われた。

宗教改革が急速に衰えるのを見た法王側は、大いに喜んだ。そして彼らは、ルターがけんめいに正そうと努力してきた誤りさえもルターの責任にした。狂信者たちは、不当な取り扱いを受けたと偽って、多くの民衆の同情を得ることに成功した。そして、誤った側に加担する者がしばしばそうみなされるように、彼らは殉教者とみなされた。こうして、宗教改革に全力をあげて反対していた者たちが、残酷と圧制の犠牲者として、同情と賞賛を

受けた。これはサタンの働きであって、最初、天においてあらわされたのと同じ反逆の精神に動かされたものであった。

サタンは、常に人々を欺き、罪を義と呼び、義を罪と呼ばせる。彼の働きはなんと成功していることであろう。真理を擁護して堅く立つために、神の忠実なしもべたちがなんとしばしば非難攻撃を受けることであろう。サタンの代理に過ぎない者が、賞賛とへつらいを受けて、殉教者とさえみなされている。他方、その神への忠誠に対して尊敬と支持を受けるべき人々が、疑惑と不信のもとに孤立させられているのである。

にせの聖潔、偽りの清さが、今なお欺瞞の活動を行なっている。それは、ルターの時代のように、種々の形態のもとにその精神をあらわし、人々の心を聖書から引き離して、神の律法に服従するよりは自分たちの感情や印象に従うようにさせる。これは、純潔と真理を非難するサタンの最も巧妙な手段の一つである。

ルターは恐れることなく、四方からの攻撃に対し福音を擁護した。神の言葉は、あらゆる争いにおいて、偉大な武器であった。その言葉をもって、彼は、法王が僭取した権力や、学者の思弁的な哲学に立ち向かった。そして他方、彼は、宗教改革と合同しようとした狂信に反対して、岩のように堅く立ったのである。

これら相対立する諸勢力は、そのいずれもが、聖書を捨て去り、人間の知恵を、宗教的真理と知識の根源として高めていた。理性主義は、理性を偶像にして、それを宗教の規準にする。ローマ主義は、法王は、使徒伝来の、そして全時代を通じて不変の靈感を受けていると主張して、使徒的任命という神聖な名目のもとに、あらゆる種類のぜいたくと腐敗をおおいかくしている。ミュンツァーとその仲間が主張した靈感とは、気まぐれな想像に過ぎず、人間の、また神の、あらゆる権威を破壊するものであった。しかし、真のキリスト教は、神の言葉を、霊

感による真理の一大宝庫として、また、すべての靈感の試金石として受け入れるのである。

聖書のドイツ語訳

ルターは、フルトブルクから帰るとすぐに、新約聖書の翻訳を完成した。そしてまもなく、ドイツ国民は、福音を自国語で手にすることができた。この翻訳は、真理を愛するすべての人々から、非常な喜びをもって迎えられた。しかし、人間の伝説や人間の律法を選ぶ人々からは、軽べつされ拒絶された。

司祭たちは、これからは一般の人々が神の言葉の戒めについて自分たちと討論することができ、こうして自分たちの無知が暴露されるのではないかと考えて驚愕し、不安になった。彼らの肉的な理論という武器は、霊の剣の前には無力であつた。ローマは全力をあげて、聖書の配布を妨害した。しかし、教書も破門も拷問も、みなおだであつた。聖書を非難し禁止すればするほど、人々は、聖書の教えを知ろうと欲した。読むことができる者はみな、自分で神の言葉を熱心に研究した。彼らはそれを、持ち歩いてくり返し読み、その大部分を暗唱するまでは満足しなかつた。ルターは、新約聖書が歓迎されたのを見て、直ちに旧約聖書の翻訳を開始し、できしだい分冊にして発行した。

ルターの著書は、都市でも村でも歓迎された。「ルターと彼の同志たちの作ったものを、他の者たちが配布した。修道院制度の不法を悟って、怠慢な長年の生活を活動的なものに一変しようと望んだが、しかし神の言葉を宣言するには無知すぎた修道士たちは、各地を旅して村々や戸ごとを訪問し、ルターとその仲間の著書を買った。

ドイツはまもなく、こうした勇敢な文書伝道者の群れであふれた。」^{一五}

これらの著書は、貧富や学識の有無を問わず、非常な興味をもって研究された。村の学校の教師たちは、夜、炉辺に集まった小さな群れに、それを読んで聞かせた。こうした努力のたびに、幾人かの魂が真理を認めて喜んで言葉を受け入れ、今度は彼らが、福音を他の人々に伝えた。

「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」という靈感の言葉が実証された（詩篇一一九ノ一三〇）。聖書の研究は、人々の心に大きな変化を起こしつつあった。これまで法王権は、その支配下にある者を鉄のくびきで縛り、無知と墮落に陥れていた。形式の迷信的遵守が厳格に継続されていたが、そのすべての儀式において、心や知性はなんのかかわりも持たなかった。しかしルターの説教は、神のみ言葉の明白な真理を示すとともに、み言葉そのものが、一般の人々の手に渡ったことによって、彼らの眠っていた能力を呼びさまし、彼らの霊性を清めて高尚にするだけでなく、知性に新しい力と活気を与えたのである。

聖書の普及と法王教の打破

あらゆる階級の人々が、聖書を手にして、宗教改革の教義を擁護するのが見られた。聖書の研究を司祭や修道士にゆだねていた法王教徒たちは、彼らが出て来て新しい教義に反論することを要求した。しかし、聖書にも神の力にも無知であった司祭や修道士たちは、彼らが無知だ異端だと弾劾していた人々によって、完全に打ち負かされてしまった。「あいにくとルターは、聖書以外のどんな神託も信じてはならないと、彼の支持者たちに信じ

込ませてしまった」とあるカトリックの著者は言った。^{一六}無学な人々が真理を擁護し、また、学識ある雄弁な神学者と彼らが討論するのを、群衆が集まって聞くのであった。これらの大家たちは、その議論が神のみ言葉の単純な教えによって反論されて、無知の恥を暴露した。労働者、兵卒、婦人、そして子供たちでさえ、司祭や学識のある博士たちよりも、聖書の教えをよく知っていたのである。

福音を信じる者と法王教の迷信を信じる者との対照は、知識階級のみならず一般の人々の目にも明らかであった。「語学の研究と文学の素養をなおざりにしてきた法王側の老戦士たちに対して、……広い心をもった青年たちが、研究に没頭し、聖書を調べ、古代の傑作に親しんでいた。活発な頭脳、高貴な魂、そして勇敢な心を持つたこれらの青年たちは、やがて、長い間にわたってだれにもひけを取らない知識の持ち主になった。……従って、これらの若い改革擁護者たちは、どのような会合において法王側の博士たちと相対しても、非常なゆとりと確信をもって彼らを攻撃するので、無知な彼らはうろたえ、当惑し、衆人の前で恥をかくのであった。」^{一七}

ローマ側の司祭たちは、自分たちの会衆が減少するのを見て当局の援助を求め、自分たちも全力をあげて聴衆を引きもどそうと努めた。しかし人々は、新しい教えの中に彼らの魂の必要を満たすものを見いだした。そして、長い間迷信的な儀式と人間の伝説という無価値な豆がらを与えてきた者からは、顔をそむけて離れていった。

真理の教師たちに迫害の火の手があがったとき、彼らは、「一つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい」というキリストの言葉に従った(マタイ一〇ノ二三)。光は、至る所に照り輝いた。逃亡者たちは、どこかで彼らを迎えてくれる家を見つけ、そこに泊まって、ある時は教会で、またそれが許されなければ個人の家、または戸外で、キリストを説教したのである。どこであろうと聴衆がありさえすれば、そこは彼らにとって聖い神殿であ

った。このような活気と確信のもとに宣言された真理は、破竹の勢いで広まった。

教会当局と政府当局の両方が異端を撲滅しようとしたが、むだであった。投獄、拷問、火刑、剣を用いてもむだであった。幾千という信者が殉教したが、働きは前進していった。迫害は、真理の進展を促すだけであった。そして、サタンがそれと合流させようと努めた狂信も、サタンの働きと神の働きの区別をいよいよ明らかにする結果に終わったのである。

注

- 一 D'Aubigné, b.9, ch.1.
- 二 *ibid.*, b.9, ch.7.
- 三 *ibid.*
- 四 *ibid.*
- 五 *ibid.*
- 六 *ibid.*
- 七 *ibid.*
- 八 *ibid.*, b.9, ch.8.
- 九 *ibid.*, b.9, ch.7.
- 一〇 *ibid.*, b.9, ch.8.
- 一一 *ibid.*
- 一二 *ibid.*, b.10, ch.10.
- 一三 *ibid.*, b.9, ch.8.
- 一四 *ibid.*, b.10, ch.10.

— 一 一
七 六 五
bid. bid. bid.
b.9, ch.1.

第一章

信教の自由のための戦い

シュパイエル議会開かる

宗教改革擁護のために宣言された最も高潔な証言の一つは、一五二九年にシュパイエルの国会で、ドイツのキリスト教諸侯が提出した『抗議書』であった。これら神の人々の勇氣と信仰と堅固な態度は、その後の幾世代にわたって、思想と良心の自由を確保した。彼らの『抗議書』が、改革教会にプロテスタントという名称を与えた。その原則は、「プロテスタント主義の真髄そのもの」である。

宗教改革にとって、暗く陰悪な時代が到来していた。ウォルムスの勅令によってルターは破門され、彼の教義を教えたり信じたりすることは禁じられていたけれども、これまでのところ、ドイツにおいては、宗教上の自由が保たれていた。神の摂理によって、真理に反対する勢力が抑えられていた。カール五世は、宗教改革を鎮圧し

ようとしたが、打撃を加えようとすると、それを他へ向けねばならなくなることがしばしばあった。幾度となく、ローマに反抗するすべてのものは、直ちに打ち滅ぼされることが不可避に思われた。しかし、そうした危機に、トルコの軍勢が東の国境に現われたり、あるいは、フランス国王、または法王自身でさえも、皇帝の勢力の増大をねたんで、戦いをいどんできたのである。こうして、諸国の紛争と騒乱の中で、宗教改革は力をつけ、発展していくことができた。

しかし、ついに法王側が彼らの紛争をやめ、力を合わせて改革者たちに当たってきた。一五二六年のシュパイエルシュパイエルの議会は、一般教会会議が開かれるまでは宗教に関して各国に完全な自由を与えていた。しかし、このような譲歩を必要としたところの危険が過ぎ去るやいなや、皇帝は、異端撲滅を目的とした第二回シュパイエル議会将一五二九年に開いた。諸侯たちは、できるなら平和的な方法で、改革に反対するように誘われるのであった。しかし、それが失敗すれば、カールは剣に訴える用意をしていた。

法王側は勝ち誇った。彼らは大ぜいでシュパイエルに乗り込み、改革者と支持者たちのすべてに対して、公然と敵意をあらわした。メランヒトンは言った。「われわれは、世ののろいを受け、ちりのように思われている。しかし、キリストは、彼のあわれな民をながめ、保護されるのである。」^二 議会に出席中の、福音を信じる諸侯は、彼らの邸宅において福音の説教をすることさえ禁じられた。しかし、シュパイエルの人々は、神のみ言葉にかわいていた。そこで、禁じられていたにもかかわらず、幾千という人々がザクセン選挙侯の礼拝堂で開かれた集会に集まった。

これは危機を早めた。良心の自由を許した決議が大混乱を引き起こしたために、皇帝はそれを撤廃する、とい



1529年のシュパイエル国会で、ドイツのキリスト者諸侯によって提出された「抗議書」は、教会史上最も気高い信仰声明の一つであった。この劇的な事件が、改革主義の教会に「プロテスタント」（抗議する者）という名を与えた。

う勅令が議会に対して発表された。この専横な行為は、福音的キリスト者たちの憤りと驚きを引き起こした。ある人は、「キリストは、ふたたび、カヤパとピラトの手に落ちた」と言った。ローマ側は、さらに猛威をふるった。ある頑迷な法王教徒は言った。「トルコ人は、ルター派の者よりはよい。なぜならば、トルコ人は断食を守っているが、ルター派はそれを破っている。われわれが、神の聖書か教会の昔からの誤りかを選ばなければならぬとすれば、われわれは、前者を拒否する」メランヒトンは、「フアーベルは、毎日議会全体の前で、われわれ福音を信じる者に、新しい石を投げつける。」と言った。^三

危険な妥協案

宗教の自由は、法的に確立されていた。そして、福音主義に立つ諸州は、彼らの権利の侵害に反対する決意をした。ルターは、依然としてウオルムスの勅令によって破門されていたので、シュパイエルに行くことは許されなかった。しかし、彼の同労者と、この危機において神の事業を擁護するために神が起こされた諸侯とが、彼の代理をつとめた。前にルターを保護したザクセンの高潔なフリードリヒ選挙侯は、もうこの世の人ではなかった。しかし、彼の兄弟で後継者のヨハン公も喜んで改革を歓迎し、平和の愛好者でありながら、信仰に関するすべてのことについては非常な努力と勇気とを示した。

司祭たちは、宗教改革を受け入れていた諸州が、ローマの支配に絶対的に従うことを要求した。しかし改革者たちは、以前に許されていた自由を主張した。非常な喜びをもって神の言葉を受け入れた諸州を、ふたたびロー

マの支配下におくことに、彼らは同意することができなかった。

そこで、ついに妥協案として、宗教改革がまだ確立されていないところにおいては、ウォルムスの勅令を施行すべきことが提案された。そして、「その勅令に従わない州、また、これに従おうとすれば反乱が起る危険のあるところでは、少なくとも、新しい改革をなさず、論争点には触れず、ミサを行なうことに反対せず、ローマ・カトリック信者にルター主義を受け入れることを許さないようにする」ことが提案された。^四この案が議会通过し、法王側の司祭と司教たちは、大いに満足した。

もしこの勅令が実施されるならば、「宗教改革は、それがまだ伝わっていないところに……伝えられることができず、また、それがすでに伝えられたところでは、堅固な基礎の上に確立されることもできなかった。」^五言論の自由が禁止され、改宗することも許されなくなる。そして、このような制限と禁止に改革支持者たちは直ちに服さなければならなかった。世界の希望は、消え去るかと思われた。「ローマの教権制度の復興が……古来の悪弊を再びもたらすことは確かだった。」そして、狂言と紛争のために「すでに激しく動揺している事業を、完全に崩壊させる」機会は、すぐに見いだされることであろう。^六

信教自由の危機

福音派の会議が開かれたときに、お互いは困惑した顔をしていた。彼らは、次々に「どうすればよいのか？」と問うた。今や、世界の運命を決定する大問題が持ち上がっていた。「改革派の首脳者たちは、屈服して、勅令

に従うであろうか。この危機、真に恐るべき危機において、誤った道に落ちこんでしまうことは、何とやさしかったことであろう。屈服するためのまことしやかな口実やもつともな理由は、いくらでもあった。ルター派の諸侯には、信教の自由が与えられていた。同じ自由は、この案が通過する前に改革派の信仰を持ったすべての臣下にも、与えられていた。彼らは、これで満足すべきではなかったか。服従すれば、どんなに多くの危機を避けることができるであろう。反対するならば、どんなにはかり知れない危機と争闘に巻き込まれることであろうか。将来、どんな機会があるかわからない。平和を結ぼう。ローマが差し出すオリブの枝をつかんで、ドイツの傷をつつもう。——このような議論のもとに、改革者たちは、速やかに彼らの事業をくつがえしてしまふ道に進むことを、正当化することもできたであろう。

しかし幸いにも彼らは、こうした妥協の根底にある原則を見て、信仰によって行動した。その原則とは、なんであつたらうか。それは、ローマは良心を強制し、自由な研究を禁じる権利を持つという主張である。しかし、彼ら自身とプロテスタントの臣下には、宗教上の自由が与えられないのであろうか。いや、与えられはするが、それは妥協案の中で特に記載された恩恵としてであつて、権利としてではない。その措置以外のあらゆる点においては、権威の大原則が支配するのであった。良心は無視された。ローマは、誤ることのない裁判官で、服従を要求した。妥協案を受け入れることは、改革主義を受け入れたザクセンだけに宗教の自由を限定することを、事実上認めたことになる。そして、その他のすべてのキリスト教国においては、改革主義の信仰を研究して信じることは犯罪で、投獄と火刑の罰を受けなければならなかった。彼らは、宗教の自由を一地方にとどめるということに、同意できるであろうか。宗教改革の改心者はこれで終わり、征服すべき地はこれまでであると宣言するの

であろうか。そして、現在ローマが支配しているところはどこであっても、永久にその主権が続くのであろうか。改革者たちは、この協定が実施されることによって、法王権下の地方において生命をささげなければならなくなる幾百幾千の人々の血に対して、自分たちの無罪を主張することができ得るであろうか。そうすることは、この一大危機において、福音の事業とキリスト教国の自由に対する裏切りとなるのであった。^七そこで彼らは、むしろ、「すべてのものを、国や王位や生命さえも、犠牲にしよう」としたのである。^八

皇帝側と改革派の対立

「われわれは、この法令を拒否しよう。良心の問題に関しては、多数といえども権力を有しない」と諸侯は言った。また代議員たちは言った。「帝国の平和が保たれているのは、一五二六年の勅令のおかげである。それを破棄すれば、全ドイツは紛争と分裂に陥るであろう。国会は、会議が開かれるまで宗教の自由を保つより他に、何もすることはできない。^九良心の自由を保護することは、国家の義務である。そして、宗教の事に関して、これが国家の権力の限界である。国家の権力によって、宗教的行事を規定し、または強制しようとする政府はみな、福音を信じるキリスト者が、そのためにおおしく闘った原則そのものを犠牲にしているのである。

法王側は、彼らのいわゆる「大胆な強情」を鎮圧しようと決意した。彼らはまず、宗教改革の支持者間に分裂を起こさせ、またそれに公然と賛成していない者をみな威嚇しようとした。ついに、自由都市の代表者たちは議会に召喚され、提案の条項に同意するかどうかを宣言することを要求された。彼らはしばらくの猶予を願ったが、

許されなかった。彼らは試問を受け、その約半数は改革者の側についた。良心の自由と各自の判断の権利を犠牲にすることを拒んだ者は、そうした立場をとったことが、将来批判や非難や迫害の的になることをよく知っていた。代議員の一人は、「われわれは、神の言葉を拒否するか、それとも火刑になるかのどちらかである」と言った。^{二〇}

議会における皇帝の代理者、フェルディナント王は、諸侯に法令を受け入れさせ支持させるのでなければ、重大な分裂が起こるのに気づいた。そこで彼は、彼らに対して暴力を用いることは、ますます彼らの決意を固めさせるだけであることを悟って、努めて彼らを説得することにした。彼は、「諸侯に、法令を承認することを請い、皇帝はそれを非常に喜ばれるであろうと断言した。」しかし、忠実な諸侯は、地上の支配者以上の権力を認めていた。そして、彼らは、冷静に、「われわれは、平和の維持と神の栄光のためであるならば、万事皇帝に従う」と答えた。^{二一}

ついに、王は、議会において、選挙侯と彼の支持者たちに、法令は「皇帝の勅令として発布されるばかりであり、」^{二二}「彼らの残された唯一の道は、多数に従うだけである」と伝えた。彼は、こう言うってから議会を退場し、改革者たちに討議や返答の機会を与えなかった。「彼らは使者を派遣して、王が議会にもどるよう懇請したが、むだであった。」^{二三}彼らの抗議に対して、王は、「これはすでに決定している。後は服従があるのみである」と答えるだけであった。^{二四}

皇帝側は、キリスト教諸侯が聖書を人間の教義や規則以上のものとして固守することを知っていた。そして、この原則が受け入れられているところはどこでも、必ず法王権がくつがえされてしまうことを知っていた。しか

し、彼らの時代以降の幾多の者たちと同様に、彼らは、ただ「見えるもの」だけを見て、皇帝と法王の側が強く、改革者の運動は弱いと思ひこみ、得意になったのであった。もし改革者たちが、人間的な助けだけに頼っていたならば、法王側の想像したとおり無力であつたことであろう。しかし、数は少なく、ローマに敵対してはいても、彼らには力があつた。彼らは、「議会の決議ではなくて、神の言葉、カール皇帝ではなくて、王の王、主の主であられるイエス・キリストに」訴えたのである。^三

『抗議書』の提出

諸侯は、フェルディナントが彼らの良心の確信を認めなかつたので、彼の退席を意に介さず直ちに議会で彼らの『抗議書』を提出することにした。そこで、厳粛な宣言が作成されて、議会に提出された。

「われわれは、われわれの唯一の創造主、維持者、贖罪主、救い主、また、われわれの審判者となられる神、および、全人類と全被造物の前で、抗議を提出する。われわれは、われわれとしても国民としても、その法令の中で、神に反し、神のみ言葉、われわれの正しい良心、われわれの魂の救いに反することには、絶対に同意支持することはできない。」

「われわれがこの勅令を承認することなどできようか。全能の神が、人間に神の知識を示されるにもかかわらず、人間は神の知識を受けることはできないなどということがあり得ようか。」「神の言葉に一致するもの以外に、確かな教義はない。…主は、その他の教義の宣布を禁じられる。…聖書は、他の、より明白な聖句によつて

説明されるべきである。……この聖書は、すべての事においてキリスト者に必要なものであり、理解しやすく、暗黒を撃退するためのものである。われわれは、神の恵みによって、旧新約聖書各巻に含まれている神の言葉だけの純粹独特の説教を維持し、それに反するどんなものをも付加しないことを決意している。この言葉が唯一の真理である。これが、すべての教義と人生全般の確かな規準である。それは決してわれわれを失望させたり、欺いたりしない。この基礎の上に築くものは、黄泉のすべての力に立ち向かうことができるし、他方それに対抗して立てられたあらゆる人間的栄華は、神の前に崩れ落ちるのである。」

「このような理由のもとに、われわれは、課せられた束縛を拒否する。」「同時に、われわれは、皇帝が、何よりも神を愛するキリスト者君主として、われわれを遇されることを期待する。そうすればわれわれは、あなたがた恵み深き諸侯に対すると同じく、われわれの正当当然の務めである愛情と服従のすべてを、喜んで皇帝に表明することを宣言するものである」。^四

議会は、深い感動を受けた。その大多数は、抗議者たちの大胆さを見て、驚きと恐れとに満たされた。将来は、波乱と不安に満ちているように思われた。不和、争闘、流血は不可避に思われた。しかし改革者たちは、彼らの運動が正しいことを確信し、全能の神のみ手にすぎり、「勇氣と堅い決意に満ちて」いた。

プロテスタントの根本精神

「この有名な抗議書に含まれた原則は、……プロテスタント主義の本質そのものであった。この抗議書は、信

仰の問題に関する人間の二つの害悪に抗議している。その第一は、為政者の侵害であり、第二は、教会の独断的権力であった。プロテスタント主義は、これらの害悪の代わりに、政権以上に良心の能力を重んじ、目に見える教会以上に神の言葉の権威を認める。それは、まず第一に、政権が神の事柄に関与するのを拒み、預言者や使徒たちと共に、『人に従うよりは、神に従うべきである』と言う。それは、カール五世の王冠の前で、イエス・キリストの王冠を掲げる。しかし、さらに一歩進めて、すべての人間の教えは神の言葉に従うべきである、という原則を規定する。^{一五}「そればかりでなくて、抗議者たちは、自分たちが真理と信じることを自由に語る権利を主張した。彼らは、信じて従うだけでなくて、神の言葉が提示していることを教えたいと望み、司祭や政権の干渉権を拒んだ。シユパイルの抗議書は、宗教的弾圧に対する重大な証言であった。そして、それは、良心の命じるままに神を礼拝する全人類の権利の主張であった。

宣言は行なわれた。それは、幾千の人々の記憶に刻まれると共に、だれも消すことができない天の書に記録された。ドイツの福音派は、すべて、この抗議書を信仰の表明として採用した。各地において、人々は、この宣言に、新しい、よりよい時代の希望を認めた。諸侯の一人は、シユパイルの抗議者たちに次のように言った。「どうか、力強く自由に、恐れることなく告白する恵みをあなたがたに与えられた全能の神が、永遠の日まで、あなたがたにそのようなキリスト者の堅実さを持たせられるように祈る。」^{一六}

もし宗教改革が、ある程度成功を収めた後で、世俗の支持を得るために世と妥協したならば、それは神に不忠誠であるとともに、運動そのものに背くことになり、ついには自滅したことであろう。これらの高潔な改革者たちの経験は、その後のすべての時代の人々に教訓を与えている。神と神の言葉に反対して働くサタンの方法は変

わっていない。彼は、十六世紀におけると同様に、今もなお、聖書を生活の規準にすることに反対している。現代においては、改革者たちの教義や信条からの大きな逸脱が見られる。われわれは、信仰と行為の基準は、聖書、そして聖書だけであるというプロテスタントの大原則に、帰らねばならない。サタンは、今なお、あらゆる手段を用いて、宗教の自由を粉碎しようとしている。シュパイエル抗議者たちが拒否したところの反キリスト者的力は、今新たな力をもって、失った主権を回復しようとしている。あの宗教改革の危機において表わされた、神のみ言葉に対するゆるがぬ信仰が、今日の改革の唯一の希望である。

天使の守護

改革者たちに危険が迫ったことを示すしがあらわれた。また、忠実な者を保護するために神のみ手がのべられたことを示すしるしもあった。ちょうどこのころのことであった。「メランヒトンは、彼の友人シモン・グリナエウスを連れて、大急ぎでシュパイエルの町を通りぬけてライン河に向かい、彼をせきたてて河の向こう側に渡らせた。そのときシモンは、なぜこつも急がせられるのかと不思議に思った。『謹厳な風采をした見知らぬ一人の老人が、わたしの前に現われて、フェルディナント公から派遣された役人が、グリナエウスを捕えにすぐやってくると言ったのだ』とメランヒトンは言った。」

その日グリナエウスは、法王側の大博士ファールベルの説教に憤慨し、「まことに憎むべき誤り」を弁護しているとして、彼に抗議したのであった。「ファールベルは、怒りを隠していたが、その後直ちに王のところへ行き、

王から、このハイデルベルクのかたくなな教授、グリナエウスの逮捕命令を得たのである。メラnhitonは、神が、聖天使の一人を送って、警告を与え、彼の友人を救ってくださったことを疑わなかった。」

「メラnhitonは、ライン河の岸边にじっと立って、川の流れが、迫害者の手からグリナエウスを救うのをみつめていた。彼が対岸に到着すると、『やつと彼は、罪なき者の血に飢えた残酷なきばかり免れた』とメラnhitonは叫んだ。彼が家に帰ってみると、グリナエウスの搜索隊が、家の中を隅から隅まで捜し回ったことを知らされた。」^{一七}

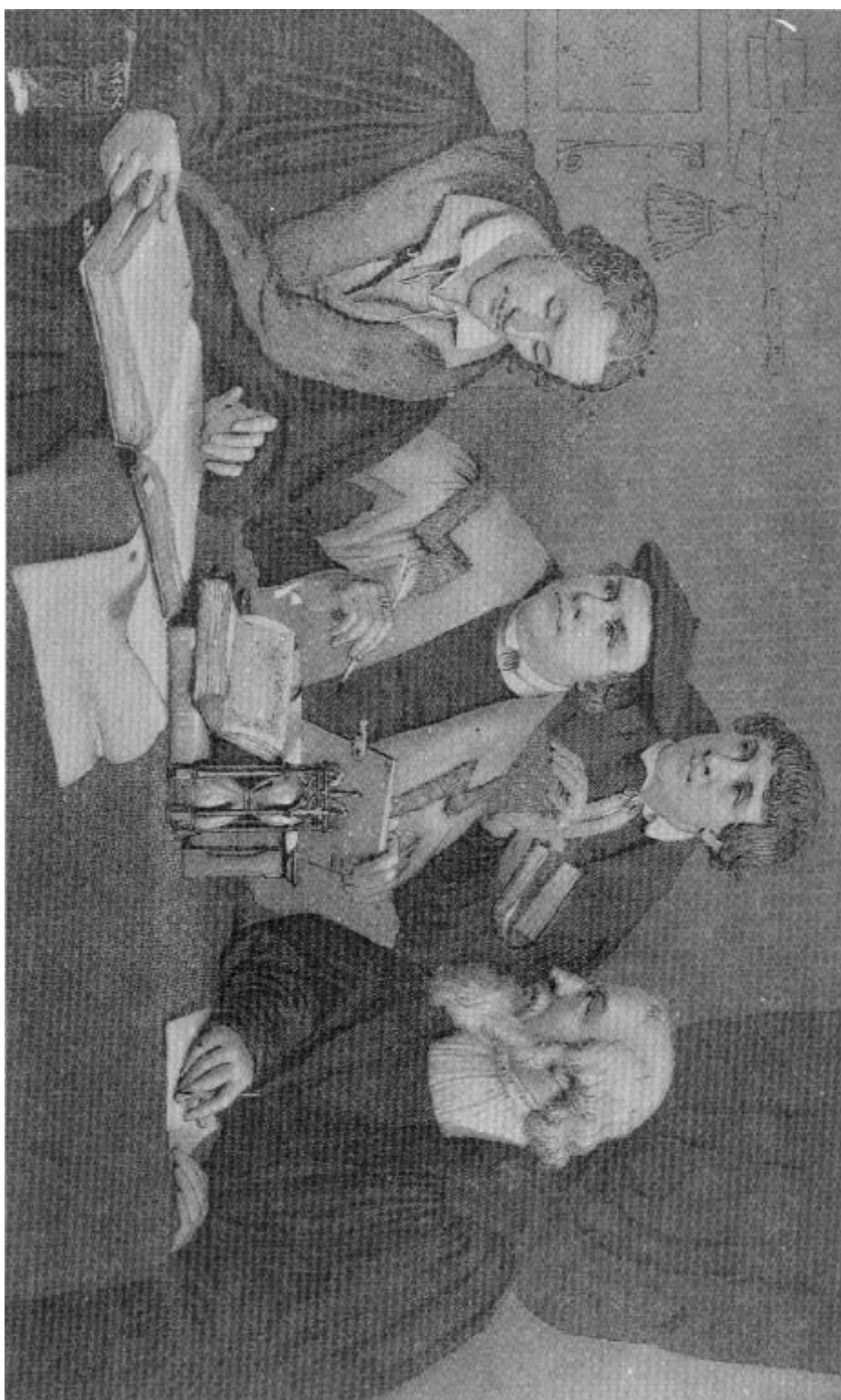
アウグスブルクの議会

宗教改革は、地上の偉大な人々の前に、卓越した存在として現われることになった。フェルディナント王は、福音を信じた諸侯の訴えを拒んだのであったが、彼らは、皇帝および教会と国家の高位高官の集まった面前で、彼らの信仰について述べる機会が与えられた。カール五世は、国内を騒がせた紛争を静めるために、シユパイエルの抗議の翌年、アウグスブルクにおいて議会を開き、自分自身が議長になると発表した。そこへ、プロテスタントの指導者たちが召喚された。

宗教改革は、大きな危険にさらされた。しかし、その支持者たちは、なお彼らの運動を神にゆだね、福音のために堅く立つ決意であった。ザクセンの選挙侯は、議会に行かないように大臣たちから勧告された。皇帝は諸侯をわなに陥れようとして、彼らの出席を要求している、と大臣たちは言った。「強力な敵がいる町に行って、そ

の城内に自分を閉じこめることは、すべてを危険にさらすことではありませんか。」しかしおおしくも、「諸侯はただ、勇気をもって身を処せばよい。そうすれば、神の事業は救われる」と断言する人々もいた。「神は忠実な力である。神はわれわれを捨てられない」とルターは言った。^{一八}選挙侯は従者たちを連れて、アウグスブルクに向かつて出発した。すべての者は、彼がさらされている危険を知っていた。そして、多くの者は沈うつな顔をして、重い気持ちをもって道を進んだ。しかし、コーブルクまで同道したルターは、その旅行中に作った「神は、わがやぐら」という讃美歌を歌って、沈みがちな彼らの信仰を奮い起こさせた。靈感のこもった歌声を聞いて、多くの者の心の不安は去り、重い心は軽くされた。

改革側の諸侯は、自分たちの見解に聖書の証明を添えて組織立てた宣言書を、議会に提出することにした。そして、その作成の任務は、ルターとメランヒトンとその同僚たちにゆだねられた。この信仰告白は、プロテスタントの者たちによって、彼らの信仰の表明として受け入れられた。そして、彼らは、この重要な書類に署名するために集まった。それは、厳粛な試練の時であった。改革者たちは、この運動が政治問題と混同されることがないよう、気を使っていた。彼らは、宗教改革が、神の言葉から出る感化以外のどんな力をも行使すべきでないと感じていた。キリスト者の諸侯が信仰告白に署名しようと進み出たとき、メランヒトンは彼らをさえぎって、「これらのことは、神学者や聖職者が提議すべきものです。地上の偉大な人々の権力は、他のこのために保留しておかれない」と言った。ザクセンのヨハンは、次のように答えた。「いや、わたしを除外されては困る。わたしは、自分の王冠のことなど問題とせず、正しいと思ったことをする決意である。わたしは、主を告白したい。わたしの選挙侯としての王冠や王衣は、わたしにとって、イエス・キリストの十字架ほど尊くない。」彼は、こう言



フルトブルクから帰るとすぐにルターは、新約聖書の注意深い翻訳を完成した。まもなく彼の翻訳はドイツ国民の手に渡り、彼らは非常な喜びをもってそれを受け取って、その天来のメッセージを自分たちの言葉で読んだ。

って自分の名を署名した。諸侯の一人は、ペンをとって言った。「わたしの主イエス・キリストのみ栄えのためであるならば、……わたしの財産も生命も捨てる覚悟である。」さらに次のように言った。「この信仰告白のなかに含まれている教義以外のものを受け入れるよりは、むしろ、わたしの国民と国家を捨て、無一物で父祖の地を追われることを望む。」^{一九}これら神の人々は、このような信仰と勇氣を持っていた。

堂々たる信仰告白

ついに皇帝の前に立つ時が来た。カール五世は、選挙侯や諸侯に囲まれて王位につき、プロテスタントの改革者たちの言葉に耳を傾けた。信仰の告白が読み上げられた。この華麗な会議において、福音の真理が明らかに宣言され、法王の教会の誤りが指摘された。この日を称して、「宗教改革の最大の日、キリスト教と人類歴史の最も輝かしい日のひとつ」であると言われるのは当然である。^{二〇}

ウィッテンベルクの修道士がウォルムスの国会でただ一人で立ったときから、まだ数年しか経っていなかった。今、彼に代わって、帝国内の最も高貴で有力な諸侯たちが現われた。ルターは、アウグスブルクに姿を見せることを禁じられていたが、彼の言葉と祈りによって出席していた。「わたしは、この時まで生きてきたことを非常に喜ぶ。今、キリストは、このような輝かしい会合において、このような堂々たる告白者たちによって、公然とあがめられたのである」と彼は書いた。^{二一}こうして、「わたしはまた王たちの前にあなたのあかしを語」と言う聖書の預言が成就した（詩篇一一九ノ四六）。

パウロの時代において、パウロは福音のために投獄されたのであったが、そのために福音は、ローマ市の王侯や貴族に伝えられた。この場合も同様で、皇帝が説教壇から説教することを禁じたものが、王宮から宣言された。召使いでさえ聞くべきものでないと言われたものを、帝国の領主や諸侯たちが、驚嘆して聞いたのである。王侯、貴人が聴衆で、諸侯が説教者で、説教は、神の尊い真理についてであった。「使徒時代以来、これほどの大きな業や堂々たる告白が行なわれたことはなかった」とある著者は言っている。^{三三}

「ルター派の言ったことは、みな真実である。われわれは、それを否定することはできない」と法王側の司教が言った。「選挙侯とその支持者たちが作成した告白を、あなたは正しい理由のもとに論ばくできるか」と他の者がエック博士に尋ねた。「使徒や預言者の書によるならばできない。しかし教父や会議の書によるならばできる」と彼は答えた。「わかった。あなたの言葉によれば、ルター派は聖書的であり、われわれは非聖書的なのだ」と質問者は言った。^{三三}

ドイツの諸侯の何人かは、改革派の信仰に導かれた。皇帝自身が、プロテスタントの信条は真実であると宣言した。信仰告白は、多くの国語に翻訳されて、全ヨーロッパに散布された。そしてそれは、その後、各時代の幾百万人の信仰の告白として用いられたのである。

神の忠実なしもべたちは、ただ一人で苦労しているのではなかった。もろもろの支配と権威と天上にいる悪の霊がこぞって彼らに対抗しても、主は主の民を捨てられなかった。もしも彼らの目が開かれたならば、彼らは、昔の預言者に与えられたのと同じ神の臨在と助けの著しい証拠を見たことであろう。エリシャのしもべが、自分たちは敵軍に包囲され、逃げる機会が全くなかったことをエリシャに告げたときに、エリシャは、「主よ、ど

うぞ、彼の目を開いて見させてください」と祈った（列王紀下六ノ一七）。彼が見ると、火の馬と火の戦車が山に満ちて、天の軍勢が神の人を保護するために部署にっていた。このように、天使たちが、宗教改革における働き人たちを保護したのであった。

ルターの持した態度

ルターが最も厳格に守った原則の一つは、宗教改革支援のために世俗の権力に頼ったりせず、その擁護のために武力に訴えたりしない、ということであつた。彼は、福音が、帝国の諸侯たちによって告白されたことを喜んだ。しかし、彼らが擁護連盟を結成することを提案したときに、彼は次のように言った。「福音の教義は、ただ神だけが擁護すべきものである。…人間の手出しが少なければ少ないほど、福音のための神の介入はいっそう著しくあらわれるであろう。」「すべての用心深い予防策は、彼の意見によれば、無用な恐怖とはなほだしい不信によるものであつた。」^{二四}

強力な敵が、合同して改革派の信仰をくつがえそうとしたとき、そして、無数の剣が抜き放たれようとしたときルターは書いた。「サタンは怒りに燃えている。不信仰な司教たちは、策を練っている。そしてわれわれは、戦争に脅かされている。われわれは、信仰と祈りによつて、主のみ座の前で勇敢に神に訴えるように人々に勧め、神の霊に征服された敵が平和を求めてくるようにしよう。われわれの最大の必要、最大の仕事は祈りである。人々に、今や彼らは剣の刃とサタンの怒りにさらされていることを知らせよう。そして彼らに祈らせよう。」^{二五}

後日ルターは、改革派の諸侯たちが連盟を企てたことについて再び言及して、この戦いにおける唯一の武器は、「御霊の剣」でなければならないと声明した。彼は、ザクセンの選挙侯に書いた。「われわれは、連盟の提案には、良心的理由によって賛成できません。われわれは、福音のために一滴の血を流すよりは、むしろ十回死ぬほうがよいのです。われわれの側は、ほふり場の小羊のようなものです。キリストの十字架を負わねばならないのです。選挙侯よ、恐れなくてください。われわれは、敵が彼らの誇りによってなすすべての事以上のことを、祈りによってなすのです。ただ、あなたの手を兄弟の血で汚さないでいただきたい。もし、皇帝がわれわれを裁判官に引き渡すならば、われわれは出頭する覚悟です。あなたは、われわれの信仰を擁護することはできません。各自が、自分自身の責任において、信じなければならないのです。」^{二六}

祈りの力

大宗教改革によって世界を揺り動かした力は、密室の祈りから出たものであった。そこにおいて、神聖な静けさのうちに、主のしもべたちは神の約束の岩の上にしっかりと立った。アウグスブルクの闘争のあいだじゅう、ルターは、「一日に少なくとも三時間は、祈りに時を費やした。そして、それは、研究のために最もよい時間を割いたものであった。」彼が一人自分の部屋の中で、「崇敬と恐れと希望に満ちて、友人と語るかのような」言葉で、神の前に彼の魂を注ぎ出すのが聞こえた。「わたしは、あなたがわたしたちの父であり、わたしたちの神であることを知っています。そして、あなたが、あなたの子供たちを迫害するものを散らされることを知っている

ます。それは、あなたご自身が、わたしたちと共に危険に陥っておられるからです。この事は、ことごとくあなたのものです。そして、わたしたちが、それに着手したのも、あなたによって、そうさせられたにすぎません。それですから、ああ、父よ、わたしたちをお守りください！」と彼は言うのだった。^{二七}

不安と恐怖の重荷にうちひしがれていたメラニヒトンに、彼は、次のように書いた。「キリストにある恵みと平和があるように。世ではなくて、キリストにあるのだ。アーメン。わたしは、あなたを圧倒する極度の心労を非常に憎んでいる。もし改革事業が正しくなければ、それをすてよ。もしそれが正しければ、恐れず眠れと命じられる主の約束をなぜ信じないのか。…キリストは正義と真理のわざに欠けるおかたではない。彼は生きて支配しておられる。それならば、われわれは、何を恐れることがあろうか。」^{二八}

神は、神のしもべたちの叫びをお聞きになったのである。神は、王侯たちや牧師たちに、この世の暗黒の支配者に対抗して、真理を維持する恵みと勇気をお与えになった。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた尊い石、隅のかしら石を置く。それにより頼む者は、決して、失望に終ることがない」と主は言われる（ペテロ第一・一二六）。プロテスタントの改革者たちは、キリストの上に築いた。そして、黄泉の門は彼らに打ち勝つことができなかった。

注

- 一 D'Aubigné, b.13, ch.6.
- 二 *Ibid.*, b. 13, ch.5.
- 三 *Ibid.*
- 四 *Ibid.*
- 五 *Ibid.*

- 六 *Ibid.*
- 七 Wylie, b.13, ch.5.
- 八 D'Aubigné, b.13, ch.5.
- 九 *Ibid.*
- 一〇 *Ibid.*
- 一一 *Ibid.*
- 一二 *Ibid.*
- 一三 *Ibid.*, b.13, ch. 6.
- 一四 *Ibid.*
- 一五 *Ibid.*
- 一六 *Ibid.*
- 一七 *Ibid.*
- 一八 *Ibid.*, b.14, ch.2.
- 一九 *Ibid.*, b.14, ch.6.
- 二〇 *Ibid.*, b.14, ch.7.
- 二一 *Ibid.*
- 二二 *Ibid.*
- 二三 *Ibid.*, b.14, ch.8.
- 二四 D'Aubigné, London ed., b.10, ch.14.
- 二五 D'Aubigné, b.10, ch.14.
- 二六 *Ibid.*, b.14, ch.1.
- 二七 *Ibid.*, b.14, ch.6.
- 二八 *Ibid.*

第二章

フランスの宗教改革

ドイツとスイスの状況

ドイツの宗教改革の勝利を画したシュパイエルの抗議とアウグスブルクの信仰告白のあとには、争闘と暗黒の年月が続いた。内部の分裂に弱められ、強力な敵の襲撃を受けたために、プロテスタント主義は全滅するかわれた。幾千の者が、そのあかしに血の印を押した。内乱が起きた。プロテスタント運動は、その指導者たちの一人に裏切られた。改革派の諸侯たちの気高い人々が皇帝の手中に陥り、捕虜として町から町へ引き回された。しかし皇帝は、一見勝利と思われたその瞬間に、敗北した。彼は、餌食が彼の手から逃れるのを見た。そして、滅ぼすことを自分の生涯の野心としていたその教義を、ついに承認しなければならなくなった。彼は、異端粉碎のために、王国と財宝と生命さえかけた。ところが、今や、彼の軍隊は戦いに疲れ、国庫は底をつき、多くの国

国は革命に脅かされていた。他方、彼が弾圧しようとした信仰が、至るところで発展していた。カール五世は、全能者の力に対抗して戦っていたのであった。神は、「光あれ」と言われた。しかし皇帝は、暗黒のままにしておこうとした。彼のもくろみは破れた。皇帝は、長い戦いに疲れ、老齢でもないのに、王位を退き、修道院に引きこもった。

スイスにおいてもドイツと同様に、宗教改革の暗黒時代が来た。多くの州が改革主義を信じたが、その他は、ローマの信条に盲目的に固執した。真理を受けようとするものに対する彼らの迫害は、ついに内乱を引き起こした。ツウイングリと彼の改革に参加した多くの者は、カッペルの戦場で倒れた。エコランパデウスもこの恐ろしい災いに圧倒されて、その後まもなく死んだ。ローマは勝ち誇った。そして、多くの場所で、失ったものをみな取り返すかに見えた。しかし、永遠の昔から目的を持っておられる神は、神の事業と神の民とを捨てられなかった。神のみ手は、彼らに救いをもたらされるのであった。神は、他の国々で改革を推進する働き人を起こされたのである。

フランスにおける先駆者

フランスにおいては、改革者としてルターの名が聞かれる以前に、すでに夜は明けようとしていた。光を捕えた最初の人々の一人は、パリ大学の教授、博学で誠実で熱心なカトリック教徒、老ルフェーブルであった。彼は、古代文学の研究中に聖書に心をひかれ、その研究を学生に紹介した。

ルフェーブルは、聖人たちを崇敬する念が厚く、教会の伝説の中に出てくる聖人や殉教者たちの歴史を著わうとしていた。これは、非常な労力を要する働きであった。しかし、彼は、すでに相当のところまで進んだところで、聖書に有益な参考があるかもしれないと考えて、その目的で聖書の研究を始めた。たしかに聖書には、聖人たちのことが書かれていたが、しかしそれは、ローマの教会暦に描かれているようなものではなかった。天来の光が、洪水のように彼の心に流れ込んできた。驚きと嫌悪の念を抱いて、彼は自分のしようとした仕事をやめ、神の言葉の研究に没頭した。まもなく彼は、自分が聖書の中で見いだした尊い真理を教え始めた。

一五二二年、まだ、ルターもツウィングリも改革の仕事を始めていなかったときに、ルフェーブルは次のように書いた。「信仰によつて、われわれに義——ただ恵みによつて義として永遠の命に至らせる義——をお与えになるのは、神である。」^一彼は、贖罪の神秘を瞑想して叫んだ。「ああ、これは、言葉で表現できない、なんと大きな交換であろう。罪なきかたが罪せられ、罪人が自由にされる。祝福された者がのろいを受け、のろわれた者が祝福にいれられる。生命の君が死なれ、死せる者が生きる。栄光の君が暗黒に圧倒され、恥のほか何も知らぬ者が、栄光を着せられる。」^二

彼は、救いは、ただ神だけにその栄光を帰すべきであると教えるとともに、人間は服従すべきであることをも断言した。「もしあなたが、キリストの教会の一員であるならば、あなたは、彼の体の肢体である。もしあなたが彼の体に属しているならば、神の性質に満ちている。…ああ、もし人がこの特権を理解しさえすれば、彼らは、どんなに純潔で貞潔で聖潔な生活を送ることであろう。また、彼らの中にある栄光——肉の目では見ることができない栄光——と比較してみるなら、この世のすべての栄えはなんと卑しいものに思えることであろう。」^三

ファールレルの熱意

ルフェーブルの学生たちのなかには、熱心に彼の言葉に耳を傾ける者が幾人かあった。そして、教師の声が沈黙しただけで後に、真理を宣言し続けるのであった。その一人は、ギヨーム・ファールレルであった。敬虔な両親に育てられ、教会の教えを絶対的な信仰をもって受け入れるように教育された彼は、使徒パウロとともに、「わたしたちの宗教の最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活をしていた」と言うことができた（使徒行伝二六ノ五）。彼は、熱心なカトリック教徒として、教会に反対するすべてのものを滅ぼそうという熱意に燃えていた。「法王に反対する言葉を発する者には、わたしは恐ろしいおおかみのようにきばをおき出した」と、後に彼は、当時を回顧して言った。^四 彼は、熱心な聖人崇拜者であったので、ルフェーブルに従って、パリの教会を巡り、聖壇で礼拝をし、聖堂をささげもので飾った。しかし、こうしたことを行なっても、心に平和をもたらすことはできなかった。彼は、罪の意識を逃れることができなかった。それは、あらゆる苦行によっても消えることがなかった。そのとき彼は、天からの声のように、改革者の、「救いは恵みである」という言葉を聞いたのである。「罪なきおかたが罪せられて、犯罪人が許される。」「天の門を開き、黄泉の門を閉じるのは、キリストの十字架だけである。」^五

ファールレルは、喜んで真理を受け入れた。彼は、パウロのような悔い改めを経験して、言い伝えの奴隷から神の子の自由に入った。「貪欲なおかみのような殺気立った心は去り、柔和で無邪気な小羊のようになった。心

は全く法王から去って、イエス・キリストにささげられた」と彼は言っている。^六

ルフェーブルは、学生間に光を広め続けたのであるが、ファールレルは、法王の事業のために持っていたのと同じ熱心さをキリストの事業にあらわし、公衆に真理を宣言するために出て行った。教会の高い地位にある人物、モーの司教も、その後間もなく彼らに加わった。ほかに、才能と学識において高い地位にあった教授たちも、福音の宣教に参加し、職人や農民の家庭から王宮に至るまで、あらゆる階級のなかから支持者があらわれた。当時君臨していたフランス（フランス）一世の皇妹も改革主義を受け入れた。王自身と母后も、一時これに好感を示した。そして、改革者たちは、大きな希望をもって、フランスを福音の側に勝ちとる日を待望した。

著しい進展

しかし、彼らの希望は実現しなかった。試練と迫害がキリストの弟子たちを待っていた。ところが、これは、恵みのうちに彼らの目から隠されていた。彼らがあらしに直面する力を養うために、平和な時が与えられた。そして、改革事業は著しく進展した。モーの司教は、彼の教区内の聖職者と人々とを教えるために熱心に働いた。無知で不道德な司祭は除かれ、できるだけ学識と敬虔の念に富む人と交替した。司教は、人々が神の言葉を自ら手にするようになることを切望した。そして、これはまもなく実現した。ルフェーブルは、新約聖書の翻訳に着手した。そして、ルターのドイツ語聖書が、ウィッテンベルクの出版所から発行されていたときに、フランス語の新約聖書が、モーで出版された。司教は、それを彼の教区内に配布するために、労力も費用も惜しまなかった。

やがてモーの農民たちは、聖書を持つようになった。

のどが渇いて死にそうな旅人が、清水の泉を喜んで歓迎するように、これらの人々は天からの使命を受け入れた。畠で働く人々、仕事場の職人たちは、聖書の尊い真理を語り合って日ごとの仕事に励んだ。夜は、酒場に行くかわりに、お互いの家に集まって、神の言葉を読み、祈りと賛美に加わった。まもなく一大変化がこれらの町に起こった。彼らは、卑賤な階級に属する無学な労働者農民であつたが、彼らの生活に、神の改変し向上させる神の恵みの力があらわれた。彼らは、謙そんで愛と聖潔の人となり、福音は真心からそれを受け入れる人々をどのように変えるかの証人となった。

モーで点じられた光は、遠くまで輝いた。信者の数は日ごとに増加した。修道士たちの頑迷さを軽べつしていた王によって、高位聖職者たちの怒りは、一時けんせいされていた。しかし、ついに、法王側の指導者たちが勝利した。今や、火刑柱が立てられた。モーの司教は、火刑が取り消しを選ぶように強いられて、安易な道を選んだ。しかし、指導者が倒れたにもかかわらず、彼の群れは堅く立った。多くの者が、火災の中で真理のあかしを立てた。火刑における勇氣と忠誠とによって、これらの卑しいキリスト者たちは、平和な時代には彼らのあかしを聞くこともなかった幾千の人々に、語ったのであった。

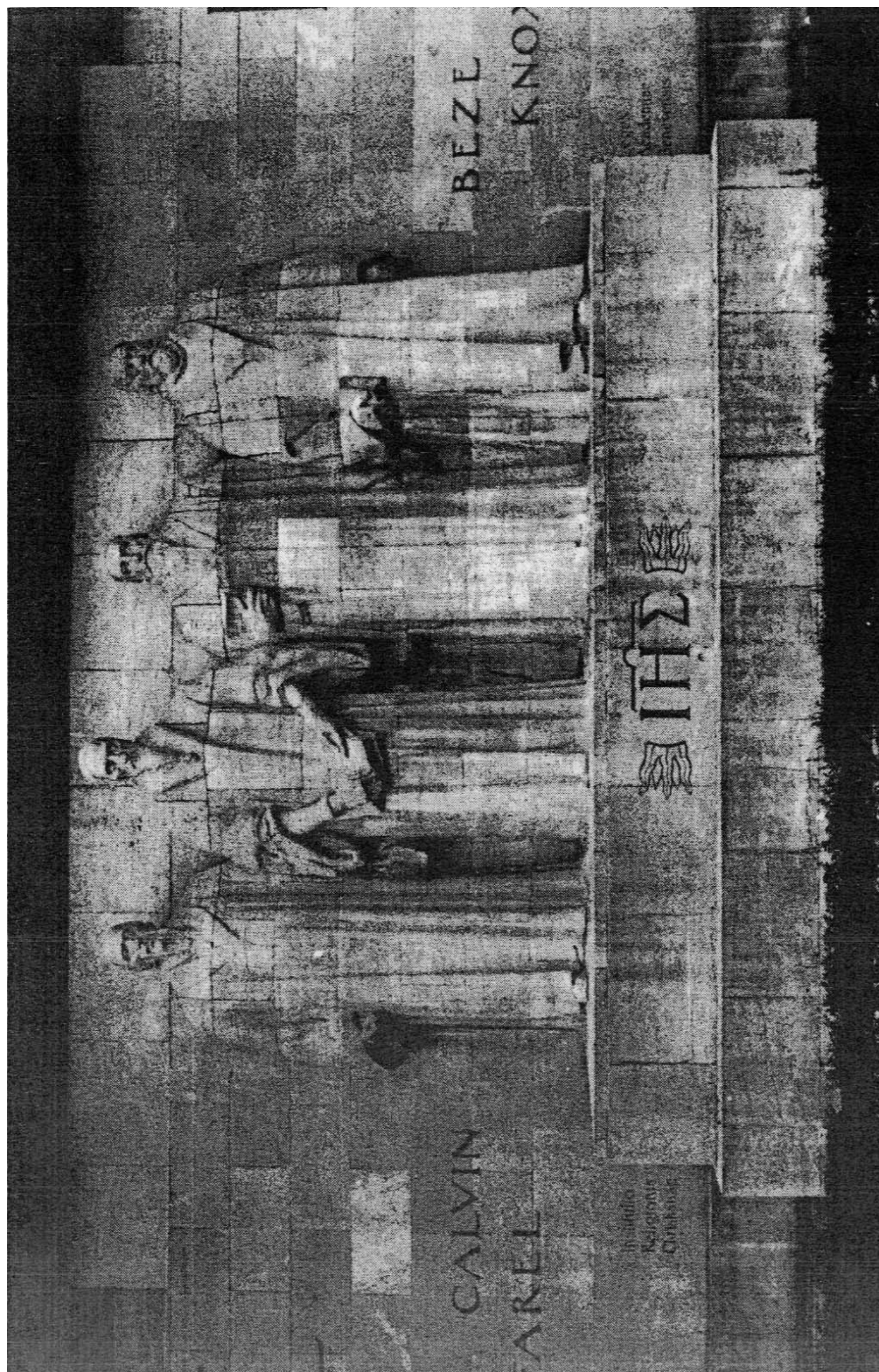
改革者ベルカン

苦難とちよう笑の中で、勇敢にキリストのあかしを立てたのは、卑しい貧民だけではなかった。城や王宮の邸

宅に、真理を、富や地位、あるいは生命よりも高く評価した気高い人々があつた。堂々たる武装の下に、司教の衣や冠をいただいた人々よりも、高尚で堅実な精神が隠されていた。ルイ・ド・ベルカンは、貴族の出であつた。彼は、勇敢で、上品な騎士で、学問に熱心で、その動作は洗練され、道徳的に潔白であつた。ある著者は次のように言っている。「彼は、法王制機構の熱心な支持者で、ミサや説教を熱心に聞いた。…そして、彼のすべての他の美德に加えて、ルター派に対して特別の嫌悪を持っていた。」しかし、他の多くの者と同様に、彼は摂理によつて聖書に導かれ、そこに「ローマの教義ではなくて、ルターの教義」を見いだして驚いた。^七その後、彼は、福音のためにすべてをささげたのである。

「フランス貴族中の最も博学な者」であつた彼の天才と雄弁、不屈の勇氣と熱心、そして宮廷における影響力（彼は国王から愛顧を受けていた）、などの理由で、多くの者は、彼はフランスの改革者になる運命にあると思つた。「もしフランソア一世が第二の選挙侯であつたなら、ベルカンは第二のルターになつていたことであろう」とベザは言つた。「彼は、ルターより始末におえない」と法王側は叫んだ。^八実際、彼は、フランスの法王側の人から、ルター以上に恐れられた。彼らは、彼を異端者として投獄したが、彼は王に釈放された。争闘は、長年続いた。フランソアは、ローマと改革との間をぐらつき、修道士たちの激しい熱意を許したり、禁じたりした。ベルカンは、法王側の当局者によつて三度投獄された。しかし、日ごろから彼の天才と高潔な品性を賞賛していた王は、彼を釈放し、彼が教権の敵意の犠牲になることを拒んだ。

ベルカンは、フランスにおいて彼の身に迫る危険についてくり返し警告を受け、自発的に逃亡して身の安全を確保した人々の例にならうよう、勧められた。おくびようで、迎合的なエラスムスは、学問的には非常に優れて



スイスのジュネーブにある宗教改革記念碑。左からファール(1489-1565)、カルバン(1509-1564)、ベザ(1519-1605)、ノックス(1514-1572)。いずれもジュネーブと関係の深い改革者たちである。

いたけれども、真理のためには生命も榮譽も捨てるというあの道德的偉大さに欠けていて、ベルカンに次のように書いた。「どこかの国の大使として送られることを求めてはいかがであるう。ドイツに行つて旅をされよ。あなたは、ベダを知っている。彼は、千の頭をもった怪物のように、至るところに毒気を放っている。あなたの敵の数は多い。あなたの主張がイエス・キリストの主張よりよいものであれば、彼らは、あなたを無残に殺すまでは手放さないであろう。王の保護に頼りすぎてはならない。とにかく、神学の教授間において、**わたしに累を及ぼさないでほしい。**」^九

しかし、危険が増すにつれて、ベルカンはますます熱心になった。彼は、エラスムスの政略的で自己本位の勧告に従うどころか、かえって、いっそう大胆な手段に出る決意をした。彼は、真理を擁護するだけでなく、誤りを攻撃するのであった。法王側が彼に向けようとした異端の非難を、彼は彼らに向けたのである。彼の最も激烈な反対者たちは、偉大なパリ大学の神学部の、学識ある博士たちや修道士たちであった。パリ大学は、パリだけでなく、フランス全体においても最高の宗教的権威の一つであった。ベルカンは、この博士たちの著書から、十二の論題を掲げて、それが「聖書に反するもので、異端である」ということを公然と宣言した。そして彼は、王にその論争の審判官になることを請うた。

ベルカンの殉教

王は、両方の対立した弁士たちの力と鋭さとを比較することをきらわず、また、これら高慢な修道士たちの自

尊心をくじくよい機会と考えて、ローマ側に、聖書に基づいて、彼らの主張を擁護することを命じた。彼らは、この武器では、自分たちのほうが不利であることをよく知っていた。投獄や拷問や火刑のほうが、彼らの使い慣れた武器だったのである。今や形勢は逆転し、彼らはベルカンを陥れようと望んだ穴に、自分たちが落ちこもうとしているのに気づいた。彼らは驚いて、どこかに逃げ道はないかと見回した。

「ちょうどそのとき、町角に立てられていた聖母マリヤの像が、傷つけられた。」それで町じゅうが大騒ぎになった。群衆がその場所に集まって、悲しみや怒りの言葉をあげた。王も、非常に心を動かされた。これは修道士たちを有利にするよい機会であった。彼らは、さっそくそれを利用した。「こうしたことは、ベルカンの教義の実である」と、彼らは叫んだ。「このルター派の陰謀によって、宗教も法律も王位までも、みなくつがえされうになっている。」

ベルカンは、ふたたび捕えられた。王は、パリを去った。そこで修道士たちは思うままに活動することができた。改革者ベルカンは、裁判によって死刑の宣告を受けた。そして、フランスアが介入して彼を救わないようにと、宣告が行なわれたその当日に刑が執行された。ベルカンは、正午に刑場に送られた。黒山のような群衆が、これを見るために集まった。そして、受刑者がフランスの最高にして最も勇敢な貴族のなかから選ばれたことに、驚きと疑念をいだいたものが多くあった。押し寄せた群衆の顔には、驚き、怒り、軽べつ、憎しみが現われていた。しかし、暗い影のない顔が一つあった。殉教者の思いは、騒がしい光景から遠く離れ、主の臨在だけを感じていた。彼を乗せたそまつな護送車、迫害者たちの不きげな顔、彼が向かいつつある恐るべき死——彼はこれらをなにも思わなかった。生きて、死なれたことがあり、そして永遠に生きておられるおかた、死と黄泉の力ギをも

っておられるおかたが、彼のそばにおられた。ベルカンの顔は、天の光と平和に輝いていた。ベルカンはりつぱな服装をしていた。彼は、「びろうどの上衣、しゅすとダマスク織りの胴着、金色のくつ下」をまとっていた。^二彼は、王の王と、見守る宇宙との前で、信仰のあかしをしようとしていた。彼の喜びを隠すような悲しみの表情はなかった。

行列が混雑した通りをゆっくりと進んでいくとき、人々は、彼の顔つきと態度に、少しの曇りもない平和と勝利の喜びとを見て驚いた。「この人は、神殿に座して、聖なることについて瞑想する人のようだ」と彼らは言った。^三

火刑台のところで、ベルカンは、人々に少し語ろうとした。しかし、修道士たちは、その結果を恐れて叫び声をあげはじめ、また、兵士たちは、武器を打ち合わせて、彼らの騒がしい音によって殉教者の声を消してしまった。こうして、一五二九年、教養の都パリの文学と神学の最高の権威者たちは、「処刑台における死に面した人の最後の言葉をもみ消すという卑劣な手本を、一七九三年の民衆に与えた」。^三

ベルカンは絞殺され、彼の体は火で焼かれた。彼の死の知らせは、フランス全国の改革派の同志を悲しませた。しかし、彼の死は、おだではなかった。「われわれもまた、来たるべき生命に目を向け、喜んで死につくつもりである」と真理の証人たちは言った。^四

迫害と、福音の前進

モーでの迫害の間、改革派の教師たちは、説教の免許状を取り上げられたために、他の地方に去っていった。

しばらくして、ルフェーブルはドイツに向かった。ファーレルは、東フランスの故郷に帰り、幼少のころの地に光を輝かした。モーにおけるできごとがすでに伝えられていたので、彼が恐れることなく熱心に伝える真理に、耳を傾ける人々があらわれた。まもなく、当局者が彼を沈黙させようとして立ち上がり、町から追い出してしまった。彼は、公然と働くことはできなくなったが、村々をへめぐって歩き、民家や人里離れた牧場で教え、少年時代の遊び場であった森や岩のほら穴に隠れ家を見いだしていた。神は、さらに大きな試練のために、彼に準備をさせておられたのである。「わたしが予告を受けた十字架や迫害やサタンの陰謀は、わずかなものではなかった。それらは、わたしが耐えられないほど苛酷であった。しかし、神はわたしの父である。神は、わたしに必要な力を備えてくださったし、常に備えてくださる。」^{一五}

使徒時代におけると同様に、迫害は、「福音の前進に役立つようになった」(ピリピーノ一二)。彼らは、パリやモーから追われて、「御言を宣べ伝えながら、めぐり歩いた」(使徒行伝八ノ四)。こうして、光は、多くのフランスの遠隔の地方にまで伝わった。

カルバンの苦悩

神は、ご自分の事業を進めていくために、なお働き人たちの準備をしておられた。パリのある学校に、思慮深く物静かな青年がいた。彼は、頭脳明晰で、知的情熱を持ち、宗教的に献身していたが、彼の生活もまた同様に高潔なものであった。彼の才能と勤勉さとは、まもなく大学の誇りとなり、ジャン・カルバン(ジョン・カルビ

ン）こそ、確かに教会の最も有力で栄誉ある擁護者になるであろうと予想されていた。しかし、神の光は、カルバンを閉じ込めていたスコラ哲学と迷信の壁をさえ貫いた。彼は、新しい教義を聞いて身震いし、異端者が火刑に処せられるのは当然であるということになんの疑いも持たなかった。しかし、彼は、全く意識しないうちに異端と顔を合わせ、プロテスタントの教えと戦うためにローマ教の神学の力を試さざるをえなくなった。

改革派に加わったカルバンのところが、パリにいたのである。この二人は、たびたび会って、キリスト教国を混乱させている問題について話し合った。「この世の中に、二つしか信仰はない。一つは、人間が考え出したいろいろの宗教であって、そこでは人間は、儀式や善行によって救われる。もう一つは、聖書に啓示された宗教であって、それは、価なくして与えられる神の恵みによってのみ救われると教えるのだ」とプロテスタントのオリベタンは言った。

「ぼくはきみの新しい教義など信じない。ぼくがこれまでずっと誤謬の中で生きてきたと、きみは言うのか！」とカルバンは叫んだ。^{一六}

とは言うものの、自分の意志では消し去ることのできない思想が、カルバンの心に起こった。彼は、自分の部屋に閉じこもって、いとこの言葉を思いめぐらした。彼は、罪の自覚に襲われた。彼は、きよく正しい審判者の前に、仲保者なしに立つ自分を感じた。諸聖人の仲保、善行、教会の儀式などはみな、罪をあがなうには無力だった。彼の前には、永遠の絶望の暗黒があるだけであつた。教会の博士たちが、彼の悩みを和らげようとしたができなかった。告白も苦行も行なってみたがだめであつた。それらは、魂を神と和解させることができなかった。カルバンは、こうしたおなしの苦悩をなおも続けているうちに、ある日、たまたま町の広場に出かけて、異端

者の火刑を目撃した。彼は、殉教者の顔に平和が宿っているのを見て、驚きに満たされた。恐ろしい死の拷問のなかにあつて、そして、それにも勝る恐ろしい教会の宣告を受けながら、彼は信仰と勇気をあらわしていた。それに引きかえ、若い学生のカルバンは、厳格に教会に従った生活を送りながらも失望と暗黒のうちにある自分を顧みて、心を痛めた。異端者が信じているのは聖書であることを彼は知った。彼は、聖書を研究しよう、とそしてできれば彼らの喜びの秘訣をみきわめようと決心した。

福音の戦士としての登場

彼は、聖書の中にキリストを発見した。「ああ父よ、彼の犠牲は、あなたの怒りをしずめ、彼の血は、わたしの汚れを洗い去り、彼の十字架は、わたしのろいをにないました。彼の死はわたしの贖いとなりました。わたしたちは、自分たちのために、多くの無用な愚策を考案しましたが、あなたはわたしの前に、み言葉を燈のようにかかげられました。そしてあなたは、わたしの心に触れて、イエスの功績以外のすべてのものを、忌みきらうようにしてくださいました。」^{一七}

カルバンは、司祭になる教育を受けていた。彼は、わずか十二才の時に、小さな教会の説教者に任じられ、教会の規定に従って、司教に頭髪をそってもらった。彼は按手の礼は受けず、司祭の務めはしなかったけれども聖職の一員となつて、彼の務めの称号を持ち、その報酬を受けていた。

今や、彼は、司祭にはなることができないのを知って、しばらく法律の研究に当たったが、ついにこの目的を

すて、一生を福音のためにささげる決心をした。しかし彼は、公の教師になることはためらった。彼は生まれつきおくびょうだったので、そういう地位の責任を重荷に感じた。そして彼は、さらに研究を持続することを願った。しかし、友人たちが熱心に勧めるので、彼もついに同意した。「このように卑賤な生まれの者が、このように大きな栄誉ある地位に高められるとは、不思議なことだ」と彼は言った。^{一八}

カルバンは静かに彼の仕事を始めた。彼の言葉は、あたかも地をうるおす露のようなものであった。彼はすでにパリを去って、今は、福音を愛し、その弟子たちを保護していたマルグリット王女の保護下にある、田舎の町にいた。カルバンはまだ、温和でひかえめな青年であった。彼の働きは、まず郷里の人々から開始された。彼は家族の者に囲まれて、聖書を読み、救いの真理を伝えた。福音を聞いた者は、それを他に伝えたので、まもなく教師は、町を離れて、その周囲の町々村々に行った。彼は、城にも貧しい家にもはいて、働きをおし進め、真理のためにおおしくあかしをすることになる諸教会の、その基礎を築いた。

数か月後、彼はふたたびパリに来了。知識人や学者の間では、まれにみる動揺が起きていた。古代言語の研究が、人々の心を聖書に向けるようになり、その真理にまだ心を動かされていない多くの人々が、熱心にそれについて論議し、ローマ側の擁護者と論じ合いさえしていた。カルバンは、神学的論争の分野においては、有能な闘士であつたけれども、これらのそうぞうしい学者たちよりは、さらに大切な使命を帯びていた。人々の関心が高まっていたので、今こそ彼らに真理を伝える時であつた。大学の講堂が、神学の論争でさわがしかったときに、カルバンは、家々を訪ねて、人々に聖書を読んで聞かせ、キリストと彼の十字架について語った。

パリにおける争闘

パリは、神の摂理のもとに、福音を受け入れるようにというもう一つの招きを受けることになった。ルフェーブルとファールルの呼びかけは拒否された。しかし、大都市のあらゆる階級の人々は、もう一度使命を聞くのであった。王は政治的理由によって、まだ全的にローマ側について改革運動に反対しているわけではなかった。マルグリットは、プロテスタント主義がフランスにおいて勝利することを、なお希望していた。彼女は、改革主義の信仰をパリに宣布せねばならぬと決意した。そこで、王の不在中に、彼女は、パリの教会で説教するように、プロテスタントの牧師に命令した。これは、法王側当局者から禁じられたので、マルグリットは王宮を開放した。王宮の一室を礼拝室に造作し、毎日一定の時間に説教が行なわれ、あらゆる階級や地位の人々に、出席するようにと招待が出された。集会には多くの人々が集まった。礼拝堂だけでなく、隣接した部屋も廊下も人でいっぱいになった。貴族、政治家、弁護士、商人、職人など、幾千という人々が、毎日集まった。王も集会を禁じるところか、パリの二つの教会が開かれることを命じた。パリの人々が神のみ言葉にこれほど感動したことはなかった。天からの生命の霊が、人々に吹きこまれるように思われた。泥酔、放蕩、鬭争、怠惰にかわって、節制、純潔、秩序、勤勉が見られた。

しかし、法王側も、手を休めてはいなかった。王は、相変わらず説教をやめさせようとはしなかったで、彼らは、民衆に向かった。無知で迷信的な民衆の、恐怖と偏見と狂信をあおるためには、手段が選ばれなかった。

パリは、偽教師に盲従し、昔のエルサレムのように、神のおとずれの時も、平和をもたらす道も知らなかった。神の言葉は、二年の間、都で宣べ伝えられた。その間に、福音を受け入れた者も多かったけれども、大半の人々は、それを拒んだ。フランスアは、信教の自由を許したように思われたが、それは、ただ単に自分の都合上であって、法王側はふたたび勢力をもり返した。教会は、また閉鎖され、火刑柱が立てられた。

カルバンの活動

カルバンはまだパリにいて、研究と瞑想と祈りによって、将来の働きの準備をしながら、光を輝かしていた。しかし、ついに、彼に嫌疑がかかった。当局者たちは、彼を火刑にすることにきめた。彼は、隠れ家にいて安全だと思っていたので、危険を感じなかった。とそのとき、友人たちがあわてて彼の部屋にやってきて、役人たちが彼を捕えるためにやってくるということを知らせた。それと同時に、表の戸をたたく大きな音が聞こえた。今や一刻も猶予はなかった。友人たちが扉のところまで役人に応対している間に、他の者たちがカルバンを助けて、窓からつりおろした。彼は急いで都の外に逃れた。改革主義に好意を持った労働者の家に隠れ、そこで主人の着物を着て変装し、くわを肩にして旅に出た。彼は南に旅をつづけ、マルグリットの領内にはいつて、ふたたび隠れ家を見つけた。^{一九}

ここで彼は、有力な友人たちの保護のもとに数か月滞在し、以前のように研究に従事した。しかし、彼の心はフランスの伝道のことを考えていたので、長くじっとしていることはできなかった。あらしがいくぶんおさまっ

てくると、彼はポアチエに新しい働き場を求めた。ここには大学があつて、新しい主張が喜んで迎えられていた。各階級の人々が喜んで福音に耳を傾けた。カルバンは、公衆に説教はしなかったが、長官の家、自分の住居、また、時には公園で、聞きたいと思う人々に永遠の生命の言葉を語った。しばらくして聴衆の数が増加したので、市外で集まるのが安全であろうと思われた。狭く深い峡谷の洞穴が、木や突出した岩におおわれて、人目を避けるには何よりと思われたので、そこが集会の場所選ばれた。少数の者が組になって町を出て、別々の道を通つてここに集まつた。この隠れ家で、聖書が読まれ、説き明かされた。ここでフランスのプロテスタントは、初めて主の晩餐を祝った。この小さな教会から、幾人かの忠実な伝道者が、世に送り出された。

カルバンは、もう一度パリに歸つた。彼は、フランスが国家として改革を受け入れるという希望を、まだ捨てることはできなかった。しかし、働きの門戸はほとんど閉ざされていることがわかった。福音を教えることは、直接、火刑への道であつた。そこで彼は、ついにドイツへ行くことにした。彼がフランスを脱出するやいなや、プロテスタントに対するあらしがまき起こつた。もし彼が残っていたならば、全面的な破滅にまき込まれたにちがいない。

檄文事件と弾圧の開始

さて、フランスの改革者たちは、自分たちの国がドイツやスイスと歩調を合わせるようにと熱望し、全国民に覚醒をうながすために、ローマの迷信に大打撃を加えることを決意した。そこで、ミサを攻撃したポスターが

一晚のうちにフランス国内じゅうにはられた。この熱心ではあるが無分別な運動は、改革を促進するどころか、その主唱者だけでなく、フランス全国の、改革主義の信仰に好意を持った人々に、破滅をもたらした。これは、□マ側が長く欲していたこと——異端者たちは王位の安定と国家の平和を脅かす扇動者であるとして全滅を要求する□実——を彼らに与えた。

不謹慎な同志であるか、それとも悪賢い敵であるのかわからなかったが、一枚の檄文が、王の寢室の扉にはられた。王は恐怖に襲われた。この紙の中では、長年尊ばれてきた迷信が手厳しく攻撃されていた。こうした率直で驚くべき言葉が、王の前につきつけられたことは前例がなかったので、王は非常に怒った。驚きのあまり、王はしばらくぼう然として、何も言えなかった。やがて王は、怒りに満ちて恐ろしい言葉を吐いた。「ルター派と疑われるものはすべて差別なく捕えよ。わたしは彼らを全滅させる。」^{二〇}さいは投げられた。王は、全的に□マ側に加担する決心をした。

パリのルター派をすべて捕える手はずが直ちにとられた。改革派の信者で、秘密の集会に信者を召集していた貧しい職人が捕えられた。彼は、火刑によつて直ちに殺すと脅されて、法王側の密偵をパリの改革派一人一人の家に案内することを命じられた。彼は、卑劣な申し出に恐怖で縮みあがったが、火刑を恐れて、ついに兄弟たちを裏切ること同意した。聖体を持つ者に先導され、司祭たち、香炉を持った者たち、修道士たち、兵士たちの行列に囲まれて、王の密偵モランは裏切り者を連れて、ゆっくりと静かに町の通りを過ぎていった。行列は見だところ「秘蹟」のためのもの、すなわち、改革派によつて加えられたミサへの侮辱を償うためのものであった。しかし、この行列のかげに恐ろしい目的が隠されていた。ルター派の家の前に来ると、裏切り者は、声こそ出さ

なかったが合い図をした。行列はとまり、その家にはいつて家族の者を引き出し、鎖につないだ。そして次の獲物を求めて、恐ろしい行列は進んだ。彼らは、「大きい家も小さい家も見過さず、パリ大学さえ見逃さなかった。…モランは、全市を戦慄させた。…それは恐怖の時代であった。」^三

無言の説教

捕えられた人々は、残酷な責め苦で殺された。火刑の火は、苦痛を長びかせるために弱めるように特に命令が発せられた。しかし、彼らは、勝利者として死んだ。彼らの忠誠はゆるがず、その平和は損われなかった。迫害者たちは、彼らの堅い決意を動かすことができず、敗北感に襲われた。「処刑台は、パリの至る所に立てられ、火刑は毎日行なわれた。処刑が分散して行なわれたのは、異端の恐怖を広く人々に知らせるためであった。しかし、結局、それは、福音の側に有利であった。パリ全市は、改革主義がどのような人物をつくり得るかを見ることができた。殉教者を焼く薪の山のような説教壇はほかにない。刑場にひかれてゆくときの彼らの顔に輝く静かな喜び、…激しい炎の中に立つときの彼らの勇氣、迫害に対する柔和と許しは、少なからぬ人々の、怒りを同情に、憎しみを愛に変えて、拒むことのできない雄弁をもって福音のために訴えたのである。」^三

司祭たちは、民衆の激しい怒りをあおることに狂奔し、プロテスタントに対して、最も恐ろしい非難を言いふらした。彼らは、カトリック教徒の虐殺、政府の顛覆、王の暗殺計画などの罪を着せられた。この申し立てに対して、何一つとして証拠はなかった。しかし、こうした悪いできごとの予告は、実現することになった。ただし

それは、はるかにかけ離れた状況下において、しかも逆の原因からであった。カトリックが罪のないプロテスタントに与えた残酷な仕打ちは、報復の重さを積み上げていた。そして、彼らが国王と政府と国民について予言したとりのことが、後世において行なわれた。しかし、それは、無神論者と法王教徒自身によって行なわれた。三百年後になって、フランスにこうした不幸をもたらしたのは、プロテスタントの樹立ではなくて、その圧迫のゆえであった。

今や疑惑、不信、恐怖が、社会のすべての階級に広がった。こうした恐慌のただ中であって、教育、勢力、また品性の高潔さにおいて最高位に立つ人々の間に、ルター派の教えがどんなに深く根を下したかが、明らかにされた。信任と名誉の地位が、突然空席になった。職人、印刷者、学者、大学教授、著述家、そして、廷臣さえいなくなった。多くの者がパリを逃れ、母国を捨てて自ら放浪者となった。こうして、彼らが改革主義に好意をもっていたことを初めて示したものが多かった。法王側は、自分たちの間にあって疑いを受けずにすんでいた異端者たちのことを考えて、驚きの目を見張った。彼らの怒りは、彼らの手中にある多くの身分の低い犠牲者たちに向けられた。牢獄はあふれた。福音を信じる者のために点じられた火刑の煙で、空そのものも暗くなったように思われた。

プロテスタント撲滅政策

フランスアー世は、十六世紀の初めに起こった学問の大復興運動の指導者であることを誇っていた。彼は、各



屈従の日、フロンソア1世は王冠をつけていなかった。頭には何もかぶらず、目は下に落としていた。国王は、着飾った聖職者たちであふれている大聖堂に、へりくだった悔悟者として、あかりのついたろうそくを手に現われた。

国から宮廷に学者たちを集めることを喜んでいて。彼が宗教改革にある程度の自由を許したのは、彼が学問を愛し、修道士たちの無知と迷信を軽べつしたことが、少なくともその動機の一部であった。しかし、ついにこの学問の後援者も、異端撲滅の熱に燃えて、フランス全国で印刷廃止の勅令を出した。フランソア一世は、知的教養が宗教的狭量と迫害に対する安全弁でないという数多くの実例の一つを示している。

フランスは、厳粛な公の儀式によって、プロテスタントの撲滅に全力を注ぐことになった。司祭たちは、改革派がミサを非難することによって天の神に与えた侮辱は、血によって贖わなければならない、そして王は、国民に代わってこの恐ろしい行為に公に制裁を加えるべきであると要求した。

一五三五年、一月二一日に、この恐ろしい儀式が行なわれることになった。全国民の迷信的恐怖とかたくなな憎しみがかきたてられた。パリは、周囲の田舎からやってきて通りにあふれた群衆で雑踏していた。当日は、堂とした行列が行なわれることになっていた。「行列が通る道の家々では、喪章をかかげ、所々に祭壇が設けられた。」家々の前には、「秘蹟」に敬意を表するかがり火が点じられた。夜明け前に、王宮の前で行列が勢ぞろいした。「まず、各教区の旗と十字架、その次に市民が二列に並んで、たいまつを持っていた。」その次に、四階級の修道士たちが、おのおの特有の衣服をまとって続いた。その次に、ありとあらゆる有名な遺物が来た。その後、紫色や緋色の衣をまとい、宝石をちりばめた飾り物を身につけた、威風堂々とした聖職者たちが続いた。

「聖体はパリの司教によって運ばれ、その上を四人の王子たちが支える豪華な天蓋がおおっていた。…聖体の後を王が歩いた。…フランソア一世は、この日、王冠も王衣もつけていなかった。」「頭には何もかぶらず、彼の目を地面に向け、手には、火を点じたたいまつを持っていた。」フランスの王は、「悔悟者の姿で」あらわれ

た。^{二三}彼は、祭壇ごとにへりくだってひざまずいたが、それは彼の心を汚した罪のためでも、彼の手を汚した罪なき人の血のためでもなく、ミサを汚した彼の臣民の恐ろしい罪のためであつた。彼の後ろには、王妃と国家の高官たちが、これもおのおの手にたいまつを持って、二列で続いた。

その日の行事の一つとして、王は自ら司教邸の大広間において、王国の高官たちに演説した。彼は、悲痛な顔をして彼らの前に現われ、感動的言葉で雄弁に、国民に降った「犯罪、冒瀆、悲しみと恥の日」について嘆いた。そして、彼は、フランスを破滅の淵に陥れる有害な異端の全滅を、すべての忠実な国民に訴えた。「わたしは王であることが事実であるように、もしわたしの手足がこの恐ろしい腐敗に感染しているならば、わたしはそれを切ってしまうであろう。…また、わたしの子供の一人がそれで汚れているならば、わたしは彼を許さない。…わたしは自分で彼を捕え、神への犠牲とするであろう。」王の言葉は涙でとぎれた。全会衆も泣き、声を合わせて「われわれは、カトリック教のために生き、また死ぬ^{二四}」と叫んだ。

福音拒否の結果

真理の光を拒んだ国家の暗黒は、恐ろしいものになった。「人を救う」恵みがすでに表われた。しかしフランスは、その力と神聖さを見、幾千のものがその天来の美に心をひかれ、町々村々がその光に照らされたにもかかわらず、光よりも暗黒を選んで背いたのであつた。彼らは、神の賜物が提供されたのにそれを退けた。彼らは悪を善と呼び、善を悪と呼んで、ついに自ら進んで自己欺瞞のとりこになった。そして今、彼らは、神の民を迫害することに

より、神に奉仕していると実際に信じこんでいたが、その真剣さが彼らを罪なしとするわけではなかった。彼らは、彼らを欺瞞から救い、彼らの魂を血で汚す罪から救うことができたはずの光を、故意に拒んでしまったのであった。異端撲滅の厳粛な誓いが、大聖堂において行なわれた。その場所には、約三百年後に、生きた神を忘れた国民が理性の女神を祭るのであった。ふたたび、行列が整えられ、フランスの代表者たちは、誓ったことの実行に取りかかった。「処刑台が少しの間隔をおいて立てられ、プロテスタントのキリスト者が生きながら焼かれることになっていた。そして、王が近づいたときに、薪に火をつけ、行列が止まって処刑を見るようにした。」^{二五}これらの証人が、キリストのために耐えたさまざまな責め苦は、あまりに痛ましくて詳述できないほどである。しかしながら彼らは、決して動揺しなかった。取り消しを勧められたとき、一人は次のように答えた。「わたしは、預言者たちと使徒たちとがかつて教え、そしてすべての聖徒たちが信じたことだけを信じる。わたしの信仰は神に対する確信であって、黄泉のすべての力に打ち勝つものである。」^{二六}

行列は幾たびとなく、処刑の場に立ち止まった。やがて王宮の出発点にもどると、群衆は散っていき、王と高位聖職者たちはその日の行動に満足し、異端を全滅するまで継続すべき仕事が始まったことを祝って別れた。

フランスが拒否した平和の福音は、徹底的に根絶され、恐ろしい結果を招いた。フランスが全力を挙げて、宗教改革者たちを迫害しはじめた日から、二五八年後の一七九三年一月二日、以前とは全く異なった目的のもとに、もう一つの行列がパリ市中を通った。「ふたたび、王が主要な人物であった。ふたたび、騒ぎと叫び声があった。ふたたび、もっと多くの犠牲者を求める声があがった。ふたたび、黒い処刑台が立てられた。ふたたび、その日のできごとは、恐ろしい処刑で終わった。ルイ十六世は、看守や処刑者たちに押えられて、もがきながら

処刑台まで引きずられてきた。そして、そこで、人々に力いっぱい押えられ、おのが落ち、彼の首は処刑台上に転がった。^{二七}犠牲になったのは王だけではなかった。血なまぐさい恐怖時代に、そのあたりで二千八百人がギロチンで殺されたのである。

宗教改革は、世の人々に聖書を開き、神の律法の教えを示し、その要求するところを人々の良心に訴えた。無限の愛の神は、人々に天国の律法と原則を示しておられた。神は言われた。「あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう」(申命記四ノ六)。フランスが天の賜物を拒否したときに、無政府と破滅の種をまいた。そして、その必然の結果として、革命と恐怖政治が起こったのである。

ファールレルの伝道

檄文事件によってひき起こされた迫害のずっと以前に、勇敢で熱心なファールレルは、彼の生まれ故郷を去らなければならなかった。彼はスイスに行つて、ツウィングリの働きを援助し、宗教改革を有利に導いた。彼は、その余生をここで過ごすことになるのであったが、それでもなお、フランスの改革に決定的な影響を及ぼしつづけた。彼は、亡命後の最初の数年は、故郷に福音を宣布することに特に心を用いた。彼は、国境近くの同胞に説教することに相当の時間を費やし、この場所から絶えず注意深く見守り、励ましと勧告の言葉を送って助けた。彼

は、他の逃亡者たちの援助を得て、ドイツの改革者たちの著書をフランス語に翻訳し、フランス語の聖書とともに、大量に印刷した。これらの著書は、文書伝道者によって、フランス国内で広く販売された。文書伝道者にはこれが安価に提供されて、彼らはその利益によって、活動を継続することができた。

ファールレルは、つましい学校教師に変装して、スイスにおける活動を始めた。彼は、遠く離れた教区に行つて、子供たちの教育に専念した。一般の学課のほか、彼は用心深く聖書の真理を教え、子供たちを通じて親たちに伝えようと望んだ。信じる者もいくらか現われたが、司祭たちが彼の働きを妨害したので、迷信的な田舎の人々は、彼に反対するようになった。「それを宣伝すれば平和でなくて争いを起こすのを見ると、それはキリストの福音ではあり得ない」と司祭たちは力説した。^{二八}そこで、初期の弟子たちのように、一つの町で迫害されたなら次の町へ逃れた。彼は、飢えと疲労に耐えながら、そして至る所で生命の危険にさらされながら、村から村、町から町へと歩いて旅をした。彼は、市場や教会で、そして時には大聖堂の説教壇から説教した。時には教会に聴衆が一人もないこともあった。時には、叫びやののしりの声に妨害されることもあった。また、乱暴に説教壇から引きずりおろされたこともあった。やじうまたちに襲われて、なぐられ、死ぬばかりになったことも何度かあった。それでも彼は前進していった。何度撃退されても、たゆまず攻撃をくり返した。そうしているうちに、法王側の要塞であつた町や都市が、次々に福音に門を開くようになるのを彼は見た。彼が最初に働いた小さな教区も、まもなく改革の信仰を受け入れた。モラとヌーシャテルの町々も、ローマの儀式を廃止し、教会から偶像を取り除いた。

ファールレルは、かねてから、ジユネーブにプロテスタントの旗を立てたいと願っていた。もしこの町に福音を

伝えることができれば、フランス、スイス、イタリアの、宗教改革の中心地となるのであった。彼は、この目的のもとに、働きを継続し、その周囲の多くの町々村々に福音を伝えた。それから彼は、ただ一人の同伴者とともに、ジュネーブに入った。しかし彼は、ただ二回の説教が許されただけであった。国家の権力によって彼を罪に定めようとしてできなかった司祭たちは、彼を教会会議に呼び出した。彼らは、衣の下に武器を隠し、彼の生命を奪おうとしていた。会場の前には、こん棒や剣を持った群衆が、もし彼が会議を逃れて出て来たら、彼を殺そうと待ちかまえていた。しかし、長官や軍隊がいたために、彼は助かった。翌朝早く、彼と同伴者とは、湖水の向こう岸の安全な地へ送られた。こうして、ジュネーブの最初の伝道は終わった。

ジュネーブにおけるカルバン

その次の伝道に選ばれたのは、もっと劣った器であった。それは、宗教改革の同志たちからさえ冷淡に扱われたほどの、みかけの貧弱な青年であった。ファールレルが拒絶された町で、このような人間に、いったい何ができたのか。最も強力で勇敢であった者が逃げなければならなかったようなあらしに、この勇気も経験も乏しい男がどうやって耐えられようか。「万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」(ゼカリヤ書四ノ六)。「強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選」ばれた。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである」(コリント第一・一ノ二七、二五)。

フロマンは、教師として活動を始めた。彼が学校で教えた真理を、子供たちは家庭でくり返した。やがて、親

たちが聖書の説明を聞きに来て、教室は熱心な聴衆であふれた。新約聖書や小冊子が、数多く配布され、新しい教義を公然と聞きに来ない多くの人々の手にも渡った。しばらくして、この伝道者も逃げなければならなかった。しかし、彼が教えた真理は、人々の心を捕えてしまっていた。宗教改革の種はまかれ、だんだん力を得て広がっていった。説教者たちが帰ってきて、彼らの努力によって、ついにジュネーブにプロテスタントの礼拝が確立した。ジュネーブが宗教改革の宣言をしたころ、各地を放浪しているいろいろの経験を経たカルバンが、ジュネーブに来た。彼は、生まれ故郷に最後の訪問をして、バーゼルに行く途中であつたが、そこへの直接の道がカール五世の軍隊に占領されているのを知って、ジュネーブ経由で遠回りをしなければならなかつたのである。

この訪問が神の摂理であることを、フアーレルは認めた。ジュネーブは、改革主義の信仰を受け入れたと言つても、まだ、この地でしなければならない大事業が残つていた。人々は、団体としてでなく、個人的に神に悔い改めるのである。新生の働きは、会議の法令ではなくて、聖霊の力が心と良心に働くことによって行なわれなければならない。ジュネーブの人々は、ローマの権威を投げ捨ててはいたが、ローマの支配下で栄えていた悪習を捨てようとはしていなかつた。ここで福音の純粋な原則を確立し、神の摂理が召している地位に適したものにこの人々を準備することは、容易なことではなかつた。

フアーレルは、カルバンこそ、この事業において彼と協力できる人物であると確信した。そこで彼は、神の名によって、青年伝道者に、ここに残つて働くように、厳かに懇願した。カルバンは、驚いて辞退した。彼は、気が弱く、平和を愛していたので、勇敢で独立心に富み、激しい気性さえあるジュネーブの人々に接することを恐れた。彼は、体が弱く、勉強好きでもあつたので、引きこもりがちであつた。彼は、文筆によって改革事業に最

上の奉仕ができる信じ、研究のために静かな場所を見つけて、そこで印刷物によって教会を教え、築き上げた
いと願った。しかし、ファールレルの厳肅な勧告は、彼にとって天からの召しと思われ、彼は拒否することができ
なかった。「神の手が天からのべられて私を捕え、早く去ろうと考えていた場所にどうしてもいなければならな
くされた」と彼には思われたのである。^{二九}

イエズス会の策動

このとき、改革事業に一大危機が訪れた。ジュネーブに対して法王の破門が宣言され、強国がこぞってジュネ
ーブを威嚇した。これまでしばしば国王や皇帝を屈服させた強力な教権に、この小さい都市がどうして対抗する
ことができたのか。世界の偉大な征服者たちの軍隊に、どうして対抗できたのか。

プロテスタント主義は、全キリスト教国において、恐るべき敵に脅かされた。改革事業の最初の勝利は過ぎ、
ローマはその全滅を期して新たな勢力を奮い起こした。このとき、法王教の全闘士中、最も残酷で無法で強力な
イエズス会が創設された。彼らは、世俗のきずなや人間関係から切り離され、人情も理性も良心もいっさいを無
視して、彼らの会以外のどんな規則もきずなも認めず、ただ、その権力を伸張することだけを義務とした（付録
参照）。キリストの福音は、その信者たちに、危険を冒し、苦難に耐え、寒さ、飢え、労苦、貧困にもめげず、真
理の旗をかかげ、拷問も投獄も火刑も恐れない力を与えてきた。この勢力に対抗するために、イエズス会は、そ
の会員を狂信的にさせ、同様の危険に耐えるように、またあらゆる欺瞞の武器をもって真理の力に対抗するよう

にさせた。彼らは、どんな犯罪を犯しても罪にならず、どんな欺瞞を行なってもかまわず、どんな偽装もわけなくできた。彼らは、一生の間貧困と質素な生活を送ることを誓ったが、その目的とするところは、富と権力の獲得であり、プロテスタント主義をくつがえし、法王至上権を復興することであった。

彼らは、会の会員として活動するときは聖衣をまとい、牢獄や病院を訪ねて病人や貧者に奉仕し、世俗を捨てたことを公言し、よい働きをしながら巡回されたイエスの清い名を帯びていた。しかし、この潔白な外観のかげに、しばしば、極悪非道な目的が隠されていた。目的は手段を正当化するというのが、会の基本原則であった。この規定によって、虚偽、盗み、偽証、暗殺などは、教会のために役立つならば許されるだけでなく、賞賛すべきものであった。さまざまな偽装のもとに、イエズス会の会員たちは、国政にまで手を伸ばし、国王の顧問の地位について、国家の政策をまとめた。また、人々の様子を探るために、そのしもべとなった。彼らは、王侯、貴族の子弟のための大学を設立し、一般の国民のための学校を建てた。そして、プロテスタントの親の子供たちは、カトリックの儀式を守るように影響された。ローマ・カトリックの礼拝の華麗な様子は、心を混乱させ、想像力を眩惑し魅惑した。こうして子供たちは、彼らの父たちが苦難と血によって得た自由を売り渡してしまった。イエズス会は、ヨーロッパに急速にひろがった。そして、彼らの行ったところは、どこでも法王権が勢力を回復した。

宗教改革におけるカルバンの位置

彼らにさらに大きな力を与えるために、宗教裁判所再建の教書が出された（付録参照）。この恐ろしい裁判所は

カトリック国においてさえ、嫌惡の念をもって見られていたにもかかわらず、法王教の支配者たちによってふたび設置され、白日の下では行ないえないような残忍な行為が、ひそかな牢獄において行なわれた。多くの国々において、国家の花とも言うべき幾千幾万の純潔で高潔な人、最も知的で高い教養を持った人、敬虔で献身的な牧師、勤勉で愛国的な市民、聡明な学者、才能ある芸術家、技量ある職人などが、殺され、あるいは他国に逃れねばならなかった。

ローマは、このような方法で、宗教改革の光を消し、人間から聖書を取り去り、暗黒時代の無知と迷信を回復しようとした。しかし、神の恵みのもとに、そしてルターに続いて神が起こされた高潔な人々の努力によって、プロテスタント主義はくつがえされなかった。その力は、諸侯の好意や武力にたよってはならなかった。最も小さい国々、最もつましく力がない国々が、その要塞となった。それは、滅亡をはかる強敵のただ中にあつた小さなジュネーブであつた。また、北海の沿岸にあつて、当時強大さと富を誇ったスペインの王政に対抗していたオランダであつた。また、宗教改革が勝利したのは、荒涼とした不毛のスウェーデンであつた。

カルバンは、三十年近くジュネーブで働いた。最初は、聖書の道德を守る教会の設立のため、その後は、ヨーロッパ全体に宗教改革を進展させるためであつた。彼の公の指導者としての行動は、無傷ではなく、彼の教義にも誤りがなかったわけではない。しかし、彼は、その当時特に重要であつた真理を宣布する器であつた。彼は、急速に回復しつつあつた法王権に対抗して、プロテスタント主義の原則を維持した。また、ローマの教えのもとに助長された高慢や腐敗のかわりに、単純で純潔な生活を改革教会において促進させた。

ジュネーブから、印刷物や教師が出ていって、改革の教義をひろめた。各地の迫害を受けた人々が、この地点

に、教えと勧告と励ましを求めた。カルバンの都市ジュネーブは、西ヨーロッパ全体のかり立てられた改革者たちの避難所となった。幾世紀も続いた恐ろしいあらしを逃れて、避難者たちがジュネーブの門に來た。家と親族を離れ、飢え、傷ついた彼らは、ここで温かく迎えられるて看護された。彼らは、ここに住みつき、その技量、学問、敬虔さによって、この都市を祝福した。ここに避難した者の多くは、ローマの圧政に対抗するために自国に帰っていった。勇敢なスコットランドの改革者、ジョン・ノックス、多くの英国の清教徒たち、オランダやスペインのプロテスタントたち、また、フランスのユグノーたちは、彼らの故国の暗黒を照らす真理のたいまつを、ジュネーブから持っていたのである。

注

- 一 Wylie, b.13, ch.1.
- 二 D'Aubigné, London ed., b.12, ch.2.
- 三 Ibid.
- 四 Wylie, b.13, ch.2.
- 五 Ibid
- 六 D'Aubigné, b.12, ch.3.
- 七 Wylie, b.13, ch.9.
- 八 Ibid.
- 九 Ibid.
- 一〇 Ibid.
- 一一 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in The Time of Calvin," b.2, ch.16.

- 一一 Wylie, b.13, ch.9.
- 一二 Ibid.
- 一四 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin," b.2, ch.16.
- 一五 D'Aubigné, "History of the Reformation of the Sixteenth Century," b.12, ch.9.
- 一六 Wylie, b.13, ch.7.
- 一七 Martyn, vol.3, ch.13.
- 一八 Wylie, b.13, ch.9.
- 一九 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin," b.2, ch.30.
- 二〇 Ibid., b.4, ch.10.
- 二一 Ibid.
- 二二 Wylie, b.13, ch.20.
- 二三 Ibid., b.13, ch.21.
- 二四 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin," b.4, ch.12.
- 二五 Wylie, b.13, ch.21.
- 二六 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin," b.4, ch.12.
- 二七 Wylie, b.13, ch.21.
- 二八 Wylie, b.14, ch.3.
- 二九 D'Aubigné, "History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin," b.9, ch.17.



リュッツェンの戦いにおいて、進軍に先立ち祈りをささげるグスタフ・アドルフ。彼の指揮下にスウェーデン軍は、ドイツが自国の新教徒たちのために信仰の自由をかちとるのを助けた。

第一三章

北 欧 諸 国 の 宗 教 改 革

オランダにおける真理の伝統

オランダにおいては、非常に早くから、法王の圧制に対して断固とした抗議が行なわれた。ルターの時代の七百年も前に、ローマに使節として遣わされ、「法王庁」の真相を知った二人の司教が、恐れることなくローマ法王を非難した。神は、「その女王であり配偶者である教会に、その家族のための貴い永遠の備えをなし、衰えることも滅びることもない婚礼の贈り物と、永遠の冠と笏とを与えられた。…あなたは、それらの祝福のすべてを、盗人のように横取りする。あなたは、自分自身を神の宮にすえる。あなたは牧者ではなくて、羊に対するおかみになっている。…あなたは、自分が最高の司教であるとわれわれに信じさせようとしているが、暴君のようにふるまっている。…あなたは、自ら称するとおり、しもべのしもべでなければならぬのに、主の主に

なろうとしている。…あなたは、神の戒めを侮辱している。…地上の至る所に教会を建てるのは、聖霊である。…われわれが市民であるところの神の都は、諸天の全域に及ぶものである。それは、預言者たちがバビロンと呼び、自分は神であって天に達し、自分の知恵は不滅であると誇り、不当にも自分には誤りはない、また誤つことはあり得ないと主張している都よりは、はるかに大きい都である。」^一

その後各時代を通じて、他の者たちが起こつてこの抗議をくり返した。いろいろの名称で呼ばれていたが、ワルド派の宣教師の特徴をもったこれらの初期の教師たちは、各地を巡回し、至る所に福音の知識をひろめて、オランダに浸透した。彼らの教義は速やかにひろまった。彼らは、ワルド派の聖書をオランダ語の詩に翻訳した。彼らは宣言した。「これは、非常に有利であつた。冗談、作り話、軽薄、偽りはなく、ただ真理の言葉だけがあつた。もちろん、ところどころに難しいところはあつても、善と聖の真髄と美味とは、たやすくその中に発見された。」^二昔からの信仰を支持する者たちは、十二世紀にこのように書いた。

さて、ローマの迫害が始まつた。しかし、火刑と拷問の中にあつても、信者は増加しつづけ、聖書が宗教の誤つことのない唯一の権威であることを断固として宣言し、「人間は、信じることを強いられるべきものでなく、説教によつて導くべきである」と言つた。^三

改革者メノー・シモンズ

ルターの教えは、オランダでそれに適した土壌を見だし、熱心で忠実な人々が福音の宣教に立ち上がった。

オランダの州の一つから、メノー・シモンズが現われた。彼は、ローマ・カトリック教徒として教育を受け、司祭になったが、聖書のことは何も知らなかった。そして、異端に欺かれるといけないと思って、読もうとしなかった。彼が化体説(全質変化)について疑問を抱いたとき、彼はそれをサタンの誘惑であると考え、祈りと告白によって、それからの解放を求めた。しかし、それはむだであった。彼は、遊興の場に行つて、良心の声を消そうとしたが、それも役には立たなかった。その後しばらくして、彼は新約聖書の研究に導かれ、これと、ルターの著書とが、彼に改革の信仰を受け入れさせた。その後まもなく、近くの村で、再洗礼を受けたために死刑に処せられる人が、首を切られるのを目撃した。このことから彼は、幼児洗礼に関して聖書を調べてみた。彼は、それを支持する証拠を聖書の中に見つけることはできなかった。かえつて、バプテスマを受ける条件として、悔い改めと信仰が至る所で要求されているのを見た。

メノーは、ローマ・カトリック教会を離れて、彼が信じた真理を教えるために一生をささげた。ドイツにもオランダにも、狂信的な人々が起つて、途方もない扇動的教義を主張し、秩序と風紀を乱し、暴力と反乱を引き起こしていた。メノーは、このような運動が必然的にもたらす恐ろしい結果を見て、狂信家たちの誤った教えと無暴力な方法とに極力反対した。しかし、こうした狂信家たちに迷わされたが、やがてその有害な教義を捨ててしまったものが多くいた。また、昔からのキリスト者たちの子孫たち、すなわち、フルド派の教えの実である人々も多く残っていた。メノーは、こうした人々の間で、熱心に働いて成功を収めた。

彼は、妻と子供たちを連れて二五年間旅を続け、大きな困難と欠乏に耐え、しばしば生命の危険にさらされた。彼は、オランダと北ドイツを巡り、主として下層階級の間で働いたが、その感化は広範囲に及んだ。限られた教

育しかなかったが、生まれつき雄弁であつた彼は、ゆるがぬ誠実さ、謙そんな精神と柔和な態度、そして真実で熱心な信仰の持ち主であつて、自分が教えるところを生活に実践し、人々の信頼を受けた。彼の弟子たちは、散らされ、迫害された。彼らは、狂信的なミュンスター暴徒たちと混同されたために、非常に苦しめられた。しかし、彼の働きによって、多数の者が悔い改めた。

迫害と宣教

改革の教義がオランダほどに広く受け入れられたところは他になかった。また、ここほど改革主義を信じた者たちが恐ろしい迫害を受けた国も少ない。ドイツでは、カール五世が宗教改革を禁じ、その信者たちをみな火刑にしようとした。しかし、諸侯たちが立ち上がつてその暴虐を防いだ。オランダにおいては、彼の権力はさらに大きく、迫害の命令が次々に発せられた。聖書を読むこと、聖書を聞いたり説教をしたりすること、また、それについて語ることさえ、火刑に値する罪であつた。ひそかに神に祈ること、偶像を拝むのを拒否すること、あるいは詩篇を歌うことも死罪に値した。自分の誤りを捨てることを誓つてさえ、男子は剣で殺され、女子は生き埋めにされた。カールとフェリペ（フィリップ）二世の時代に殺された者は、幾千にのぼつた。

あるとき、ミサに出ないで家庭で礼拝をしたという理由で、一家族全員が宗教裁判官の前に引き出された。ひそかに行なっていたことについての取り調べに對し、いちばん下の息子は答えた。「わたしたちはひざまずいて、神がわたしたちの心を照らし、わたしたちの罪をゆるしてくださいと祈ります。わたしたちは、わたした

ちの王様のために祈り、王様の治世が栄えてご幸福であられるように祈ります。わたしたちは長官たちのために祈り、神が彼らを守ってくださるよう祈ります。」^四 裁判官のなかには、非常に感動した者たちもいた。しかし、父親と、息子たちの一人は、火刑の宣告を受けた。

迫害が激しくなるにつれて、殉教者たちの信仰も熱してきた。男子だけでなく、かわいい女性や年若い少女たちも、確固とした勇気をあらわした。「妻たちは、夫の火刑柱のそばに立って、夫が火に耐えている間、慰めの言葉をささやき、詩篇を歌って夫を励ました。」「少女たちは、夜寝床にはいるかのように、生きながら墓に横たわり、あるいは婚礼に行くかのように、最上の衣裳をまもって、絞首台や火刑台に進んでいった。」^五

多神教が福音を撲滅しようとした時代と同様に、キリスト者の血は種であった（テルトゥリアヌス「護教論」五〇節）。迫害は、真理の証人たちの数を増加させるだけであった。征服することのできない人民の決意に、たけり狂った王は、年々その残酷な行動を推し進めていったが、しかしむだであった。そして、高貴なオレンジ公ウイリアムの下における独立は、ついにオランダに、神を礼拝する自由をもたらしたのである。

デンマークの改革者タウセン

ピエモンテの山々で、フランスの平原で、そしてオランダの海岸で、福音の進んでいったところは、その弟子たちの血で彩られた。しかし、北欧諸国には、平和にはいっていった。ウィッテンベルクの学生たちは、故郷へ帰るとき、改革の信仰をスカンジナビアに伝えた。ルターの著書の発行も、光を広めた。単純で強健な北欧の人

人は、ローマの腐敗、華美、迷信を捨てて、純潔、単純で生命を与える聖書の真理を歓迎した。

「デンマークの改革者」タウセンは、農夫の息子であった。彼は、幼いときから、知力の活発な少年であった。彼は、教育を渴望した。しかし、親の事情がそれを許さなかったので修道院にはいった。ここで、彼の勤勉と誠実と純潔な生活が、先輩の好意を勝ち得た。彼は、試験の結果、将来教会のためによい奉仕をする才能の持ち主であることが認められた。そこで、ドイツかオランダの大学で、教育を受けさせることにきまった。この青年学徒は、ウィッテンベルクには行かないという一つの条件のもとに、自分で学校を選ぶ自由が与えられた。教会の学者たるものは、異端の害毒にさらされてはならない。このように修道士たちは言った。

タウセンは、今日同様当時においても、ローマ教の本拠の一つであったケルン大学にはいった。ここで彼はまもなく学者たちの神秘主義にあいそをつかした。ちょうどそのころ、彼は、ルターの著書を手に入れた。彼はこれを読んで非常な驚きと喜びとを感じ、ルターの教えを直接受けたいと切望した。しかし、そうすることは、修道院の先輩を怒らせ、彼の支持を失うことであつた。彼はすぐに決心した。そして、まもなくウィッテンベルク大学に入学した。

彼は、デンマークに帰ってから、ふたたび修道院にもどつた。彼がルター派ではないかと疑う者は、だれもまだいなかった。彼は、自分の秘密をあらわさなかったが、同僚の偏見を起こさないようにして、彼らを純粋な信仰と清い生活に導こうと努めた。彼は、聖書を開いてその真の意味を説明し、ついに罪人の義、救いの唯一の希望として、キリストを宣べ伝えた。修道院長の怒りは大きかった。彼はタウセンに、ローマの擁護者としての大きな期待をかけていたのであつた。タウセンは直ちに、彼の修道院から別の修道院に送られて、厳重な監視のも

とに個室に閉じ込められた。

ところが、彼の新しい監視人たちが驚いたことには、まもなく修道士たちが数名、プロテスタント主義に改宗したことを宣言した。タウセンは、独房のこうしの間から、彼の同僚たちに真理を教えたのであった。もしデンマークの修道院長たちが、異端に対する教会の処置に通じていたならば、タウセンの声は二度と聞かれなかったであろう。しかし彼らは、どこかの地下牢で彼を埋葬するかわりに、修道院から彼を追放した。これで、もう彼らには、どうすることもできなかった。ちょうどそのとき、新しい教義の教師たちを保護する勅令が発せられた。タウセンは、説教しはじめた。諸教会は彼に扉を開いた。多くの人々が集まって聞いた。他にも神の言葉を伝える者がいた。新約聖書がデンマーク語に翻訳され、広く配布された。この働きをくつがえそうとする法王側の努力は、かえってこれを促進し、まもなく、デンマークは改革主義の承認を宣言した。

スウェーデンの改革者ペトリ兄弟

スウェーデンにおいても、ウィッテンベルクの井戸から学んだ青年たちが、生命の水を自国の人々に伝えた。スウェーデンの宗教改革の指導者のうちの二人、オラフ・ペトリとローレンティウス・ペトリは、オレブの鍛冶屋の息子たちで、ルターとメランヒトンの下で学び、こうして学んだ真理を熱心に教えた。オラフは、偉大な改革者ルターのように、熱と雄弁によって、人々を覚醒させた。一方ローレンティウスは、メランヒトンのように、学識があり、思慮深く静かな人であった。両方とも、熱心に神を敬う人たちで、神学に深く通じ、断固とし

た勇氣をもって真理を推進させた。法王側の反対はやまなかった。カトリックの司祭たちは、無学で迷信的な人を扇動した。オラフ・ペトリは、しばしば暴徒に襲われ、命からがら逃げたことも何度かあった。しかし、これらの改革者たちは、王の愛顧と保護を受けていた。

ローマ教会の支配の下で、人々は貧困に苦しみ、圧迫にあえいだ。彼らは、聖書を持っていなかった。そして心に光を伝えない単なるしるしと儀式だけの宗教を持っていたので、彼らは、彼らの異教の先祖たちの、迷信的信仰と多神教的習慣にもどろりつつあった。国民は党派に分かれて相争い、絶えまなく続く争いは、すべての者の悲惨を増した。王は、国家と教会の改革を決意し、ローマと戦うためにこれらの有能な援助者を歓迎した。

オラフ・ペトリは、スウェーデン国王と指導者たちの前で、ローマ側の支持者に対抗して、改革主義の信仰の教義をりっぱに擁護した。彼は、教父たちの教えは、聖書と一致するものだけを信じるべきであると言った。また、信仰上の重要な教義は、聖書に簡単明瞭に示されているから、すべての者が理解できると言明した。「わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である」とキリストは言われた（ヨハネ七ノ一六）。そして、パウロは、彼が受けた福音以外のことを宣べ伝える者は、のろわるべきであると言った（ガラテヤ一ノ八参照）。「それでは、いったいだれがかつてに教義を規定して、それが救いに必要なものであると強制することができるでしょうか」と改革者は語った。^六彼は、教会の法令が神の命令に反するときは、権威がないことを示し、プロテスタントの「聖書、そして聖書のみ」という大原則が、信仰と行為の規則であることを主張した。この論争は、割合目だたない程度のものであったが、しかし「宗教改革者側の陣営が、どのような人々によって占められていたかを」示してくれるものである。「彼らは、無学で党派心に強くそうぞうしい論争家では、け

つてなかった。彼らは、神の言葉を研究した人々であり、聖書の兵器庫が彼らに与えた武器を、十分に使いこなせる人々であった。博学の点においては、彼らは、彼らの時代に先んじていた。われわれは、ウィッテンベルクやチューリヒのような輝かしい中心地、また、ルターやメランヒトン、ツウィングリやエコランパデウスのような著名な人物に注目するとき、当然、彼らは運動の指導者であって、驚くべき能力と学識の持ち主であったが、その他の人々はそうではなかったように考えがちである。しかし、遠く離れたスウェーデンの舞台に目を転じ、オラフとローレンティウス・ペトリというつましい名前に目を向けてみよう。教師たちからその弟子たちへと目を転じるのである。するとそこに、われわれは何を見いだすであろうか。…学者と神学者である。福音の真理の全体系を完全にこなし、学校の哲学者やローマの司教たちを容易に打ち負かす人々である」。^七

この論争の結果、スウェーデンの王は改革主義を受け入れ、その後まもなく、国会が賛成した。新約聖書は、オラフ・ペトリによって、スウェーデン語に翻訳され、王の希望によって、二人の兄弟は聖書全体の翻訳にとりかかった。こうして、スウェーデン人は、初めて神の言葉を自国語で持つことができた。また、王国全体において、牧師は聖書を説き明かすように、そして学校において子供たちに聖書を読むことを教えるように、国会で定められた。

無知と迷信の暗黒は、徐々にではあるが確実に、福音の祝福された光によって追い払われていった。ローマの圧迫から解放された国は、これまで到達したことのない力と偉大さに達した。スウェーデンは、プロテスタント主義のとりでの一つとなった。一世紀後、非常な危険のときに、この小さく弱かった国——ヨーロッパにおいて、支援の手をさしのべた唯一の国——が、三十年戦争の恐ろしい戦いに際して、ドイツを救ったのである。北欧全

土は、ふたたびローマの压制下に置かれるかと思われた。ドイツが法王側勝利の形勢を一変させて、ルター派同様にカルバン派のプロテスタント主義の信教の自由を確保し、宗教改革を受け入れたこれらの国々に、良心の自由を回復することができたのは、スウェーデンの軍隊のおかげであった。

注

- 一 Gerard Brandt, "History of the Reformation in and About the Low Countries," b.1, p.6.
- 二 *Ibid.*, b.1, p.14.
- 三 Martyn, vol.2, p.87.
- 四 Wylie, b.18, ch.6.
- 五 *Ibid.*
- 六 Wylie, b.10, ch.4.
- 七 *Ibid.*

第一四章

英国における真理の前進

聖書を英国民の手に

ルターが、封じられた聖書をドイツの人々に開いていたときに、ティンダルも神の靈に動かされて、英国（イングランド）のために同じことを行なった。ウィクリフの聖書は、多くの誤りを含むラテン語訳からの翻訳であった。それは、印刷されず、写本の価格は非常に高価であったために、金持ちか貴族でなければ手に入れることができなかった。その上、教会が厳しく禁じていたために、比較的小範圍にしか広まっていなかった。一五一六年、すなわち、ルターの九五か条の論題が公にされる前年、エラスムスは、ギリシア語とラテン語の新約聖書を出版した。神の言葉が原語で印刷されたのは、これが初めてであった。この事業によって、以前の訳の多くの誤

りが正され、意味も明瞭になった。これによって、多くの知識人たちが真理をよく知るようになり、改革事業に新たな刺激を与えた。しかし、一般の人々はまだ、その大部分が、神の言葉から除外されていた。ティンダルは、ウィクリフの事業を完成して、同胞に聖書を与えるのであった。

勤勉で熱心な真理の探究者であった彼は、エラズムスのギリシア語新約聖書によって、福音を受け入れた。彼は、恐れることなく自分の確信を説教し、すべての教義は聖書によってためすべきであると主張した。聖書を与えたのは教会であって、教会だけが聖書を説明することができるという法王側の主張に対して、ティンダルは答えた。「ワシにえさを見つけることを教えたのがだれか、あなたは知っているか。その同じ神が、神の飢えた子供たちに、聖書の中に彼らの父を見つけるよう教えておられる。あなたがたは、われわれに聖書を与えるどころか、われわれから聖書を隠してきた。聖書を教える人々を焼くのがあなたがただ。そしてあなたがたは、できることなら聖書そのものまで焼こうとしている。」

ティンダルの説教は、非常に人々の興味をかきたてた。そして多くの者が真理を受け入れた。しかし、司祭たちは待機していて、彼が伝道地を去るやいなや、脅迫や偽りによって、彼の働きを破壊しようとした。彼らが成功することがしばしばであった。「どうしたらよいだろうか。一か所で種をまいていると、敵は、今わたしが去ったばかりの所を荒らしている。わたしは、至る所にいることはできない。そうだ！もしキリスト者たちが、自国語で聖書を持つことができるならば、彼らはこれらの詭弁家たちに対抗できることであろう。聖書がなければ、信徒を真理に定着させることはできない。」

ティンダルの偉大な事業

彼は、新しい目的を心に抱いた。「イスラエルが主の宮で詩篇を歌ったのは、イスラエルの国語によってであった。それではわれわれの間で、福音が英語で語られてはいけないであろうか。…教会では、明けがたよりも真昼の光のほうが弱くてよいであろうか。…キリスト者は、母国語で新約聖書を読まなければならない」と彼は言った。教会の博士たちや教師たちの意見は、互いに異なっていた。人々は、ただ聖書に基づいてのみ、真理を知ることが出来る。「ある者は、この博士を信じ、他の者は、別の博士を信じる。…これらの著者たちは、互いに他を否定する。それでは、正しいことを言う人と誤ったことを言う人とは、どのようにして区別することができようか。…それは真に、神の言葉によつてである。」^三

その後まもなく、学識あるカトリックの博士が、彼と論争して叫んだ。「われわれは、法王の法律を廢するよりは、神の律法を廢したほうがよい。」ティンダルは答えた。「わたしは、法王と彼のすべての法律を無視する。そして、もし神がわたしの生命を長らえさせてくださるならば、わたしは幾年もたたぬうちに、農業に従事する少年が、あなたよりもっと聖書のことを知るようになるであろう。」^四

人々に自国語の新約聖書を与えるという、ティンダルが心に抱き始めた計画は、今や確固たるものとなり、彼は直ちにその仕事に取りかかった。彼は迫害のために家を追われ、ロンドンへ行って、そこでしばらくじやまされずに仕事に従事した。しかし彼は、ふたたび法王側の人々の暴行によって、逃げなければならなかった。イギ

リス全国が、彼に対して閉じられたように思われたので、彼はドイツに隠れ家を求める決心をした。ここで彼は、英語の新約聖書を印刷しはじめた。仕事は二度も妨害された。しかし、一つの町で印刷を禁じられると、彼は次の町へ行った。ついに彼は、ウォルムスに向かったが、ここは数年前に、ルターが国会において福音を擁護したところであった。この古い町には、宗教改革の多くの支持者たちがいたので、ティンダルはその後なんの妨害もなく、仕事を継続することができた。間もなくここで三千冊の新約聖書が完成し、同じ年に第二版も発行された。

彼は、非常な熱心と忍耐をもって、仕事を続けた。英国当局が各港を厳重に監視していたにもかかわらず、神の言葉は、さまざまな方法で、ひそかにロンドンに運ばれ、そこから全国に配布された。法王側は真理を圧迫しようとしたが、むだであった。あるときドラムの司教はティンダルの友人であった書籍販売人から、彼が持っているだけの聖書を買取った。これは聖書を焼き捨てるためで、そうすれば、改革事業を大いに妨害することができるからであった。ところが、こうして得た金で、新しいよりよい版のための材料を買うことができた。もし、これがなければ、その出版はできなかったのである。後に、ティンダルが捕えられたとき、彼は、聖書の印刷費を援助した人々の名を明かせば、自由にすると言われた。彼は、ドラムの司教が、他のだれよりも多くの援助をしたと答えた。それは、司教が手もとに残っている聖書を高い値段で買ってくれたために、彼は、勇気をもって仕事を継続することができたからであった。

ティンダルは、裏切られて敵の手に渡され、一時何か月もの間牢獄に入れられた。彼はついに、殉教の死を遂げて信仰のあかしを立てた。しかし、彼が用意した武器は、今日に至るまで幾世紀にわたって、他の兵士たちの戦闘を可能にしたのである。

改革主義者たちの輩出

ラティマーは、聖書は自国語で読むべきものであると、説教壇から主張した。聖書の著者は、「神ご自身である。」そして、この聖書は、その著者の力と永遠性を帯びている、と彼は言った。「王、皇帝、長官、統治者であっても、…神の聖なる言葉に…従う義務のない者はいない。」「われわれは、横道にそれず、神の言葉に導かれるようにしよう。われわれは、先祖たちの道を歩かず、彼らのしたことをしようとせず、彼らがすべきであったことをしよう。」^五

ティンダルの忠実な友人たち、バーンズとフリスが、真理を擁護するために立ち上がった。それに、リドリと克蘭マーが続いた。これら英国の宗教改革指導者たちは学識ある人々で、たいていはカトリックの社会で、その熱意と敬虔さを高く評価されていた人々であった。彼らが法王権に反対したのは、「法王庁」の誤りを認めただけであった。彼らがバビロンの奥義をよく知っていたことは、教会に反対する彼らのあかしをいっそう力強いものにした。

ラティマーは言った。「ここでわたしは、奇妙な質問をしようと思う。英国全体のなかで、いったいだれが最も勤勉な司教であり高位聖職者であろうか。…みなさんは、わたしがだれの名前を言うかと、耳をそばだてておられる。…それでは申し上げよう。それは悪魔である。…彼は自分の教区からけっして出ない。彼を訪問すれば、いつでも家にいる。…彼はいつでも仕事をしている。…請け合ってもいいが、みなさんはけっして彼が怠けて

いるのを見ることができない。…悪魔が住みついたところは、…書物を捨て去って、ろうそくを立てる。聖書は捨てて、じゅうずを取り上げる。福音の光を捨てて、白昼にろうそくの光を掲げる。…キリストの十字架を捨てて、煉獄という搾取が行なわれる。…裸の者、貧しい者、力ない者に着せることをせず、偶像を飾り、さまざまの像をきらびやかに飾る。人間の言い伝えと律法をたいせつにして、神の教えと最も神聖な言葉を捨てる。…ああ、われわれの高位聖職者たちが、サタンが毒麦をまくような熱心さで、良い教義の種をまけばよいのだが！」^六

これらの改革者たちが主張した大原則は、フルド派、ウィクリフ、ヨハン・フス、ルター、カルバン、ツウィングリその他の同志たちが信じた原則と同じであって、信仰と行為の規則としての聖書の、誤ることのない権威ということであつた。彼らは、法王、会議、神父、王たちの、宗教の問題において良心を支配する権利を拒んだ。聖書が彼らの権威であつた。そして彼らは、その教えによって、すべての教義とすべての主張を試した。これらの聖徒たちが処刑台の露と消えたときに、彼らを支えたのは、神と神の言葉に対する信仰であつた。ラティマーは、炎のために、今にも声が沈黙させられそうになったとき、同僚の殉教者に向かつて叫んだ。「喜べ。きょうわれわれは、神の恵みによって、英国にろうそくをとすのだ。その火は決して消えないであろう。」^七

スコットランドの情勢

スコットランドにおいて、真理の種は、コルンバによってまかれた。そして彼の同志たちは、その後も決して



スコットランドの諸侯と女王の面前に連れてこられたとき——その前では、多くのプロテスタント指導者たちの熱意はくじけてしまったのであったが、——ノックスは真理のために断固として証言した。

なくならなかった。英国の教会がローマに服従してから数百年の間、スコットランドの教会は自由を保ち続けた。しかし、十二世紀に至って、法王権がこの地に打ち立てられ、他国では見られなかった絶対的支配が行なわれた。ここほど暗黒なところは他になかった。それにもかかわらず、光が輝いて暗黒をさし貫き、来たるべき日の約束を与えた。□ラード派の人々が、英国から聖書とウィクリフの教えを携えて来て、福音の知識の保持のために大いに貢献した。また、各世紀に、福音の証人と殉教者があらわれた。

大宗教改革の開始とともに、ルターの著書が紹介され、それに続いて、ティンダルの英語の新約聖書がはいってきた。これらの書物は、法王側の目を逃れて、黙々と山々や谷間を行きめぐり、スコットランドで今にも消えそうになっていた真理の燈に新たな生命を与え、ローマが四世紀にわたって行なってきた圧迫から人々を解放した。

さらに、殉教者の血が、運動に新たな刺激を与えた。法王側の指導者たちは、突然、彼らの働きが危機に陥ったのを悟って、スコットランドの最も高貴で栄誉ある人々を火刑にした。しかし、彼らは、説教壇を立てたにすぎなかった。そしてそこから、これらの証人たちの最後の言葉が全国に響き、ローマの束縛を打破するという不滅の目的をもって、人々の心を感動させたのであった。

ハミルトンとウィシャートは、家柄も品性も高貴であったが、他の多くの質朴な弟子たちと共に、火刑にされて死んだ。しかし、ウィシャートの火刑柱から、炎も沈黙させることができない者、神の力によってスコットランドの法王権の没落を来たらせる者が現われた。

大胆不敵なジョン・ノックス

ジョン・ノックスは、教会の伝説と神秘主義を捨てて、神の言葉の真理を研究した。そして、ウィシャートの教えが、彼に、ローマ・カトリック教会を出て、迫害されている改革者の側に加わる決心を固めさせた。

彼は、仲間から説教者になるように勧められたとき、その責任の重大なことを恐れてしりぞみした。そして、数日間閉じ込もって苦悩した後、初めてそれに同意した。しかし、一度その職につくと、断固とした決意とひるむことなき勇氣をもって、一生の間前進していった。この誠実な改革者は、人の顔を恐れなかった。迫害の炎が彼を取り囲んだが、それはただ彼の熱をあおるだけであつた。暴君のおのが彼の頭上を脅かしていたが、彼は自分の立場を貫き、偶像を破壊するために右や左に強力な打撃を加えた。

スコットランドの女王の前に連れ出されると、プロテスタントの指導者の多くは、熱意がさめてしまつのであるが、ジョン・ノックスは、真理のためにゆるがめあかしを立てた。彼は、愛顧を受けても譲らず、脅かされてもひるまなかつた。女王は彼を異端者扱いした。彼は、国家が禁じた宗教を信じるように人々に教えたのであるから、国民は君主に服従することを命じる神の命令に背いたと、女王は宣言した。ノックスは、断固として答えた。

「正しい宗教は、世俗の君主からではなく、ただ永遠の神から、その本来の力と権威を受けています。それゆえに、国民は、君主の嗜好のままに宗教を定める必要はありません。なぜなら、君主は他のだれよりも、神の真の宗教について無知なことがあるからです。…もしアブラハムの子孫がみな、彼らの長く隷属していたパロの

宗教を続けていたならば、世界には、どんな宗教が出現していたことでしょうか。あるいは、使徒時代の人々がみな、ローマ皇帝の宗教を信じていたならば、この地上には、どんな宗教が起きたことでしょうか。…それゆえ、女王よ、国民は君主に服従すべきではありませんが、宗教に関しては、君主に縛られるべきではないということが、おわかりになるでしょう。」

メアリ女王は言った。「おまえが聖書をこういう意味に解釈すれば、彼ら（ローマ・カトリックの教師たち）は別の解釈をする。わたしは、だれを信じたらよいのか、だれが裁判官になるのか。」

改革者は答えた。「聖書によって明瞭に語られる神を信じればよいのです。そして、み言葉が教える以外のものは、これもあれも信じなくてよいのです。神の言葉は、それ自体明瞭です。もしどこかに不明瞭なところがあれば、ご自身に矛盾することのない聖霊が、それを他の場所において明らかに説き明かしてください。それですから、かたくなに知ろうとしない者を除いては、なんの疑惑も残りえないのです。」^ハ

恐れを知らぬ改革者は、自分の生命の危険も顧みず、女王の前で、このような真理を語った。彼は、この同じひるむことのない勇氣をもって、目的に向かって進み、ついにスコットランドが法王権から解放されるまで、祈りつつ主の戦いを戦った。

イングランドの情勢

イングランドでは、プロテスタント主義が国教になったので、迫害は減ったけれども、全くやんだわけではな

かった。ローマの教義が多く破棄されたけれども、形式は少なからず残っていた。法王の至上権は拒否されたけれども、その代わりに、国王が教会の頭の座を占めた。教会の礼拝は、福音の純粹さと単純さからまだ遠く離れていた。宗教の自由という大原則も、まだ理解されていなかった。プロテスタントの国王たちは、ローマが異端に対して用いた恐ろしい残酷行為は行なわなかったが、おのおのが自分の良心に従って神を礼拝する権利は認めていなかった。すべての者は、国教会が規定した教理を受け入れ、礼拝の形式を守らなければならなかった。国教反対者は、幾百年にわたって、程度の差こそあれ迫害に苦しんだ。

十七世紀には、幾千という牧師がその地位を追われた。人々は、教会が承認したものの以外のどんな宗教的集会に出席することをも禁じられ、違反する者は重い罰金、投獄、追放に会わねばならなかった。そこで、神を礼拝するために集まらずにはおれない忠実な人々は、やむをえず、暗い路地、薄暗い屋根裏、またある季節には、夜中に森に集まった。神ご自身がお建てになった神殿である森の奥深くに、これらの散らされ迫害された主の子供たちは集まり、魂を注ぎ出して祈り、神を賛美した。このように用心深くしていてもなお、信仰のために苦しむ者が多かった。牢獄はあふれた。家族は離散した。外国に追放された者も多かった。それでも神は、ご自分の民と共におられ、迫害は、彼らのあかしを沈黙させることができなかった。海のかなたのアメリカに追われた者も多かった。そして彼らは、アメリカにおいて、同国のとりでであり栄光である政治と宗教の自由の基礎を築いたのであった。

また、使徒時代のように、迫害はかえって福音を進展させた。ジョン・バンヤンは、放蕩者や重罪犯人が群がっている薄気味悪い牢獄のなかで、天国のふんい気にひたり、そこで、滅亡の国から天の都に行く巡礼の旅のす



犯罪者たちでいっぱいの、胸の悪くなるような牢獄の中で、バンヤンは天の栄光に思いをこらした。そしてそこで彼は、天の都へのキリスト者の旅についての寓話を書いた。

ばらしい寓話を著わした。それ以後二百年以上にもわたって、ベッドフォードの牢獄からの声は、人々の心に感動的な力をもって語ってきた。バンヤンの『天路歷程』と『罪人の頭に溢るる恩寵』は、多くの人を生命の道に導いた。

バクスター、フレーベル、アリン、その他、才能と教育とキリスト者経験の豊かな人々が、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰を勇敢に擁護した。この人々の成し遂げた仕事は、この世の支配者からは厳しく禁じられたものであったが、けっして滅びることのないものである。フレーベルの『生命の泉と恵みの道』は、魂をキリストにゆだねる方法を幾千の人々に教えてきた。バクスターの『改革牧師』は、神の働きの復興を望む多くの人々に祝福を与え、『聖徒の永遠の安息』は、神の民のために存続している「安息」に、魂を導く役割を果たしてきた。

ウエスレー兄弟の出現

それから百年後、霊的大暗黒の時代に、ホイットフィールドとウエスレー兄弟が、神の光を掲げる者として現われた。国教会の支配下にあつて、英国の人々は、異教と見分けがつかないほどの宗教的墮落状態に陥っていた。牧師たちは、自然宗教を好んで研究し、それが彼らの神学の大半であつた。上流階級は信心を冷笑し、自分たちは、いわゆる狂信よりすべれていると誇っていた。下層階級は非常に無知で、悪習にふけていた。一方、教会は、ふみにじられた真理の運動を、支持する勇氣も信仰もなかった。

ルターがあればはっきりと教えた、信仰による義という偉大な教理は、ほとんど姿を消してしまっていた。

そして、善行によって救いを得るというローマ教の原則が、その代わりになっていた。ホイットフィールドとウエスレー兄弟は、国教会の信者であった。彼らは、神の恵みを真剣に求め、そしてそれは、高潔な生活と宗教儀式の遵守とによって与えられると教えられていた。

あるとき、チャールズ・ウエスレーが病気にかかり、死にそうになった。彼は、永遠の生命の希望を何にしているかという質問を受けた。彼は答えた。「わたしは、神に仕えるために全力を尽くしてきた。」しかし、質問した友人は、この答えでは満足しないらしかった。ウエスレーは考えた。「なんだって？わたしの努力が、希望の十分な根拠でないというのか。彼は、わたしから、わたしの努力を奪おうとするのか。わたしは他に何も頼るものがない。」^九教会にはこうした深い暗黒がおおいかぶさり、贖罪を隠し、キリストからその栄光を奪っていた。そして、人々の心を、救いの唯一の希望——十字架に架けられた贖い主の血から引き離していた。

ウエスレーと彼の仲間、真の宗教は心に根ざすものであって、神の律法は、言葉や行為と同様に思想にまで及ぶものであることを悟った。外部の行状が正しいのと同様に、心の聖潔の必要を確信して新しい生活に入ろうと熱心に努めた。彼らは、非常な努力と祈りによって、生来の心の悪を抑制しようとした。彼らは、自己犠牲、愛、謙遜の生活を送り、彼らが何よりも望んだもの——すなわち、神の恵みを受けることができる聖潔——に到達するために役立つことはどんなことでも、非常な厳格さと正確さをもって実行した。しかし、彼らは、求めたものを得ることはできなかった。罪の宣告や罪の力から自由になろうとする彼らの努力はおなしかった。これは、ルターが、エルフルトの小部屋で経験したのと同じ悩みであった。「人はどうして神の前に正しくありえようか」という、彼の魂を悩ましたのと同じ問題であった（ヨブ記九ノ二）。

モラビア派との出会い

プロテスタント主義の祭壇の上で、今にも消えそうになっていた神の真理の火は、各時代を通じてボヘミアのキリスト者たちによって伝えられてきた古いたいまつによって、再び点じられることになった。宗教改革の後、ボヘミアのプロテスタント主義は、ローマの軍勢によってふみにじられた。真理を放棄することを拒んだ者は、みな逃亡しなければならなかった。ある者はザクセンに避難所を見いだし、そこで昔ながらの信仰を保った。ウエスレーと彼の仲間が光を受けたのは、これらのキリスト者たちの子孫からであった。

ジョン・ウエスレーとチャールズ・ウエスレーは、牧師の按手礼を受けたあとで、米国の伝道に遣わされた。同じ船に、モラビア人の一団が乗っていた。途中、激しい暴風雨に出会い、ジョン・ウエスレーは死に直面して、まだ自分が神との平和の確証を持っていないのを感じた。ところが、このドイツ人たちは、彼が味わっていない平静さと信頼をあらわしていた。

彼は、次のように言っている。「わたしは、ずっと以前から、彼らの非常にまじめな態度に気づいていた。彼らは、英国人がしようとしてもしい卑しい仕事を他の船客のために行なって、彼らの謙遜を常に実証した。彼らは、これに対する報酬を望まず、また受けようともせず、これは自分たちの高慢な心に益であり、自分たちの愛する救い主は、自分たちのためにもっと多くのことをされた、と言った。そして毎日、彼らは、どんな害を受け

ても動ぜず、柔和であつた。もし、押されたり、打たれたり、投げ倒されたりしても、立ち上がって行つてしまふ。彼らはつぶやいたりはしなかつた。ところで今、彼らが、誇りや怒りやふくしゅうの念と同様に、恐怖からも救われているかどうかを試すときがやつてきた。彼らの礼拝は詩篇で始まつたのであるが、その詩篇を読んでいる最中に、海が大荒れになり、主帆をはずたずに引き裂き、水は船におおいかぶさつて、まるで大海がわれわれを飲んでしまつたかのように、甲板の間に流れ込んだ。英国人の間からは恐ろしい叫び声が起こつた。ドイツ人たちは静かに歌い続けていた。わたしは後で、彼らの一人に、『恐ろしくなかつたですか』と聞いた。彼は、『神様のおかげで、少しも』と答えた。わたしは、『でも婦人や子供たちは恐ろしくなかつたですか』と聞いた。彼は穏やかに答えた。『いいえ、私たちの婦人や子供たちは、死ぬことを恐れてはいません』。

サバナに到着しても、ウエスレーはしばらくの間モラビア人といっしょに住んだ。そして、彼らのキリスト者的な行状に強く心を打たれた。英国の教会の無気力な形式主義とは対照的な、彼らの礼拝について、彼は次のように書いた。「その全体の非常な厳肅さと単純さとは、わたしに千七百年の隔たりを忘れさせ、形式も儀礼もない、あの天幕作りのパウロや漁師のペテロの司会する集会にいるかのような感を与えた。しかも、そこに霊と力のあらわれがあつた。」

ウエスレーは、英国に帰つてきて、モラビア人の説教者の指導のもとに、聖書の信仰をはっきりと理解することができた。彼は、救いを得るために自分自身の行為に頼ることを全く捨てて、「世の罪を取り除く神の小羊」に全的に信頼しなければならぬことを悟つた。ロンドンのモラビア人の集会で、神の霊が信じる者の心に起こす変化について述べたルターの言葉が読まれた。これを聞いて、ウエスレーの心に信仰の火が点じられた。「わ

たしは、自分の心が不思議に温まるのを感じた。わたしは、救われるためにキリストに、ただキリストに頼る自分を感じた。そして、キリストが、**わたしの罪、わたしの罪**さえ取り去って、**わたしを罪と死との法則から救**てくださった、という確証が与えられた」と彼は言っている。^二

キリストの兵卒として

長年にわたる重苦しく慰安のない苦闘——苛酷な自制、自己譴責、へりくだり——によって、ウエスレーは、神を求めるという一つの目的をひたすら追求してきた。そして今、彼は、神を見いだした。彼は、自分が祈禱や断食や施しや自己否定によって得ようとしてきた恵みは、「金を出さずに、ただで」与えられる賜物であることを知ったのである。

ひとたびキリストを信じる信仰に堅く立つと、彼の心は、神から価なくして与えられる恵みという輝かしい福音を、あまねく人々に伝えたいという願いに燃えた。「わたしは全世界をわたしの教区とみなす。そしてわたしは、世界のどこにしよう、喜んで耳を傾けるすべての者に救いの福音を宣べ伝えることを、わたしの当然なすべき正当な義務と考える」と彼は言った。^三

彼は、相変わらず、厳格な克己の生活を続けた。しかし、今それは、信仰の**根拠**ではなくて、**結果**であり、聖潔の**根**ではなくて、**実**であった。キリストによって与えられる神の恵みは、キリスト者の希望の基礎であり、この恵みは、服従となって現われる。ウエスレーの生涯は、彼が受けた大真理——キリストの贖罪の血を信じる

信仰による義認、人の心を変える聖霊の改変力、そして、キリストの模範と一致した生活となって実を結ぶこと——の宣教のためにささげられた。

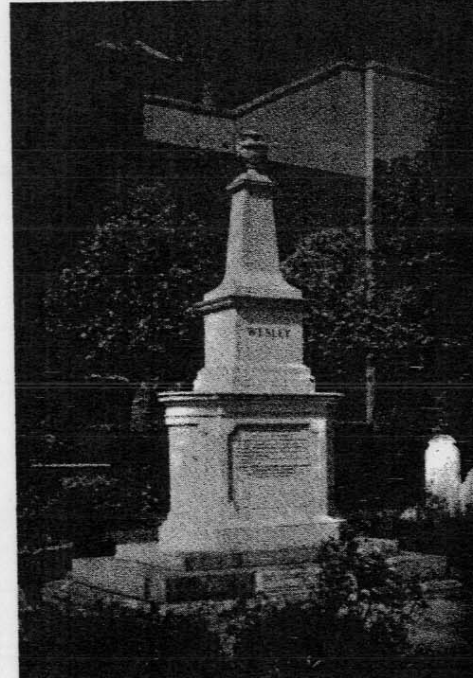
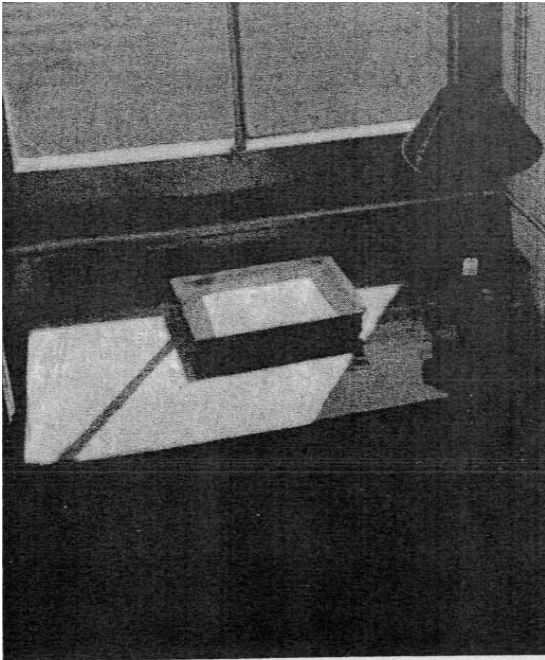
ホイットフィールドとウェスレー兄弟は、自分自身の望みのない失われた状態について、長い間深刻に自覚してきたことによって、彼らの働きの準備ができていた。また彼らは、大学時代にも、牧界に入ったときにも、軽べつやちよう笑や迫害といった、激しい試練を受けていたので、キリストのよき兵卒として困難に耐えることができた。彼らと、彼らに共鳴した少数の人々とは、不信心な学生仲間から、軽べつ的に「メソジスト」と呼ばれた。しかし、この名称は、現在、英国とアメリカの最大の教派の一つの名称となつて、名誉あるものとなっている。

奇跡的な神の守り

彼らは、英国国教会の会員として、教会の礼拝形式に強い愛着を感じていたが、主は、聖書によって彼らにさらに高い標準を示された。聖霊は彼らに、キリストと彼の十字架を宣教することを迫った。至高者の力が彼らの運動に伴った。幾千の者が罪を認め、真に悔い改めた。これらの羊を、貪欲なおかみから守らなければならなかった。ウェスレーは、新しい教派をつくろうという考えはなかったが、いわゆるメソジスト会のもとに人々を組織した。

これらの説教者たちは、国教会から理解に苦しむほどの激しい迫害を受けた。しかし神は、教会それ自体の内

第 14 章 英国における真理の前進



(左上) ウェスレーの祈りの部屋。ここが彼の力の源だった (ロンドン)。(右上) 市場で福音を説くウェスレー。(左下) オクスフォードにあるプロテスタント殉教者記念碑。(右下) ウェスレーチャペルの庭にあるジョン・ウェスレーの墓 (ロンドン)。©KIRJATOIMI

部に改革が起こるように、事態を導いておられたのであった。もしこれが、全く外部からのものであれば、最も必要なところまで浸透しなかったことであろう。しかし、リバイバル(信仰復興)の説教者が教会内の人で、機会あるごとに教会内において活動したので、真理は、さもなければ閉じられたままのところにも、入っていくことができた。聖職者のあるものは、自分たちの道徳的無感覚にめざめて、それぞれの教区で熱心に宣教するようになった。形式主義によってマヒしていた教会が、生きかえったのである。

教会歴史の各時代におけると同様に、ウエスレーの時代にも、異なった賜物を与えられた人々が、それぞれに定められた任務を果たした。彼らは、教義のすべての点において一致しているわけではなかったが、すべての者は聖霊に動かされており、魂をキリストに導くという大目的において一致していた。ホイットフィールドとウエスレー兄弟は、あるとき、見解の相違から仲違いが起こりそうになった。しかし彼らは、キリストの学校で柔和を学んでいたので、お互いに忍耐と愛をもって和解した。至る所に誤りと悪が満ち、罪人が滅びに沈んでいるときに、争っている暇はなかった。

神のしもべたちは、困難な道を歩いた。有力者や学者たちは、その力を振って彼らに反対した。しばらくして、聖職者の多くは、彼らに断固たる敵意をあらわし、純粋な信仰とその宣言者とは対して、教会の扉はふたたび閉じられた。彼らに対する聖職者たちの説教壇からの非難は、人々の間に暗黒と無知と不法を引き起こすものであった。ジョン・ウエスレーは、何度となく神のあわれみ深い奇跡によって死を免れた。群衆が彼に対して激しく怒って、もはや逃げられないように思われたとき、人間の姿をした天使が彼のそばに来て、群衆が後退したすきに、キリストのしもべは危険な場所から安全なところに行くことができた。

このようにして激怒した群衆から救い出されたのであるが、そうした経験の一つについて、ウェスレーは次のように語っている。「われわれが町へ向かつて、すべりやすい道を下っていたとき、多くの者がわたしを倒そうとした。もし一度倒れたならば、それきり起き上がれなかったことだろうと思う。しかしわたしは一度も転ばず、すべりもせずに、彼らの手から完全に逃れた。……多くの者がわたしのえりや服をつかんで引き倒そうとしたが、彼らは、しっかりとつかむことができなかった。ただ一人、わたしのチョッキのポケットのたれぶたをつかんだが、それはすぐにちぎれてしまった。もう一方の、銀行の小切手のはいつていたポケットのたれぶたもちぎれて、半分だけ残った。……わたしのすぐ後ろにいた頑丈な男は、わたしを大きな櫂の棒で数回なぐった。もしも彼が、それでわたしの後頭部を一度なぐったならば、もうわたしは、それでおしまいだったであろう。しかし、そのたびに、棒はわきにそれた。どんなふうにかは知らない。なぜならわたしは、右にも左にも動くことができなかったのだから。……また、もう一人の男が群衆をかきわけて近づき、手を上げていきなり打ち下ろしたが、わたしの頭をなでただけであった。『なんて柔らかな髪をしてるんだ！』と彼は言った。……一番最初に悔い改めたのは、町の英雄たち、どんなときにも野次馬たちの先頭に立つ男たちで、その中の一人は、娯楽場の拳闘選手だった男であった。……

神は、なんと穏やかにわれわれを導いて、み心を行なわせられることであろう。二年前に一個のれんががわたしの肩をかすめた。その一年後には、石がわたしの両眼の間に当たった。先月は一回なぐられ、今夜は町に入る前に一回と町を出てから一回、計二回なぐられた。しかし、二回ともなんとなかった。一人はわたしの胸を力いっぱい打ち、もう一人は、血が吹き出るほどの勢いでわたしの口を打ったのだが、わたしは、どちらの場合も、

わらがさわったほどの痛みも感じなかった。」^四

初期メソジストの苦闘

こうした初期のメソジストは、説教者も一般信徒も、国教会の会員と彼らの偽りの言葉によって興奮した一般の不信心な人々から、ちよう笑と迫害を受けた。彼らは裁判所に引き出された。しかし、正義の法廷とは名ばかりで、当時、法廷で正しい裁判はまれであった。彼らはしばしば、迫害者たちの暴行を受けた。暴徒が家々を襲って、家財道具を破壊し、手当たりしだいに略奪し、男や女や子供たちを残酷に扱った。またあるときには、メソジストの家の破壊と略奪を手伝いたい者は、どこそこについて集まれという公の掲示がはられた。このような、人間の律法と神の律法に対する明らかな違反が、なんのとがめもなく許されていた。組織的な迫害が、この人々に加えられたのであるが、彼らの唯一の罪状は、罪人の足を滅亡の道から聖潔の道へ向けようとするものであった。ジョン・ウェスレーは、彼自身と彼の仲間とに対する非難について、次のように言っている。「ある人々はこう言う。この人々の教義は偽りで、誤っていて、狂信的である。新しいもので最近まで聞いたこともないものである。クエーカー的、狂信的、法王教的である。しかし、こうした主張は、全く根拠のないもので、この教義のどの部分も、われわれの教会によつて説き明かされた、聖書の明白な教義なのである。それだから、聖書が真実であるならば、これも偽りでも誤りでもあり得ない。」「他の者は、『彼らの教義は、厳格すぎる。彼らは天国への道を狭くしすぎる』と言った。実は、これが、そもそも最初からの反対理由であつて（しばらくの間、これが

ほとんど唯一の反対理由だったのだが、いろいろの形で現われる多くの反対の根底にひそんでいる。しかしわれわれは、主や使徒たちよりも天国の道を狭くしているであろうか。われわれの教義は、聖書の教義よりも厳格であろうか。ほんの二、三のはっきりした聖句を考えてみたい。『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。』『審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならぬであろう。』『だから、飲むにも食べるにも、また何事をするにも、すべて神の栄光のためにすべきである。』

もしわれわれの教義が、これよりも厳格であれば、われわれにその責任がある。しかし、そうでないことはあなだがたがその良心において、よくごぞんじである。そして、一点においても厳格さを欠きながら、神の言葉を汚さないでえられるものがあるうか。神の奥義の管理者が、その神聖な委託をいくらかでも変えるならば、彼を忠実なしもべということができようか。いや、管理者は、何一つ減らしても、和らげてもならない。彼は、すべての人に向かって、『わたしは、あなたの好みに合わせて聖書を下げることはできない。あなたがそこまで上つて来なければならぬ。さもなければ、永遠の滅びである』と言わなければならぬ。よく『彼らには愛がない』という叫びがきかれるが、それは実はこうしたことに基づいている。いったい、われわれには愛がないのだろうか。どの点においてであろうか。われわれは、飢えた者に食べさせず、裸の者に着せないのであるうか。『いや、そうではない。彼らはこの点では欠けてはいない。しかし、彼らは、人を裁くことにおいて愛がない。彼らは、自分たちのようにしなければ救われぬと考えている』(と反対者たちは言うのだ)。^{一五}

律法不要論との戦い

ウェスレーの時代の直前に、英国に起こった霊的衰退は、律法廃棄論の教えの結果であつた。キリストは道德律を廃棄されたのであるから、キリスト者はそれを守る必要がない、また、信者は「善行のくびき」から解放されている、と多くの者は主張した。また他の者は、律法の永續性を認めながらも、牧師が人々にその戒めに従うよう勧めることは無用であると言つた。なぜならば、神が救いに選ばれた人々は、「抵抗できない神の恵みの衝動にかられて、敬虔と徳の実行へと導かれる」し、他方、永遠の滅びの運命にある者は、「神の律法に従う力を持っていない」からである、というのであつた。

そのほかに、「選ばれた者は、恵みを失い、神の愛顧を失うことはあり得ない」と主張し、「彼らが犯す悪行は、真に悪いものではなく、神の律法を犯すものと考えるべきではない。したがって、彼らの罪を告白すること、悔い改めによつて罪から離れることも、必要ではない」というさらに恐るべき結論に到達する者たちもいた。^{一六}それゆえに、もしも選ばれた者の一人の罪であれば、どんなに恐ろしい罪で「一般に神の律法のはなはだしい違反であると思われるものでも、神の前に罪ではない。なぜならば、神のみ心を痛めたり、律法によつて禁じられていたりするようなことは、何一つすることができないと言つのが、選ばれた者の本質的な、そして顕著な特徴の一つだからである」と彼らは断言するのであつた。

このように恐ろしい教義は、後世の人気のある教育家や神学者たちの教えと、本質的に同じである。すなわち、

義の標準としての不変の神の律法はない。道德の標準は、社会自体が示すものであって、常に变化するものである、と彼らは言うのである。こうした考えは、みな、同じサタンの精神の影響によるもので、彼は、罪のない天の住民たちの間にいたときでさえ、神の律法の正当な抑制を破ろうとしたのである。

人間の品性を動かすことができぬように決めたという神の定めの教義は、多くの者に、神の律法を事実上拒否させるに至った。ウェスレーは、この律法廃棄論者たちの誤りに断固として反対し、律法廃棄論に至らせるこの教義は、聖書に反するものであることを示した。「**すべての人を救う**神の恵みが現れた。」「これは、わたしたちの救主である神のみまえに良いことであり、また、みこころにかなうことである。神は、**すべての人が救われて**、真理を悟るに至ることを望んでおられる。神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。彼は、**すべての人のあがないとしてご自身をささげられた**」(テトス二ノ一、テモテ第一・二ノ三―六)。すべての人が救いの道を悟ることができるように、神の霊が豊かに与えられている。こうして「まことの光」であられるキリストは、「すべての人を照」らされる(ヨハネ一ノ九)。人は、生命の賜物を故意に拒否することによって、救いを受け損じるのである。

律法と福音

キリストの死によって十誡は礼典律と共に廃された、という主張に答えて、ウェスレーは言った。「十誡に含まれ、預言者が強調した道德律を、主は廃されなかった。彼が来られたのは、そのどれをも廃止するためではな

かった。これは、廃することができない律法で、『天の証人として堅く立つ』ものである。……これは、世のはじめから、『石の板ではなく、』すべての人の心に、創造主の手によって造られたときに書かれた。しかし、ひとたび神の指によって書かれた文字は、今は罪のために大部分損われてはいるが、善悪に関する良心があるかぎり、文字を全部消し去ることはできない。この律法のすべての部分は、各時代のすべての人類が守るべきものとして存続すべきものであつて、時や場所や環境などによって左右されるものではなく、神のご性質と人間の性質及びその相互間の不変の関係によつていのである。

『廃するためではなく、成就するためにきた』……このところの意味は（その前後の関係から見ても、疑いもなく、次のような意味である。わたしは、人々のあらゆる曲解にもかかわらず、それを完全に成就するために来た。その不明また不明瞭な点は、なんであれ完全に明らかにするために来たのである。その各部分の真の完全な意味を宣言するために、そこに含まれているすべての戒めの長さ^七と広さ、すなわちその全範囲、そして、そのあらゆる分野における高さ^七と深さ、すなわち人間の思いも及ばぬ純潔と靈性を示すために、わたしはきたのである。）」
ウェスレーは、律法と福音の完全な一致について、次のように言っている。「それゆえに、律法と福音の間には深い関係がある。一方において律法は、たえずわれわれを福音へ導き、われわれに福音を指し示す。また、他方において、福音はわれわれを導いて、もっと正しく律法を成就させようとする。たとえば律法は、神を愛し隣人を愛し、柔和で謙そんで聖潔であるようにと、われわれに要求する。われわれは、こうしたことにおいて、不十分であることを感じる。たしかに、『人にはそれはできない。』しかし、その愛をわれわれに与え、われわれを謙そん、柔和、聖潔にするという神の約束を見る。われわれは、この福音、この喜ばしいおとずれをつかむ。そ

れは、われわれの信仰に従って行なわれるのである。そして、イエス・キリストを信じる信仰によって、『律法の要求が……わたしたちにおいて、満たされる』のである。」

またウェスレーは、こう言った。「キリストの福音の最大の敵の中には、公然とあからさまに、『律法をさばき』『律法をそしる』人々があり、また、律法の中の一つ（最大のものであれ最小のものであれ）というのではなく、すべての戒めを、一撃のもとに破壊する（廃止する、解消する、その義務を解く）ことを人々に教える者がある。……この強力な欺瞞に伴う状態で最も驚くべきことは、それに没頭している人々が、キリストの律法をくつがえすことによって、キリストをあがめていると信じ、彼の教義を廃しながら、彼の務めを大いならしめていると信じこんでいることである。実に彼らは、ちょうどユダが、『先生、いかがですか』と言って、イエスに接吻した』ようにして、主をあがめているのだ。キリストは、このような人々に対して、同じく『あなたは接吻をもって人の子を裏切るのか』と言われることであろう。彼の血について語りながら、彼の冠を取り去り、福音の進展という名目のもとに、彼の律法のどの部分であれ軽々しく廃することは、接吻をもって彼を裏切ることにほかならない。直接であれ間接であれ、服従のなんらかの部分を廃するというやり方で信仰を説こうとする者、また、神の戒めのどんなに小さいものでも、それを取り消したり、または少しでも弱めたりして、キリストを宣傳伝える者は、この非難を免れることはできない。」^{一八}

「福音を宣べ伝えれば、律法の目的はみな達せられる」と主張する人々に、ウェスレーは答えた。「この事をわれわれは、全く否定する。それは、律法の第一の目的、すなわち、人々に罪を自覚させること、まだ黄泉の淵で眠っている者を覚醒させるということを果たしていない。」使徒パウロは、「律法によっては、罪の自覚が生じ

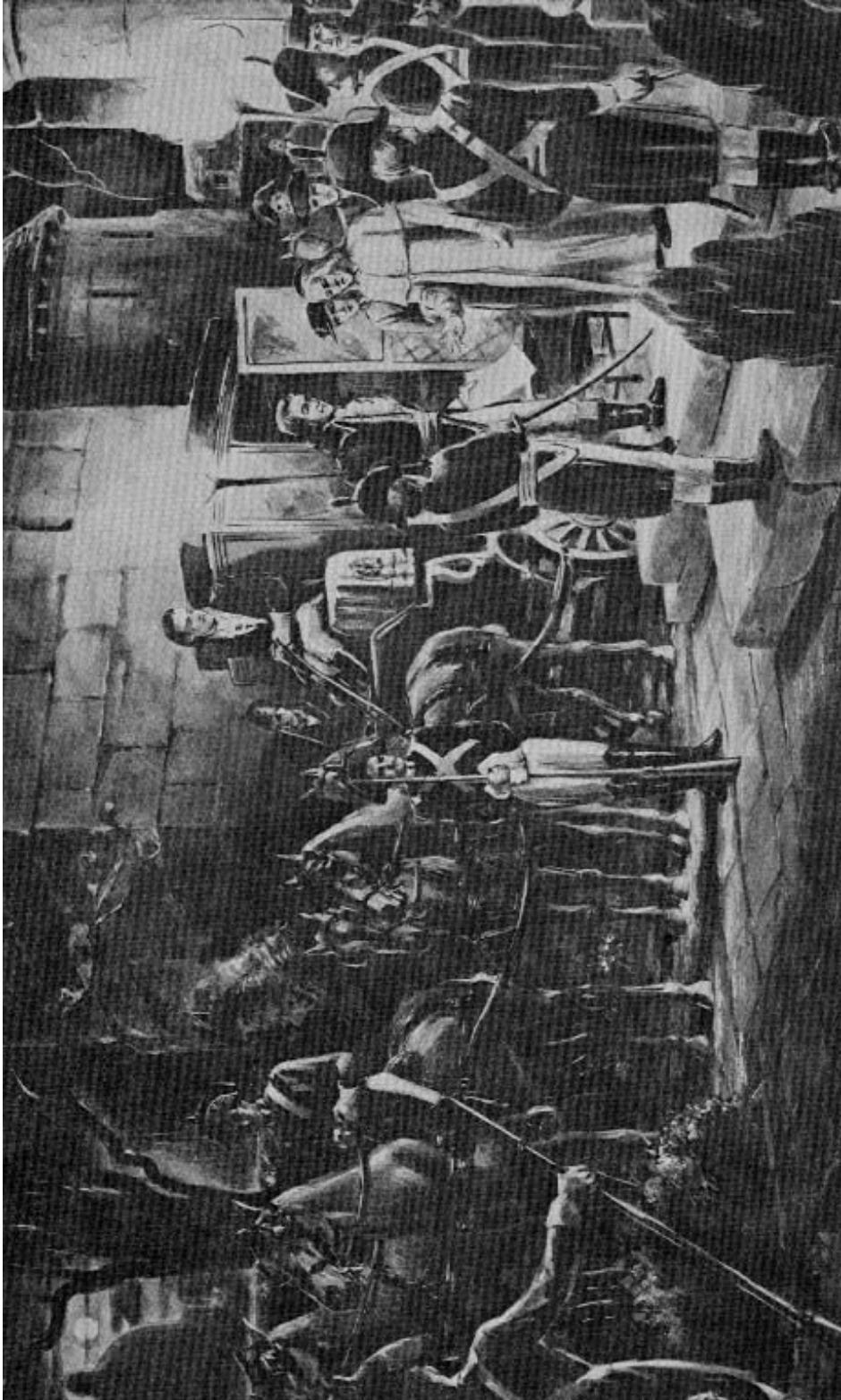
る」と宣言している。「人間は、罪を自覚しないかぎり、キリストの贖罪の血の必要をほんとうには感じない。……われわれの主ご自身も、『丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である』と言われた。それゆえに、丈夫な者、または、少なくとも自分は丈夫であると思っている者に、医者を与えても意味がないのである。まず、彼らが病人であることを自覚させなければならぬ。さもないと、彼らは、あなたがたの労力に感謝しないであろう。これと同様に心が丈夫で、まだ砕かれたことのない者に、キリストを示すことも、意味のないことである。」^九

ウェスレーの生涯の意味

こうしてウェスレーは、神の恵みの福音を宣べ伝えるとともに、彼の主と同様に、「その教え（律法）を大いなるものとし、かつ光栄あるものとすることを」努めた。彼は、神から与えられた仕事を忠実に成し遂げた。そして、彼が見ることを許された結果は、輝かしいものであった。彼の八十才以上の長い生涯と、半世紀を越えた巡回伝道の終わりにあいて、公然と彼を支持する信仰が五十万人を超えたのである。しかし、彼の活動によって、罪の破滅と墮落から高潔な清い生活へと高められた群衆、また、彼の教えによって、深く豊かな経験に入れられた者の数は、贖われた者の全家族が神の国に集められるまでは、知ることができないであろう。彼の生涯は、すべてのキリスト者にとって、非常に価値ある教訓を示している。この神のしもべの信仰、謙そん、うむことを知らない熱意、自己犠牲、献身が、今日の教会のなかにあらわれることを願うのである。

注

- 一 D'Aubigné, "History of the Reformation of the Sixteenth Century," b.18, ch.4.
- 二 *Ibid.*
- 三 *Ibid.*
- 四 Anderson, "Annals of the English Bible," p.19.
- 五 Hugh Latimer, "First Sermon Preached Before King Edward Ⅴ."
- 六 *Ibid.*, "Sermon of the Plough."
- 七 "Works of Hugh Latimer," vol.1, p.13.
- 八 David Laing "The Collected works of John Knox," vol.2, pp.281, 284.
- 九 John Whitehead, "Life of the Rev Charles Wesley," p.102.
- 一〇 Whitehead, "Life of the Rev. John Wesley," p.10.
- 一一 *Ibid.*, pp.11, 12.
- 一二 *Ibid.*, p.52.
- 一三 *Ibid.*, p.74.
- 一四 John Wesley "Works" vol.3, pp.297, 298.
- 一五 *Ibid.*, vol.3, pp.152. 153
- 一六 McClintock and Strong, "Cyclopedia," art, 'Antinomians.'
- 一七 Wesley, Sermon 25.
- 一八 *Ibid.*, Sermon 35.
- 一九 *Ibid.*



1798年、ペルチエ將軍指揮下のフランス軍はローマにはいり、法王ピウス6世を捕虜にした。法王権は、幾世紀もの暗黒時代のあいだ所有していた権力と支配力を、もはやふるい得なくなった。

第一章

聖書とフランス革命

恐るべき預言

宗教改革は、十六世紀に、聖書を人々に開いてみせ、ヨーロッパのあらゆる国々に入っていこうとした。ある国々では、それを天からの使者として喜んで迎えた。他の国々では、法王権が、その侵入を防ぐのに大いに成功し、聖書の知識の光とその高尚な感化力は、全くといっていいほど締め出された。ある国では、光が入ったにもかかわらず、暗黒はそれを理解しなかった。何世紀の間、真理と誤謬とは覇を競った。ついに悪が勝利し、天の真理は追い出された。「そのさばきというのは、光がこの世にきたのに、人々は……光よりもやみの方を愛したことである」(ヨハネ三ノ一九)。その国は、自ら選んだ道の結果を刈りとることになった。神の霊の抑制が、神の恵みの賜物を軽べつした国民から取り去られた。悪は、成熟するままにされた。全世界は、故意に光を拒む

この結果を見た。

フランスで幾世紀も続いた、聖書に対する闘争は、ついに革命へと発展した。この恐ろしいできごととは、ローマが聖書を圧迫した当然の結果にほかならなかった（付録参照）。革命は、世界がローマの政策の成り行きについて目撃したところの、最も著しい例であった。それは、ローマ教会が一千年以上にわたって教えてきたことの結果の実例であった。

法王至上権時代における聖書の禁止については、預言者たちによって預言されていた。また、黙示録の記者は、「不法の者」の支配のために、特にフランスに起こる恐ろしい結果をも指摘している。

主の天使は、次のように言った。『彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう。そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう。』…そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。…地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常に恐怖に襲われた」（黙示録一一ノ二一一）。

ここに、「四十二か月」と「千二百六十日」という二つの期間があげられているが、これは同じもので、キリストの教会がローマの圧迫を受ける期間を表わしている。千二百六十年の法王至上権時代は、紀元五三八年に始まったから、一七九八年に終わることになる（付録参照）。この時、フランスの軍隊がローマに侵入し、法王を捕

虜にした。そして彼は配所で死んだ。その後、すぐ新法王が選ばれたけれども、法王制度は、もはや以前のよう
な権力を振うことはできなかった。

教会の迫害は、千二百六十年の全期間を通じて続いたわけではなかった。神は、神の民をあわれんで、火のよ
うな試練の期間を短縮された。救い主は、教会にふりかかる「大きな患難」を預言して言われた。「もしその期
間が縮められないなら、救われる者はひとりもないであろう。しかし、選民のためには、その期間が縮められる
であろう」（マタイ二四ノ二二）。迫害は、宗教改革の影響を受けて、一七九八年より前に終わったのである。

二人の証人

二人の証人について、預言者は、次のように言っている。「彼らは、全地の主のみまえに立っている二本のオ
リーブの木、また、二つの燭台である。」また詩篇記者は、「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」
と言った（黙示録一一ノ四、詩篇一一九ノ一〇五）。二人の証人というのは、旧約と新約の聖書を表わしている。
両方とも、神の律法の起源とその永続性に関する重要な証言である。両者はまた、救いの計画の証人でもある。
旧約聖書の型、犠牲、預言は、来たるべき救い主をあらかじめ示している。新約聖書の福音書と手紙とは、型と
預言に示されたとおりに来られた救い主について語っている。

「わたしは、わたしの二人の証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう。」この期間の
大部分の間、神の証人は、人の目につかない状態にあった。法王権は、真理の言葉を人々から隠そうと努め、彼

らの前に、その証言に反ばくするために偽りの証人を立てた（付録参照）。聖書が、宗教界と俗界の権威によって禁止されたとき、その証言が曲解され、人々の心をそれから引き離すために、人間と悪鬼とが考え出すことのできるあらゆる努力がなされたとき、聖書の聖なる真理を宣言する者たちがかり立てられ、裏切られ、拷問され、牢獄に入れられ、信仰のために殉教し、あるいは山のとりでや地の洞窟に逃げなければならなかったとき、——そのとき忠実な証人たちは、荒布を着て預言したのである。しかも彼らは、千二百六十年の全期間を通じて、あかしを立てつづけたのである。最も暗黒な時においても、神の言葉を愛し神の御名をあがめるのに熱心な、忠実な人々があつた。これらの忠誠なしもべたちに、この全期間を通じて、神の真理を宣言する知恵と力と権威とが与えられた。

「もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであらう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない」（黙示録一一ノ五）。神の言葉をふみにじる者は、罰を受けずにはすまない。この恐ろしい宣告の意味は、黙示録の最後の章に示されている。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」（黙示録二二ノ一八、一九）。

神が啓示または命令されたものを、人間がどのような方法によっても変更することがないようにと、神はこのような警告をお与えになった。この厳粛な警告的宣言は、人々に神の律法を軽視する影響を及ぼすすべての人に



周到な計画のもとになされた残虐な攻撃、聖バーソロミューの虐殺の光景は、恐怖とともに今なお人々の記憶から消えない。ローマ教会の指導者たちにせき立てられて、国王は虐殺の許可を与えたのであった。

当てはまる。神の律法に従っても従わなくてもたいした問題でないと軽率なことを言う者は、この警告に震えおののかねばならない。神の啓示よりも自分の意見を重要視し、自分に都合のいいように、または世俗と妥協するために、聖書の明白な意味を変更しようとする者はみな、恐ろしい責任を自分で負っているのである。聖書と神の律法は、すべての人の品性をはかり、この過つことのないテストの結果、欠けていると宣言されるすべての者を、罪に定めるのである。

「彼らがそのあかしを終えると。」ふたりの証人が荒布を着て預言する期間は、一七九八年で終わった。彼らが人目につかずに働く期間が終わりに近づく、「底知れぬ所からのぼって来る獣」といわれている権力が、彼らに戦いをいどむのであった。ヨーロッパの多くの国々において、教会と国家を支配した諸権力は、幾世紀にもわたって、法王権を通して、サタンに支配されていた。しかし、ここに、新たなサタンの権力があらわれたのである。

神を否定する国の出現

聖書を崇敬すると言いながら、それを人々の知らない言語のまましまい込んで、人々から隠しておくことがローマの政策であった。ローマの統治下において、証人たちは、「荒布を着て」預言した。しかし、もう一つの権力——底知れぬ所からのぼって来る獣——があらわれて、神の言葉に対して公然と戦いをいどむのであった。証人たちが大通りで殺され、その死体を横たえたという「大いなる都」は、エジプトに「たとえられて」いる。

聖書歴史にあらわれているすべての国々の中で、エジプトほど、生きた神の存在を大胆に否定し、神の命令に抵抗した国はない。また、エジプトの王ほど、天の権威に対して、公然たる横暴な反逆を企てた王はない。モーセが主の名によって、彼に使命を伝えたととき、パロは高慢に答えた。「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従ってイスラエルを去らせなければならないのか。わたしは主を知らない。またイスラエルを去らせはしない」(出エジプト記五ノ二)。これは無神論である。そして、エジプトにたとえられた国は、同様に、生きた神の要求を拒み、同じような不信と反抗の精神をあらわすのである。「大いなる都」はまた、ソドムに「たとえられて」いる。ソドムが神の律法を犯して腐敗したのは、特に放縦の点で著しかった。そこで、この聖句の記述においてはまる国においては、この罪もまた著しい特徴となるのであった。

預言の言葉に従うならば、一七九八年の少し前に、サタンの起源と性質をもったある種の権力が、立ち上がって聖書に戦いをいどむのであった。そして、神の二人の証人の証言がこうして沈黙させられるその国において、パロの無神論とソドムの放縦とがあらわれるのであった。

この預言は、フランスの歴史において、最も正確に最も著しく成就した。革命のさなか、一七九三年に、「文明国に生まれて教育を受け、ヨーロッパ諸国中最も優れた国の一つを統治する権利を有する人々から成る議会が、人の心が抱く最も厳粛な真理を、声をそろえて否定し、神に対する信仰と礼拝を満場一致で放棄するのを、世界は初めて聞いたのである。」

「フランスは、宇宙の創造主に対して公然と反逆の手をあげた国として、公式の記録が残っている世界でただ一つの国である。英国、ドイツ、スペインその他の国にも、多くの神を汚す者、多くの無神論者があらわれたし、

これから現われるであろう。しかし、フランスは、議会の決議によって無神論を宣言し、首都の住民全体と他の地域の大群衆とが、男も女もその宣言を喜び、歌い踊ったという、世界史上唯一の国である。」^二

またフランスは、特にソドムで著しかった特徴をあらわした。革命の時の墮落と腐敗の状態は、平原の町々に滅亡をもたらしたものと似ていた。そして歴史家は、預言のとおり、フランスの無神論と放縦な生活とともにあげている。「宗教に影響を及ぼすこれらの法律と密接な関係があつたのが、結婚を軽視した法律であつた。結婚は人間が結ぶ最も神聖な契約であつて、その永続が社会の統合に最も貢献するものであるにもかかわらず、これを、二人の人間が随意に結んだり解いたりできる単なる一時的な民事契約にしてしまった。…もし悪魔が、家庭生活の尊ぶべきもの、優雅なものを最も効果的に破壊し、それと同時に、その目的としている害毒を、世々にわたって引き続いて及ぼそうとするならば、結婚の墮落以上に効果的な手段を考え出すことはできなかったであろう。…機知に富んだことを言うことで有名な女優、ソフィ・アルノーは、フランス革命時代の結婚を、『姦淫の秘蹟』と評した。」^三

フランスの殉教者たち

「彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。」この預言の言葉もまた、フランスによって成就した。キリストに対する敵意が、この国以上に著しくあらわれたところはない。真理が、これ以上に激しく残酷な反対に会った国は他にない。フランスは、福音を信じる者に迫害を加えることによって、主の弟子たちを通してキリ

ストを十字架につけたのであった。

聖徒の血は、幾世紀にわたって流された。フルド派の人々は、「神の言葉とイエス・キリストのあかしのために」、ピエモンテの山々で彼らの生命を捨てた。彼らの同信の仲間たち、フランスのアルビ派の人々も、真理のための同様のあかしを立てた。宗教改革時代には、その支持者たちは恐ろしい拷問によつて殺された。国王や貴族、上流の婦人や優雅な少女、国家の誇りである騎士たちが、イエスの殉教者たちの苦悩を見て楽しんだ。勇敢なユグノー教徒たちは、人間の心が最も神聖視するこれらの権利のために闘い、多くの激戦地で彼らの血を流した。プロテスタント教徒は、法律の保護外の者とみなされ、彼らの首には懸賞金がつけられて、あたかも野獣のようにかり立てられた。

「荒野の集会」と呼ばれる、昔のキリスト教徒の子孫が、十八世紀のフランスにわずかながら残っており、南方の山中に隠れて、先祖の信仰を依然として守っていた。彼らが、夜、山腹や寂しい荒れ地で集会を開こうとすると、竜騎兵に追撃され、一生ガレー船につなされる奴隷として引き立てられるのであった。フランスの、最も純潔で最も洗練され、最も知的な人々が、強盗や暗殺者に混じつて鎖につなされ、恐ろしい拷問を受けた^四。少しは情けある扱いを受けた他の者たちは、武装もなく無力なまま、ひざまずいて祈っているとこを射殺された。彼らの集会の場所は、何百人という年老いた人々、無防備な婦人、罪のない子供たちが、彼らが集会をもったその場所で殺されて地上に捨てておかれた。彼らがよく集会を開いていた山腹や森林を通るとき、「数歩行くごとに、草原に死体が散在するか、または木からたれ下がっている」のを見つけるのは、珍しいことではなかった。彼らの地方は、剣とおのと火刑のまき束で荒らされ、「陰うつな一大荒野と化した」「こうした残虐行為は、…暗

黒時代ではなくて、輝かしいルイ十四世の時代に行なわれたのであった。その当時、科学は発達し、文芸は栄え、宮廷や首都の聖職者たちは学識ある雄弁家たちで、柔和と愛の美德を大いに愛好する人々だったのである。^五

聖バーソロミューの虐殺

しかし、陰惨な犯罪の歴史中最も暗黒で、各世紀を通じて行なわれたあらゆる極悪非道な行為中、最も恐ろしいものは、聖バーソロミューの虐殺であった。世界は今でも、あの最もひきょうで残忍な殺害の光景を思い起こして身震いする。フランスの王は、ローマ教の司祭や高位聖職者に迫られて、恐ろしい行為に彼の許可を与えた。夜の静けさを破って聞こえる鐘の音が、虐殺の合図であった。幾千のプロテスタントは、王の名誉にかけての約束に信頼して、自分たちの家で眠っていたが、何の警告もなく引きずり出されて、冷酷に殺された。

エジプトの奴隷から神の民を導き出した目に見えない指導者がキリストであったように、殉教者の数を増したこの恐ろしい行為において、その部下たちの目に見えない指導者はサタンであった。虐殺は、パリで七日続き、特にその最初の三日間は狂暴を極めた。そしてそれはパリ市内だけでなく、王の特別な命令によって、プロテスタントのいるすべての地方や町々にも及んだ。老若男女の差別はなかった。何も知らぬ赤ん坊や白髪の老人にも容赦はなかった。貴族も農民も、老いも若きも、母も子もともに切り殺された。フランス全国において、虐殺は二か月間続いた。国民の花とも言うべき七万人が殺害された。

「虐殺の知らせがローマに伝わると、聖職者たちの喜びは非常なものであった。ローレーヌの枢機卿は、使者に

一千クラウンを報賞として与えた。聖アンジエ口城の大砲は祝砲を放った。そして、すべての塔から鐘の音が聞こえ、かがり火は夜を昼のように明るくした。そして、グレゴリー十三世は、枢機卿やその他の高位聖職者を従えて、長い行列を作って聖ルイ教会へ行き、そこで□レーヌの枢機卿は、『テ・デウム』を詠唱した。…虐殺を記念するメダルが鑄造され、バチカンでは今でも、バサーリの三つの壁画を見ることが出来る。それは、提督襲撃の場面、王が虐殺を計画しているところ、そして虐殺そのものの光景である。グレゴリーは、シャルルに金製バラ章を贈った。そして、虐殺があつてから四か月後、…フランスの司祭の説教を満足げに聞いた。…この司祭は、『幸福と喜びに満ちた日、法王が知らせを受けて、神と聖ルイとに感謝するために、威儀を正して行かれたあの日』について、語ったのであった。^六

聖バーソロミューの虐殺を引き起こした同じ精神が、革命の場面をも導いた。イエス・キリストは詐欺師であると宣言され、フランスの無神論者たちはこぞって「卑劣漢をやつつけろ」と叫んだが、これはキリストのことであった。天を恐れない冒涇と言語道断の罪悪とがともに行なわれ、最も卑劣な人間たち、残酷悪徳のかぎりを尽くした無頼漢たちが、最も賞賛された。こうしたすべてのことにおいて、最高の栄誉がサタンにささげられた。それに反して、真理、純潔、無我の愛という特質をもつておられるキリストが、十字架につけられたのであった。

無神論の挑戦

「底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。」革命と恐怖政治の時代にフランス

を支配した無神論的権力は、これまで世界になかったほどの戦いを、神と聖書に対していどんだ。神の礼拝が、国会によって廃止された。聖書は集められて、あらゆる軽べつを浴びせられながら、公衆の前で焼かれた。神の律法はふみにじられた。聖書的な諸制度は廃止された。毎週の休日は廃止され、その代わりに、十日めが歓楽と冒瀆の日に定められた。バプテスマと聖餐式は禁止された。そして墓地には、死は永遠の眠りであると宣言する掲示が、目立つように立てられた。

神を恐れることは、知恵のはじめであるどころか、愚のはじめであると言われた。自由と国家とに対するもの以外のすべての宗教的礼拝は禁止された。「パリの憲法宣誓司教は、国民の代表たちの前で、最も恥知らずで言語道断の茶番劇の主役を演じさせられた。…彼は行列を従えて出て来て、彼が長年教えてきた宗教は、すべての点において聖職者たちの政略であって、歴史にも神聖な真理にも基づいていないものであると、国民議会で宣言させられた。彼は、厳粛で明白な口調で、これまで自分が礼拝のために献身してきた神の存在を否定し、これからは、自由、平等、徳、道義に忠誠を誓うと言った。それから彼は、自分の司教の衣服を脱いで卓上におき、国民議会の議長から友愛の抱擁を受けた。数名の背教した司祭が、この高位聖職者の例にならった。」^七

「地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである」（黙示録一一ノ一〇）。不信のフランスは、神の二人の証人の譴責の声を沈黙させた。真理の言葉は殺されて、大通りに横たえられた。そして、神の律法の制限や要求を憎んだ人々は、歓声をあげた。人々は、公然と天の王に挑戦した。昔の罪人たちのように、「神はどうして知り得ようか、いと高き者に知識があるうか」と叫んだ（詩篇七三ノ一一）。

新しい秩序のもとの司祭の一人は、信じられないような大胆な冒瀆さで言った。「神よ、もし存在するならば、あなたの傷つけられた名のふくしゅうをせよ。わたしは挑戦する。あなたは黙っている。怒ることはできない。今後、だれがあなたの存在を信じるであろうか。」^八これはパロの言った、「主とはいったい何者か。わたしがその声に聞き従わなければならぬのか。」「わたしは主を知らない」という言葉と、なんとよく似ていることであろう。

「理性の女神」

「愚かな者は心のうちに『神はない』と言う」（詩篇一四ノ一）。そして、主は、真理を曲解する者について、「彼らの愚かさは……多くの人に知れて来るであろう」と言われた（テモテ第二・三ノ九）。フランスは、「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者」である生きた神の礼拝を放棄して間もなく、理性の女神の礼拝という低劣な偶像礼拝に陥った。不品行な一女性が、この理性の女神に仕立てられた。しかも、これが、国民を代表する議会において、そして、行政と立法の最高の権威者たちによって、行なわれたのである。歴史家は、次のように言っている。「この狂気の時代の儀式の一つは、不合理と不敬虔とを結合した点で、他に類を見ない。議会の扉が広く開かれ、音楽隊を先頭に、市当局の役員が厳粛な行列を作って、自由の賛歌を歌いながら入って来た。そして、これから彼らが礼拝する対象、すなわち、彼らが理性の女神と称するところの、ベールをかけた女性を案内してきた。いよいよ会場内に入ると、彼らは厳かに彼女のベールを脱がせて、議長の右側にすわらせた。そ

してそのとき人々は、彼女がオペラのダンサーであることに気づいた。…この女性に対して、フランスの国会は、彼らの礼拝する理性に最もふさわしい代表者として公の敬意を表わしたのである。

この不敬虔で、言語道断の無言劇は流行した。理性の女神の除幕式は、革命の最高潮に遅れをとるまいとする住民のいる、国内の至る所でくり返され模倣された。」^九

理性の女神の礼拝を提案した演説者は言った。「代議士諸君、今や狂信は理性に敗れた。そのかすんだ目は、輝かしい光に耐えられなかった。今日、無数の群衆がゴシックの丸天井の下に集まり、初めて真理を反響させたのである。フランス人は、ここで唯一の真の礼拝、自由と理性の礼拝を行なった。ここでわれわれは、共和国の軍隊の隆盛を祈った。ここでわれわれは、生命のない偶像を捨てて、理性、生命のある像、自然の傑作を礼拝したのである。」^{一〇}

女神が議場に入ってきたとき、演説者は彼女の手をとり、会衆に向かって言った。「人間たちよ。あなたがたの恐怖が造り出した神の、無力な怒りの前に震えるのをやめよ。これからは、理性以外の神を認めるな。わたしは、その最も高貴で純粋な像を紹介する。もしあなたがたが偶像を持たねばならぬのならば、このようなものだけに犠牲をささげよ。…堂々たる自由の殿堂の前で、理性から幕を除こう！」

「女神は、議長から抱擁を受けたあとで、豪華な車に乗せられ、神の地位につくために、大群衆の中を通過してノートルダム^二の聖堂へ導かれた。ここで彼女は、高い祭壇にあげられて、列席したすべての者の礼拝を受けた。」これに続いてまもなく、公衆の前で聖書が焼かれた。あるとき、「民間博物館協会」の人々が、「理性万歳！」と叫びながら市の公会堂に入った。棒の先には、半焼けになった何冊かの本を突き刺していたが、その中には、

祈祷書、ミサ典書、旧新約聖書などがあつた。それらは「人類をして犯さしめたあらゆる愚行を、大いなる火でもって償つたのである」と会長は言つた。^{二三}

ローマの政策

無神論者が完成しつつあつた仕事を、最初に始めたのは法王権であつた。フランスをこのように速やかに破滅に陥れた、社会的政治的宗教的状態を引き起こしたのは、ローマの政策であつた。著作家たちは、革命の恐怖に言及して、これらの暴挙は国王と教会の責任であると述べている（付録参照）。厳密に言うならば、それらは教会の責任であつた。法王側は、王たちに、宗教改革に対する反感を抱かせ、それが王の敵であり、国家の平和と秩序を破壊する不穏な分子であると考えさせた。こうして、国王に最も恐ろしい残酷な行為と悲惨な迫害を行なわせるのが、ローマのやりかたであつた。

自由の精神は、聖書と共に伝わつた。福音が伝えられたところはどこでも、人々の心が覚醒された。彼らは、今まで自分たちを、無知と悪習と迷信の奴隷として縛っていた拘束を捨て始めた。彼らは、人間として思考し行動しはじめた。国王たちはこれを見て、彼らの専制政治の安泰を気づかつた。

ローマは、彼らのしつと深い恐怖心をたきつけるのに後れをとらなかつた。一五二五年、フランスの摂政にあつて法王は言つた。「この宗教狂（プロテスタント主義）は、宗教を混乱させ破壊するだけでなく、すべての主権者、貴族、法律、秩序、階級をも破壊するものである。」^{二三}その数年後に、法王の使節は、王に警告して言つた。

「陛下、欺かれてはなりません。プロテスタントは、宗教的秩序とともにあらゆる市民的秩序をもくつがえすでしょう。……祭壇と同様に、王座も非常な危険にさらされております。……新しい宗教をとり入れることは、当然新しい政府をもたらすことになります。」^{一四}また神学者たちは、プロテスタントの教義は、「人々を目新しい愚かなものに誘い、国民の王に対する敬愛を失わせ、教会と国家を二つとも荒廃させる」と言って、人々の偏見をあおった。こうして、ローマは、フランスをして宗教改革に敵対させるのに成功した。「フランスにおいて、迫害の剣が最初に抜かれたのは、王位を安全にし、貴族を保護し、法律を維持するという名の下にであつた。」^{一五}

革命の遠因

国の支配者たちは、この致命的政策の結果を予見することが、ほとんどできなかった。聖書の教えは、正義、節制、真実、平等、慈愛など、国家の繁栄の基礎である原則を、人々の心と思いこみに植えつけたはずであつた。「正義は国を高く」し、正義によって、「その位が……堅く立」つのである（箴言一四ノ三四、一六ノ一二）。「正義は平和を生じ、正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である」（イザヤ書三二ノ一七）。神の律法に従う者は、真心から自分の国の法律を重んじて、守るのである。神を恐れる者は、すべての正当で合法的な権威を行使する王を、尊ぶのである。しかし、不幸なことに、フランスは聖書を禁止し、それを信じる者たちを追放した。幾世紀にわたって、原則に堅く立つ誠実な人々、知的鋭さと道徳的強靱さを持った人々、確信するところを公言する勇氣と、真理のために苦しむ信念を持った人々——こうした人々が幾世紀にもわたって、ガレー船の奴隷となつて苦しみ、

火刑にされ、あるいは牢獄でやせ衰えていった。幾千もの人々が逃亡して、安全な地に行った。そしてこれは、宗教改革が始まってから、二百五十年間も続いたのである。

「その長期間のどの時代においても、迫害者の狂った怒りから逃亡する福音の使徒たちを見なかったフランスの世代は、ほとんどなかった。そして彼らは一般に、著しく優れた知能、技術、工芸、秩序を持っていて、逃亡した先の国々を富ませた。そして、彼らがこれらの優れた才能によって、他の国々を満たしたのに比例して、フランス自体は**から**になっていった。追いやられた人々がみなフランスに残っていたならば、また、この三百年の間に、逃亡者たちの産業的技術が、土地の耕作に向けられていたならば、そしてこの三百年の間に彼らの芸術的趣向が、フランスの製品を改善していたならば、また、もしこの三百年の間に彼らの創造的才能と分析的能力とが、フランスの文学を豊富にし、科学を発展させていたならば、また、もし彼らの知恵がフランスの議会の指導し、彼らの勇敢さが戦場で戦い、彼らの公正が法律を制定し、聖書の宗教がフランス人の知能を啓発し、良心を支配していたならば、今、フランスはどんなにか栄光に輝いていたことであろう。フランスは、どんなにか偉大な、繁栄した幸福な国となり、諸国の模範となっていたことであろう。

しかし、盲目で冷酷な頑迷さのために、フランスは、その国土からすべての高潔な教師、すべての秩序の支持者、すべての真実な王位擁護者を追い払ってしまった。フランスは、自国を「名声と栄光」の国としたはずの人に、火刑か追放か、そのどちらかを選べと言ったのであった。ついに国家は、衰退の極に達した。もはや禁じるべき良心はなくなり、火刑に引きずっていくべき宗教はもうなくなった。かり立てて追放すべき愛国心は、もはやなくなってしまうた。^{一六}そして、その恐るべき結果として、戦慄すべき革命が起きたのであった。

革命前夜

「ユグノー教徒の逃亡によって、フランスは全般的に衰退した。製造業の繁栄していた都市が衰えた。肥沃な地方が元の荒地地にもどった。まれな進歩の期間のあとに、知的沈滞と道徳的退化が続いた。パリは巨大な救貧院のようになり、革命が起こった当時は、二十万の貧民が王からの施しを請うていた。イエズス会だけが、衰微していく国内にあつて繁栄し、教会と学校と牢獄とガレー船の上に、恐ろしい圧政を行なっていた。」

福音は、フランスに、政治的社会的諸問題——聖職者、国王、立法者たちの手に負えず、ついに国家を無政府状態と破滅に陥れたところの諸問題——の解決をもたらすはずであつた。しかし人々は、ローマの支配下にあつて、自己犠牲と無我の愛という、救い主のすばらしい教訓を忘れていた。彼らは、他人の幸福のために自分を犠牲にすることから、かけ離れてしまつていた。金持ちが貧者を圧迫してもどれからも譴責されず、貧者は、その苦役と墮落からの救いを与えられなかった。富と権力を持つ者の利己心は、ますます露骨で圧制的になった。幾世紀にわたつて、貴族の貪欲と放蕩は、農民に対する苛酷な搾取を行なつてきた。金持ちは貧者をしいたげ、貧者は金持ちを憎んだ。

多くの地方において地所は貴族が所有し、労働者階級は小作人に過ぎなかった。彼らは地主の言いなりであつて、彼らの法外な要求に従わなければならなかった。教会と国家をささえる負担は、中流と下層階級に負わされ、彼らには国家と聖職者から重税がかけられた。「貴族は快樂の追求を第一とし、圧迫者たちは農民たちが餓死し

ようといっこうにかまわなかった。…民衆はどんな場合でも、地主の利益だけを考えなければならなかった。農業労働者の生活は労働の連続で、救われる道のない悲惨な生活であった。彼らの苦情は、それを訴えることができたにしても、おうへいな軽べつ的態度で扱われた。法廷は常に貴族の言い分を聞いて、農民の言い分を聞かなかった。裁判官がいろいろを受け取るのは、公然の秘密であった。このような全般的腐敗の体制の中では、貴族のほんの気まぐれが法としての力を持った。一方では世俗の権力が、そして他方では聖職者たちが、庶民から巻き上げた税金の、その半分も王室や教会の金庫には入らなかった。残りは遊興と放縦のために浪費されてしまった。こうして、同胞を窮乏に陥れた人々自身は税金を免れ、法律によって、あるいは習慣に従って、国家のすべての要職を占めていた。特権階級は、十五万人に達していた。そして、彼らを満ち足らせるために、幾百万の人々が、望みのない惨めな生活を余儀なくされていた」（付録参照）。

宮廷は、ぜいたくと放蕩にふけていた。国民と支配者の間に信頼はなかった。政府の政策はみな、たくらみのある我欲に満ちたものであると、疑惑の目で見られた。革命が起こる前、五十年以上にわたって、ルイ十五世が王位を占めていたが、彼は、そのような墮落した時代においてさえ、怠惰で軽薄、淫蕩な王として有名であった。腐敗し残酷な上流階級、窮乏に陥り無知な下層階級、国家の財政困難、国民の憤激などを見れば、預言者でなくとも、恐ろしい暴動が起ころうとしていることは予想できた。王は、顧問官たちの警告に対して、「わたしの存命中は、現状のままで継続せよ。わたしの死後は、どうなってもかまわない」と答えるのが常であった。改革の必要を力説してもむだであった。王は弊害を認めてはいたが、それを改める勇氣も力もなかった。彼の怠惰で利己的な「あとは野となれ山となれ」という答えは、切迫したフランスの運命を、あまりにも正確に描写していた。

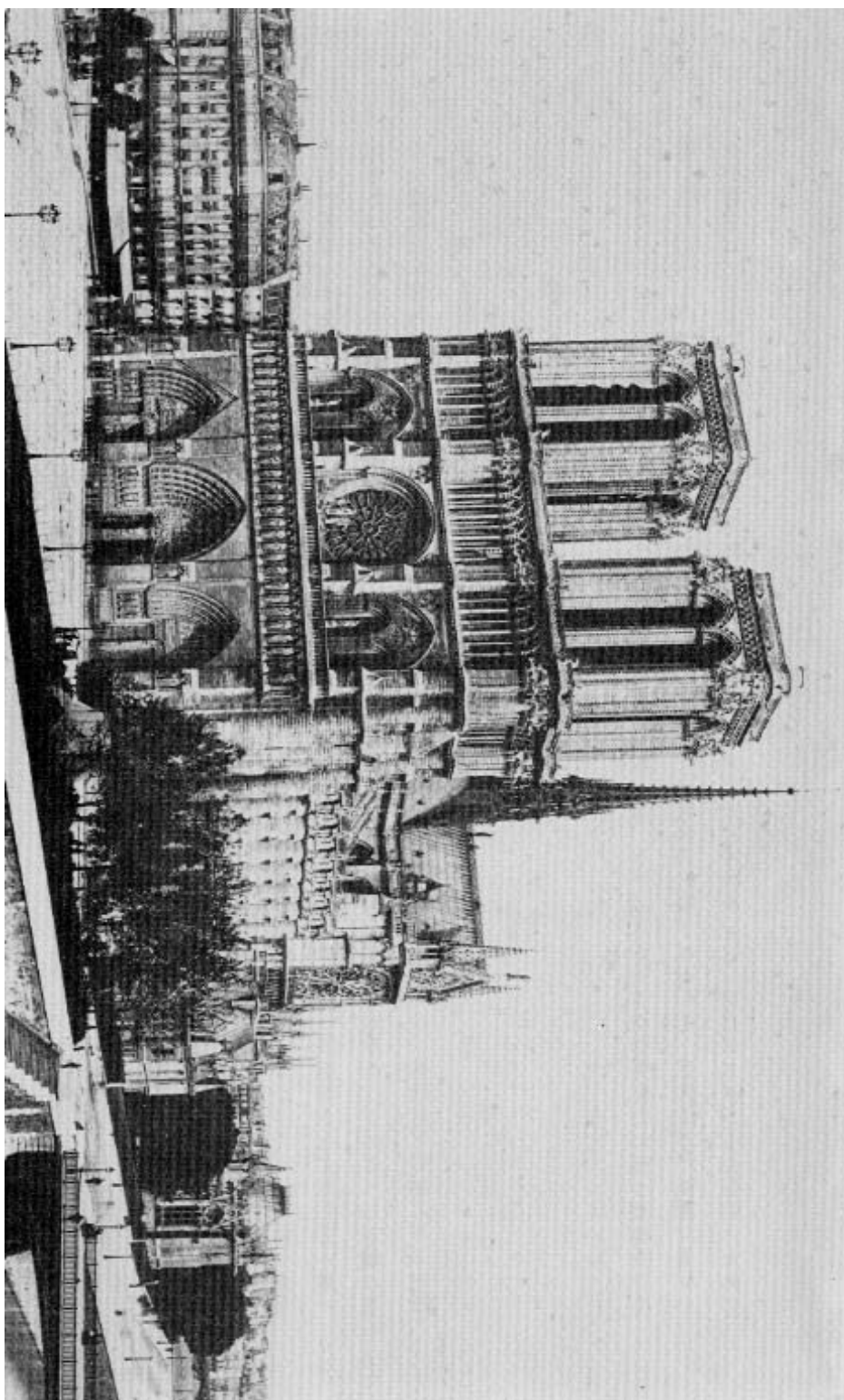
ローマ教と無神論

ローマは、王や支配階級のしつと心に訴えて、国民を奴隷として縛っておくように彼らを動かした。ローマはこうすれば国家が弱くなり、この方法で支配者と国民を両方ともローマの奴隷にしておけることをよく知っていた。ローマは、はるか将来を見通して、人間を思いのままに奴隷にするには心を束縛しなければならぬこと、また、彼らがその束縛からどうしても逃れることができないようにするには、自由を与えないようにしなければならぬことを知っていた。ローマの政策がひき起こした肉体的苦痛より幾千倍も恐ろしいことは、道德的墮落であった。人々は聖書を奪われ、偏狭で利己的な教えを聞かせられ、無知と迷信に閉ざされていた。そして彼らは、悪習に陥り、全く自制ができなくなっていた。

しかしこれらすべてのことの結果は、ローマが意図したものとは非常に異なつたものであった。ローマの行なつたことは、大衆を盲目的にローマの教義に服従させる代わりに、彼らを無神論者と革命論者にしてしまった。彼らはローマ・カトリック教を、僧侶の策略であるとして軽べつした。彼らは、聖職者たちを、彼らを圧迫するものの一部とみなした。彼らが知っている唯一の神は、ローマの神であった。またその教えが、彼らの唯一の宗教であった。彼らは、ローマの貪欲と残酷は、聖書が結ぶ当然の実であると考え、そのようなものはいらぬと思つた。

ローマは、神の品性を誤って伝え、神の要求をゆがめていた。そこで人々は、聖書もその著者も、共に拒否し

ノートルダム大寺院。ここで異端絶滅の厳粛な誓いがなされた。そして約 3 世紀の後、この同じ場所で、神を忘れた国民によって理性の女神の礼拝が行なわれた。



てしまった。ローマは、聖書がそれを認めているかのように装いつつ、自分の教義に盲目的信仰を要求してきた。その反動として、ボルテールと彼の仲間たちは、聖書を全面的に拒否し、至る所に不信の害毒を広めた。ローマは人々を弾圧し、苦しめてきた。そして今度は、墮落し狂暴になった大衆が、ローマの暴虐をはねのけて、すべての束縛を投げ捨てた。彼らは、自分たちが長い間尊敬を払ってきた華麗な詐欺に憤激して、真理と虚偽の両方を拒絶した。そして、放縦を自由と取り違えて、悪徳の奴隷たちは自由を得たものと思つて狂喜した。

革命が始まったとき、人々には王の譲歩のもとに、貴族と聖職者を合計した数以上の代表数が与えられた。こうして彼らは、政治の実権を握った。しかし彼らは、それを賢明に適度に用いる準備がなかった。彼らは、自分たちが苦しんできた圧迫を除くことに熱心で、社会の改造を断行しようとした。長い間虐待されてきた苦しい思いをもつところの憤激した群衆は、もはや耐えられないまでになった悲惨な状態を変革し、このような苦境に彼らを陥れたと思われる者たちにふくしゅうしようと決意した。圧迫を受けた者たちは、暴政の下で学んだことを実行し、彼らを圧迫した者たちの圧迫者となった。

革命 勃発

不幸なフランスは、自分がまいた種の収穫を、血で刈り取った。フランスがローマの支配力に従った結果は、実に恐ろしいものであった。フランスが、ローマ・カトリック教会の影響下において、宗教改革の初期に最初の火刑柱を立てたところに、革命は、その最初のギロチンをすえた。十六世紀に、プロテスタントの信仰のための

最初の殉教者が焼かれたその同じ場所で、十八世紀に、最初の犠牲者がギロチンで殺された。フランスに癒しをもたらしたはずの福音を拒んだために、フランスは、不信と破滅の門を開いた。神の律法の抑制を放棄してしまったときに、人間の法律では人間の激情の強力な潮流を、抑止できないことが明らかになった。そして国民は、反乱と無政府状態に陥ってしまった。聖書に戦いをいどんだことが、世界史において恐怖政治の時代と呼ばれる一時代を開くことになった。人々の家庭と心から、平和と幸福が去った。だれも安心しておられなかった。今日勝ち誇っている者が、明日は嫌疑をかけられて罪に定められた。暴力と欲望が、わがもの顔に横行した。

王侯、聖職者、貴族たちは、興奮して熱狂した人々の残虐行為に服するほかなかった。彼らのふくしゅう欲は、王の処刑によって、いっそう強烈になるばかりであった。そして、王の処刑を命じた人々が、間もなく引き続いて処刑台に上った。革命の反対者であるという嫌疑を受けた者たちは、皆殺しにされた。牢獄は満ちあふれ、一時は囚人が二十万人を超えた。国内の諸都市は、恐ろしい光景で満ちた。革命家の一派は他の一派と争い、フランスは、大群衆の激情のあらしのままに揺れる一大戦場と化した。「パリでは暴動が次々に起こり、市民たちは、さまざまな党派に分かれていたが、それは互いに滅ばし合おうとしているとは思えなかった。」国を挙げての悲惨に加えて、国家はヨーロッパ大同盟軍との、長期にわたる破壊的な戦争状態に陥った。「国家は破綻をきたし、軍隊は給料の支払を要求し、パリっ子たちは食に飢え、地方は盗賊に荒らされ、文明は、無政府と放縦のために絶滅しそうになっていた。」

ローマがたんに教えた残虐と拷問のやり方を、人々はあまりにもよく覚えていた。ついに、報復の日がやって来た。今度、牢獄に入れられ、火刑柱に引かれていくのは、イエスの弟子たちではなかった。この人々は、

ずっと前に殺されるか、あるいは追放されるかしていた。今、苛酷なローマは、流血行為を喜ぶように自分が訓練してきた人々の、恐ろしい力を感じた。「フランスの聖職者たちが長年にわたって演じて来た迫害の前例は、今彼らに手厳しくはね返って来た。処刑台は、司祭の血で赤く染まった。かつてユグノー教徒で充滿したガレー船と牢獄は、今、彼らの迫害者たちで満員になった。ローマ・カトリックの司祭たちは、鎖で腰掛けにつながれてかいをこぎ、教会が温和な異端者たちに容赦なく味わわせた苦悩を、あますところなくなめたのであった」（付録参照）。

恐怖の時代

「最も凶悪な裁判官が最も残忍な法典を執行する時、極刑の危険を冒さずには……隣人とのあいさつも祈りもできない時、密偵が至る所に潜んでいるとき、ギロチンが毎朝忙しく長時間動く時、牢獄が奴隷船の船倉のように満員の時、下水が血であわ立ってセーヌ川に流れる時、このような時が到来した。……パリでは毎日、処刑を受ける人々を満載した護送車が通りを通過している時に、最高委員会によって派遣された地方の総督たちは、首都パリでさえ行なわれたことのないような残虐行為を行なった。彼らの殺人のためには、恐ろしい機械の刃が上り下りするのでは遅すぎた。数珠つなぎにされた囚人たちが、ブドウ弾でなぎ倒された。満員のはしけの底に穴が開けられた。リオンは荒れ地と化した。アラスでは、すぐに殺すという残酷なあわれみさえ囚人たちに与えられなかった。□アール川沿岸では、ソーミユールから海まで、二人ずついまわしい抱擁をさせた裸の死体を、カラスやトビの大群の餌食にした。女も年寄りも容赦なく殺された。のろわしい政府に殺された十七才の少年少女

の数に数百もあった。母の乳ぶさからもぎ取られた赤ん坊は、ジャコバン党員のほこ先からほこ先へと投げ渡された」（付録参照）。わずか十年の間に、おびただしい数の人間が殺された。

これはみな、サタンの望むところであった。これはサタンが、幾時代にわたって確保しようとしてきたことであつた。彼の策略は、初めから終わりまで欺瞞であつて、彼の不動の目的は、人間の世界に不幸と悲惨をもたらし、神のみ業を傷つけ、汚し、神の慈悲と愛のみ心をだいにし、こうして天を悲しませようとするにある。こうしてサタンは、その欺瞞的な方法によつて人の心を盲目にし、これらすべての不幸が創造主の計画の結果であるかのように考えさせて、彼の働きを神のせいだと思わせようとするのである。同様に、彼の残酷な力によつて墮落し、残忍になつた者たちが自由を得ると、サタンは彼らに、極端で非道なことを行なわせる。すると暴君や压制者は、この無軌道な放縦を、自由の結果が何であるかを示す好例であるといふのである。

サタンは、一つの扮装の誤りが見破られると、また別の仮面をかぶつて現われ、群衆は前と同様に熱狂してこれを迎える。ローマ・カトリック教が欺瞞であることが人々にわかり、これを用いて人々に神の律法を犯させることができなくなると、サタンは、すべての宗教は人をまどわすものであり、聖書は作り話であると主張した。そして彼らは、神の律法を放棄して、無軌道な罪の生活に陥つた。

真理拒否の結果

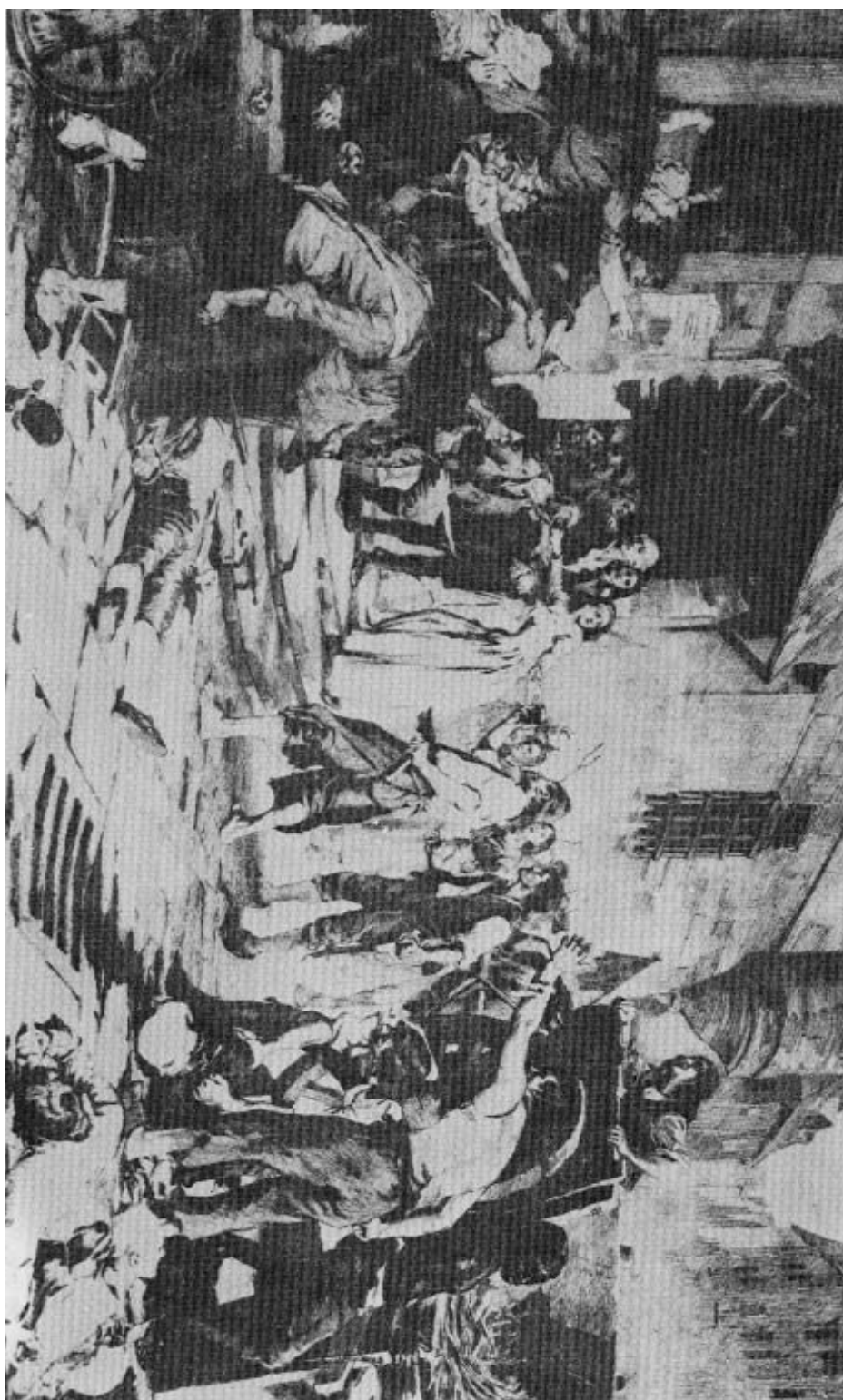
フランスの国民をこのような悲惨な状態に陥れた致命的誤りは、真の自由は神の律法の範囲内にあるという一

大真理を無視したためであつた。「どうか、あなたはわたしの戒めに聞き従うように。そうすれば、あなたの平安は川のように、あなたの義は海の波のように」なる。「主は言われた、『悪い者には平安がない』と。」「しかし、わたしに聞き従う者は安らかに住まい、災に会う恐れもなく、安全である」(イザヤ書四八ノ一八、二二、箴言一ノ三三)。

無神論者、不信仰者、背教者たちは、神の律法に反対し非難を向けるが、彼らのもたらす結果を見るならば、人類の幸福は神の律法に服従することにあることがわかるのである。神の書から教訓を読み取ろうとしない者は、諸国の歴史のなかにそれを読み取るように命じられている。

サタンが、ローマ教会を通じて人々を神に背かせたとき、彼の活動は隠されていた。そして、彼の働きは巧みに偽装されていたので、その結果起こった墮落と不幸は、罪を犯した結果であるとは思われなかった。また、彼の力は、これまで神の聖霊の働きによって妨げられ、十分に実を結ぶに至っていなかった。人々は原因を探ることをせず、彼らの不幸の源を見出さなかった。しかし、革命が起こり、議会は公然と神の律法を廃した。そして、それに続いた恐怖時代に、その原因結果がすべての者に明らかとなった。

フランスが公然と神を拒み、聖書を放棄したとき、悪人たちと暗黒の霊とは、彼らが長く望んでいた目的を達成して喜んだ。それは、神の律法の制限を受けない国であつた。悪の行為に対する判決が、速やかに執行されないために、人の子らの心は「もっぱら悪を行うことに傾いている」(伝道の書八ノ一一)。しかし、公正で義である律法を犯すならば、その結果は必然的に不幸と破滅である。人間の悪事は、直ちに罰が与えられないにしても、必ず破滅をもたらすのである。幾世紀にもわたる背信と罪悪は、報復の日の神の怒りを蓄えてきた。そして、彼



フランス革命が恐怖政治となったとき、もはやだれ一人安全ではなかった。今日の勝利者が、残酷で報復をたくらむ敵たちによって、明日は刑の宣告を受けぬともかぎらなかつた。こうした体制のもとで、暴力と欲望が全国を支配した。

らの罪が満ちたときに、神を軽べつした人々は、神の忍耐がつき果てることがどんなに恐ろしいことであるかを知ったのであるが、時はすでに遅かった。サタンの残酷な力を抑えていた神の霊の抑制力が、大半取り除かれた。そして、人々を不幸にすることだけを喜びとしているサタンのなすがままになった。反逆に荷担した者は、その実を刈り取った。そして地はついに筆紙に尽くし得ない恐ろしい犯罪で満たされた。荒廃した地方や破壊された都市から、恐ろしい叫び、耐えがたい苦悩の叫びがあがった。フランスは、地震で震動するかのように揺れ動いた。宗教、法律、社会秩序、家族、国家、そして教会などすべてのものが、神の律法に反抗してあげられた邪悪な手で打ち倒された。賢者は実にこう語った。「悪しき者は、その悪によって倒れる。」「罪びとで百度悪をなして、なお長生きするものがあるけれども、神をかしくみ、み前に恐れをいだく者には幸福があることを、わたしは知っている。しかし悪人には幸福がない」(箴言一一ノ五、伝道の書八ノ一二、一三)。「彼らは知識を憎み、主を恐れることを選ばず、」「自分の行いの実を食らい、自分の計りごとに飽きる」(箴言一一ノ二九、三二)。

聖書の勝利

「底知れぬ所からのぼって来る」神を汚す権力に殺された神の忠実な証人は、長く沈黙していなかった。「三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた」(黙示録一一ノ一一)。キリスト教を廃し聖書を破棄する法令が、フランスの議会を通過したのは、一七九三年であった。それから三年半後にはこの法令は廃止され、聖書を読むことを許す決議が、同じ

議会において採択された。聖書を拒否した結果起こった極悪非道さに、世界は驚きを禁じ得なかった。そして人は、神に対する信仰の必要と、神の言葉が、徳と道徳の基礎であることを認めたのであった。主は言われた、「あなたはだれをそしり、だれをののしったのか。あなたはだれにむかつて声をあげ、目を高くあげたのか。イスラエルの聖者にむかつてだ」(イザヤ書三七ノ二三)。「それゆえ、見よ、わたしは彼らに知らせよう。すなわち、この際わたしの力と、わたしの勢いとを知らせよう。彼らはわたしの名が、主であることを知るようになる」(エレミヤ書一六ノ二一)。

二人の証人について、預言者はなお次のように言っている。「その時、天から大きな声がして、『ここに上つてきなさい』と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た」(黙示録一一ノ一二)。フランスが神の二人の証人に戦いをいどんで以後、かえって彼らは、それまでになかったほどあがめられてきた。一八〇四年に、英国聖書協会が組織された。これに続いてヨーロッパ大陸に、多くの支部をもった同様の聖書協会が設立された。一八一六年には、米国聖書協会が設立された。英国聖書協会が設立されたとき、聖書は五十か国語で印刷配布された。そしてその後、聖書は幾百の国語と方言に翻訳されてきた(付録参照)。

一七九二年以前の五十年間、外国伝道事業についての関心はなかった。新たな伝道協会は設立されなかった。そして、異教国にキリスト教を宣べ伝えようと努力する教会は、ほとんどなかった。しかし、十八世紀の終わりになって、大変化が起こった。人々は、合理主義の結果に不満を感じ、神の啓示と体験的宗教の必要を痛感したのである。この時から外国伝道事業が、これまでにない発展を遂げたのであった(付録参照)。

印刷技術の発達、聖書配布事業を促進した。諸国間の交通機関の発達、昔ながらの偏見の壁や国家的排他主義の崩壊、ローマ法王の俗権の喪失などが、神の言葉が入っていく道を開いた。数年前から聖書は、ローマの通りにおいてさえ、何の束縛も受けずに販売されている。そしてそれは、今、人類の住んでいるところはどこにでも、配布されるようになったのである。

かつて無神論者ボルテールは、次のように自慢して言った。「十二人がキリスト教を設立したということを、わたしはもう聞き飽きた。わたしは、それをくつがえすのにひとりで十分であることを証明しよう。」彼の死後、幾世代が過ぎ去った。幾百万の者が、聖書に対する戦いに加わった。しかし聖書は、滅びるところか、ボルテールの時代に百あったところには、一万、いや十萬の神の書があるのである。ある初期の改革者は、キリスト教会に関して、「聖書は多くの金づちをすりへらしたかなとこのようなものである」と言った。「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」と主は言われた（イザヤ書五四ノ一七）。

「われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない。」「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立ち、真実と正直とをもってなされた」（イザヤ書四〇ノ八、詩篇一一ノ七、八）。人間の権威の上に建てられたものはみな崩れる。しかし、神の不變の言葉の上に基礎をおいたものは、永遠に立つのである。

注

- Sir Walter Scott, "Life of Napoleon," vol. 1, ch. 17.
- "Blackwood's Magazine," November, 1870.

- 三 Scott, vol. 1, ch. 17.
- 四 Wylie, b.22, ch.6.
- 五 *Ibid.*, b.22, ch.7.
- 六 Henry White, “The Massacre of St. Bartholomew,” ch. 14, par. 34.
- 七 Scott, vol. 1, ch. 17.
- 八 Lacreteille, “History,” vol.2, p.309. in Sir Archibald Alison, “History of Europe,” vol. 1, ch. 10.
- 九 Scott, vol. 1, ch. 17.
- 一〇 M. A. Thiers, “History of the French Revolution” vol.2, pp.370, 371.
- 一一 Alison, vol.1, ch.10.
- 一二 ‘Journal of Paris, 1793, No.3 18.’ Buchez—Roux, “Collection of Parliamentary History” vol. 30, pp. 200, 201 ㄆㄣㄣㄣㄣ。
- 一三 G. de Félice, “History of the Protestants of France,” b.1, ch. 2, par. 8.
- 一四 D’Aubigné, “History of the Reformation in Europe in the Time of Calvin,” b.2, ch.36.
- 一五 Wylie, b.13, ch.4.
- 一六 *Ibid.*, b.13, ch.20.



メイフラワー二世号。1620年アメリカ建国の父祖たちをのせて大西洋を横断したメイフラワー号に模して建造され、同じコースで海を渡り、現在は米国マサチューセッツ州プリマスに置かれて博物館となっている。

第一六章

アメリカ合衆国と建国の精神

英国宗教界の情勢

英国の改革者たちは、ローマ・カトリック教会の教義を捨てながらも、その形式の多くを保持していた。こうして、ローマの権威と信条は否定していながら、その習慣と儀式が、少なからず英国国教会の礼拝に取り入れられた。こうしたことは良心の問題ではない、また、聖書に命じられていないから重要ではないが、それでも禁じられていないから本質的には悪ではない、という主張が行なわれた。これらの遵守は、ローマと改革教会との間の隔たりを狭めるものであった。そしてそれは、カトリック教徒がプロテスタントの信仰を受け入れるのを促進すると力説された。

保守的で妥協的な人々にとっては、このような議論は決定的なものに思われた。しかし、そう判断しなかった

人々もいた。こうした習慣は、「ローマと改革主義との間の深い割れ目に橋を架けるものである」からこそ、それらの保持には断固として反対である、というのが彼らの意見であった。彼らはそれらを、奴隷状態——彼らはそこから解放されたのであって、そこにもどる気持ちなど全くないのであった——のしるしとみなした。神はみ言葉の中で、神の礼拝に関する規則を定められたのであるから、人間が自由にそれに加えたり減じたりすることはできないと、彼らは論じた。大背教のまず第一歩は、教会の権威によって神の権威を補おうとしたことにあった。ローマは、神が禁じられなかったことを禁じることから始めて、神が明らかに命じておられることを禁じるに至ったのであった。

多くの者は、初代教会の特徴であつた純潔と単純にもどることを熱望した。彼らは、英国教会に根をおろした多くの習慣を偶像礼拝の遺物とみなし、良心上その礼拝に参加することができなかった。しかし教会は、国家の権力によってささえられていて、その儀式に反対することを許さなかった。教会の礼拝に出席することが法律で要求され、許可なくして宗教的集会を開くことは禁じられて、もしそれを犯せば、投獄、追放、死刑であつた。

清教徒の海外移住

十七世紀の初め、王位についたばかりの英国王は、清教徒(ピューリタン)たちに、「国教に従わせるか、…それとも国外に追放、または、それ以上の刑に処す」という決意を明らかにした。彼らは、かり立てられ、迫害され、投獄されて、将来、事態の好転を望むことができなくなった。そして、良心の命じるところに従って神に

仕えようとするものにとって、「英国は永久に住むところではなくなつた」と考える者が多かつた。^三ある者は、少なくとも、オランダまで避難しようと思ひ切つた。彼らは、困難や損失や投獄のうきめに会つた。彼らの目的は妨げられ、裏切られて敵の手に渡された。それでも屈せず耐え忍んで、ついに彼らは、オランダ共和国にあたたく迎へられ、避難することができた。

彼らは逃げる際、家も財産も生計の手段をも置いてきた。彼らは異国に住む異邦人となり、言葉も習慣も異なる人々の中で暮らした。彼らは、生計を立てるために、新しい不慣れな職業につかなければならなかつた。これまで耕作に従事していた中年の男が、今度は技術的な職業を覚えなければならなかつた。しかし彼らは、そうした事態をも快活に受け入れた。怠けたり悔やんだりして時間を浪費したりしなかつた。彼らはしばしば貧困に陥つたけれども、なお彼らに与えられた福音を神に感謝し、妨げられずに霊の交わりができることを喜んだ。「彼らは、自分たちが旅人であることを知り、そのようなものに心を奪われることなく、彼らの最も愛する国、天国に目を向け、心安んじていた。」^四

流浪と困難のただ中にあつても、彼らの愛と信仰は強くなつた。彼らは主の約束に信頼した。そして神は、必要な時に必ず助けを与えられた。神の天使は彼らのそばにいて、彼らを励ましささえた。そして、神のみ手が、海の向こうの土地——そこで彼らが国を建設し、宗教の自由という尊い遺産を子孫に残すことのできるところ——を指さしたとき、彼らは、ひるむことなく摂理の道に従つて前進した。

神は、ご自分の民に対する恵み深いみこころの完成のために、彼らに準備をさせるよう、彼らに試練が来るのを許された。教会が衰えたのは、また高められるためであつた。神は、教会のために力をあらわし、神に信頼す

る者を捨てないというもう一つの証拠を世界に示そうとしておられた。神は、サタンの怒りと悪人の策略が、神に栄光を帰して神の民を安全な場所に導くことになるように、諸事件を支配しておられた。迫害と追放が自由への道を開きつつあった。

ジョン・ロビンソンの告別の辞

清教徒たちは、最初に英国国教会から分離しなければならなかったとき、主の自由な民として、「彼らに知らされた、あるいは、これから知らされるすべての神の道を共に歩く」ことを、一致団結して厳粛に誓った。^五ここに、改革の真の精神、プロテスタント主義の極めて重大な原則があった。清教徒たちが、オランダを去って新世界に移住したのは、この目的のためであった。彼らの牧師、ジョン・ロビンソンは、摂理によって彼らに同行できなかつたが、亡命者たちへの告別説教において次のように言った。

「兄弟たちよ、われわれは今、まもなく別れようとしている。わたしが再び、あなたがたの顔を見ることができるかどうかは、ただ神だけが知っておられる。しかし、主がそうお定めになっていようとまいと、わたしは、神と聖天使たちの前で、わたしがキリストに従ったように、あなたがたがわたしに近く従うように命じる。もし神が、ご自分の他の器を用いて、何かをあなたがたに示されるならば、わたしが教える真理を受けたように、喜んで信じてほしい。わたしは、主がみ言葉のなかから、これからももっと真理と光を輝かせてくださると確信している」。^六

「わたしとしては、宗教的に行き詰まった改革教会の状態を、嘆かないではおられない。教会は現在、改革運動を起こした器たちから一步も進んではない。ルーテル教会員は、ルターが認識したこと以上に出ていない。……そして、カルバン派の人々は、神の偉大な人物ではあったがすべてを認識していたとは言えない人の残したことを、堅く守っている。これは、非常に悲しむべきことである。彼らは、その時代においては、燃え輝く光ではあったが、神の教えをすべて知りつくしたのではなかった。彼らは、もし今日生きていたならば、彼らが初めに受けた光と同様に、それ以上の光も喜んで受けることであろう。」^七

「すでに示され、またこれからも示されるすべての主の道を歩くことに同意した、教会の契約を覚えてほしい。神のみ言葉から示される光と真理は、なんでも受け入れるという神とお互いの約束と契約とを、覚えてほしい。さらに、真理として受け入れる場合に注意してほしいことは、それを受け入れる前に、他の聖書の真理と比較してよく検討することである。なぜならば、非キリスト教的暗黒から最近出て来たばかりのキリスト教会に、一時に完全無欠の知識が輝き出ることにはあり得ないからである。」^八

アメリカの岸辺で

この、いわゆる「巡礼者」(ピルグリム)たちが、勇敢にも長途の航海の危険を冒し、荒野の種々の困難と危険に耐え、そしてついに神の恵みによって、アメリカの岸に偉大な国家の基礎をすえたのは、良心の自由を得たという願いからであった。しかし、これらの清教徒たちは、誠実で神を恐れる人々ではあったけれども、まだ

宗教の自由の大原則を理解していなかった。彼らは、大きな犠牲を払って獲得した自由を、等しく他の者に与えようとはしなかった。「十七世紀の最も進歩的な思想家たちや道徳家たちでさえ、新約聖書より発している大原則、すなわち神以外にはだれも人間の信仰をさばくことはできないということを、正しく認識したものはほとんどいなかった。」^九人間の良心を支配し、異端を定義し、処罰する権を、神は教会にゆだねられたという教義は、法王教の誤謬に最も深く根ざす誤りの一つである。改革者たちは、ローマの教義を否定はしたが、その狭量な精神から完全にぬけきつてはいなかった。法王権の長期にわたる支配下において、キリスト教会全体をおおった濃い暗黒は、まだ全部消え去つてはいなかった。マサチューセッツ湾の植民地における有力な牧師の一人は、次のように言った。「寛容であつたことが世界を反キリスト教的にした。そして教会は、異端を罰しても何の害も受けなかった。」^{一〇}植民地開拓者たちは、教会員だけが政治に発言権を持つべきであるという規則を採用した。一種の国教が制定され、すべての住民は聖職者を支持するために献金することを要求された。そして、長官には異端を鎮圧する権が授けられた。こうして、世俗の権力が教会の手中にあつた。やがて、こうした方法は、その必然的な結果である迫害をひき起こすことになった。

植民地が創設されてから十一年後に、ロージャー・ウィリアムスがアメリカに來た。初期の清教徒たちのように、彼も宗教の自由を享受するために來た。しかし彼は、彼らとは異なつて、当時まだ、ほとんどだれも気づいていなかったこと、すなわち、この自由は、その信条が何であろうと、すべての者にとって譲渡できない権利であることを認識していた。彼は、熱心な真理の探究者であつた。そしてロビンソンと共に、神のみ言葉の真理がすべて与えられてしまったとは思っていなかった。ウィリアムスは、「近代のキリスト教世界において、良心の



宗教の自由を絶えず求めたために、ロジャー・ウィリアムスは植民地からの追放を宣告された。彼はインディアンの中に避難し、後にロード・アイランド植民地を創設したが、ここでは宗教的自由が根本原則となった。

自由、法の前に於ける意見の平等という教義に基づいて政府を制定した、最初の人物であつた。」^二 犯罪を抑止することは行政長官の義務であるが、人間の良心を支配してはならないと、彼は宣言した。彼は次のように言った。「公衆または行政長官は、人間と人間との間の義務を決定するが、彼らが神に対する人間の義務を規定しようとするならば、それは越権行為であつて、安全ではあり得ない。なぜならば、もし長官にその権威があれば、朝令暮改の誤りを犯すことは明らかだからである。英国において、さまざまな国王や女王が行なつたように、また、さまざまな法王やローマ教会の会議が行なつたように、信仰は、非常な混乱に陥るであらう。」^三

信教自由の闘士ロージャー・ウィリアムス

教会の礼拝には出席が要求されていて、行かない者は、罰金または投獄の罰を受けた。「ウィリアムスは、この法律に反対した。英国における最悪の法令は、教区教会に出席を強要したものであつた。異なつた信条の者を一致するように強制することは、彼らの生得の権利を公然とふみにじることであると彼は考えた。非宗教的で、来ることを好まない人々を、公の礼拝に引きずつてくることはただ偽善を要求しているように思われた。…『だれも自分の意志に反して、礼拝や教会維持を強制されるべきではない』と彼は述べた。彼の反対者たちは、彼の主義に驚いて、『働きの人がその報酬を受けるのは当然ではないか』と叫んだ。すると彼は、『その通り。彼を雇つた者たちからである』と答えた。」^三

ロージャー・ウィリアムスは忠実な牧師、そして、非凡な才能、不動の誠実さ、真の愛の持ち主として尊敬さ

れ愛された。しかし彼が、行政長官が教会の上に権をとることを断固として拒否し、宗教の自由を要求していることは、許しておくことができなかった。この新しい教義が行なわれるならば、「国家の基礎と政治をくつがえす」であろうと、人々は主張した。^{一四} 彼は、植民地からの追放の宣告を受けた。そして、ついに彼は、逮捕を免れるために寒い冬の吹雪の中を、まだ開かれていない森の中へと逃げ込まなければならなかった。

「わたしは十四週間の間、パンも寝るところもなく、厳寒の季節をあちこちと激しく逃げ回った」と彼は言っている。しかし、「荒野で、カラスがわたしを養ってくれ、」そしてしばしば、木の幹の穴が彼の隠れ家となった。^{一五} こうして彼は、雪と道のない森の中を苦勞して逃げて行き、ついに、インディアンの部族にかくまわれた。ここで彼は、彼らに福音の真理を教えながら、彼らの信頼と愛を勝ち得たのである。

彼は、数か月にわたって転々と流浪して、ついに、ナラガンセト湾の岸に到着し、ここで、宗教の自由を完全に認めた、近世における最初の州の基礎を築いた。ロージャー・ウィリアムスの植民地の根本的原則は、「人間はだれでも、自分の良心に従って、神を礼拝する自由をもつべきである」ということであつた。^{一六} 彼の小さなロード・アイランドという州は、迫害に苦しむ人々の避難所となり、次第に人口が増加して繁榮し、ついに、その基本的原則である政治的宗教的自由が、アメリカ共和国の礎石となった。

合衆国と信教自由の精神

われわれの先祖たちが、基本的人権の宣言として公にした偉大な古文書、すなわち「独立宣言」のなかで、次

のように表明されている。「われわれは、これらが自明の真理であると考え。すなわち、すべての人間は平等に創られ、創造主から、ある譲渡することのできない権利を授けられていて、その中には、生命、自由、幸福の追求が含まれている。」そして憲法は、良心は侵すことができないものであることを、極めて明白な言葉で保証している。「アメリカ合衆国のどんな公職に対しても、その資格として、宗教的な審査を要求してはならない。」「国会は、宗教の設立に関する法律や、その自由な活動を禁止する法律をつくってはならない。」

「憲法の起草者たちは、人間と神との関係は人間の法律以上のものであり、人間の良心は固有の権利を持つという永遠の原則を認めていた。この真理を確立するのに、議論する必要はなかった。われわれは自らの胸中において、それを意識しているのである。多くの殉教者たちが、人間の法律を無視して、拷問や炎に耐えたのはこのことを自覚していたからであつた。彼らは、神に対する義務は人間の法令以上のものであり、人間は良心にまで権力を及ぼすことができないと感じていた。それは、生まれながらに備つた原則であつて、なにものによつても根絶されえないものである。」^{一七}

すべての人が自分の勤労の実を享受し、良心の確信することに従うことができる国についての報道が、ヨーロッパの国々に伝わると、幾千という人々が、新世界アメリカの岸に群がった。植民地は急速に増加した。「マサチューセッツ州は、特別の法律を設けて、『戦争、飢饉あるいは迫害者の圧迫を逃れて、』大西洋を越えてやってくるキリスト者は何国人であつても、公費によつて、無償の歓迎と援助を提供した。こうして、亡命者や圧迫された者たちが、法令によつて州の客となつた。」^{一八}最初プリマスに上陸してから二十年後には、何千という清教徒たちが、ニュー・イングランド地方に住みついていた。

その求める目的を達するために、「彼らは、儉約と勤勞の生活によって、かろうじて生きること満足した。彼らは、自分たちが耕す土地からも、その勞苦の正当な報酬のほかは何も求めなかった。一攫千金の夢も見なかった。…彼らは、自分たちの社会の組織が、徐々にではあるが着実に進歩していくことに満足であった。彼らは荒野の苦難に忍耐強く耐え、自由という木に涙で水を注ぎ、それが土に深く根をおろすまで、額に汗しつづけてたのである。」

聖書は、信仰の基礎、知恵の源、自由の憲章として重んじられた。その原則は、家庭、学校、教会において忠実に教えられ、その実は、勤儉、聡明、純潔、節制となつてあらわれた。清教徒の植民地に長年住んでも、「一人の酒飲みも見ず、一言ののしりも聞かず、一人の乞食にも会わない」のであつた。^{一九}聖書の原則は、国家を偉大にする最も確かな安全策であることが、明らかにされた。微弱で孤立していた植民地が、強力な合衆国に成長し、世界は、「法王のない教会、国王のない国家」の、平和と繁栄に驚きの目をみはつた。

米 国 宗 教 界 の 墮 落

しかし、最初の清教徒たちとは全く目的を異にした者が、続々とアメリカの岸にひかれてやって来た。初期の信仰と純潔は、広く感化力を及ぼしていたけれども、ただ世俗の利益だけを求める者の数が増加するにつれて、その影響は、次第に衰えていった。

初期の移住者が採用した、教会員だけが投票権を持ち、あるいは政府の職につくことができるという規則は、

有害きわまる結果を生じた。この方策は、州の純潔を保つために採用されたのであったが、教会を腐敗させることになった。信仰の告白が、投票と公職につく条件であったために、多くの者が、心の変化なしに、ただ世俗的目的のために教会に加わった。こうして教会は、多くの悔い改めていない人々で満たされるようになった。そして、聖職者のなかにさえ、誤った教義を保持するだけでなく、聖霊の改新の力を知らない者もいるようになった。こうして、コンスタンチヌスの時代から現代に至るまで、教会歴史にしばしば見られた悪い結果が、ふたたびあらわれたのである。すなわち、国家の援助によつて教会を盛り立て、また、キリストの福音を支持するために俗権に訴えようとするのである。しかし、そのキリストは、「わたしの国はこの世のものではない」と宣言された（ヨハネ一八ノ三六）。教会と国家との結合は、たとえどんなにささいなものであっても、世俗を教会に近づけるように見えながら、実際は、教会を世俗に近づけることにはかならないのである。

ロビンソンとロージャー・ウィリアムスが堂々と主張した大原則、すなわち、真理は漸進的なものであつて、キリスト者は神の聖書から輝き出る光をみな、いつでも信じる用意をしているべきである、ということを彼らの子孫たちは忘れていた。ヨーロッパの教会も同様であるが、アメリカのプロテスタント教会は、宗教改革の恩恵をあれほどまでに受けていながら、改革を推し進めることに失敗した。時おり、忠実な人々がわずかながら立ち上がつて、新しい真理を宣言し、旧来の誤りを指摘したりしたのであるが、大部分の人々はキリストの時代のユダヤ人、あるいは、ルターの時代のカトリック教会の人々のように、先祖たちが信じたように信じ、彼らが生活したように生きること満足した。そのために、宗教はふたたび形式主義に墮してしまった。そして、教会が神のみ言葉の光のなかを歩き続けたならば、当然捨て去ってしまったはずの誤りや迷信が、そのまま残存し固守さ

れた。こうして、宗教改革によって奮い立った精神が次第に衰えて、ルター時代のカトリック教会とほとんど同様の改革が、プロテスタント教会に必要なまでになった。同様の世俗化と靈的無感覚、人間の意見に対する同様の尊敬、神のみ言葉の教えの代わりに、人間の説の代用が見られるのであった。

十九世紀の初期において、聖書が広く配布され、大いなる光が世界に輝いたのであるが、啓示された真理の知識に対応する前進、あるいは、体験的宗教の前進はなかった。サタンは、以前のように神の言葉を人々から隠しておくことはできなかった。聖書はだれでも手に入れられるようになった。しかしサタンは、なおその目的を達成するために、多くの者にそれを低く評価するようにさせた。人々は、聖書の研究を怠り、こうして、相変わらず誤った解釈を信じ、聖書に根拠のない教義を固守するのであった。

サタンは、迫害によって真理を粉碎することができなかったのを見て、大背教とローマ教会の出現の原因となったところの妥協策を、ふたたび採用した。サタンはクリスチャンを、今度は異教徒ではなくて、世俗の事物に執着して、刻んだ像を拜むのと同様に偶像礼拝者となってしまうた者たちと、結合させようとした。こうした結合の結果は、昔と同様に有害なものであった。宗教の仮面のもとに、虚栄とぜいたくがほしいままに行なわれて、教会は墮落した。サタンは聖書の教義をゆがめつけ、無数の者を滅びに陥れるような伝説が、深く根をおろしつつあった。教会は、「聖徒たちによって、ひとたび伝えられた信仰」を主張するかわりに、こうした伝説を支持し、擁護した。こうして、宗教改革者たちの非常な努力と苦難によって確立された原則が、崩壊したのである。

注

- 一 Martyn, vol.5, p.22.
- 二 George Bancroft, "History of the United States of America," pt.1, ch.12, par.6.
- 三 J. G. Palfrey, "History of New England," ch.3, par.43.
- 四 Bancroft pt.1 ch.12, par.15.
- 五 J. Brown, "The Pilgrim Fathers," p.74.
- 六 Martyn, vol.5, p.70.
- 七 D. Neal, "History of the Puritans," vol.1, p.269.
- 八 Martyn, vol.5, pp.70, 71.
- 九 *Ibid.*, vol.5, p.297.
- 一〇 *Ibid.*, vol.5, p.335.
- 一一 Bancroft, pt.1, ch.15, par.16.
- 一二 Martyn, vol.5, p.340.
- 一三 Bancroft, pt.1, ch.15, par.2.
- 一四 *Ibid.*, pt.1, ch.15, par.10.
- 一五 Martyn, vol.5, pp.349, 350.
- 一六 *Ibid.*, vol.5, p.354.
- 一七 Congressional Documents (U. S. A.), Serial No.200, Document No. 271.
- 一八 Martyn, vol.5, p.417.
- 一九 Bancroft, pt.1, ch.19, par.25.

第一七章

最大の希望

各時代の希望

聖書に啓示された最も厳粛で、最も輝かしい真理の一つは、キリストが、贖罪の大きな業を完成するためにつたたび来られるという真理である。長い間、「死の地、死の陰」をたどってきた神の旅人たちにとって、「よみがえりであり、命で」あり、「追放されたものを帰らせ」られる主の出現の約束は、尊く喜びに満ちた希望であった。キリストの再臨という教義は、聖書の基調そのものである。われわれの祖先が、悲しみながらエデンを去った日以来、信仰の子供たちは、約束のみ子が現われて、破壊者の力をこぼち、失われた楽園に彼らをふたたび連れもどすのを待っていた。昔の聖者たちは、メシヤが栄光のうちに来られて、彼らの希望が成就されるのを待ち望んだ。エデンに住んだ者からわずか七代めに当たるエノクは、この地上において、三百年の間神と共に歩み、

救い主の来臨をはるか遠くから見ることが許された。「見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。それは、すべての者にさばきを行うため」であると彼は言った（ユダ一四、一五節）。また家長ヨブは苦難の夜、ゆるがめ信仰をもって言った。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立てれる。…わたしは肉にあつて神を見るであらう。わたしはこのかたを、自分自身で見るであらう。そして、わたしの目がこれを見る。他の者の目ではない」（ヨブ記一九ノ二五―二七・英語訳）。

正義の時代の到来を告げるキリストの再臨は、聖書記者たちに、最も崇高で熱烈な言葉を言わせたのである。聖書の詩人や預言者は、天来の火に燃やされて、そのことを語った。詩篇の記者は、イスラエルの王の力と威光とを歌った。「神は麗しさのきわみであるシオンから光を放たれる。われらの神は来て、もだされない。…神はその民をさばくために、上なる天および地に呼ばれる」（詩篇五〇ノ二―四）。「天は喜び、地は楽しみ、…主のみに喜び歌うであらう。主は来られる、地をさばくために来られる。主は義をもって世界をさばき、まことをもってもろもろの民をさばかれる」（詩篇九六ノ二―三）。

預言者イザヤも次のように言った。「ちに伏す者よ、さめて喜び歌え。あなたの露は草木をつるおす露のごとく地はなきたまをいださん（後半文語訳）。」「あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。」「主はとこしえに死を滅ぼし、主なる神はすべての顔から涙をぬぐい、その民のはずかしめを全地の上から除かれる。これは主の語られたことである。その日、人は言う、『見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。これは主である。わたしたちは彼を待ち望んだ。わたしたちはその救を喜び楽しむ』と」（イザヤ書二六ノ一九、二五ノ八、九）。

ハバククは、神からの幻を与えられて、主が来られるのを見た。「神はテマンからこられ、聖者はバランの山からこられた。その栄光は天をおおい、そのさんびは地に満ちた。その輝きは光のようであり、」「彼は立って、地をはかり、彼は見て、諸国民をおののかせられる。とこしえの山は散らされ、永遠の丘は沈む。彼の道は昔のとおりである。」「主よ、あなたが馬に乗り、勝利の戦車に乗られる。」「山々はあなたを見て震い、…淵は声を出して、その手を高くあげた。飛び行くあなたの矢の光のために、電光のようにならめく、あなたのやりのために、日も月もそのすみかに立ち止まった。」「あなたはあなたの民を救うため、あなたの油そそいだ者を救うために出て行かれた」(ハバクク書三ノ三、四、六、八、一〇、一一、一三)。

再臨の約束

救い主は、弟子たちから離れていこうとするに当たり、また来るという確証を与えて、彼らの悲しみを慰められた。「あなたがたは、心を騒がせないがよい。…わたしの父の家には、すまいがたくさんある。…あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」(ヨハネ一四ノ一―三)。「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集め」る(マタイ二五ノ三一、三二)。

キリストの昇天後、オリブ山にとどまっていた天使たちは、キリスト再臨の約束を弟子たちにくり返した。「あ

なたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」(使徒行伝一ノ一一)。また、使徒パウロは、靈感に動かされて次のようにあかしした。「すなわち、主**ご自身**が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる」(テサロニケ第一・四ノ一六)。パトモスの預言者も、「見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、これに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう」と言っている(黙示録一ノ七)。

彼の再臨には、「神が聖なる預言者たちの口をおして、昔から預言しておられた万物更新の時」の輝かしい光景が関連している(使徒行伝三ノ二一)。そのとき、長く続いた悪の支配が砕かれて、「この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった。主は世々限りなく支配なさるであろう」(黙示録一ノ一五)。「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。」「主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」主は、「その民の残った者のために、栄えの冠となり、麗しい冠となられる」(イザヤ書四〇ノ五、六一ノ一、二八ノ五)。

長く待望してきた平和なメシヤの王国が、全天のもとで建設されるのは、この時である。「主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。」「これにレバノンの栄えが与えられ、カルメルおよびシヤロンの麗しさが与えられる」「あなたはもはや、『捨てられた者』と言われず、あなたの地はもはや『荒れた者』と言われず、あなたは『わが喜びは彼女にある』となえられ、あなたの地は『配偶ある者』となえられる。」「花婿が花嫁を喜ぶようにあなたの神はあなたを喜ばれる」(イザヤ書六一ノ三、三三ノ二、六二ノ四、五)。

主の再臨は、各時代において、神の真の弟子たちの希望であつた。また来るといふ、オリブ山上での救い主の、離別にあたつての約束は、弟子たちの未来を明るく照らし、彼らの心を喜びと希望で満たし、どんな悲しみも試練もこれを消し去ることはできなかった。苦難と迫害のただ中であつて、「大いなる神、わたしたちの救主キリスト・イエスの栄光の出現」は、「祝福に満ちた望み」であつた。生きて主の来臨を見たいと望んでいた愛する者たちを葬つて、悲しみのうちにあつたテサロニケの人々に、彼らの教師パウロは、救い主の再臨の時に起こる復活を指し示した。そのときには、キリストにあつて死んだ人々がよみがえり、生きている人々と共に引き上げられて、空中で主にお目にかかる。こうして、「いつも主と共にいるであらう。だから、あなたがたは、これらの言葉をもつて互に慰め合いなさい」と彼は言つた（テサロニケ第一・四ノ一六―一八）。

岩角険しいパトモス島において、愛する弟子ヨハネは「しかり、わたしはすぐに来る」といふ約束を聞いた。そして、「主イエスよ、きたりませ」といふ彼の切実な応答は、流浪のうちにある教会の祈りでもあつた。（黙示録二二ノ二〇）。

改革者たちの再臨信仰

聖徒や殉教者たちは、牢獄、火刑柱、処刑台において、真理のあかしを立てたが、彼らの信仰と希望の言葉が、幾世紀後のわれわれに伝えられている。彼らは、「主の復活を確信し、したがつて主の再臨の時に彼ら自身も復活することを確信していたので、彼らは死を恐れず、死を超越していた」と、あるキリスト者は言っている。彼

らは、「自由の身になって復活する」ために、喜んで墓に下っていった。^二 彼らは、「主が、父の栄光をもち、天の雲に乗って来られ」、「義人たちに王国の時代をもたらされる」のを待望した。フルド派も同じ信仰を抱いていた。^三 ウィクリフも、贖い主の出現を教会の希望として待望していた。^四

ルターは次のように言った。「わたしは、今後三百年もすれば必ず、審判の日が来ると確信する。神は、この邪悪な世界を長く忍ぶことはなさらないであろうし、また、おできにならないのである。」「悪虐な王国を打ち砕く大いなる日が近づいている」。^五

「この古びた世界は、終末から遠くない」とメランヒトンは言った。カルバンは、「キリストの再臨を、あらゆる事件中の最も喜ばしいものとして、ためらわず、熱心に待望するよう」キリスト者に命じ、「忠実なもの家族全員が、その日を待望するように」勧めている。「われわれは、主がみ国の栄光を十分にあらわされる大いなる日の夜明けまで、飢えかわくようにキリストを求め、たずね、瞑想しなければならない」と彼は言っている。^六

「われわれの主イエスは、われわれの肉体を天にたずさえて行かれたのではなかったか。そして彼は、帰って来られないであろうか。われわれは、彼が帰って来られること、しかもそれが速やかであることを知っている」とスコットランドの改革者ノックスは言った。真理のために生命をささげたリドリとラチマーは、主の再臨を信じて待ち望んだ。「わたしは、この事を信じるから言うのであるが、この世界は疑いもなく終末に近づいている。われわれは、神のしもべヨハネと共に、来てください、主イエスよ、来てくださいと、われわれの救い主キリストに向かつて、心の中で叫ぼう」とリドリは書いた。^七

「主の再臨を考えることは、わたしには最も楽しく喜ばしいことである」とバクスターは言った。^八 「彼の出現

を愛し、祝福された望みを待ち受けることは、信仰のわざであり、聖徒の特質である。」「死が、復活の時に滅ぼされる最後の敵であるならば、この最後の完全な勝利が与えられるキリストの再臨を、信者たちがどんなに熱心に待望し、そのために祈るべきであるかがわかるのである。」^九「この日こそ、すべて信ずる者の贖罪のすべての働きと、彼らの魂の願望と、努力のすべてが完成されるのであるから、すべての信者は、この日を熱望し、待ちかまえていなければならない。」「主よ、この祝福された日を早めてください。」^{一〇}これが使徒時代の教会の希望であり、「荒野の教会」の希望であり、また改革者たちの希望であった。

再臨の前兆——リスボンの大地震

預言は、キリスト再臨のようすと目的を予告するだけでなく、人々がその近づいたことを知るように、しるしも与えている。イエスは、「また日と月と星とに、しるしが現れるであろう」と言われた(ルカ二一ノ二五)。「日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ち、天体は揺り動かされるであろう。そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう」(マルコ一三ノ二四—二六)。黙示録の記者も、再臨に先だつ第一のしるしをこのように描写している。「大地震が起つて、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようにな」った(黙示録六ノ一二)。

こうしたしるしは、十九世紀の開始前に起こった。この預言の成就として、一七五五年に、これまでの記録を破る恐ろしい地震が起きた。これは、一般にリスボンの地震と言われているが、ヨーロッパの大部分、アフリカ、

アメリカにも及んだ。グリーンランド、西インド諸島、マデイラ島、ノルウエー、スウェーデン、大ブリテン（英国）アイルランドでも感じられた。その範囲は、四百万平方マイルに及んだ。アフリカでは、ヨーロッパと同様の激震であった。アルジェは大半崩壊した。そしてモロッコ付近の、八千から一万にぐらゐの人口をもっていた村が陥没した。スペインとアフリカの沿岸には、高波が押し寄せて町々をのみ尽くし、大きな破壊をもたらした。

地震が特に激しかったのは、スペインとポルトガルであった。カディスでは、押し寄せる波の高さが、六〇フイート（約一八メートル）もあったという。「ポルトガルの高山のいくつかは、あたかもその根底から覆えされるかのように、猛烈に震動した。そのうちのいくつかは頂上が開いて、異様な形に裂けて割れ、巨大な塊が隣接した谷間に崩れ落ちた。これらの山々からは炎が噴き出たと言われている。」^二

リスボンでは、「雷のような音が地下で聞こえたかと思うと、その直後に激しい震動が起こって、市の大部分が倒壊した。六分ほどの間に六万人死んだ。海は、最初潮がひいて砂州が露出したが、平常の水準よりも五〇フイート（約一五メートル）以上も高くなつて、またもどつてきた。」「この災害のときに、リスボンで起こつたと伝えられる異常なできごとの一つは、巨額の費用を投じて造られた総大理石の新しい埠頭が陥没したことであった。大群衆が、倒壊物を避ける安全な場所としてそこに避難していた。ところが、埠頭は突然人々もとともに陥没して、遺体は一つも表面に浮いて来なかった。」^三

「震動後直ちに、すべての教会や修道院、ほとんどすべての大建造物と家屋の四分の一以上が倒壊した。震動後約一時間のうちに、各地から火事が起こり、三日近くも非常な激しさで燃えつづけ、都市は全滅した。地震は聖日に起こり、教会や修道院は人々でいっぱいだったが、逃れた者はほとんどいなかった。」^三「人々の恐怖は、言

葉では表現できないほどだった。だれも泣かなかった。泣くどころではなかった。彼らは恐怖と驚きに狂乱状態となつて、あちこち走りまわり、顔や胸を打って、『あわれみたまえ！世の終わりだ！』と叫んでいた。母親は子供たちを忘れて、十字架の像を背負つて走り回つた。多くの者が教会に避難したことが悲惨を招いた。聖体を取り出してもむだであつた。哀れにも人々は祭壇にしがみついたが、むだであつた。聖画像も司祭も人々も、もろともに埋没してしまつた。」この恐るべき日に生命を失つた人の数は、九万と推定されている。

再臨の前兆——暗黒日

日と月が暗くなるという預言の次のしるしは、その二十五年後にあらわれた。このしるしに関してさらに驚くべきことは、その成就の時が明確に示されていたことである。救い主は、オリブ山上で弟子たちと語り、教会の長い試練の期間、すなわち、一二六〇年間にわたる法王権の迫害について述べ、その苦難は短くされると約束された。それから、再臨に先だつて起こる諸事件をあげて、その最初のものがいっ起こるかを定められた。「その日には、この患難の後、日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ」(マルコ一三ノ二四)。一二六〇日、すなわち一二六〇年は、一七九八年に終わった。その四半世紀前に、迫害はほぼ完全にやんでいた。キリストの言葉によれば、この迫害のあとで日が暗くなるのであつた。一七八〇年五月一九日に、この預言は成就した。

「この種の現象として、他に類例がなく、最も不思議で説明することができないものは……一七八〇年五月一九日の暗黒日である。これは、ニュー・イングランド地方の空全体をおおつた不可解な暗黒である。」^{一四}

マサチューセッツ州に住んでいた目撃者は、そのできごとを次のように語っている。「太陽は、朝晴れやかに昇ったが、まもなく雲がかかった。雲は荒れ模様となり、まもなく、黒く無気味な雲から稲光りが光り、雷が鳴り、雨も少し降った。九時ごろには雲が薄らぎ、真ちゅうか銅のような色になり、地面も、岩も、木も、建物も、水も、人々も、この不思議な、この世のものとは思われない光に照らされて変わってみえた。その数分後には、地平線に細い一線を残して、全天を黒い雲がおおった。その暗さは普通の夏の夜の九時ごろの暗さであつた。…

人々の心は徐々に、恐怖と不安と畏怖の念に満たされた。女たちは戸口に立って、暗いけしきをながめていた。男たちは畑の仕事から帰って来た。大工は道具を、かじやはふいごを、商人は売り場を離れた。学校は授業を取りやめ、子供たちはおびえながら家に帰った。旅人は最寄りの農家に泊まった。『いったい、どうなるのだろうか？』とだれもが心に思い、口に出してたずねていた。それは、あたかも大あらしが地上を襲おうとするか、それとも万物の終わりの日であるかのように思われた。

ろうそくに火がつけられた。炉の火は、月の出ない秋の夜のようにあかあかと燃えた。…鶏は巢に帰ってねた。家畜は、牧場の棚に寄ってきて鳴いた。カエルが鳴き、小鳥は夜の歌をうたい、こつもりは飛びかった。しかし、人間は、夜がきたのではないことを知っていた。…

セイレムのタバナクル教会の牧師、ナサニエル・ホイッテカー博士は、集会所で伝道集会を開いて説教し、その中で、この暗黒は超自然的なものであると言明した。その他多くの場所で、会衆が集まった。即座に行なわれた説教の聖句は、どれも、暗黒が聖書の預言と調和することを示すと思われるものであつた。…暗黒は、十一時を少し過ぎたころが最も濃かつた。^{一五}「昼間であるにもかかわらず、その地方一帯の暗黒は非常に深く、ろうそく



暗黒日に開会中だったコネティカット州議会では、多くの議員が恐怖に襲われた。ダベンポート大佐はこう言った。「わたしは自分が義務を遂行しているところを見られたいと思う。それゆえに、ろうそくをもってこさせよ。」

をつけなければ、時計や柱時計を見て時間を知ること、食することも家事をすることもできなかった。…

この暗黒の範囲は非常なものであった。東は、ファルマスに及んだ。西は、コネクティカットの端と、アルバニー市に至った。南は、海岸地方一帯に及び、北は、アメリカの植民地が広がっている全域をおおった。^{一六}

昼間の濃い暗黒は、夕方の一、二時間前まで続き、まだ暗く重く、霧にさえぎられてはいたが、幾分か晴れた空のすきまから太陽が現われた。「日没後、また雲がでてきて、急速に暗黒になった。」「その夜の暗黒は、昼間の暗黒に勝るとも劣らぬ異常で恐ろしいものであった。月は、ほとんど満月であったにもかかわらず、灯火の助けをかりなければ、何も見えなかった。その灯火でも、隣の家々や遠方から見たならば、光線をほとんど通さないエジプトの暗黒を通して見るようであった。^{一七}この光景の目撃者は言った。「わたしはそのとき、宇宙のすべての発光体が、なにものをも通さないやみにつつまれるか、あるいは消え去るかしても、これ以上の暗黒はあり得ないのではないかと、考えずにはおれなかった。^{一八}その夜九時に、月は完全に姿を現わしたが、「それには、死のようなやみを消す力はなかった。」夜半後になってやみは消え、月が見えはじめたが、そのとき、それは血のようであった。

一七八〇年五月一九日は、歴史上「暗黒日」となっている。モーセの時代以来、これほどの濃さと広さと時間的長さをもった暗黒は、記録されていない。目撃者によるこの事件の描写は、その成就の二五〇〇年前の預言者ヨエルが記録した主の言葉のくり返しに過ぎない。「主の大なる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変わる」(ヨエル書二ノ三二)。

再臨直前の教会の状態

キリストはご自分の民に、彼の再臨のしるしによく注意し、来たるべき王のしるしが見えたならば喜べとお命じになった。「これらの事が起りはじめたら、身を起し頭をもたげなさい。あなたがたの救が近づいているのだから」と主は言われた。彼は、春芽を出す木々を指さして、弟子たちに言われた。「はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たら、神の国が近いのだとさとりなさい」(ルカ二一ノ二八、三〇、三二)。

しかし、教会のなかの謙そんと献身の精神が、高慢と形式主義に変わったとき、キリストに対する愛と彼の再臨に対する信仰が冷えていった。世俗と快樂の追求に熱中して、神の民と自称する人々は、再臨のしるしについての救い主の教えに、盲目になった。再臨の教義は、ないがしろにされた。再臨に関する聖句は、曲解されて不明瞭となり、ついにはその大部分が無視されて、見失われてしまった。こうしたことは、特に、アメリカの諸教会で起こった。社会のすべての階層が自由と安樂を享受することができるので、人々は、富とぜいたくにあこがれ、金もうけに熱中し、だれもが手に入れられると見える名譽と權力を追求し、この世の事物に関心と希望を集中させ、現在の秩序が崩壊するあの厳肅な日を、はるか将来に押しやってしまった。

救い主は、再臨のしるしを弟子たちに示されたときに、再臨の直前における背教の状態を予告された。ちょうど、ノアの時代のように、世俗の事業と快樂の追求に忙殺されて、売り買い、植えつけ、建築、とつぎ、めとり

などして、神と来世のことを忘れてしまうのである。このような時代に生存する者に、キリストは、次のように勧告される。「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることがないように、よく注意していなさい。」「これらの起るうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい」(ルカ二一ノ三四、三六)。

この時の教会の状態は、黙示録のなかの「あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる」という救い主の言葉の中に指摘されている。そして、その軽率な安心感からめざめようとしないうちに、次のような厳粛な警告が発せられている。「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない」(黙示録三ノ一、二)。

人々は、自分たちの危険にめざめなければならぬ。恩恵期間に関連した厳粛なできごとの準備をするために、目をさましなければならぬ。神の預言者は、「主の日は大いにして、はなはだ恐ろしいゆえ、だれがこれに耐えることができよう」と言っている。「目が清く、悪を見られない者、また不義を見られない者」であられるおがたが現われるときに、だれが立つことができようか(ヨエル書二ノ一、ハバク書一ノ一三)。「わが神よ、われわれは…あなたを知る」と言いながら、神の契約を破り、ほかの神を選び、心に悪を隠し、不義の道を愛する人々には、主の日は、「暗くて、光がなく、薄暗くて輝きがない」のである(ホセア書八ノ二、一、アモス書五ノ二〇。詩篇一六ノ四参照)。「その時、わたしはとしびをもって、エルサレムを尋ねる。そして滓の上に凝り固まり、その心の中で、『主は良いことも、悪いこともしない』と言う人々をわたしは罰する」と主は言わ

れる(ゼパニヤ書一ノ一二)。「わたしはその惡のために世を罰し、その不義のために悪い者を罰し、高ぶる者の誇をとどめ、あらぶる者の高慢を低くする」(イザヤ書一三ノ一一)。「彼らの銀も金も、…彼らを救うことができない。」「彼らの財宝はかすめられ、彼らの家は荒れはてる」(ゼパニヤ書一ノ一八、一二三)。

預言者エレミヤは、この恐るべき時を予見して叫んだ。「わたしは苦しみにもだえる。…わたしは沈黙を守ることができない、ラッパの声と、戦いの叫びを聞くからである。破壊に次ぐに破壊がある」(エレミヤ書四ノ一九、二〇)。

「その日は怒りの日、なやみと苦しみの日、荒れ、また滅びる日、暗く、薄暗い日、雲と黒雲の日、ラッパとときの声の日」(ゼパニヤ書一ノ一五、一六)。「見よ、主の日が来る。…この地を荒し、その中から罪びとを断ち滅ぼすために来る」(イザヤ書一三ノ九)。

再臨と神の警告

この大いなる日に関して神の言葉は、最も厳粛で印象深い言葉で、神の民に、靈的昏睡から目ざめて、悔い改めとへりくだりによって神の顔を求めるよう促している。「あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。国の民はみな、ふるいわななけ。主の日が来るからである。それは近い。」「断食を聖別し、聖会を召集し、民を集め、会衆を聖別し、老人たちを集め、幼な子…を集め、花婿をその家から呼びだし、花嫁をそのへやから呼びだせ。主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣」け。「『今からでも、あなたがたは心

をつくし、断食と嘆きと、悲しみとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け』。あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで」ある(ヨエル書二ノ一、一五―一七、一二、一三)。

神の日に立ち得る民を準備するには、改革の大いなる働きが成し遂げられねばならなかった。神は、神の民と称する人々の多くが、永遠のために築いていないのを見られ、あわれみのうちに彼らに警告の使命を与えて、彼らを昏睡から目ざめさせ、主の再臨の準備をさせようとされた。

この警告が、黙示録一四章に記されている。ここには、天使が宣言するといわれている三重の使命が書かれていて、すぐそれに続いて人の子が来られ、「地の穀物」を刈られる。警告の使命の第一は、審判の切迫を宣言する。預言者は、天使が「中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った。『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め』」(黙示録一四ノ六、七)。

この使命は、「永遠の福音」の一部として宣言されている。福音宣布の働きは、天使にゆだねられたのではなく、人間に委託されているのである。天使はこの働きを指導するために用いられ、人間の救いのための大運動の任を負わせられている。しかし、福音の実際の宣教は、地上のキリストのしもべたちによって行なわれるのである。

神の聖霊の感動とみ言葉の教えに従った忠実な人々が、この警告を世界に宣言するのであった。彼らは、「夜が明け、明星がのぼる…まで、この預言の言葉を」心にとめていた人々であつた(ペテロ第二・一ノ一九)。彼らは、すべての隠された宝以上に神を知ることを求め、それを、「銀によって得るものにまさり、その利益は精

金よりも良い」とみなしたのであった(箴言三ノ一四)。主は、彼らにみ国の偉大な事物を啓示された。「主の親しみは主をおそれる者のためにあり、主はその契約を彼らに知らせられる」(詩篇二五ノ一四)。

この真理を理解し、その宣布に従事したのは、博學な神學者たちではなかった。もしも彼らが、祈りつつ勤勉に聖書を研究する忠実な夜回りであつたならば、夜の時刻を知つたことであらう。預言は、まさに起こらうとしていたできごとを、彼らに示したことであらう。しかし彼らはそうでなかったために、使命は、彼らより劣る人によつて伝えられた。「光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい」とイエスは言われた(ヨハネ一二ノ三五)。神から与えられた光に背を向け、手近にある光を求めない者は、暗黒のなかに残される。しかし、「わたしに従つて来る者は、やみのうちを歩くことがなく、命の光をもつてあらう」と救い主は宣言された(ヨハネ八ノ一二)。ひたすら神のみこころを行なおうと願い、すでに与えられた光を熱心に心に留める者はだれでも、もっと大きな光を受ける。そのような魂には、天の光に輝く星が送られて、すべての真理に彼を導くのである。

初臨と再臨

キリストの初臨の時、神の言葉を托されていた聖都の祭司や學者たちは、時のしるしを見わけて約束されたおきたの來臨を宣布することができたはずであつた。ミカの預言は、彼の誕生の地を指示していた。ダニエルは、彼の來臨の時をはつきり示した(ミカ書五ノ二、ダニエル書九ノ二五参照)。神はこうした預言を、ユダヤの指導者た

ちに托された。彼らがメシヤの来臨が近づいたことを知らず、人々に宣布しなかったことに対して、弁解はあり得ない。彼らの無知は、罪深い怠慢の結果であった。ユダヤ人は、殉教した神の預言者たちの記念碑を建てていたが、その一方では地上の偉大な人物たちに敬意を払うことによってサタンのしもべたちに誉れを帰していた。彼らは、世俗の地位と権力の争奪に心を奪われて、天の王が彼らに与えようとされた榮譽を見失ってしまった。

人類の贖罪の完成のために神のみ子が来られるという、史上最大のできごとの場所、時、状況などを、イスラエルの長老たちは心からの畏敬の念をもって研究していなければならないはずであった。すべての人々は、世の贖罪主をまつ先に歓迎する者の中に入ろうと、目をさまして待っているべきであった。ところが、見よ、ベツレヘムでは、ナザレの山地から来た二人の疲れた旅人は、一夜の泊まる場所を求めて、狭く長い通りを町の東のはずれまで歩いているが得られない。彼らを迎えて開く戸はどこにもない。彼らはついに、家畜を入れるみすばらしい小屋に休み場を見つける。そしてそこで、世の救い主がお生まれになる。

み子が、世界が造られる前から、父とともに持つておられた栄光を見ていた天使たちは、彼が地上に現われるのをすべての人々が、大きな喜びをもって迎えるであろうと、非常な関心を持つて期待していた。天使たちは喜びの知らせを、それを受ける準備のできている者たちに、そして喜んでそれを地の住民たちに知らせる者たちに伝達するようにという任命を受けた。キリストは、身を低くして人性をとられた。彼がご自分の魂をとがの供え物となすとき、苦悩の無限の重荷を負われるのであった。しかし天使たちは、至高者のみ子が、ご自分を低くされたとはいえ、そのご品性にふさわしい威光と栄光とをもって人々の前にお現われになるよう望んだ。地上の偉大な人々が、イスラエルの首都に集まって、彼のおいでを迎えるであろうか。天使の大軍が、待ちうけている群

衆に、彼を紹介するであろうか。

天使が、イエスを迎える準備のある者はだれかを見るために、地を訪れる。しかし、待ち受けている様子はどこにも見られない。メシヤ到来の時が近づいたという賛美と勝利の声は聞こえない。天使は、しばらく、選ばれた都の上に、そして、長い間神の臨在があらわされていた神殿の上にとどまる。しかし、ここにも同じ無関心さがある。祭司たちは、虚飾と高慢に満ちて、汚れた犠牲を神殿でささげている。パリサイ人たちは、大声で人々を教えているか、それとも、町角で高慢な祈りをささげているかである。王宮も、哲学者の会合も、ラビの学校も、みな全天を歓喜と賛美で満たしている驚くべき事実、すなわち、人類の贖い主が今まさに地上にあらわれようとしておられるということを、知らずにいるのである。

ベツレヘムの物語の教訓

キリストに対する期待、生命の君を迎える準備は、どこにも見られない。驚いた天使は、この恥ずべき報告をもって天に帰ろうとする。とその時、夜羊の番をしながら星空を仰ぎ、メシヤが地上に来られるという預言を瞑想し、世界の贖い主の来臨を待望している、羊飼いの一群を見つける。ここに、天来の知らせを受ける用意のできた一団がいるのである。そこで、突然主の使いが現われて、大いなる喜びの福音を宣言する。天の栄光が平原に満ち、数えきれない天使たちがあらわれる。あたかもこの喜びは、ただ一人の天使が伝えるにはあまりにも大きすぎるかのように、おおぜいの声が高らかに、やがてすべての国々から贖われた者たちの歌う賛美の歌を歌う。「いと高

きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」(ルカ二ノ一四)。
このベツレヘムの驚くべき物語は、なんという教訓を教えていることであろう。それはなんとわれわれの不信、高慢、うぬぼれを譴責することであろう。それは、われわれもまた、恐るべき無関心に陥って、時のしるしを見分けることができず、そのために神のおとずれの日を知らずに過ごすことがないように、注意するようにとわれわれに警告を与えている。

天使が、メシヤの来臨を待望している人々を見つけたのは、ユダヤの丘の卑しい羊飼いたちの中だけではなく、異教徒の国でも、彼を待っている人々があつた。彼らは、高貴で富裕な賢者、東方の哲学者であつた。この賢者たちは、自然の探究者であり、神の手のわざの中に神を認めたのである。ヘブルの聖書から、彼らは、ヤコブから星が現われることを学び、「イスラエルの慰め」であるばかりでなく、「異邦人を照す啓示の光」であり、「地の果までも救をもたらす」おかたが来られるのを熱心に待望していた(ルカ二ノ二五、三二、使徒行伝一三ノ四七)。彼らは光を求めていた。そして、神のみ座からの光が彼らの歩く道を照らした。真理の擁護者、また解説者として任じられたエルサレムの祭司や教師たちが、暗黒に閉ざされていたときに、天からの星はこれら異邦の旅人を、新たにお生まれになった王の誕生地へと導いたのである。

教会の覚醒と、再臨を迎える準備

キリストが、「罪を負うためではなしに二度目に現われて、救を与えられる」のは、「彼を待ち望んでいる人

人に」である（ヘブル九ノ二八）。救い主の誕生の知らせと同様に、キリストの再臨の知らせも、人々の宗教的指導者に托されなかった。彼らは、神との接触を保つことをせず、天からの光を拒んでしまった。それゆえに彼らは、使徒パウロが描いた人々の中に入っていなかった。「しかし兄弟たちよ。あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう。あなたがたはみな光の子であり、昼の子なのである。わたしたちは、夜の者でもやみの者でもない」（テサロ二テ第一・五ノ四、五）。

シオンの城壁の上の見張り人たちは、救い主の来臨の知らせを最初に認め、最初に声をあげてその近いことを宣言し、人々に、その来臨のための準備をするよう最初に警告を発すべきであつた。しかし彼らは、安易な気持ちで平穩無事の夢をむさぼっていた。そして人々は、罪のなかで眠っていた。イエスは彼の教会が、葉ばかり数多く茂っているが、貴い実のなっていない、実のないいちじくのような状態であるのを見られた。宗教の形式は遵守してそれを誇っていたが、真の謙そん、悔い改め、信仰の精神は欠けていた。実はこれらだけが、神に喜ばれる礼拝であつたのである。聖霊の実の代わりに、高慢、形式主義、虚栄、利己心、圧迫などがあらわれていた。背信した教会は、時のしるしに対して目を閉じてしまった。神は、彼らを捨てたり、誠実を曲げたりならなかった。しかし、彼らは神から離れ、神の愛から離反したのである。彼らが条件に従うことを拒んだときに、神の約束は、彼らに果たされなかったのである。

神がお与えになる光と特権を、感謝して受けて活用するようにしないならば、必ずこのようになる。教会が、すべての光を受け入れ、啓示されるすべての義務を行なつて、神の摂理の導きに従っていかないならば、宗教は必ず形式化して、墮落し、生きた敬神の精神は失われるのである。このことは、教会の歴史において、くり返し

起こった。神は、受けた祝福と特権に相応する信仰と服従の行為を、神の民に要求される。服従は犠牲を要求し、十字架を伴っている。多くの自称キリスト信者が、天からの光を受けることを拒み、昔のユダヤ人のように、神のおとずれの時を知らなかったのは、このためである（ルカ一九ノ四四参照）。彼らが高慢不信であったために、神は彼らを素通りして、ベツレヘムの羊飼いや東方の賢者たちのように、示されたすべての光に心を留めていた人々に、神の真理をあらわされたのである。

注

- 一 Daniel T. Taylor, "Tue Reign of Christ on Earth: or, The Voice of the Church in All Ages," p.33.
- 二 *Ibid.*, p.54.
- 三 *Ibid.*, pp.129—132.
- 四 *Ibid.*, pp.132—134.
- 五 *Ibid.*, pp.158, 134.
- 六 *Ibid.*, pp.158, 134.
- 七 *Ibid.*, pp.151, 145.
- 八 Richard Baxter "Works" vol.17, p.555.
- 九 *Ibid.*, vol.17, p.500.
- 一〇 *Ibid.*, vol.17, pp.182, 183.
- 一一 Sir Charles Lyell, "Principles of Geology," p.495.
- 一二 *Ibid.*, p.495.

- 一三 “Encyclopedia Americana,” art Lisbon, note (ed. 1831).
- 一四 R. M. Devens, “Our First Century,” p.89.
- 一五 “The Essex Antiquarian,” April, 1899, vol.3, No.4, pp.53, 54.
- 一六 William Gordon “History of the Rise, Progress, and Establishment of the Independence
of the U.S.A.,” vol.3, p.57.
- 一七 Isaiah Thomas, “Massachusetts Spy; or American Oracle of Liberty.” vol. 10, No.472 (May 25,
1780).
- 一八 Letter by Dr. Samuel Tenney, of Exeter, New Hampshire, December, 1785 (in “Massachusetts
Historical Society Collections,” 1792, 1st Series, vol.1, p.97

付 録

四五ページ「称号」

ローマ教会法の一部となっている一節において、法王インセント（インノケンティウス）三世は、ローマ法王は「地上における代理者である。単なる人間ではなくて、神そのものの」と宣言している。そして、この節の注釈において、それは彼が、「真の神であり、真の人である」キリストの代理者であるからであると説明されている。次のものを参照。

Decretal. D. Gregor. Pap. IX. lib. 1. de translac. Episc.

tit. 7. c. 3. Corp. Jur. Canon. ed. Paris, 1612; tom. II. Decretal. col. 205.

「主なる神、法王」について称号については、左記参照。

A gloss on the Extravagantes of Pope John XXII, title 14, ch. 4, “*Declaramus*.” In an Antwerp edition of the Extravagantes, dated 1584, the words “*Dominum Deum nostrum Papam*” (Our Lord God the Pope) occur in column 153. In a Paris edition,

dated 1612, they occur in column 140. In several editions published since 1612, the word “*Deum*” (“God”) has been omitted.

四六ページ「偶像礼拝」

「偶像礼拝は、……いつそいつと、ほとんど気づかれずに教会内にしのび込んできたキリスト教の腐敗の一つであった。この腐敗は、他の異端のように、突然現われたものではなかった。もしそうであれば、直ちに断固たる非難と譴責を受けたことであろう。しかし、まことにやかな仮面のもとに侵入して、徐々に、一つまた一つと、それと関連した習慣が次々に取り入れられていったために、強力な反対どころか断固たる抗議すらほとんどなく、教会は、事実上偶像礼拝に深く落ちこんでしまった。そして、ようやくそれを根絶しようとしたときには、この悪弊はあまりに根が深すぎて、抜けなくなっていた。……これは、人間の心の中にある偶像礼拝への傾向と、創造主より被造物に仕えようとする性癖とにさかのぼらねばならない。

偶像や絵画は、最初、礼拝するためではなくて、読むことができない人々を教えるための書物の代わりに、あるいは、他の

人々の心に敬神の念を起させざるために、教会に取り入れられた。そうした目的がこれだけ達成されたかは疑わしいが、しかしともかく、このことはそうした事情であったにしても、まあなぐ、なぐびはなぐなした。そして、教会内に持ち込まれた絵画や偶像は、無学な者たちの心を照らすのでなくて暗くし、礼拝者の献身を高めるのでなくて墮落させることがわかった。こうして、それらは、人々の心を神に向けるよう意図されたものであったとしても、人々を神から引き離し、被造物の礼拝に導くところの目的であった。」(J. Mendham "The Seventh General Council, The Second of Nicaea," Introduction, pp. iii-iv.

偶像礼拝の確立のために召集された七八七年の第二ニケーア公会議の議事録と決議について、左記参照。

Baronius, "Ecclesiastical Annals," Vol. IX, (pp.

391-407 (1612 Antwerp ed.); J. Mendham, "The Seventh General Council, the Second of Nicaea,"

Ed. Stillingfleet, "Defence of the Discourse Concerning the Idolatry Practiced in the Church of Rome" (London, 1686); "A Select Library of Nicene and Post-Nicene Fathers," second series, Vol. XIV, pp.

521-587 (N.Y., 1900); C. J. Hefele, "History of the Councils of the Church, from the Original Documents," bk. 18, ch. 1, sec. 332, 333; ch. 2, sec. 345-352 (T. & T. Clark ed., 1896, Vol. V, pp. 260-304, 342-372).

四十一ページ「コンスタンティヌス帝の勅令」

紀元三二一年三月七日、コンスタンティヌス帝によって發布された、休業日に関する法律は次の通りである。

「すべての法官、すべての市民、そしてすべての商人は、尊ぶべき太陽の日には休業せよ。しかし、田舎に住んでる者は、自由になんの拘束もなぐ、畑を耕してよい。それは、穀物の種まき、あるいはぶどうの植えてけなどが、他の日では適しないことがよくあるからである。それゆえ、天からの食糧を失くすのをなぐち、適当な時を見過ぐやなぐちをくぐねぐね」(A. H. Lewis, "History of the Sabbath and the Sunday," 2d. ed., rev., 1903, pp. 123, 124.)

The original (in the "Codex of Justinian," lib. 3, tit. 12, leg. 3) is quoted by Dr. J. A. Hessey in his Bampton Lectures on "Sunday," lecture 3, par. 1, and by Dr. Philip Schaff in his "History of the

Christian Church," Vol. III, sec. 75, par. 5, note 1. See also

Mosheim, "Ecclesiastical History," cent. 4, part 2, ch. 4, sec. 5; Chambers' Encyclopædia, art. Sabbath; Encyclopædia Britannica, ninth ed., art. Sunday; Peter Heylyn, "History of the Sabbath," part 2, ch. 3 (2d ed., rev., London, 1636, pp. 66, 67).

四九ページ「預言的年代」

これらについては、本書の下巻（特に第一八章など）を参照のこと。

五二ページ「偽書」

今日、偽書として一般に認められているもので、「偽イシドール教令集」（偽イシドール文書）と、その中の「コンスタンティヌス帝の寄進状」は、最も重要である。

『「コンスタンティヌス帝の寄進状」は、いつ、だれが偽造したか』という問題に関する事実を引用して、パリの聖シユルピウス・セミナリーの校長、M・ゴスランは次のように述べ

ている。

「この文書は疑いもなく偽作であるが、それが偽造された年代を明確に決定することは困難である。M・ユ・マルカ・ミトラント、その他の博学な批評家たちは、八世紀に、そしてシャルルマーニュの治世以前に造られたという意見である。やはりミトラントは、多分これに同意して、王位継承は法王庁に対して寛大な心を抱くようになったのであると考えている。」（"The Power of the Pope during the middle Ages," tr. by the Rev. Matthew Kelly, st. Patrick's College, Maynooth; J. Murphy and Company, Baltimore, 1853, vol. 1, p. 321.）

偽イシドール教令集の年代については、Mosheim, "Institutes of Ecclesiastical History," b. 3, cent. 9, pt. 2, ch. 2, sec. 8. 参照。翻訳者、マートリック博士が、脚注において指摘しているように、博学なカトリックの歴史家、フルーリ神父は、彼の、"Ecclesiastical History" (diss. 4, sec. 1) の中で、この教書について言っている。「これらは、八世紀の終わりと明るみに出た。フルーリが書いたのは十七世紀の終わりごろであるが、彼はさらに、これらの「偽りの教令集は、八百年の間、本物とされていた。そして、前世紀になってや

このように、そのほかにもいろいろとわかってきた。今日では、この事について十分に教えられている者でも、この教令集が偽物であることを認めない者はほとんどいない。」
“Ecclesiastical History,” b. 44, par. 54 (G. Adam’s translation, London, 1732, vol. 5, p. 196). Gibbon, “The History of the Decline and Fall of the Roman Empire,” ch. 49, par. 16
を参照。

「ユリウス・カエサル」の「ユリウス・カエサル」

この左記を参照。

Baronius, “Ecclesiastical Annals,” An. 1076 (Antwerp ed., 1608, Vol. XI, page 479). A copy of the “Dictates,” in the original, may also be found in Giesel, “Ecclesiastical History,” period 3, sec. 47, note 4 (ed. 1836, tr. by F. Cunningham). An English translation is given in Mosheim, “Ecclesiastical History,” bk. 3, cent. 11, part 2, ch. 2, sec. 9, note 8 (Soames’ ed., tr. by Murdock).

「五六ページ」煉獄

ジョセフ・F・D・ブルー博士は、煉獄を次のように定義している。「煉獄とは、現世の後苦しみを受ける状態である。大罪の汚れとがを許され、受けなければならない。彼らは、許されて死んだ魂は、一時そこに留めておかれる。彼らは、まだ、その罪のために、この世の罰を受けなければならない。また、小罪だけを犯した世を去る魂もそこにある。」
“Catholic Belief,” p. 196 (ed., 1884; imprimatur Archbishop of New York).

この左記のものを参照。

K. R. Hagenbach, “Compendium of the History of Doctrines,” Vol. —, pp. 234—237, 405, 408 ; Vol. II, pp. 135—150, 308, 309 (T. & T. Clark ed.) ; Chas. Elliott, “Delineation of Roman Catholicism,” bk. 2, ch. 12 ; Catholic Encyclopædia, art. Purgatory.

「五六ページ」免罪符（贖宥）

免罪符の教義に関する詳しい歴史については、左記参照。

412

かわらず、スペインは、相も変わらず、昔ながらのしきたりに従いつづけた。そして、議論する余地のない公文書を提供してくれているので、われわれは純然たる歴史の光に照らして、この事柄を研究することができるのである。」

五六ページ「ミサ」

343-346); Chas. E 11 iott, "Delineation of Roman Catholicism, bk. 2, ch. 13; H. C. Lea, "A History of Auricular Confession and Indulgences," G. P. Fisher, "The Reformation," ch. 4, par. 7.

宗教改革時代に免罪符の教義が実際にどのように運用されていたかについては左記参照。

Cardinal Wiseman's work, "The Real Presence of the Body and Blood of Our Lord Jesus Christ in the Blessed Eucharist"; also Catholic Encyclopaedia, art. Eucharist (contributed by J. Pohle, S. T. D., Breslau); "Canons and Decrees of the Council of Trent," sess. 13, ch. 1-8 (London ed., 1851, tr. by T. A. Buckley, pp. 70-79); K. R. Hagenbach, "Compendium of the History of Doctrines," Vol. I, pp. 214-223, 393-398, and Vol. II, pp. 88-114; J. Calvin, "Institutes," bk. 4, ch. 17, 18; R. Hooker, "Ecclesiastical Polity," bk. 5, ch. 67; Chas. Elliott, "Delineation of Roman Catholicism," bk. 2, ch. 4, 5.

"Ecclesiastical Polity," bk. 5, ch. 67; Chas. Elliott, "Delineation of Roman Catholicism," bk. 2, ch. 4, 5.

六五ページ「聖書のフルト派訳」

聖書の一部を民衆の言語に訳した初期のフルト派訳については左記参照。

Townley, "Illustrations of Biblical Literature,"

Vol. I, ch. 10, par. 1-13; E. Petavel, "The Bible in France," ch. 2, par. 3, 4, 8-10, 13, 21 (Paris ed., 1864); G. H. Putnam, "The Censorship of the Church of Rome," Vol. II, ch. 2.

八〇ページ「フルト派抑圧の布告」

一四八七年、インセント八世がフルト派に対して発した法王教書の大部分(その原文は、ケンブリッジ大学図書館所蔵)が、英語に訳されて次の書に出ている。

Dowling, "History of Romanism," ed., 1871, b. 6, ch. 5,

sec. 62.

八九ページ「免罪符」

五六ページ「免罪符」についての、先ほどの説明を参照されたい。

九一ページ(「注四」)「ウィクリフ」

ウィクリフに対して発せられた、英訳付きの法王教書の原文については左記を参照。

J. Foxe, "Act and Monuments," Vol. III, pp. 4-13 (Pratt-Townsend ed., London, 1870). See also J. Lewis, "Life of Wiclif," pp. 49-51, 305-314 (ed. 1820); Lechler, "John Wycliffe and His English Precursors," ch. 5, sec. 2 (pp. 162-164, London ed., 1884, tr. by Lorimer); A. Neander, "General History of the Christian Church," period 6, sec. 2, part 1, par. 8.

九二ページ「法王不可謬説」

法王不可謬の教義については左記を参照。

Catholic Encyclopaedia, art. Infallibility (contributed by P. J. Turner, S. T. D.); Geo. Salmon, "The Infallibility of the Church;" Chas. Elliott "Delinea-

tion of Roman Catholicism," bk. 1, ch. 4; Cardinal Gibbons, "The Faith of Our Fathers," ch. 7 (49th ed., 1897).

一一五ページ「免罪符」

五六ページ「免罪符」についての、先ほどの説明を参照のこと。

一一六ページ「コンスタンツ公会議」

シギスムント皇帝の発議で、法王ヨハネス二三世が召集したコンスタンツ公会議については左記を参照。

Mosheim, "Ecclesiastical History," bk. 3, cent. 15, part 2, ch. 2, sec. 3; J. Dowling, "History of Romanism," bk. 6, ch. 2, par. 13; A. Bower, "History of the Popes," Vol. VII, pp. 141-143 (London ed., 1766); Neander, "History of the Christian Religion and Church," period 6, sec. 1 (1854, 5-vol. ed., tr. by Torrey Vol. V, pp. 94-101).

一四九ページ「免罪符」

既述、五六ページ「免罪符」についての説明を参照。

一九三ページ「イエズス会」

「イエズス会」の起源、主義、目的のあらましに関し、その会員が述べた言葉については左記のものを参照。

"Concerning Jesuits," edited by the Rev. John Gerard, S. J., and published in London, 1902, by the Catholic Truth Society.

この著作の中で次のように言われている。「本会の全組織の主要動機は、全的服従の精神である。『服従の下に生きる者は、長上を通しての神の摂理のままに、動かされ、導かれるべきである』と各自は自らに言い聞かせよ。それはちょうど、彼らが、いかにでも運ばれ、どんな取扱いでも受ける死体であるかのような、また、それを持つ人の意志のままにその人に奉仕する、老人のつくえであるかのようなものである」と、聖イグナチウスは言った。

この絶対的服従は、その動機によつて高貴にされる。そこへそれは、『速やかに、喜びをもつて、忍耐強くなされるべきである。…従順な修道士は、一般の人々の幸福のために聖土から課せられたことを喜んで成し遂げる。そこで、そのために、真に神の恵みに与つていくなむを確信せしめられ』と説く神聖ローマのコンテス（The Comtesse R. de Courson in "Concerning Jesuits," p. 6.)

なお、左記のものを参照のこと。

L. E. Dupin, "A Compendious History of the Church," cent. 16, ch. 33 (London ed., 1713, Vol. IV, pp. 132-135); Mosheim, "Ecclesiastical History," cent. 16, sec. 3, part 1, ch. 1, par. 10 (including notes 5, 6); Encyclopaedia Britannica (ninth ed.), art. Jesuits; C. Paroissien, "The Principles of the Jesuits, Developed in a Collection of Extracts from Their Own Authors" (London, 1860-an earlier edition appeared in 1839); W. C. Cartwright, "The Jesuits, Their Constitution and Teaching" (London, 1876); E. L. Taunton, "The History of the Jesuits in England, 1580-1773" (London, 1901).

二九四ページ「宗教裁判」

これに關しては左記のものを参照。

Catholic Encyclopaedia, art. Inquisition (contributed by J. Bötzer, S. J., Munich); H. C. Lea, "History of the Inquisition in the Middle Ages;" Limborch, "History of the Inquisition," Vol. I, bk. 1, ch. 25, 27-31 (London ed., 1731, tr. by S. Chandler, Vol. I, pp. 131-142, 144-161); L. von Ranke, "History of the Popes," bk. 2, ch. 6.

三〇〇ページ「フランス革命の原因」

フランスの人々が聖書と聖書の宗教を拒否したことの、広汎遠大な結果として左記を参照。

H. von Sybel, "History of the French Revolution," bk. 5, ch. 1, par. 3-7; H. T. Buckle, "History of Civilization in England," ch. 8, 12 (N. Y. ed., 1895, Vol. I, pp. 364-366, 369-371, 437, 550, 540, 541); *Blackwood's Magazine*, Vol. XXXIV, No. 215 (November, 1833, p. 739); J. G. Lorimer, "An Historical Sketch of the Protestant Church in France," ch. 8, par. 6, 7.

三四〇ページ「預言的年代」

本書の下巻（特に一八章）を参照。

三四二ページ「聖書を禁止し絶滅しようとする運動」

フランスにおける、聖書、特に民衆の言葉に訳された聖書を禁止しようとする長期にわたる運動について、ゴージェンは次のように言っている。「自国語で聖書を読むすべての者を宗教裁判にかけることを定めた、一二一九年のツールーズの布告は……火と流血と破壊の布告であった。その第三、四、五、六章は、聖書を持っていたために罪に定められた人々の、家屋、みすばらしい隠れ家、そして地下の隠れ場所までも、みな完全に破壊されること、また、彼らは森林や洞穴の中まで追跡されること、そして、彼らをかくまった人々までも厳罰に処されることを命じている。」その結果、聖書は「至る所で禁止された。聖書は、いわば、地下にもぐってしまった。それは墓に下った。」（同じした布告は、「五百年にわたって続き、無数の刑罰が課せられ、聖徒たちの血は、水のように流

れた。」〔L.Gausson, "The Canon of the Holy Scriptures," pt. 2, ch. 7, sec. 5, prop. 561; and ch. 13, sec. 2, prop. 641, par. 2.〕

一七九三年後期の恐怖時代における、聖書を全滅させようとする特別な努力について、ロリマー博士は次のように言っている。「同じでも聖書が発見されれば、迫害して殺せようわれた。そういうわけで、数名の尊敬すべき注釈者たちは、黙示録一章において二人の証人が殺されたことを、フランスのこの時代において、旧新約聖書が広く禁止され、否、絶滅されたことであると解釈している。」（J. G. Lorimer, "An Historical Sketch of the Protestant Church in France," ch. 8, pars. 4, 5.）

なお、左記のものをも参照。

G. P. Fisher, "The Reformation," ch. 15, par. 16 ; E. Petave1, "The Bible in France," ch. 2, par. 3, 8-10, 13, 21 (Paris ed., 1864) ; G. H. Putnam, "The Censorship of the Church of Rome," Vol. I, ch. 4 (1906 ed., pp. 97, 99, 101, 102); Vol. II, ch. 2 (pp. 15-19); S. Smiles, "The Huguenots: Their Settlements, Churches, and Industries," etc., ch. 1, par. 32, 34; ch. 2, par. 6; ch. 3, par. 14; ch. 18, par. 5 (with note); S. Smiles, "The

Huguenots in France after the Revocation," ch. 2, par. 8; ch. 10, par. 30; ch. 12, par. 2-4; J. A. Wylie, "History of Protestantism," bk. 22, ch. 6, par. 3.

三三三ページ「恐怖時代」

教会および国家の迫害者たちの語った迫害の歴史、教会の迫害者の語った迫害など、フランスで迫害された人々についての書物にいくつかの参考文献。

W. M. Sloane, "The French Revolution and Religious Reform," Preface, and ch. 2, par. 1, 2, 10-14 (1901 ed., pp.

vii-ix, 19, 20, 26-31, 40); P. Schaff, in "Papers of the American Society of Church History," Vol. I, pp. 38, 44; S. Smiles, "The Huguenots after the Revocation," ch. 18, par. 4, 6, 9, 10, 12-16, 27; J. G. Lorimer, "An Historical Sketch of the Protestant Church of France," ch. 8, par. 6, 7; A. Galton, "Church and State in France, 1300-1907," ch. 3, sec. 2 (London ed., 1907); Sir J. Stephen, "Lectures on the History of France," lecture 16, par. 60.

三五七ページ「大衆と特権階級」

革命以前のフランスを支配していた社会状態については左記参照。

H. von Holst, "Lowell Lectures on the French Revolution," lecture 1; also Taine, "Ancient Regime," and A. Young, "Travels in France."

三六一ページ「フランス革命の懲罰的性格」

フランス革命の懲罰的性格の詳細については左記を参照。

Thos. H. Gill, "The Papal Drama," bk. 10; E. de Pressense, "The Church and the French Revolution," bk. 3, ch. I.

三六三ページ「恐怖時代の虐殺」

左記参照。

M. A. Triers, "History of the French Revolution," Vol. III, pp. 42-44, 62-74, 106 (N.Y. ed., 1890, tr. by F. Shoberl); F. A. Mignet, "History of the French Revolution," ch. 9, par. 1 (Bohn ed., 1894); A. Alison, "History of Europe," 1789-1815, Vol. I, ch. 14 (N.Y. ed., 1872, Vol. I, pp. 293-312).

三六七ページ「聖書の配布」

英国および外国聖書協会のウィリアム・カントン氏によると、一八〇四年に、「写本、または印刷された聖書は、各国語に訳されたものも含めて、四百万余りあった。…その四百万が書かれた種々の言語は、ウルフィラス訳のミソゴート語やベータ訳のアングロサクソン語などの古語も含めて、約五十語に及んでいる。」("What is the Bible Society?" rev. ed., 1904, p. 23.)

それから百年後に、英国および外国聖書協会は、創立後百年めにあたって、同協会だけの聖書とその分冊の配布総数が、一億八千六百六十八万百一に達したと報告することができた。一九一〇年には、四百近くの言語によって、総数二億二千万

冊以上が配布されたのである。

この総数に、他の聖書協会や商業団体が多くの国語で配布した幾百万の聖書と分冊をも加えなければならない。英国聖書協会という母体から生じた最大の団体である米国聖書協会は、その最初の九四年間に、合計八千七百二十九万六千八百一十二冊配布したと報告した(「聖書協会記録」一九一〇年六月参照)。ひかえめな推定によると、約六百万の聖書が商業出版社によって毎年発行されているので、それを聖書協会の数に加えると、毎年、千五百万冊以上の聖書が配布されていることになる。

本文中の、聖書全体または部分的翻訳の数は、本書が書かれた当時において正確なものであった。現在では、一千語以上に達している。

三六七ページ「外国伝道」

G・P・フィッシャー博士は、『キリスト教会史』の中の「キリスト教伝道」という章において、伝道活動の開始について次のように記している。「十八世紀の末年に、伝道史上、初代教会の活動以来かつてなかったような輝かしい伝道活動

が開始された。」一七九二年に、「バプテスト伝道協会が設立されて、ケアリが最初の宣教師として派遣された。ケアリはインドに渡り、同協会の他の宣教師たちの援助を得て、セラポンバ―伝道本部を設立した。」一七九五年に、ロンドン伝道協会が設立された。一七九九年に、「一つの組織が設立され、それは一八一二年に英国聖公会宣教師会となった。」その後、まもなくウェスレー伝道協会が設立された。

「伝道活動が英国において盛んになる一方、アメリカのキリスト者たちも、同じ熱意に燃えてきた。」一八一二年に、アメリカ外国伝道委員会（アメリカン・ボード）が設立された。そして、一八一四年に、アメリカ・バプテスト伝道連合が設立された。アドニラム・ジャドソンは、アメリカから出て行った最初の宣教師の一人で、一八一二年にカルカッタに渡り、一八一三年七月にビルマに到着した。一八三七年に、長老派教会伝道委員会が組織された。Fisher, "History of the Christian Church" par. 9, ch. 7, pars. 3, 25 を参照。

A・T・ピアソン博士は、一九一〇年一月の『ミッシヨナリー・レビュー・オブ・ザ・ワールド』の中で次のように言っている。「半世紀前には、中国、満州、日本、朝鮮、トルコ、アラビア、そして広大なアフリカ大陸さえ、まだ眠っていた。

それらは、長く孤立と排他のからに閉じこもった国々であった。中央アジアも中央アフリカと同じく、かなり未開拓の状態であった。多くの国において、サタンの長期にわたる占領は妨害されず、彼の帝国は侵されなかった。カトリック教国は、異教国と同様に、偏狭であった。イタリアやスペインは、聖書を販売したり福音を宣べ伝えたりする者を投獄した。フランスは、実質上、無神状態であり、ドイツは、理性主義が浸透していた。そして、伝道地の大部分は、多かれ少なかれ、厳しい排他主義と閉鎖的階級制度に閉ざされていた。ところが、今、至る所に変化が起きた。あまりに著しく、あまりに急激な変化なので、前世紀半ばの人が突然これを見たならば、……これが自分たちの世界だとは思えないことであろう。一枚戸の扉のカギを持ったかたが、扉を開き、全地を十字架の使者のために開いてくださったのである。半世紀前であれば、訪問者は聖書を城外に置いていかなければならなかった永遠の都ローマにおいてさえ、プロテスタントの会堂が幾十となく存在し、聖書が自由に配布されているのである。」

エレン・G・ホワイト略伝

エレン・G・ホワイト（旧姓エレン・G・ハーモン）は、一八二七年一月二六日に、米国メイン州ゴーハムに生まれた。彼女の両親はふたりとも熱心なクリスチャンで、メソジスト・エピスコパル教会に属していた。

エレンは強健な両親から、丈夫な身体と物覚えのよい頭脳とを受け継いでいたので、将来に大きな望みをかけられていた。ところが、エレンが九才のときのことである。ふとしたことで学友が投げた石が彼女の鼻を打ち、鼻骨が折れて、彼女は昏睡状態で三週間を過ごした。そして重病を併発し、勉学を続けることができなくなり、ついに十二才以後は学校の門をくぐったことがないという不幸な状態に陥ってしまった。若いエレンにとって、顔は醜くなり、健康は衰え、勉学の希望を捨ててはならぬことは、耐えられないことであつたが、彼女はその苦境を、ひたすら信仰によって乗り越えて行つた。

やがて、この気高い信仰の持ち主は、神に用いられる器として選ばれることになった。時は、ちょうどあの有名なウィリアム・ミラー等による、キリストの再臨運動のまただ中のことで、エレンもこの運動に加わっていた。しかし、彼らが予期していた一八四四年二月二日がきても、キリストの再臨はなかった。こうして、多くの信者が失望、落胆のどん底にあったとき、エレンは神から公の召命を受けた。ときに彼女の健康状態は実に悪く、肺患により右側は完全に侵され、病巣は左肺にも及び、心臓もまた非常に衰えていた。人間の目から見るときに、彼女はほとんど廃人同様であり、召しに応ずることとは冒険に近いことであつたが、エレンは、信仰をもって神の召命に応じた。当時、彼女は十七才であつた。

一八四六年、エレン・ハーモンはジェイムズ・ホワイト長老と結婚したが、これから始まるホワイト夫妻の伝道生涯は、席の暖まることを知らないほどの忙しいものであつた。また、彼女の前身を知る者には驚くべき奇跡でもあつた。あの交通不便な十九世紀の中ごろにあつて、夫人は米国の各州はもちろんのこと、イギリス、フランス、スイス、ドイツ、デンマーク、ノルウエー、スウェーデンの各地をたずね、オーストラリア、ニュージーランド、タスマニア等には八年間も滞在した。彼女の一生には、多くの偉業や逸話が残っているが、ここでそれらの一つ一つに触れることは紙面が許さないので、その最大のもを一つ取り上げてみたい。それは彼女の著述家としての一面である。

彼女はその多忙な生涯において、一大叢書ともいふべき数多くの本を著わしたが、主なものだけでも五十数冊にのぼる。そしてその中のおもだったものは、各国語に訳されて、長年にわたって何百万部も読まれている。たとえば『キリストへの道』は、一〇〇の言語に訳されて、全世界で一四〇〇万部も発行されてきた。そして今なお手につけられていない多数の原稿が、「エレン・G・ホワイト著書刊行委員会」の手で保管されている。

彼女の多くの著作の中で、「争闘時代叢書」とよばれる五冊からなる大作は、彼女の代表作として知られている。それはまた、最も読みごたえのある著作でもある。その五冊とは、「Patriarchs and Prophets」（邦訳『人類のあけぼの』）、“Prophets and Kings”、“The Desire of Ages”（邦訳『各時代の希望』）、“Acts of Apostles”、“The Great Controversy”（邦訳『各時代の大争闘』）である。本訳書はこの最後の書“The Great Controversy between Christ and Satan”を訳したもので、原著は一八八八年に発行され、一九一一年に改訂版が出た。本訳書はこの一九一一年版に拠っている。

彼女の著作は、宗教、教育、健康、家庭と幅広い分野にわたっているだけでなく、その内容においても、すでに一〇〇年も前に、砂糖、肉食、タバコの害を訴え、環境汚染や薬禍の問題を警告するなど、まことに現代の預言者と呼ばれるにふさわしい。

ホワイト夫人は、一九一五年七月一六日、満七十年間の充実した伝道生涯を終えて、カリフォルニア

州セント・ヘレナで永眠した。彼女がなくなったとき、世界的な宗教雑誌「ニューヨーク・インディペンデント」は、セブンスデー・アドベンチスト教会を紹介した後、エレン・G・ホワイトに言及して、「夫人はインスピレーション（靈感）であり、ガイド（指導者）であつた。彼女は尊い記録を残していった」とその死を惜しんだ。

発 行 者

ホワイイト選集

- 1 人類のあけぼの (上巻)
- 2 人類のあけぼの (下巻)
- 3 国と指導者 (上巻)
- 4 国と指導者 (下巻)
- 5 各時代の希望 (上巻)
- 6 各時代の希望 (中巻)
- 7 各時代の希望 (下巻)
- 8 患難から栄光へ (上巻)
- 9 患難から栄光へ (下巻)
- 10 各時代の大争闘 (上巻)**
- 11 各時代の大争闘 (下巻)

N D C 194/440P/22cm

転載複製を禁ず

1979年2月1日 発行

著者	エレン・G・ホワイイト
訳者	清野喜夫
	村上良夫
発行者	岡藤米蔵
印刷所	福音社

	〒241 横浜市旭区上川井町1966
発行所	福音社
	電話(045)921-1414 振替横浜7-599番

	〒241 横浜市旭区上川井町846
発売所	健康と品性向上協会本部
	電話(045)921-1121

製本・関山製本社 PRINTED IN JAPAN

☆ご愛読下さいましてありがとうございます。当社出版物は直販制
です。書店には出しておりません。お問合せ、ご用命、出版目
録のご請求等は、直接発売所へお申し越し頂たく存じます。